金沢城跡切石積石垣確認調査報告書

二〇二二年三月

石川県金沢城調査研究所

金沢城史料叢書 42

金沢城跡切石積石垣確認調査報告書

2022

石川県金沢城調査研究所

金沢城史料叢書 42

金沢城跡切石積石垣確認調査報告書

２０２２

石川県金沢城調査研究所

例　言

1　本書は、石川県金沢市丸の内地内に所在する史跡金沢城跡の埋蔵文化財確認調査報告書である。

2　調査の範囲は、金沢城跡（県遺跡番号130200、金沢市丸の内地内他）を対象とした。

3　本書は、平成29年度（2017）～令和元年度（2019）にかけて、金沢城調査研究事業に係る城郭庭園等の総合研究事業の一環として行った切石積石垣確認調査の成果を収録したものである。事業については、石川県金沢城調査研究所が文化庁の国庫補助を得て実施した。

4　現地調査の期間（発掘作業）と担当職員は次のとおりである。

平成29年度（2017）

期　間　平成29年（2017）年６月19日～８月31日

担当者　滝川重徳（主幹）、西田郁乃（調査研究専門員）、知田真衣子（非常勤嘱託）

平成30年度（2018）

期　間　平成30年（2018）５月21日～８月31日

担当者滝川重徳（同上）、西田郁乃（同上）、道言瑞希（非常勤嘱託）

令和元年度（2019）

期　間　令和元年（2019）５月７日～９月３日

担当者　滝川重徳（担当課長）、西田郁乃（同上）、川名俊（主任主事）、知田真衣子（同上）

5　出土品整理は、令和２年度に公益財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託して実施したほか、直営で遺物の写真撮影及び遺物の補足実測を行った。

6　報告書の作成は、滝川重徳と西田郁乃（主幹）が担当し、第１章第１節・第４章第２・３節、第５章は滝川が執筆し、それ以外の執筆と編集は西田が行った。

また、遺物写真撮影は知田真衣子と辻森由美子（非常勤職員）、遺物実測は供田奈津子（非常勤嘱託）、図版等作成は、広多美幸（非常勤嘱託）が補助した。

7　調査に関する記録・出土品は石川県金沢城調査研究所で保管している。

8　調査・報告にあたり、以下の機関・個人の指導・助言、協力を得た。

文化庁文化財第二課　金沢市立玉川図書館　金沢大学附属図書館　東京大学総合図書館

公益財団法人前田育徳会　防衛省防衛研究所戦史研究センター　石川県立図書館

石川県立歴史博物館

市川浩文　金田明大　北垣聰一郎　北野博司　久保智康　千田嘉博　中村利則　成瀬晃司

西形達明　飛田範夫　平井 聖　堀内秀樹　宮里 学　森島康雄　横山隆昭　吉岡康暢（敬称略）

凡　例

1　本書中に示した水平基準は海抜高であり、東京湾平均海面標高(T.P.)による。
2　方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第Ⅶ系に準拠した。
3　土層注記の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用している。
4　遺構図中のケバ種や線種は下記の「平面図線種表」のとおりである。
5　遺構図・遺物図等の縮尺については、各図中に示した。
6　本文中で使用する石垣用語については、「石垣用語表」及び「石垣名称凡例図」のとおりである。
7　遺物名は次の略号を使用した。P:陶磁器・土器　T:瓦　M:金属製品　S:石製品
8　遺物実測図版・写真の遺物番号は、ゴシック体が本報告番号を示しており、本文・観察表とも共通する。明朝体は実測番号である。
9　引用・参考文献については、一括して巻末に記載した。

平面図線種表

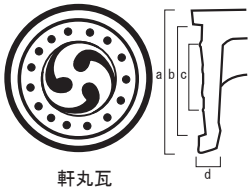
	ケバ種	上端線／下端線
トレンチ		崖ケバ
		実線
近代以後		短・短ケバ
		実線
近世以前		長・短ケバ
		実線

	ケバ種	上端線／下端線
遺構(未完掘)		長・短ケバ
		一点鎖線
遺構(検出のみ)		長・短ケバ(下端線なし)
(壁のみで確認された遺構)		長・短ケバ(下端線なし)

	ケバ種	上端線／下端線
遺構壁の傾斜変換線		長・短ケバ(下端線なし)
遺構以外(土質境)	———	実線・ケバなし
石(埋没部分)	—-—	一点鎖線

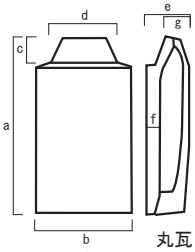
遺物観察表計測部位凡例

瓦計測部位



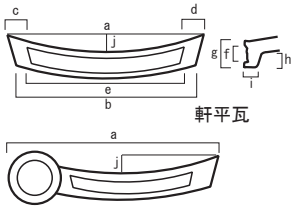
軒丸瓦

a 瓦当径　b 文様区径
c 内区径　d 瓦当厚



丸瓦

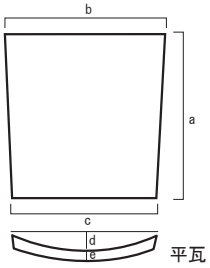
a 全長　b 体部幅　c 玉縁長
d 玉縁幅　e 体部高　f 体部厚
g 玉縁高



軒平瓦

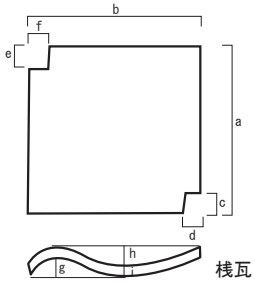
軒桟瓦

a 上弧幅　b 下幅　c 右周縁　d 左周縁
e 文様区幅　f 文様区厚　g 瓦当厚　h 顎高
i 顎下部高　j 弧深



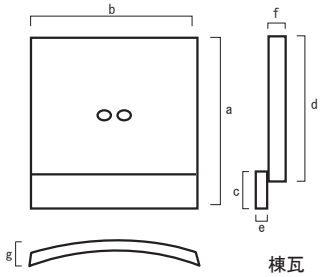
平瓦

a 全長　b 広端幅
c 狭端幅　d 弧深
e 厚



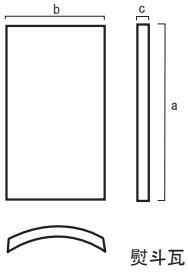
桟瓦

a 全長　b 全幅　c 平部切込長　d 平部切込幅
e 桟部切込長　f 桟部切込幅　g桟部弧深
h 平部弧深　i 厚



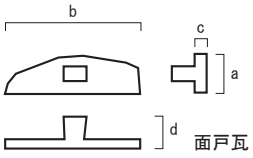
棟瓦

a 全長　b 全幅　c 桟部長
d 体部長　e 桟部厚　f 体部厚　g 高さ



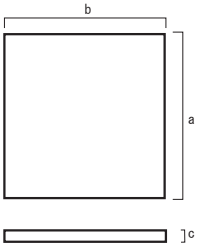
熨斗瓦

a 全長　b 全幅　c 厚



面戸瓦

面戸瓦　a 全長　b 全幅
c 厚　d 高さ



腰瓦

a 全長　b 全幅　c 厚

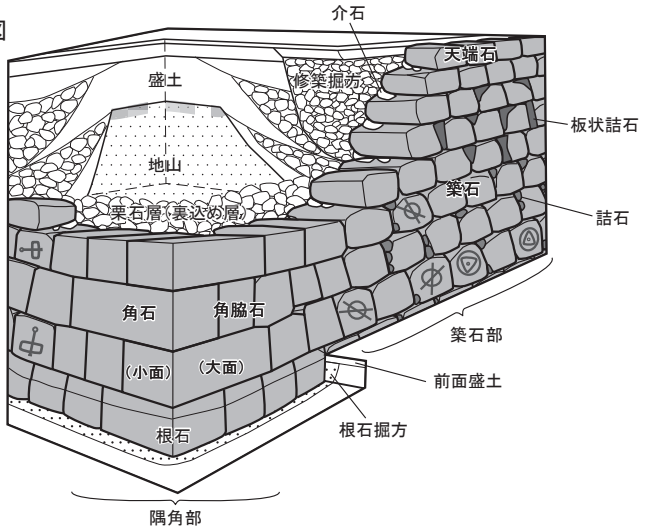
腰瓦側辺中央凹部分類表

大分類(平面系)		小分類(断面形)	特　徴
A 円形凹			底面が平らになっている ※二次調整するものも含む
B 円形凹			底面を平らにしない
C 方形凹			底面が平らに調整されている ※「堺」の刻印が多い
D 縦長凹			小型で断面は浅い皿状を呈する 平面形状で細分可
E 円形貫通(仮称)			円形あるいは方形の孔、側縁ではなく中央による

石垣用語表

用　語	読　み	解　説
築石部	つきいしぶ	石垣の面部分
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ部分、外側に折れるものを出角(ですみ) 、内側に折れるものを入角(いりすみ)と呼ぶ
シノギ角	しのぎすみ	出角の一つで、鈍角状に組まれる
輪どり	わどり	石垣の壁面を弧状に湾曲させる構築方法
天端	てんば	石垣の上面
天端石	てんばいし	石垣の最上部の石材
裾部	すそぶ	石垣が地面と接する部分
根石	ねいし	石垣の最下部の石
築石	つきいし	石垣を構築する石材、平石（ひらいし）とも言う
詰石	つめいし	築石の隙間に詰める小振りの石
板状詰石	いたじょうつめいし	石垣面を平滑に見せるため、石材の隙間に合わせて加工された板状の石材を詰石とする技法
角石	すみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
栗石	ぐりいし	築石の裏込めなどに用いられる円礫
押さえ石	おさえいし	石垣を補強するために裏込めに入れた石材
介石	かいいし	石材の固定及び角度調整のため据え置く石材
捨石	すていし	栗石の内部に押さえ石・介石に適さない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本来の地面の上に盛られた土
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度。直線のノリと曲線のソリからなる
丁張	ちょうはり	石垣普請時に石積の通りや勾配を示すために張る水糸や板
鉢巻き石垣	はちまきいしがき	斜面上部だけに鉢巻状に石垣を築いたもの。斜面裾部だけに築いた石垣を腰巻石垣という
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おおづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が大きい面
小面	こづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が小さい面
控	ひかえ	石材の奥行き
石尻	いしじり	石材の後ろ側
胴	どう	石材の面と尻の間
合端	あいば	石同士の接点
自然石	しぜんいし	加工していない石。野面石・河川転石とも言う
割石	わりいし	割って、大きさを整えたり、面を作ったもの
粗加工石	あらかこういし	割石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合端までを加工した石材
周囲加工	しゅういかこう	切石の石面の四方を一定幅で平滑にならす加工。周囲はつりとも言う
練積み	ねりづみ	コンクリート等を石積みの接合面や裏込めに使用して固めた工法
空積み	からづみ	石材を緊結・接着しないで積んだ工法
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横目地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
落とし積み	おとしづみ	下の石の谷(くぼみ)へ石を落していく積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する２面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方
孕み出し	はらみだし	変形の一つ。膨らんで張り出した状態
迫出し	せりだし	単体の石材が石垣面から飛び出した状態

石垣名称凡例図



目次

第１章　調査の経緯と経過　1

第１節　調査に至る経緯……（滝川）　1
第２節　調査の経緯……（西田）　3

第２章　位置と環境　5

第１節　金沢城と周辺の歴史的環境……（大西）　5
第２節　金沢城の沿革……（大西）10
第３節　玉泉院丸の来歴……（西田）12
第４節　既往の調査成果……（西田）24

第３章　遺構　29

第１節　調査の概要……（西田）29
第２節　数寄屋屋敷北調査区……（西田）31
第３節　玉泉院丸南東調査区……（西田）55
第４節　玉泉院丸北調査区……（西田）73

第４章　遺物　93

第１節　概要……（西田）93
第２節　陶磁器・土器……（滝川）93
第３節　瓦……（滝川）94
第４節　石製品……（西田）125
第５節　金属製品……（西田）138

第５章　総括　153

第１節　各調査区の成果……（滝川）153
第２節　金沢城の切石積石垣……（滝川）153

引用参考文献　165

図版目次

第1図　平成29年度調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第2図　平成29年度現地指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第3図　平成30年度調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第4図　平成30年度現地指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第5図　平成30年度現地公開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第6図　令和元年度調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第7図　令和元年度現地指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第8図　令和元年度現地公開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第9図　金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡・・・・・・・・・6
第10図　近世後期の金沢城全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第11図　近世初期の金沢城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第12図　石垣被災・修築・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第13図　玉泉院丸と周辺絵図１・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第14図　玉泉院丸と周辺絵図２・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第15図　玉泉院丸と周辺絵図３・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第16図　玉泉院丸と周辺絵図４・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第17図　玉泉院丸と周辺絵図５・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第18図　玉泉院丸と周辺絵図６・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第19図　玉泉院丸南西石垣（整備後）・・・・・・・・・・・・・24
第20図　玉泉院丸庭園　第５地点（滝壺）・・・・・・・・・25
第21図　玉泉院丸南石垣（整備後）・・・・・・・・・・・・・・・25
第22図　鼠多門・鼠多門橋調査区（全景）・・・・・・・・・25
第23図　金沢城跡発掘調査位置図（～令和３年度）・26
第24図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第25図　数寄屋屋敷北調査地点全景（調査前）・・・・・31
第26図　数寄屋屋敷北調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・32
第27図　数寄屋屋敷北調査区周辺地形断面図・・・・・・33
第28図　調査区平面図・オルソ写真・・・・・・・・・・・・・・34
第29図　2710W・2800N　石垣（調査区内）　立面図・
オルソ写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第30図　数寄屋屋敷北　土層断面図・・・・・・・・・・・・・37
第31図　数寄屋屋敷北　土層断面図・略図・・・・・・・・38
第32図　2801W・2801E　石垣立面図・オルソ写真・・39
第33図　石組側溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第34図　石組側溝　石材観察（№1・2・3・4）・・・・・41
第35図　石組側溝　石材観察（№5・6・7・8・9）・・42
第36図　2710W　根石部分・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第37図　2710W　石垣立面・断面図・オルソ写真・・・44
第38図　2800N　石垣立面・断面図・オルソ写真・・・45
第39図　鉛付着状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
第40図　2710W（雛土蔵下）　石材の色調・・・・・・・・・・46
第41図　2800N（数寄屋屋敷北）鉛付着状況・・・・・・・47
第42図　塀の取り付き痕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第43図　数寄屋屋敷北絵図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第44図　数寄屋屋敷北周辺の災害被災状況・・・・・・・・50
第45図　数寄屋屋敷北遺構写真１・・・・・・・・・・・・・・・・51
第46図　数寄屋屋敷北遺構写真２・・・・・・・・・・・・・・・・52
第47図　数寄屋屋敷北遺構写真３・・・・・・・・・・・・・・・・53
第48図　数寄屋屋敷北遺構写真４・・・・・・・・・・・・・・・・54
第49図　玉泉院丸南東調査地点全景（調査前）・・・・・55
第50図　玉泉院丸南東調査区位置図・・・・・・・・・・・・・56
第51図　玉泉院丸南東石垣周辺地形断面図・・・・・・・・57
第52図　玉泉院丸南東調査区周辺の石垣・・・・・・・・・・57
第53図　調査区平面図・オルソ写真・・・・・・・・・・・・・・58
第54図　1561W　石垣立面・断面図・オルソ写真・・・59
第55図　1561W　石垣（調査区内）立面図・
オルソ写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第56図　盛土上面の黄橙色粘土層（南西から）・・・・・61
第57図　玉泉院丸南東　土層断面図１・・・・・・・・・・・・62
第58図　玉泉院丸南東　土層断面図２・・・・・・・・・・・・63
第59図　46層検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第60図　46層戸室石剥片・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第61図　6430W　石垣裾整地土・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
第62図　6430W・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
第63図　玉泉院丸南東部の変遷１・・・・・・・・・・・・・・・・65
第64図　玉泉院丸南東部の変遷２・・・・・・・・・・・・・・・・66
第65図　切石材実測図・陰影図・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第66図　切石材オルソ写真・現況写真・・・・・・・・・・・・69
第67図　玉泉院丸南東遺構写真１・・・・・・・・・・・・・・・・70
第68図　玉泉院丸南東遺構写真２・・・・・・・・・・・・・・・・71
第69図　玉泉院丸南東遺構写真３・・・・・・・・・・・・・・・・72
第70図　玉泉院丸北調査地点全景（調査前）・・・・・・・73
第71図　玉泉院丸北調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・74
第72図　玉泉院丸北調査区周辺地形断面図・・・・・・・・75
第73図　板石出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
第74図　円礫検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
第75図　黄白色粘土層と腰瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
第76図　調査区平面図・オルソ写真・・・・・・・・・・・・・・77
第77図　玉泉院丸北　土層断面図１・・・・・・・・・・・・・78
第78図　玉泉院丸北　土層断面図２・・・・・・・・・・・・・79
第79図　植栽痕上部でのプラン・・・・・・・・・・・・・・・・・80
第80図　植栽痕検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
第81図　2640E　根石の切石材・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
第82図　2640E　石垣立面・断面図・オルソ写真・・・81
第83図　2620S　石垣立面・断面図・オルソ写真・・・82
第84図　2640E・2620S　石垣（調査区内）立面図・・83
第85図　2640E・2620S　石垣（調査区内）
立面オルソ写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第86図　石材の周縁部の加工・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第87図　玉泉院丸北周辺の変遷１・・・・・・・・・・・・・・・・87

第88図　玉泉院丸北周辺の変遷２・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第89図　納戸土蔵下前面ボーリングコア（BP74）・・・88
第90図　玉泉院丸北遺構写真１・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
第91図　玉泉院丸北遺構写真２・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
第92図　玉泉院丸北遺構写真３・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
第93図　玉泉院丸北遺構写真４・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
第94図　出土遺物　陶磁器・土器１
　　数寄屋屋敷北 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
第95図　出土遺物　陶磁器・土器２
　　玉泉院丸南東 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
第96図　出土遺物　陶磁器・土器３
　　玉泉院丸南東 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
第97図　出土遺物　陶磁器・土器４
　　玉泉院丸北 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第98図　出土遺物　陶磁器・土器５
　　玉泉院丸北 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第99図　出土遺物　陶磁器・土器６
　　玉泉院丸北 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
第100図　軒丸瓦　瓦当文様分類・・・・・・・・・・・・・・・・103
第101図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類１・・・・・・・・104
第102図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類２・・・・・・・・105
第103図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類３・・・・・・・・106
第104図　出土遺物　瓦１　数寄屋屋敷北・・・・・・・・107
第105図　出土遺物　瓦２　数寄屋屋敷北・・・・・・・・108
第106図　出土遺物　瓦３　数寄屋屋敷北・・・・・・・・109
第107図　出土遺物　瓦４　数寄屋屋敷北・・・・・・・・110
第108図　出土遺物　瓦５　数寄屋屋敷北・
　　玉泉院丸南東・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
第109図　出土遺物　瓦６　玉泉院丸南東・
　　玉泉院丸北・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
第110図　出土遺物　瓦７　玉泉院丸北・・・・・・・・・・113
第111図　出土遺物　瓦８　玉泉院丸北・・・・・・・・・・114
第112図　出土遺物　瓦９　玉泉院丸北・・・・・・・・・・115
第113図　出土遺物　瓦10　玉泉院丸北・・・・・・・・・・116
第114図　出土遺物　瓦11　玉泉院丸北・・・・・・・・・・117
第115図　出土遺物　瓦12　玉泉院丸北・・・・・・・・・・118
第116図　出土遺物　瓦13　玉泉院丸北・・・・・・・・・・119
第117図　出土遺物　瓦14　玉泉院丸北・・・・・・・・・・120
第118図　出土遺物　瓦15　玉泉院丸北・・・・・・・・・・121
第119図　出土遺物　瓦16　玉泉院丸北・・・・・・・・・・122
第120図　出土遺物　瓦17　玉泉院丸北・・・・・・・・・・123
第121図　出土遺物　瓦18　玉泉院丸北・・・・・・・・・・124
第122図　出土遺物　石１　数寄屋屋敷北・
　　玉泉院丸北・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
第123図　出土遺物　石２　玉泉院丸北・・・・・・・・・・127
第124図　出土遺物　石３　玉泉院丸北・・・・・・・・・・128
第125図　出土遺物　石４　玉泉院丸北・・・・・・・・・・129
第126図　出土遺物　石５　玉泉院丸北・・・・・・・・・・130
第127図　出土遺物　石６　玉泉院丸北・・・・・・・・・・131
第128図　出土遺物　石７　玉泉院丸北・・・・・・・・・・132
第129図　出土遺物　石８　玉泉院丸北・・・・・・・・・・133
第130図　出土遺物　石９　玉泉院丸北・・・・・・・・・・134
第131図　出土遺物　石10　玉泉院丸北・・・・・・・・・・135
第132図　出土遺物　石11　玉泉院丸北・・・・・・・・・・136
第133図　出土遺物　石12　玉泉院丸北・・・・・・・・・・137
第134図　出土遺物　金属１　数寄屋屋敷北・
　　玉泉院丸南東・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138
第135図　出土遺物　金属２　玉泉院丸北・・・・・・・・139
第136図　出土遺物　金属３　玉泉院丸北・・・・・・・・140
第137図　金沢城切石積石垣現位置図・・・・・・・・・・・・158
第138図　金沢城跡の切石積石垣等１・・・・・・・・・・・・159
第139図　金沢城跡の切石積石垣等２・・・・・・・・・・・・160
第140図　金沢城跡の切石積石垣等３・・・・・・・・・・・・161
第141図　金沢城跡の切石積石垣等４・・・・・・・・・・・・162
第142図　金沢城跡の切石積石垣等５・・・・・・・・・・・・163
第143図　金沢城跡の切石積石垣等６・・・・・・・・・・・・164

表目次

第1表　近世遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第2表　金沢城の沿革・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第3表　玉泉院丸年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第4表　主な災害・修築記録年表（玉泉院丸周辺）・・17
第5表　金沢城発掘調査一覧（１）・・・・・・・・・・・・・・・27
第6表　金沢城発掘調査一覧（２）・・・・・・・・・・・・・・・28
第7表　出土遺物観察表　陶磁器・土器１・・・・・・・・141
第8表　出土遺物観察表　陶磁器・土器２・・・・・・・・142
第9表　出土遺物観察表　瓦１・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
第10表　出土遺物観察表　瓦２・・・・・・・・・・・・・・・・・144
第11表　出土遺物観察表　瓦３・・・・・・・・・・・・・・・・・145
第12表　出土遺物観察表　瓦４・・・・・・・・・・・・・・・・・146
第13表　出土遺物観察表　瓦５・・・・・・・・・・・・・・・・・147
第14表　出土遺物観察表　瓦６・・・・・・・・・・・・・・・・・148
第15表　出土遺物観察表　瓦７・・・・・・・・・・・・・・・・・149
第16表　出土遺物観察表　石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・150
第17表　出土遺物観察表　金属１・・・・・・・・・・・・・・・150
第18表　出土遺物観察表　金属２・・・・・・・・・・・・・・・151
第19表　出土遺物観察表　金属３・・・・・・・・・・・・・・・152

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

１．金沢城跡埋蔵文化財確認調査の推移

近世において加賀藩前田家の居城であった金沢城は、明治期に入り兵部省（後陸軍省）の管轄となり、第二次大戦後は国立金沢大学のキャンパスとして利用されてきたが、大学の郊外移転を受け、平成８年(1996) ３月、石川県は国から用地を取得し、城跡を都市公園として利用するべく公園整備事業を進めることとなった。

平成９年度（1997）には、整備事業の柱となる城郭建造物の復元に着手し、石垣解体・積み直し等を含む大がかりな調査･整備を経て、平成 13 年（2001） ９月、金沢城公園二ノ丸における内堀･菱櫓･五十間長屋・橋爪門続櫓等の復元事業が竣工した。

この動きの中で、今後の金沢城跡の保存・活用を図る上で専門的な調査研究機関の必要性が認識され、復元整備事業が最終段階に至った平成 13 年７月、県教育委員会の文化財課の中に、金沢城研究調査室が設置されることとなった。調査室では平成 14 年度（2002）から、絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の４つの分野より、学術的価値の確立を通じ保存と活用に資することを目的に調査研究事業に着手した。

調査研究を進めるにあたり、金沢城跡の変遷と構造の解明という全体課題を設定したが、とりわけ寛永８年（1631）の大火以前の状況については、絵図・文献・建造物による情報が乏しいことから、埋蔵文化財分野においては、初期金沢城の構造追求を当面の課題とした。これに基づき、平成 14 年度（2002）から国庫補助を得て、初期の中枢であった本丸とその周辺を対象に、埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。

この間、平成 19 年（2007）４月には、金沢城研究調査室は、石川県金沢城調査研究所に改組された。また平成 20 年（2008） ６月 17 日、金沢城跡は国の史跡指定を受けた。

本丸一帯を対象とした確認調査については、平成 20 年度まで発掘調査を継続し、その後もボーリング調査を実施する中で、平成 19 年度及び平成 25 年度に調査報告書を刊行し、とりまとめを行った[石川県金沢城調査研究所 2008d・2014d]。

調査成果における特に重要な所見として、史料にみえる元和６年（1620）の本丸火災と翌年の普請をめぐり、発掘調査でその前後の実態が確認されたことが挙げられる。元和６年以前の本丸は、自然地形を生かし、周囲に深い堀、高い石垣を配備した堅固な防御性が目立っていたが、元和７年（1621）の普請ではこれを大きく改め、本丸周囲の堀を埋め立て、本丸と周辺の郭を拡張していることが明らかとなった。ここに戦国期・織豊期を通じ発達してきた城郭構造が変質する転換点を認め、今後の課題として、変質後＝近世城郭としての金沢城の構造を積極的に捉え直す視座の構築を挙げた。

２．城郭庭園等の総合研究事業

埋蔵文化財分野では、以上のように初期金沢城の構造解明から次の目標への移行を図ることとしたが、これは金沢城調査研究事業の第２期事業計画（H24 ～ H33）の一環をなすものであった。第２期事業計画では、金沢城の学術的価値と特徴の深化、及び史跡の本質的価値の保存･継承を目標に掲げ、基礎的調査の充実・発展とともに、分野を超えた総合研究の進展を取り組みの課題とした。この枠組みと、初期金沢城の調査成果を踏まえた研究視座の交点にある対象として、城郭に関連する庭園に注目した。庭園は、御殿等とともに、近世城郭の構造とその変容の意義を捉え直すのに有効な素材であり、

近世城郭の多様性を体現する構成要素と目される。また遺構だけでなく文献・絵図史料も多く、庭園遺構の実態を把握するためにはその検討が不可欠であり、総合研究にふさわしい対象と言えた。

すでに本丸・東ノ丸の発掘調査において、従来ほとんど知見のなかった初期の庭園遺構を部分的ではあるが確認していた（第１図）。また土木部が主管する都市公園整備事業においても、近代以後、その景観を失った城内の庭園、玉泉院丸庭園の復元整備事業が着手されたところであり（平成 20 年度確認調査開始、第２図）、金沢城に関連する庭園に係り総体として取り組む機運が生じつつあった。加えて金沢においては大名庭園の典型として名高い兼六園が所在する。近年になって文献史による実証的な研究が進められ、一定の指針となった。

以上から、本丸の確認調査成果の取りまとめと並行させつつ、平成 24 年度から、庭園について総合的に検討することにより、金沢城の特質を一層明確にし、併せて城郭の構成要素としての庭園の意義の解明に資することを目的に、「城郭庭園等の総合研究」に取り組むこととした。

「城郭庭園」の用語については明確な定義はなく、一般に城郭に内包される位置にある庭園を指すことが多いようである。本事業においてもとくに一定の様式等を念頭に置かず、城郭との関連が深く、その構成要素たる性質が窺える庭園を対象とし、城内に位置する本丸・東ノ丸、二ノ丸、玉泉院丸、金谷出丸等と、城域に隣接する兼六園（蓮池庭・竹沢庭）について検討することとした。以上の取り組みは、平成 29 年度をもって一旦取りまとめるとともに、並行して庭園の構成要素である切石積石垣を対象とした確認調査に着手した。

３．切石積石垣確認調査

前項の通り「城郭庭園等の総合研究事業」では、金沢城の庭園について、城郭構造との関わりを軸に、各庭園の特徴と、全体の変化傾向を把握することに努めた。その事業成果のとりまとめにおいて、平成 29 年度以後の課題として、庭園を形づくる個々の構成要素に立ち戻り、これらを成立させている技術・機能・意匠等がどのように作用しあっているのか等を掘り下げることを挙げた。この点を踏まえると、金沢城の庭園において、デザイン性の高い切石積石垣は、全国的にも類のない、金沢城ならではの特色を示しており、もっとも注目するべき構成要素の一つである。

加賀前田家では、元和６年（1620）の大坂城公儀普請において、すでに切石積石垣を構築していたが、金沢城では、石垣編年５期（寛永年間（1624 ～ 1643）頃）、より具体的には、寛永８年（1631）の大火後に採用されたことが判明している。しかしこの出現期切石積石垣は、五十間長屋・橋爪門続櫓下部、つまり御殿や御殿に至る門付近で確認されたのみであった。玉泉院丸庭園において、現状で地上部分で見られる切石積石垣の多くは、17 世紀後半の特徴を有しており、庭園築造当初である寛永期の状況は不明であった。

なお石垣自体については、調査研究事業当初から重点的に調査を実施し、分類・編年の大綱は整理されてきたところであったが［石川県金沢城調査研究所 2012c］、上記の課題は、石垣調査における課題という側面も持ち合わせていた。平成 29 年度は、金沢城調査研究 20 年計画の終盤（第２期事業後半）にあたり、残された課題に取り組む節目として位置付けられ、切石積石垣は、その点でもここで取り上げるべき対象として認識されたのである。

以上から、城郭庭園等の総合研究・石垣の調査研究双方の課題として、玉泉院丸庭園周辺の切石積石垣を対象とし、その出現期の様相を発掘によって探り、金沢城の城郭構造全体の解明につなげることを目標に、切石積石垣確認調査に着手することとした。ただし、当初その存在を想定していた寛永期切石積石垣は、玉泉院丸庭園では構築されなかったことが判明し、切石積石垣の展開、ひいては城郭の構造にとって、17 世紀後半の重要性が浮き彫りになったことは、以下に報告する通りである。

第２節　調査の経緯

１．概要

本事業は、前節でも述べたように平成 24 年度から行われた「城郭庭園等の総合研究」の取組みの一環として、金沢城の庭園の構成要素である切石積石垣の実態を明らかとするため平成 29 年度より５か年の計画で確認調査を進めてきたものである。

平成 29 ～令和元年度にかけて現地調査を実施し（H29 数寄屋屋敷北、H30 玉泉院丸南東、R1 玉泉院丸北・第 24 図参照）令和２年度に出土品整理委託、令和３年度に報告書の作成・刊行を行った。

第 1 図　平成 29 年度調査

第 2 図　平成 29 年度現地指導

第 3 図　平成 30 年度調査

第 4 図　平成 30 年度現地指導

２．体制

金沢城の調査研究事業については、総合的、専門的視点からの指導を置受けるため、金沢城調査研究委員会を設置している。また分野ごとに調査研究への参画及び専門的な見地からの指導。助言を得るため、金沢城調査研究専門委員会を設置している。本事業については、調査研究委員会の総括的指導の下、主に埋蔵文化財専門委員会と伝統技術（石垣）専門委員会より指導・助言を得た。調査研究委員会・専門委員会の構成は下記のとおりである。

金沢城調査研究委員会
　平井　聖（委員長、建築）
　嶋崎　丞（美術工芸、～令和元迄）
　中村　利則（建築、～令和２迄）
　飛田　範夫（庭園）
　吉岡　康暢（考古）
　脇田　修（文献、～平成 29 迄）
金沢城調査研究埋蔵文化財専門員会
　吉岡　康暢（委員長）
　久保　智康
　千田　嘉博
　森島　康雄
金沢城調査研究伝統技術（石垣）専門委員会
　北野　博司（委員長）
　市川　浩文
　金田　明大
　西形　達明
　宮里　学

３．年次経過

平成 29 年度（2017）　　予算額　4,878 千円

調査期間　平成 29 年６月 19 日～８月 31 日

調査面積　20 ㎡

平成 29 年度は二ノ丸数寄屋屋敷北を対象として発掘を行い、雛土蔵下石垣と数寄屋屋敷北石垣の構造等を確認した。

平成 30 年度（2018）　　予算額　4,406 千円

調査期間　平成 30 年５月 21 日～８月 31 日

調査面積　38 ㎡

平成 30 年度は玉泉院丸の南東部を対象として発掘を行い、寛文期に行われた玉泉院丸庭園の再整備とともに切石積石垣が築かれたことを確認した。８月 25 日には現地公開を行った。

令和元年度（2019）　　予算額　6,350 千円

調査期間　令和元年５月７日～９月３日

調査面積　15 ㎡

令和元年度は玉泉院丸の北、色紙短冊積石垣の東面周辺を対象として発掘を行い、玉泉院丸庭園を代表する色紙短冊積石垣は平面的な設計プラン寛文期に新設されたことを確認した。８月 25 日には現地公開を行った。

令和２年度（2020）　　予算額　4,799 千円

現地調査は実施せず、出土品整理を行った。出土品整理については、洗浄と陶磁器類の実測の一部を直営で行ったが、その他の大部分は（公財）石川県埋蔵文化財センターに委託して実施した。

洗浄 15 箱、記名・分類・接合 69 箱、

記名・接合（瓦）33 箱、実測・トレース 138 点

令和３年度（2021）　　予算額　1,620 千円

平成 29 年度から令和元年度にかけて現地調査を行った成果について報告書を作成、刊行した。

第５図　平成 30 年度現地公開

第６図　令和元年度調査

第７図　令和元年度現地指導

第８図　令和元年度現地公開

第２章　位置と環境

第１節　金沢城と周辺の歴史的環境

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より流れ出す犀川・浅野川によって形成された、細長く伸びる小立野台地の先端部に位置する。城外との比高差は、低所に位置する新丸においては約10m、最高所である本丸で30m以上を測る。本丸からは、低地の金沢平野のみならず小立野台地方面へも眺望がきく。また、城のある台地先端部とその南東に続く台地本脈との間には、自然谷が形成されていたらしく［藤1999］、城付近の地形は、人の手が加わる以前から独立丘的な状況を呈していたようであり、城は自然地形を巧みに利用して築かれたことが推察される。

城下町は、金沢城を中心に小立野台地を含む河岸段丘から沖積平野に展開している。外堀としての内惣構堀、外惣構堀が城を遠巻きに二重に囲み、旧北国街道は金沢城を東に迂回するよう城下町を通る。それらを基幹として城下町と各地を繋ぐ街道や街路が整備された。これら城下町の基本的な構造は、現在の市街地に引き継がれ、城下町の町並を色濃く反映している様態は、歴史都市・金沢を特徴づける要素の一つになっている。

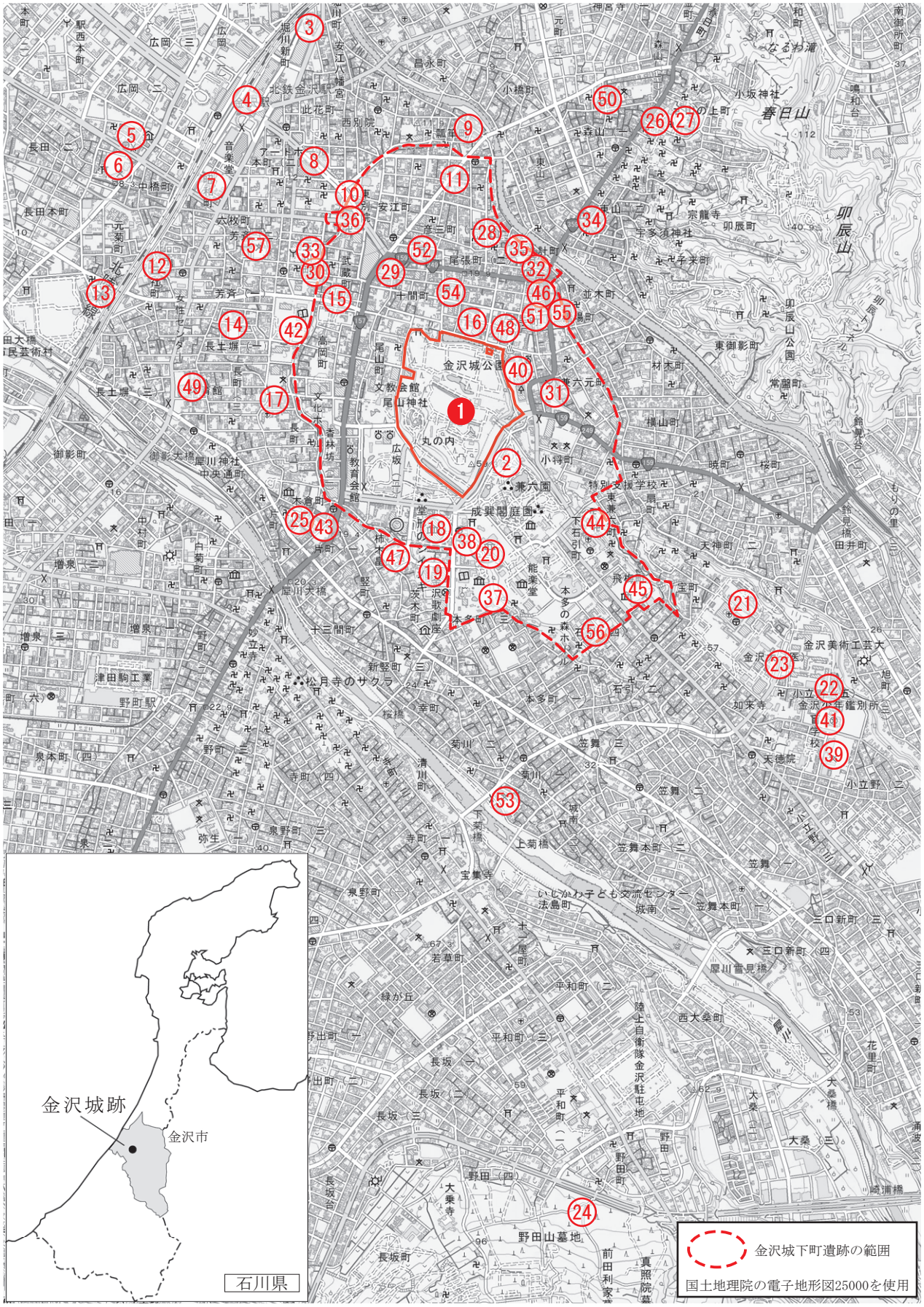
金沢城跡周辺は、絵図等の資料から近世以降の市街化が確認できるものの、それ以前の様相については文献等からの推定にとどまっていたが、城跡自体や城地に隣接する前田氏（長種系）屋敷跡地点［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002e］、広坂１丁目遺跡［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004a・2005c・2006a・2007a・2009a］・丸の内７番地点［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2014a・2015a］の発掘調査、惣構堀復元整備に伴う確認調査［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b・2011a・2011b・2012d・2013b・2014c］や市街地再開発等に伴う諸所の発掘調査等により、その姿を垣間見ることが可能となった。また平成23年４月１日には、第３図の赤破線内の範囲が金沢城下町遺跡として周知されている。

旧石器時代の遺跡は、城外縁の車橋、石川門前土橋、丸の内７番地点の調査で数点の石器が出土している。県内において数少ない当該期の遺跡のあり方を示すものとして注目される。

縄文時代の遺跡は、丸の内７番地点で草創期の有舌尖頭器が採取されている他、城内の幾つかの調査区で遺物の出土が確認されるとともに、前田氏（長種系）屋敷跡地点で、後期の陥穴が検出されている。城下町の調査でも、まとまった面積の調査が実施された地点では遺物の出土がみられ、今後その実態が明らかになることを期待したい。

弥生時代は、前田氏（長種系）屋敷跡地点で弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓が確認され、広坂１丁目遺跡では中期の土器が出土し、後期後半の竪穴建物等が検出されている。古墳時代は、高岡町地点［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002d、金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003a］で前期の竪穴建物が確認され、下本多町遺跡［金沢市埋蔵文化財センター1999］や彦三町一丁目地点［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007b］では中期の遺構が、広坂１丁目遺跡では前期、後期の土器の他、車輪石や勾玉等の遺物が出土しており、後に隆盛となる集落の母体が出来上がっていたものと考えられる。

古代では、城内の平成９年度の調査において８～９世紀代の掘立柱建物跡が検出された他、断片的ではあるが、幾つかの調査区で遺構、遺物が確認されている。城下では高岡町地点で７世紀後半の竪穴建物や、半瓦当を含む古式瓦、奈良、平安時代の掘立柱建物と、円面硯、帯金具、奈良三彩等が確認されている。県庁跡地（堂形）［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2010・2012、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014c］でも７世紀後半から10世紀初頭の遺物が出土し、竪穴建



第 9 図　金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡

第１表　近世遺跡一覧表

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地種	特記事項	
1	金沢城跡	（別掲）	城郭	（別掲）	（別掲）
2	兼六園	（別掲）	庭園	（別掲）	（別掲）
3	木ノ新保遺跡（久昌寺遺跡）	H8（1996）・H9（1997）	寺院（墓地）	近世墓 292 基	増山 1997、金沢市埋蔵文化財センター 2004c
4	木ノ新保遺跡	H5（1993） H6（1994）・H7（1995）	寺院？（墓地）→足軽組地→下級武家地、町人地、百姓地	近世墓、水利施設（管井戸・竹樋）、溝（堰・しがらみ）、建物跡（土蔵基礎、木柱）	（財）石川県埋蔵文化財センター 2002b 金沢市埋蔵文化財センター 2005c
5	醒ヶ井遺跡	H7（1995）～ H10（1998）	百姓地→下級武家地	前田氏（直之系）下屋敷 水路、水利施設（竹樋・溜升）	金沢市埋蔵文化財センター 2001c 谷口・増山 2004
6	長田町遺跡	H6（1994）	下級武家地		金沢市埋蔵文化財センター 1998
7	昭和町遺跡	H5（1993）～ H7（1995）	町人地・下級武家地	延宝５年（1677）火災資料出土、近世鞍月用水	金沢市埋蔵文化財センター 2001b・2003a・2004a
8	本町一丁目遺跡	H2（1990）・H6（1994）・H9（1997）・H15（2003）	町人地	廃棄土坑、墨書木製品多数、焼成遺構、鍛冶関連遺物（鞴羽口、椀型鉄滓）	金沢市教育委員会 1995・1997b 金沢市埋蔵文化財センター 2003c・2006c
9	瓢箪町遺跡	S61（1986）	上級武家地	前田氏（主膳系）上屋敷、整地層から遺物多数出土	金沢市教育委員会 1991
10	金沢城下町遺跡（安江町地区　安江町１番地点）	H3（1991）～ H5（1993） H30（2018）～ R1（2019）	町人地・中級武家地	板塀跡（布堀土坑）、墨書木製品多数、「乾山」銘向付出土、道跡、堀、溝、建物跡、井戸、土坑	金沢市教育委員会 1997a・2019a・2020a
11	金沢城下町遺跡（彦三町地点）	H11（1999）	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター 2002
12	三社町遺跡	H3（1991）・H9（1997）	百姓地→町人地	道路・側溝、肥溜め群、操人形かしら	（財）石川県埋蔵文化財センター 2001b・2007
13	元菊町遺跡	S62（1987）・H1（1989）	百姓地→町人地		石川県立埋蔵文化財センター 1990 （公財）石川県埋蔵文化財センター 2014d
14	穴水町遺跡	H8（1996）	下級武家地	長氏下屋敷	金沢市埋蔵文化財センター 1998
15	金沢城下町遺跡（高岡町地点）	H8（1996）・H10（1998）～ H11（1999）・H9（1997）	上級町人地、水溜	礎石建物、桶棺墓、廃棄土坑、瓦溜り（鬼瓦を桟瓦で囲む）、石灯篭基壇、椀形鉄滓	金沢市埋蔵文化財センター 2001a・2003b （財）石川県埋蔵文化財センター 2002d
16	金沢城下町遺跡 （前田氏（長種系）屋敷跡地点）	H8（1996）・H27（2015）	町人地→上級武家地	寛永以前の町屋遺構	（財）石川県埋蔵文化財センター 2002e 金沢市埋蔵文化財センター 2019c
17	長町遺跡	H8（1996）	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター 1998
18	広坂１丁目遺跡	H8（1996）～ H12（2000） H14（2002）・H17（2005）	中～上級武家地	寛永の大火火災資料、大型土坑（廃棄土坑、地下室、池等）、楽焼窯道具、惣構跡、紀年銘木製品等の基準資料検出	金沢市埋蔵文化財センター 2004b・2005b・2006b・2007c・2009b
19	下本多町遺跡	H4（1992）	下級武家地→上級武家地	宝暦の大火による火災資料	金沢市埋蔵文化財センター 1999
20	金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）	S55（1980）・H21（2009）・H22（2010）・H26（2014）・H27（2015）・H28（2016）・H29（2017）	上級武家地、武家地	溝、階段（地下室？） 本多家上屋敷、塀基礎石積、門跡、石垣、道跡	石川県立埋蔵文化財センター 1992 金沢市埋蔵文化財センター 2012b・2018d （公財）石川県埋蔵文化財センター 2016・2020
21	金沢大学宝町遺跡 （医学部附属病院地点）他 16 地点	H9（1997）～ H14（2002） H23（2011）	下～中級武家地等	地下室多数	金沢大学埋蔵文化財調査センター 2000・2002・2003・2017
22	金沢大学宝町遺跡 （医学部保健学科地区）	H10（1998）・H11（1999） H13（2001）	下～中級武家地等		金沢大学埋蔵文化財調査センター 2000・2002・2003・2017
23	経王寺遺跡	H9（1997）・H10（1998）	寺院（墓地）・中級武家地	近世初期の灰塚、池状遺構、塀跡	（財）石川県埋蔵文化財センター 2002c
24	野田山墓地	H12（2000）～ H14（2002） H16（2004）～ H19（2007） H20（2008）～ H24（2012）	墓地	藩主家の墓所を中核とした近世墓地	金沢市埋蔵文化財センター 2003d・2008b・2012a・2012d・2013a
25	片町二丁目遺跡	H15（2003）・H23（2011）	武家地		金沢市埋蔵文化財センター 2005a
26	妙国寺門前遺跡	H15（2003）	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター 2006a
27	三宝寺前遺跡	H16（2004）	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター 2005d
28	金沢城下町遺跡（彦三町一丁目地点）	H16（2004）	武家地	廃棄土坑	金沢市埋蔵文化財センター 2007a
29	金沢城下町遺跡（下堤・青草町地点）	H17（2005）	町人地		金沢市埋蔵文化財センター 2007b
30	金沢城下町遺跡 （金沢城西外惣構跡武蔵町地点）	H17（2005）・H21（2009）	惣構	築造当初の堀、堀の改変状況　土居盛土	金沢市埋蔵文化財センター 2008a・2011c
31	金沢城下町遺跡（兼六元町 兼六元町７番地点　兼六元町 15 番地点）	H17（2005）・H23（2011）・H30（2018）	武家地	井戸、土坑、石組溝、石垣、石列	金沢市埋蔵文化財センター 2007a・2018b・2020c
32	金沢城下町遺跡 （金沢城東内惣構跡枯木橋北地点）	H18（2006）	惣構	堀の改変状況	金沢市埋蔵文化財センター 2008a
33	玉川町遺跡	H18（2006）	武家地	土坑、溝	金沢市埋蔵文化財センター 2016b
34	東山一丁目遺跡	H20（2008）	町人地	鍛冶関連遺構・遺物（炉跡、鞴羽口、椀形鉄滓等）	金沢市埋蔵文化財センター 2010b
35	金沢城下町遺跡 （金沢城西内惣構跡主計町地点）	H20（2008）	惣構	素掘の堀、室町～戦国期の鍛冶関連遺物	金沢市埋蔵文化財センター 2011a
36	金沢城下町遺跡 （金沢城西外惣構跡升形地点）	H20（2008）～ H22（2010） H30（2018）	惣構	堀、升形遺構、建物跡、石垣	金沢市埋蔵文化財センター 2012e・2013c・2018a
37	金沢城下町遺跡（本多町三丁目地点）	H22（2010）	武家地	道路、水路（辰巳用水分流）	金沢市埋蔵文化財センター 2012c
38	金沢城下町遺跡 （西外惣構跡本多町三丁目地点）	H21（2009）	惣構（西外惣構起点付近）	堀、土居基部	金沢市埋蔵文化財センター 2012b
39	小立野四丁目遺跡 （旧天徳院加賀藩主前田家墓所）	H22（2010）	寺院、墓地	堀	金沢市埋蔵文化財センター 2013b
40	金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）	H21（2009）～ H23（2011）	武家地（公事場、屋敷）	庭園遺構（石組池状遺構、景石等）	（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014a・2015a
41	小立野ユミノマチ遺跡	H22（2010）～ H24（2012）	武家地	階段付大型土坑	（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014b・2015b
42	金沢城下町遺跡（長氏屋敷跡地区）	H24（2012）～ H25（2013） R1（2019）	上級武家地、武家地	長氏上屋敷、柱穴、建物基礎、土塀基礎	金沢市埋蔵文化財センター 2015b・2020a
43	片町二丁目遺跡（５番地点）	H23（2011）	武家地	地下室、井戸、建物跡（石列基壇、礎石）、水路、土坑	金沢市埋蔵文化財センター 2014b
44	金沢城下町遺跡（東兼六町５番地点）	H25（2013）～ H27（2015）	墓地	土坑（甕棺墓、木棺墓等）、石列（墓石区画）	（公財）石川県埋蔵文化財センター 2017
45	金沢城下町遺跡（飛梅町３番地点）	H25（2013）～ H27（2015）	武家地	前田氏（長種系）・大音氏下屋敷 土坑（粘土採掘跡、地下室）、井戸	金沢市埋蔵文化財センター 2019b・2020b・2021
46	金沢城下町遺跡 （金沢城東内惣構跡枯木橋南地点）	H24（2012）	惣構	堀	金沢市埋蔵文化財センター 2014c
47	柿木畠遺跡	H28（2016）・H29（2017）	武家地	曲水遺構、建物跡（土台、礎石）、区画溝、方形石組遺構、石列、池跡、土坑、井戸	金沢市埋蔵文化財センター 2017・2018a
48	金沢城下町遺跡（大手町３番地点）	H29（2017）	武家地（人持組津田玄蕃邸跡）	石敷き、井戸、土坑	金沢市埋蔵文化財センター 2018c
49	長町三丁目遺跡	H29（2017）	武家地	土塀基礎、井戸、溝、土坑	金沢市埋蔵文化財センター 2021
50	森山二丁目遺跡	H29（2017）	武家地（足軽屋敷）	道路、石敷遺構、ゴミ穴	金沢市埋蔵文化財センター 2018a
51	金沢城下町遺跡 （尾張町１丁目７番地点）	H30（2018）	惣構（東内惣構）	石垣、堀、土坑	金沢市埋蔵文化財センター 2019a
52	金沢城下町遺跡（袋町２番地点）	R1（2019）	町人地	土坑、溝、石列	金沢市埋蔵文化財センター 2021
53	菊川１丁目遺跡（２番地点）	R1（2019）	町人地	屋敷地、道路、井戸	金沢市埋蔵文化財センター 2020a
54	金沢城下町遺跡（尾張町１丁目１番地点）	R2（2020）	町人地	井戸、ゴミ穴	金沢市埋蔵文化財センター 2021
55	金沢城下町遺跡（橋場町２番地点）	R2（2020）	武家地	ゴミ穴、建物礎石、石列	金沢市埋蔵文化財センター 2021
56	金沢城下町遺跡（石引４丁目 10 番地点）	R2（2020）	武家地	ゴミ穴、柱穴	金沢市埋蔵文化財センター 2021
57	芳斉２丁目遺跡（３番地点）	R3（2021）	武家地	井戸、ゴミ穴	金沢市埋蔵文化財センター 2021

※金沢市埋蔵文化財センター：2001 年は金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）、2002 年以降は金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
（財）石川県埋蔵文化財センター：石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター（2013 年度から公益財団法人）

物、掘立柱建物等の遺構が確認されている。広坂１丁目遺跡では７世紀初め頃から11世紀の遺物が確認されるとともに、藤原宮式、平城宮式に準拠した大量の瓦、「佛」刻書土器、「寺」刻書瓦、仏器等が出土し、矩形の区画溝、掘立柱建物、竪穴建物等が確認され、古代寺院が造営されたと考えられている。また、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内７番地点でも古代の土器が出土し、城跡周辺では兼六園のある小立野台地側や、反対の尾山神社側等にまだ空白部はあるが、律令初期から金沢城跡を取り囲むように遺跡が展開していたと想定され、地域の拠点となっていたと考えられる。

中世では、広坂１丁目遺跡で区画溝や礎石建物、墓地等が確認され、13世紀後半頃～14世紀代に盛期を持つ居館、室町末～17世紀初頭は寺内町内の有力者の居住域か施設が想定されている。また、西側の県庁跡地（堂形）では、16世紀後半の館ないし寺院の区画施設と推定される溝、土塁が確認されている。一方、城の反対側に位置する丸の内７番地点では遺構は不明であるが13世紀頃から17世紀初頭の遺物が出土し、隣接する石川橋白鳥堀調査区では16世紀第３四半期頃に築造されたと考えられる鍛冶関連遺構が確認されている。高岡町地点では薬研堀状の溝が確認され館跡の一部と考えられている。

文献資料からは14世紀には現在の久保市乙剣宮付近に「山崎窪市」が成立し、天文15年（1546）には現在の城地に金沢御堂（金沢坊舎）が創建され寺内町が展開し、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展したとされている。遺跡からはまだまだ当時の様相を具体的に述べるほどの資料は得られていないものの、古代から引き続き、それらのベースとなった集落の展開がうかがわれる。やがて金沢御堂（金沢坊舎）は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階を遺跡ではうまく捉えきれていない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配の下、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は50か所を数えるが（第３図・第１表）、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長年間に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c、木越2013a］。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永８年（1631）・同12年（1635）の大火等）に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661～1672）までにほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

先にもあげたが、城下中枢に位置する遺跡として広坂１丁目遺跡、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内７番地点がある。広坂１丁目遺跡は、17世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また17世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏（長種系）屋敷跡地点は、寛永16年（1639）以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。丸の内７番地点では、16世紀後半～17世紀初頭の町屋→17世紀初頭～寛永８年大火頃の町屋→大火以降から万治２年の武家屋敷→万治２年以降の公事場・武家屋敷という城下町遺跡の成立、変遷が捉えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目遺跡の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡［金沢市・金沢市教育委員会1997a］は中級藩士・町人居住地が対象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡［金沢市教育委員会1995］は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廃棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追究されている。木ノ新保（久昌寺含む）・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004b］

では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する約300基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡[石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002b]では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容をうかがうことができ、三社町遺跡[石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2007]でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

その他に城下町から離れるが、関連する遺跡として戸室石切丁場跡、野田山墓地、辰巳用水が挙げられる。戸室石切丁場跡[石川県金沢城調査研究所2008e・2013c]は金沢市東部の戸室山・キゴ山周辺に広がる採石関連遺跡群であり、城内石垣の９割強を占める石材産地である。悉皆踏査により丁場の分布範囲と保存状態が確認され、戸室石の特性を踏まえた総合的な調査研究により丁場の構造と変遷、戸室石の石割技術など様々な点が明らかにされた。野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や藩主前田家墓所の測量・試掘調査等が実施されている[金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2003d・2008a・2012e]。辰巳用水[金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2009b]は寛永９年(1632)に開削され、終着点である金沢城では堀や庭園の水源として利用された。調査でも導水管(木樋、石樋)が確認されている。上流部では用水法面を保護するための三段石垣や隧道など当時の土木技術を良好に留めた遺構が残る。

「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）文政13年(1830)

第 10 図　近世後期の金沢城全体図

第２節　金沢城の沿革

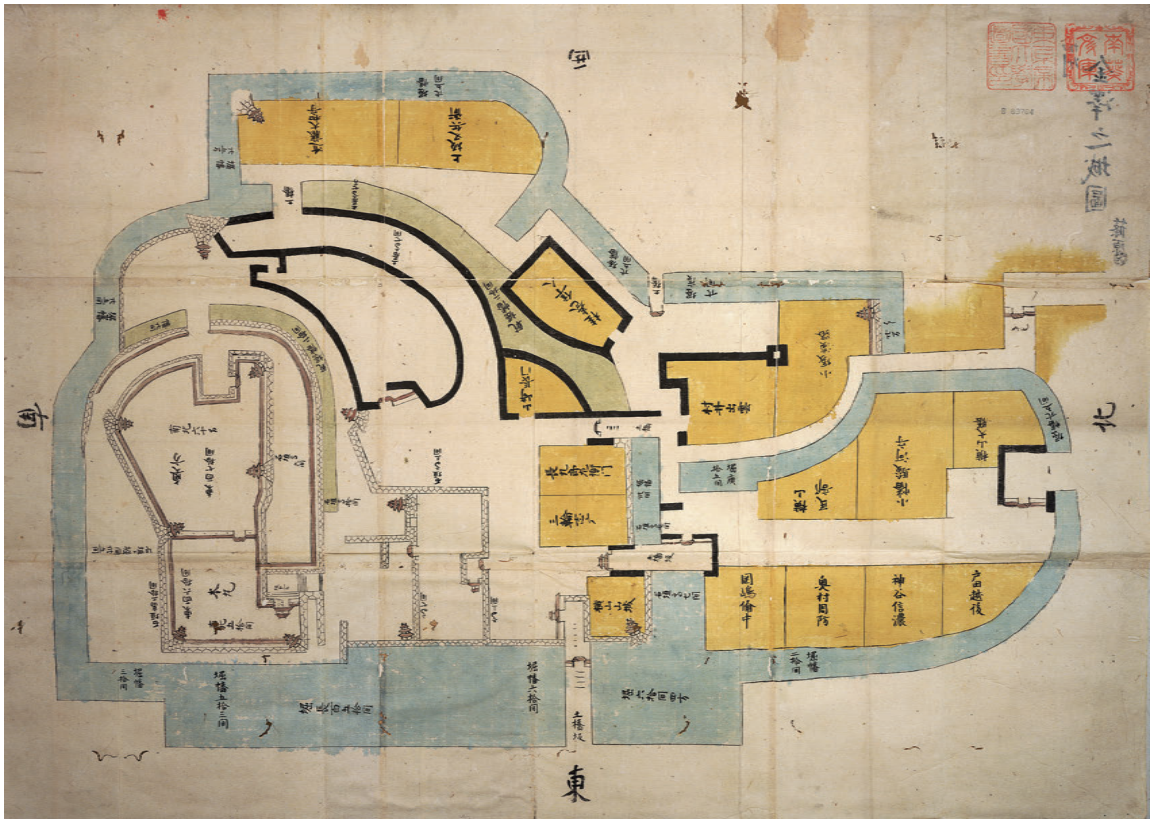
金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』[石川県金沢城調査研究所2008d] が詳しく、参照されたい。ここでは、次頁の年表（第２表）をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。

年表では、金沢城の歴史を４期に区分し、造成・災害・修築等を中心に記載した４つの時期については、利家による城内整備から寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までを「宝暦の大火後」、廃藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城とそれ以前については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

画期となった災害のうち、寛永8年（1631）の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壮麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、現在まで受け継がれることとなる。一方、宝暦9年（1759）の大火は、全盛期の終わりを象徴する災害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、石川門・河北門・橋爪門のいわゆる三御門も、再建までに10～30年の長期を要した。

廃藩後では、明治14年（1881）に二ノ丸御殿が焼亡したほか、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また城の外堀・内堀の多くは埋め立てられ、松原屋敷・金谷出丸など縁辺が削平され往時の形状が失われた郭もある。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けている。



「加州金沢之城図」（東京大学総合図書館蔵）近世初期

第 11 図　近世初期の金沢城

第 2 表　金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出　来　事
前	天 文 15 年	1546	本願寺別院として金沢御坊（金沢坊舎）を設置、金沢城の前身
初期金沢城	天 正 8 年	1580	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天 正 11 年	1583	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北 前田利家が入城し、これ以後前田家が 14 代にわたり金沢城主をつとめる
	天 正 14 年	1586	天守築造、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のもてなしを受け、天守をはじめ、 城内の案内をされる
	天 正 15 年	1587	石垣職人の穴太源介に知行 100 俵を与え召抱える
	文 禄 元 年	1592	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶 長 7 年	1602	落雷により天守焼失
	慶　長　期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元　和　期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元 和 6 年	1620	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の大火後	寛 永 8 年	1631	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し本丸御殿など城内も延焼　【寛永の大火】 大火後二ノ丸を造成拡張し御殿を造営。現在の縄張りに近い状態になる
	寛 永 9 年	1632	犀川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛 永 11 年	1634	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造営
	寛 永 20 年	1643	北ノ丸に東照宮を造営
	寛 文 元 年	1661	5 代綱紀がはじめて入国、城内及び城下町整備や新田開発、文化振興等をすすめる
	寛 文 2 年 ～ 寛 文 11 年	1662 1671	城内の損傷著しい石垣を修築。玉泉院丸色紙短冊積石垣もこの頃に構築か 鉛瓦が普及
宝暦の大火後	宝 暦 9 年	1759	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する 被害　【宝暦の大火】
	宝 暦 10 年	1760	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、修築
	宝 暦 11 年	1761	河北門石垣を修築
	宝 暦 12 年	1762	橋爪門を再建
	宝 暦 13 年	1763	五十間長屋石垣を修築、10 代藩主重教二ノ丸御殿に入る
	明 和 2 年	1765	石川門石垣を修築
	安 永 元 年	1772	河北門を再建
	天 明 8 年	1788	五十間長屋や石川門などを再建 橋爪門続櫓台修理
	文 化 5 年	1808	二ノ丸火災
	文 化 6 年	1809	橋爪門を再建、12 代斉広二ノ丸御殿に移徙
	寛 政 11 年	1799	地震による石垣被害が大きく、石垣修築を願い出る
	安 政 2 年	1855	
	安 政 5 年	1858	三十間長屋を再建
近代以降	明 治 4 年	1871	兵部省（のち陸軍省）の所管となり、多くの建物が払い下げ
	明 治 9 年	1876	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明 治 14 年	1881	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明 治 15 年	1882	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明 治 17 年	1884	鼠多門焼失
	明 治 40 年	1907	本丸南の高石垣が崩落、石垣上部を幅 200m、高さ 2/3 にわたり撤去して改築
	昭 和 24 年	1949	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平 成 7 年	1995	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平 成 8 年	1996	石川県が土地を取得し、公園整備に着手
	平 成 13 年	2001	金沢城公園供用開始、菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓を復元
	平 成 20 年	2008	国史跡に指定、金沢城土蔵（鶴丸倉庫）が国重要文化財に指定
	平 成 22 年	2010	河北門を復元、いもり堀の段階復元
	平 成 27 年	2015	橋爪門を復元、玉泉院丸庭園を再現復元
	令 和 2 年	2020	鼠多門を復元、鼠多門橋を整備

第３節　玉泉院丸の来歴

玉泉院丸の変遷については、『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅰ－』[石川県金沢城調査研究所2015d]や『金沢城庭園調査報告書』[石川県金沢城調査研究所 2018b]で詳細に述べられているので、そちらも参照いただき、本節では郭の来歴と、庭園築造と石垣普請について概略を述べたい。

１．概要

玉泉院丸は金沢城の南西、二ノ丸と金谷出丸の中間にあたる郭である。郭の標高は西辺石垣上(鼠多門続土蔵下 6110W・6100W)で約33mを測り、北東の二ノ丸(標高約49m)より約16m、東ノ本丸附段(約55m)より22m、南西の薪ノ丸(41m)より８m低く、堀を挟んだ西の金谷出丸(約27m)より６m高い。

郭全体の面積は約17,000 ㎡で、このうち６割超の約11,000 ㎡が池と石垣からなる庭園空間、その他が露地役所、鼠多門、同続土蔵等の建物空間及び通路である。

郭縁辺部は南・西・北の三方がいもり堀に囲まれている。堀に面した斜面上には鉢巻石垣が廻り、北東～東側には玉泉院丸庭園の景色として取り入れられた意匠的な切石積石垣が連なっている。

２．近世初期～西ノ丸から玉泉院丸へ～

玉泉院丸は当初、西ノ丸とよばれ、村井長頼や長連龍といった重臣達の屋敷地であったとされ、初期の景観を描いたとされる「加州金沢之城図」(東京大学総合図書館蔵)には、近藤大和守、上坂又兵衛といった名前がみられる。慶長19年(1614)に高岡で二代前田利長が没した後、その正室であった永姫(織田信長娘)が高岡より金沢城の西ノ丸に移住した。郭名もそれにちなみ玉泉院丸と呼ばれるようになったとされる。

この頃の玉泉院丸ついては断片的な情報しかないが、庭園の池の原型と推定される堀や、溝・土坑等が確認されている[石川県金沢城調査研究所2015d]。また、解体調査を行った玉泉院丸南西石垣の背後からは、郭側をむいた近世初期と推測する石垣が確認されている[石川県金沢城調査研究所2010b]。郭の西縁にあたる鼠多門続土蔵下石垣では、現状で見える最下段の一部に、慶長期頃とみられる石材が遺存している。主郭以外の外縁部では、土羽上部を取り巻く鉢巻石垣が造られるが、玉泉院丸周辺ではこの頃に外縁部を画する鉢巻き石垣が造られた可能性がある。

元和期にはいると、玉泉院丸南東側にあるいもり堀縁に石垣が築かれている。

３．近世前期～庭園と石垣整備～

寛永８年(1631)の大火を契機に御殿が本丸から二ノ丸へと移動した。これに伴い大規模な土地造成を伴う縄張変更も行われ、併せて石垣普請も進められることとなり、現在とほぼ同じ金沢城の姿が完成する。玉泉院丸でも鼠多門続土蔵下石垣において修理痕跡を伺える。また、北東～東側の二ノ丸・本丸附段側となる庭園の石垣は寛永11年の作庭に伴い創建されたと考えられる。江戸より帰国した三代前田利常は、玉泉院丸の作庭に取りかかっており(「三壺聞書」)、玉泉院の屋敷跡に露地を築くことを命じ、土をならして泉水にすべきところの土を町中に下されると触れて金沢町から人夫を集めて作業をさせたのだという。利常の思い入れは強く、毎日普請場へ出て進捗を見守ったようである。こうして、それまでは二ノ丸との間に堀をもつ防御空間として存在していた玉泉院丸は、「庭園の郭」として姿を変えることになった。

現状で寛永期の石垣は視認できないが、色紙短冊積石垣周辺の石垣群の調査成果として、寛文期以前に遡る可能性がある根石を確認している。

寛永16 年(1639)に利常が小松城に隠居して以降、金沢城は四代光高の早逝や五代綱紀が幼少で江戸住まいが長かったことなどから、藩主が国元に不在の状態が20 年続いた。その間、金沢城は手をいれら

れないままであったが、寛文元年(1661)に五代綱紀が初入国してからは、城内各所で盛んに石垣修築が行われることとなった。傷んだ石垣だけでなく、大雨や地震といった災害による石垣修理も度重なっており、現在でも城内各所で、寛文期に修築された石垣が確認できる。

玉泉院丸に関しては、寛文２年(1662)に、玉泉院丸土蔵建設の際の地響きにより「玉泉院丸北之石垣」が幅16間(約29m)、高さ４間(約７m)にわたり崩れたとされる(第12図№.３)。「玉泉院丸北石垣」は、現状で丸の内園地に面した粗加工石積の石垣が遺存するが近代の改変により、中央部が撤去されるなどの改変をうけている。同じ寛文２年の修理願いには、地震による被災石垣が提出されており、城内各所で被害があったことがうかがえる。

また、寛延４年(1751)に「玉泉院様御丸鼠多門続御露路之方塀下御石垣」(第12図№.６)の「押直」した、という記録がみられる。詳細な地点までは特定できないが、玉泉院丸西側から南側にかけて二重塀下の石垣修理が行われたと推測する。

寛永期に作庭された玉泉院丸庭園についても手が入れられており、それに伴い石垣も改築されていったとみられる。玉泉院丸庭園の石垣の中にあって、ひときわ目立つ色紙短冊積石垣もこの頃と考えており、角石サイズの石材を縦に配し、黒色の溶結凝灰岩である坪野石を上部の石樋やその周辺に設置した特徴的、かつ独創的な石垣がつくられるのもこの頃である。

４．江戸中後期～宝暦の大火と安政の地震～

18世紀代に入ると、大規模な石垣改変は行われないが、石垣の維持管理のための小規模な修理が行われている。また、火災や地震等による災害復旧のための石垣修理も度々行われている。

宝暦９年(1759)寺町台地に位置する寺院からの火災により、城の大半を焼失したが、玉泉院丸は罹災をまぬがれた。ただし、玉泉院丸の北東側、二ノ丸との境にあたる数寄屋門や松坂門周辺は被災しており、石垣とあわせて宝暦10年提出の修理願いに記載されている。現状の石垣にもその際の修理によるとみられる。

その後の天明３年(1783)には「玉泉院丸之内二重塀下御石垣」(第12図№.15)の「押直」の記録があり、玉泉院丸南側にある石垣の修理が行われたようだが、地点の特定はできない。本報告の南石垣や、過去に解体修理を行った南西石垣のいずれも、調査の結果複数回の修理を経て現在に至っていることが判明しており、天明３年の押直が含まれている可能性も高い。

寛政11 年(1799)に金沢は直下型の地震がおきており、城内でも複数箇所の石垣修理願いが出されている。玉泉院丸周辺でも、「松坂高石垣」が崩れたり、「玉泉院丸之内石垣(鼠多門続櫓)」が孕み出すなどしている。鼠多門続櫓については、地震との因果関係は不明だが、文化年中に崩れ、文化７年(1810)に修理が完了している。

安政期には全国的にも地震が相次いでおり、金沢でも安政２年(1855)２月１日に強震(飛騨地震)に見舞われた。「玉泉院様丸御武具土蔵後御堀縁石垣」が長さ15 間程崩落や、二ノ丸の御居間先御庭に地割れなどが生じている。被害が出た「玉泉院様丸御武具土蔵後御堀縁石垣」は「玉泉院丸北之方石垣」として幕府に届け出て修築の願を出し、許可がおりている。この石垣は寛文２年にも土蔵建設の地響きで石垣が崩れたとしている箇所である。

次いで安政５年(1858)の地震では「御居間先柵下石垣」が孕み増したとの記録がある。色紙短冊積石垣周辺の石垣群は、比較的保存状態が良好だが、柵下にあたる石垣(2601S、2602S)は、現状でいずれも中央部分が面的に弧を描くように孕み出している。この変形と安政５年の地震との関係も不明である。

５．近代の変貌 ～軍用施設、県の体育施設から再び庭園へ～

明治をむかえ、金沢城でも明治２年(1869)の版籍奉還によって旧藩主慶寧は、この年の11月、城を出

て八家本多邸に移った。ついで同４年(1871)の廃藩置県により、城内は兵部省ついで陸軍省の所管となった。玉泉院丸には明治４、５年頃から御雇い外国人であったオランダ人医師スロイスの邸宅が存在したとされている。玉泉院丸に存在したスロイスの邸宅は、明治７年(1874)の離任後、同８ないし９年頃に解体され、その後「益智館」に移築されたようである(今井1996)。

庭園は、明治13年(1880)に兼六園に作られた「明治紀念之標」の土台として庭石が撤去、持ち出されている。

玉泉院丸には明治17年までには金沢陸軍監獄署が置かれ、「鼠田門櫓」が監獄署倉庫・囚徒作業場として使われていた(明治17年「大日記鎮台 10 月 陸軍省総務局」)。しかし火災で焼失、門の開口部は新たに石垣を構築し、閉塞された。

明治40年には郭の南方斜面が鋤きとられ、堀の埋め立てが行われた。いもり坂が造成されたのもこの頃と考えられる。

戦後、城内には国立金沢大学が置かれ、城内の主要部は大学用地として利用された。玉泉院丸には昭和30年10月に、石川県スポーツセンターが建てられるも、昭和38年の「38豪雪」で倒壊、２年後の昭和40年４月に石川県体育館として再建された。この際に石垣の一部が開削、撤去され通路となっている。平成20年には体育館が取り壊され、石川総合スポーツセンターとして金沢市稚日野町に移転し、体育館跡地となった玉泉院丸は庭園として平成27 年３月に暫定的に整備されるにいたった。

第３表　玉泉院丸年表

	年代	内容	出典
近世初期	天正 19 年（1591）頃	重臣村井長頼の屋敷が西ノ丸に置かれていた。	「三壺聞書」（県図森田）、「亜相公夜話」（加越能）、「新山田畔書」（加越能）
	慶長５年（1600）頃	関ヶ原合戦ののち、重臣長連龍の屋敷が西ノ丸に置かれたと伝える。	「長谷部信連記」（加越能）、『金沢古蹟志』、「可観小説」（加越能）
	慶長後半期（1605 ～ 14）	金沢城の絵図に、西ノ丸に近藤大和守・上坂又兵衛、三ノ丸に長連龍の屋敷が描かれる。	「加州金沢之絵図」（東大図）ほか
	元和元～３年（1615 ～ 17）	玉泉院（二代前田利長正室　永、織田信長娘）の屋敷が造営され、ここに移る。	「御歴代御書写」一（加越能）、「本藩歴譜」『金沢市史』
	元和９年（1623）	金沢城内で玉泉院没する。	「三壺聞書」、「本藩歴譜」
近世前期	寛永８年（1631）	大火を契機に二ノ丸御殿を造営する。	「加藩国初遺文」（加越能）
	寛永９年（1632）	辰巳用水を開削し城内に引水する。	「金城深秘録」（県図森田）
	寛永 11 年（1634）	京都の庭師剣左衛門を招いて作庭する。	「三壺聞書」、「菅家見聞集」（加越能）
	寛文元年（1661）	玉泉院丸に厩を建設し、「池」を掘らせる。	「政隣記」（加越能）、「日帳」（県図森田）
	元禄元年（1688）	馬廻組番所を撤去し、千宗室に御亭や露地の整備を指示する。同年９月厩を取り壊し、御亭や花畑を整備する。	「葛巻昌興日記」（加越能）
	宝暦８年（1758）	鼠多門周辺の石垣が崩れているのが確認される。	「御城御巡見御道筋」（加越能）
近世中後期	宝暦９年（1759）	玉泉院丸、大火による焼失をまぬがれる	「金沢城類焼後普請等被仰付候絵図」（加越能）
	明和２年（1765）	鼠多門橋を架け替える。	「政隣記」
	文化９年（1812）	鼠多門長屋を修理する。	「御触抜書」（玉図奥村）、『加賀藩史料』
	文化 13 年（1816）	鼠多門を玉泉院様丸御門と改称する。	「御城方御親翰御加筆物写」『加賀藩史料』
	文政４年（1821）	武具土蔵を新築する。	名倉氏採取文書（金沢大）
	天保３年（1832）	斉泰、カラカサ亭の設置を命ずる。	「温敬公日記」（育徳会）
	安政２年（1855）	地震で鼠多門続土蔵に被害が及ぶ。	「御用方手留」『加賀藩史料』
近代	明治４年（1871）頃	オランダ人医師スロイスの邸宅が置かれる（～明治８又は９年頃）	『金沢古蹟志』
	明治 10 年（1877）	鼠多門橋、老朽化により撤去される。	『稿本金沢市史』
	明治 13 年（1880）	兼六園に設置された明治紀念之標の土台石組みに玉泉院丸の庭石を転用する。	『稿本金沢市史』
	明治 15 年（1882）	金沢営所囚獄（16 年より金沢陸軍監獄署と称す）を新築する。	国立公文書館文書
	明治 17 年（1884）	盛り土地盤沈下のため、新築した陸軍監獄署が傾く。鼠多門が焼失する。	「陸軍大日記」（防衛研究所）
	明治 31 年（1898）	鼠多堀埋め立てが完成する。	『金沢の百年』
	明治 40 年（1907）	玉泉院丸の南方斜面を削平する。	「陸軍大日記」（防衛研究所）
	大正 13 年（1924）頃	玉泉院丸に馬関連施設を設置する。	「第９師団関係資料（建造物履歴表）」『金沢市史』
戦後	昭和 24 年（1949）	金沢大学が開学、玉泉院丸跡に薬草園を設置。	『金沢大学五十年史　通史編』
	昭和 30 年（1955）	県スポーツセンター竣工。40 年県体育館竣工。	『石川県体育協会 20 年の歩み』
	平成 20 年（2008）	県体育館閉館、解体撤去。	「玉泉院丸庭園」石川県ＨＰ
	平成 27 年（2015）	暫定整備のもと玉泉院丸庭園復元。	「玉泉院丸庭園」石川県ＨＰ
	令和２年（2020）	鼠多門、鼠多門橋完成。	

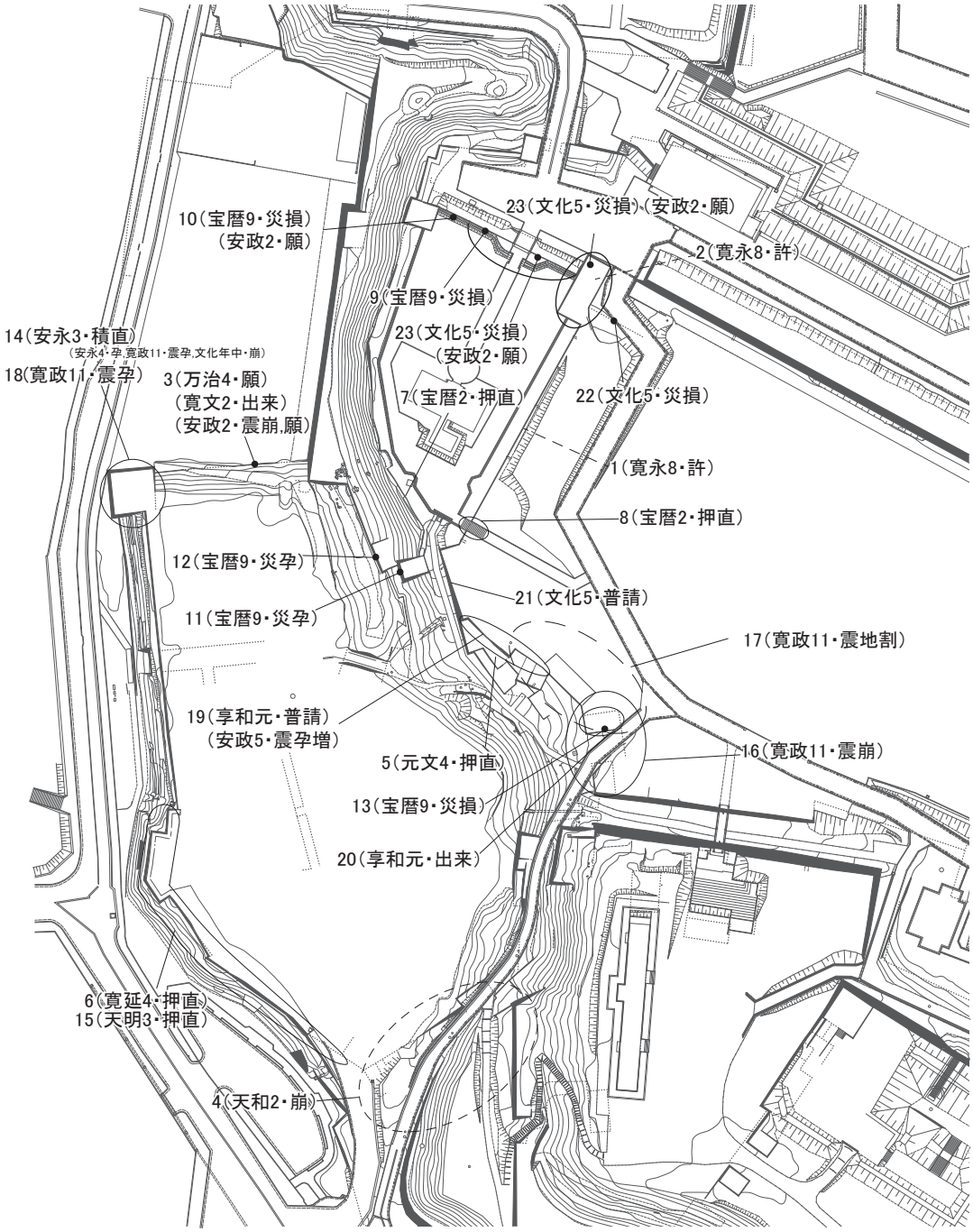
＊出典欄の略称は次のとおり

〔史料蔵書機関〕

県図森田＝石川県立図書館森田文庫、加越能＝金沢市玉川図書館加越能文庫、東大図＝東京大学総合図書館、玉図奥村＝金沢市立玉川図書館奥村文庫、防衛研究所＝防衛研究所戦史研究センター、育徳会＝（公財）前田育徳会、石川歴博＝石川県立歴史博物館、金沢大＝金沢大学文学部日本史研究室

〔図書〕

『金沢古蹟志』＝歴史図書社（1976 年）、『金沢市史』＝『金沢市史』資料編３　近世一、『稿本金沢市史』（金沢市役所　1973 年復刻版）、『金沢の百年』（金沢市史編さん室編　1965）、『金沢大学五十年史　通史編』（金沢大学創立 50 周年記念事業後援会　1999　橋本確文堂）、『石川県体育協会 20 年の歩み』（石川県体育協会　1968）



数字 第４表の「位置番号」に対応
● 城郭修補願図に則した箇所

例 ９（正保元・普請）
29（寛文２・震崩，願，許）
36（寛文４・出来）
正保元年に石垣普請、寛文２年に地震で崩れたため、修理願が出され、許可を受ける。寛文４年に修築。

第 12 図 石垣被災・修築

第４表　主な災害・修築記録年表（玉泉院丸周辺）

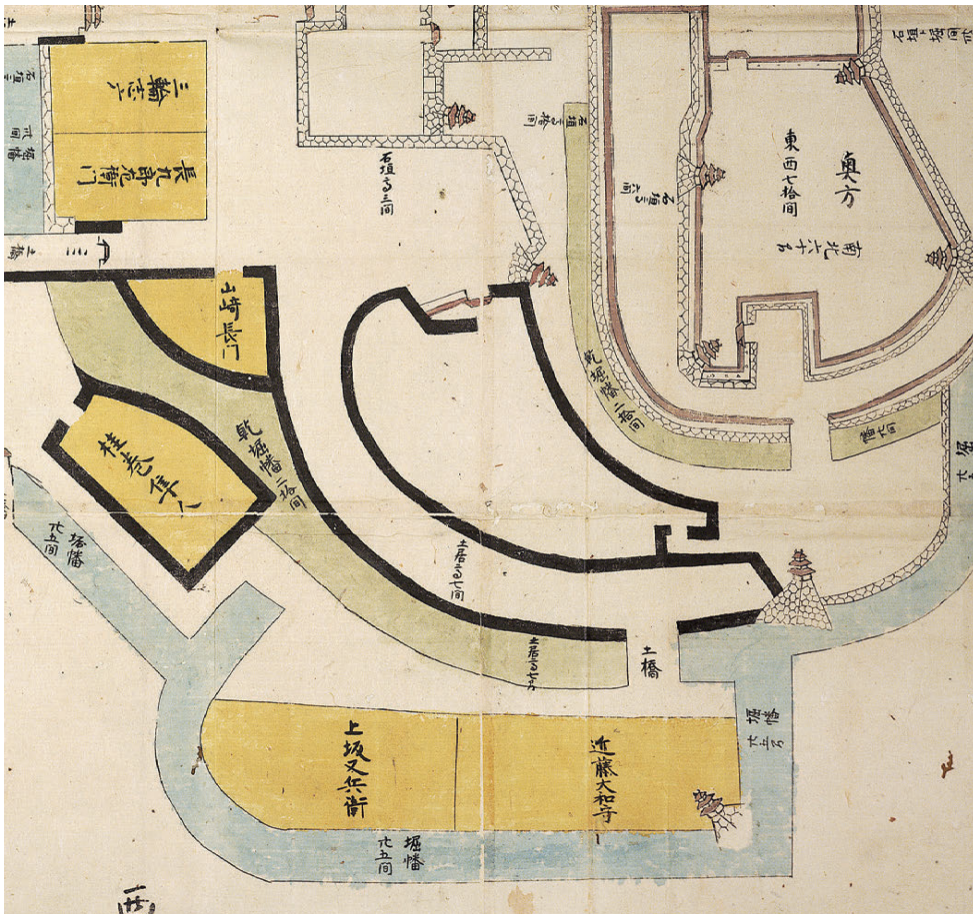
位置番号	年代	場所	誘因			履歴	参考文献	
			種別	内容	規模		史料番号－頁	論文番号－頁
	寛永８年（1631）			寛永の大火		4.14	災 1b	
1	寛永８年（1631）	芳春院丸境石垣				許可 9.1	13b	c-54 d-70, 76
2		「北明候門脇石垣」（裏口門ヵ）						
3	万治４年（1661）	「玉泉院丸北之石垣」		地響き崩、地盤が悪い	拾六間高サ四間（28.8 m、高さ 7.2 m）	願 1.16	13c	c-52 d-69, 76
	寛文２年（1662）	「玉泉院様御丸北之方」				普請	7-4	c-50 ～ 52 d-65, 67, 76
		「玉泉院様御丸北之方御石垣」				出来	14	a-45, 46
4	天和２年（1682）	「薪御丸、玉泉院様御丸之間カシ（から）堀之高崩御石垣」		崩（※被害報告書の年代、詳細は不明）			14	a-46
5	元文４年（1739）	「玉泉院様御泉水之高御石垣」		崩	高弐間半幅四間半（高さ 4.5 m、幅 8.1 m）	押直 11 月		
6	寛延４年（1751）	「玉泉院様御丸鼠多門続御露路之方塀下御石垣」				押直閏 6 月		
	宝暦２年（1752）			「強地震」		2.11	災 35a, 39	災 1
7	宝暦２年（1752）	「二之御丸御数寄屋御門之内御膳水井戸後通塀下御石垣」				押直 8 月	8-82	
8		「二之御丸御風呂屋御門之内土留御石垣」				押直 8 月	8-82	
	宝暦９年（1759）			宝暦の大火				
9	宝暦９年（1759）	切手門東石垣	大火	損シ	高壱間長折廻シ拾間（高さ 1.8 m、長さ折廻し 18 m）		9	e
10		切手門西石垣	大火	損シ	高壱間長折廻シ三間（高さ 1.8 m、長さ折廻し 5.4 m）			
11		数寄屋丸唐門下石垣	大火	孕	高五間之内中程八尺四方（高さ 9 m、2.42 m四方）			
12		数寄屋丸西下段石垣	大火	孕	高四間長五間（高さ 7.2 m、長さ 9 m）			
13		松坂門下石垣	大火	損シ	高二間三尺長折廻シ拾五間（高さ 4.5 m、長さ折廻し 27 m）			
14	安永年間	「玉泉院様丸御門続御櫓台」				積直	5-154	
	安永３年（1774）	「鼠多御門続御櫓台」		「出来無間茂孕地震ニ大孕文化年中崩申候」		積直	4b-322	
15	天明３年（1783）	「玉泉院様丸之内二重塀下御石垣」				押直	6-197, 198	
	寛政 11 年（1799）			「強地震」 「古来稀成大地震」		5.26、7.2、8.28	災 3e, 13 ～ 15	災 3
16	寛政 11 年（1799）	「松坂者高石垣」	地震	崩れ			3d-890	
		「松坂高石垣」	地震	崩れ			15	g-94
17		二ノ丸御居間先周辺	地震	地割れ			3d-889	
18		「玉泉院丸之内石垣」（鼠多御門続櫓台）	地震	孕			3d-895, 896	
19	享和元年（1801）	「二ノ丸御居間先柵下石垣」				普請開始 5.10	3e-40	b
20		「松坂門続櫓台」				出来	10-451	f
21	文化５年（1808）	二ノ丸御居間先土蔵下石垣				普請	11-478	f
	文化５年（1808）			文化の大火		1.15	災 3f, 5b, 17, 18	
22	文化５年（1808）	御雛土蔵	大火	破損	高弐間弐尺（高さ 4.2 m）			
	安政元年（1854）			「強き地震」 「大地震」		6.15 11.4	災 27 ～ 29, 30b, 33	災 1
	安政２年（1855）			「余程強地震」		2.1	災 30a, 31, 32	
10	安政２年（1855）	7　切手門西石垣	大火			願	12	e
23		1　切手門左方土塀下石垣	大火	文化５年（1808）被災未修理箇所		願	12	e
22		2　御雛土蔵下石垣	大火			願	12	e
3		「玉泉院丸北之方石垣」	地震	崩	高四間長拾五間（高さ 7.2 m、長さ 27 m）	願	12	e
3		「玉泉院様丸御武具所役所後御土蔵と右御丸御門並之御土蔵間之御石垣」（玉泉院丸北之方石垣？）	地震	崩落、2.1	長拾弐，三間（長さ 21.6 ～ 23.4 m）		2-670	
		「玉泉院丸北之方石垣」	地震	崩、2.1			1-672, 673	b
	安政５年（1858）			「強地震」		2.26	災 21b, 33	
19	安政５年（1858）	「御居間先柵下石垣」	地震	孕増、2.26			16	a-88
	安政６年（1859）			「強地震」		1.13	災 30b, 38	災 1

【史料】

1「公私日記」『加賀藩史料』藩末編上巻，2「御用方手留」『加賀藩史料』藩末編上巻，3d「政隣記」『加賀藩史料』第 10 編，3e「政隣記」『加賀藩史料』第 11 編，4b「高石垣等之事」（「宝暦九年四月御城御焼失同十年ゟ安永年中迄御石垣積直御出来ケ所積方等善悪之事」）『金沢城郭史料』，5「古伝書」『金沢城郭史料』，6「文禄年中以来等之旧記」『金沢城郭史料』，7「先祖由緒并跡々勤方等之覚」『金沢城郭史料』，8「勤方之覚」『金沢城郭史料』，9 宝暦 10 年「金沢城図」（（公財）前田育徳会蔵），10 享和元年「（松坂門続櫓台）石垣東南根水之図」「松坂御門続櫓台石垣出来指図絵図」『金沢城郭史料』，11 文化５年「二之丸御居間土蔵下石垣縄絵図」『金沢城郭史料』，12 安政３年「金沢城石垣破損絵図」（金沢市立玉川図書館蔵），13「古より公儀江被上候御城絵図・御国絵図改申品々之帳」『公儀へ被上候御城并御国絵図品々帳』，13b 寛永８年江戸幕府年寄連署奉書（９月１日），13c 万治４年前田綱紀石垣修理願書（１月 16 日），14「御普請会所役付等覚書」（河内山勲文書），15「寛政十一巳未年五月大地震記」『北國地震記』，16「地震之節心得」『御普請奉行諸事留』

【論文】

a 石川県金沢城調査研究所 2013『金沢城普請作事史料１』，b 石川県教育委員会 1991『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』（金沢城史料編），c 木越隆三 2003「資料紹介：古より公儀江被上候御城絵図・御国絵図改申品々之帳」『研究紀要　金沢城研究』創刊号，d 木越隆三 2003「元和～寛文期の金沢城修築について」『研究紀要　金沢城研究』創刊号，e 木越隆三 2004「金沢城全域絵図の分類と編年－金沢城絵図調査報告Ⅰ－」『研究紀要　金沢城研究』第２号，f 北野博司 2001「加州金沢城の石垣修築について」『東北芸術工科大学紀要』№８東北芸術工科大学，g 前川哲朗 1996「近世の金沢地域における震災史料について」『市史かなざわ』第２号　金沢市



1．慶長 16（1611）年頃　　「加州金沢之城図」　東京大学総合図書館蔵

2．寛文２（1662）年　「寛文二年金沢御城御普請の絵図並奉書（別題「加州金沢城絵図」）」金沢大学附属図書館蔵

第 13 図　玉泉院丸と周辺絵図1

1．寛文７（1667）年　　「寛文七年金沢御城二丸石垣御普請の絵図付奉書」金沢大学附属図書館蔵

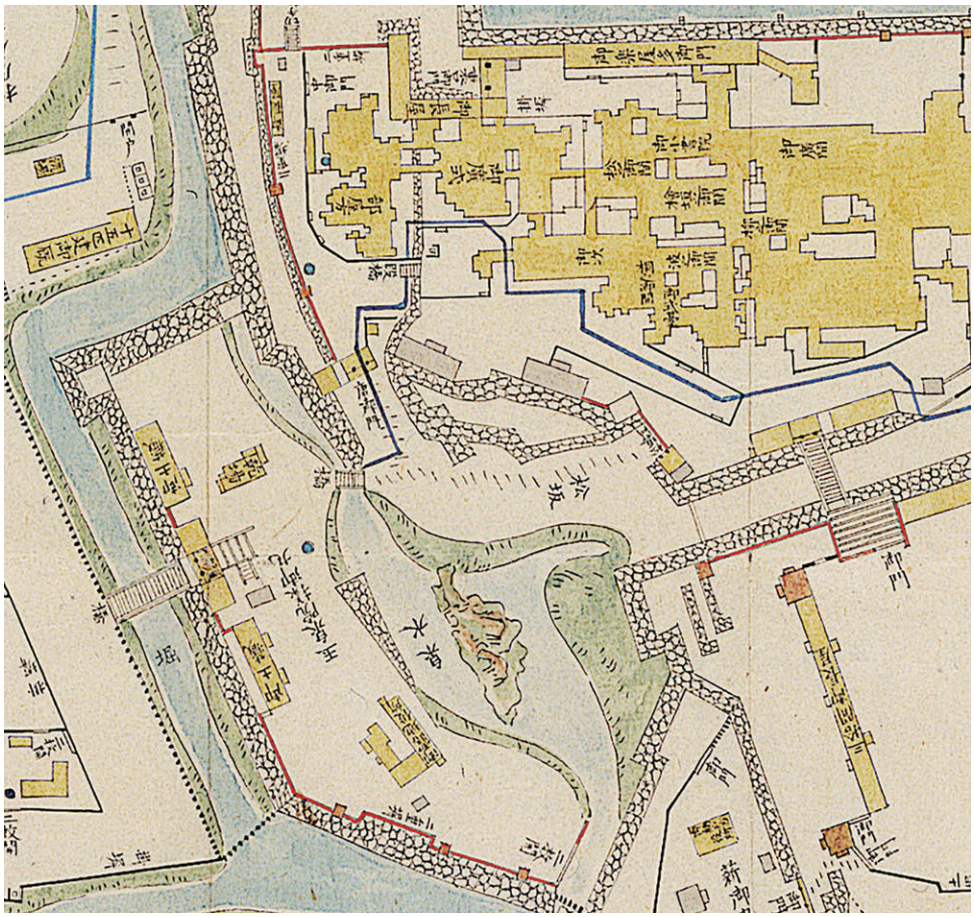
2．延宝年間（1673 ～ 1681）　　「金沢御城絵図」（公財）前田育徳会蔵

第 14 図　玉泉院丸と周辺絵図2

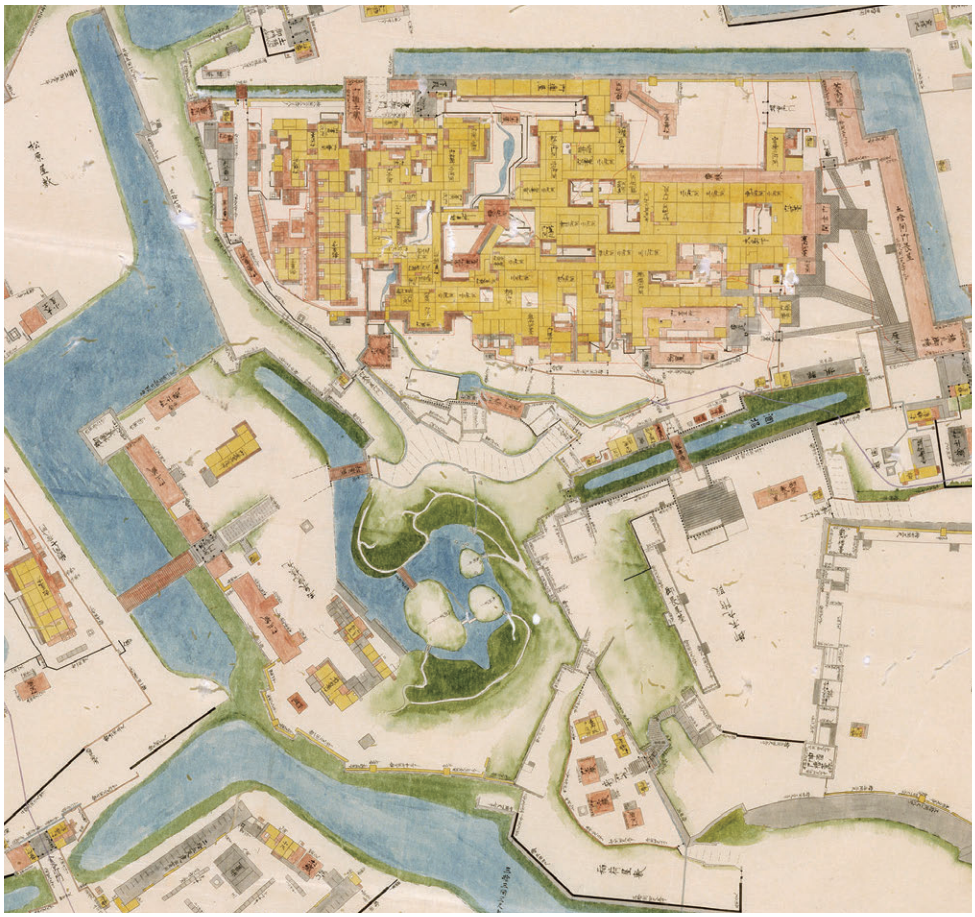
1．延宝４～元禄年間（1676 ～ 1704）　「金沢城絵図幅」石川県立歴史博物館蔵

2．元禄元年（1688）以降　「金沢城絵図」石川県立歴史博物館蔵

第 15 図　玉泉院丸と周辺絵図3



1．18 世紀前半　　「金沢城図（奥村家鎧袋内・箱入」）　金沢市立玉川図書館蔵



2．文政 13（1830）年　　「御城中壱分碁絵図」　横山隆昭氏蔵

第 16 図　玉泉院丸と周辺絵図4

1．嘉永３（1850）年　　「御城分間御絵図」（公財）前田育徳会蔵

2．明治 40（1907）年　　「金沢城之図」　防衛研究所戦史研究センター蔵

第 17 図　玉泉院丸と周辺絵図5

1．昭和 20（1945）年　　「第五十二師団司令部図」　石川県立歴史博物館蔵

第 18 図　玉泉院丸と周辺絵図6

第４節　既往の調査成果

１．金沢城の発掘調査（第 23 図、第５・６表）

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和43年の金沢城学術調査委員会が実施した本丸・二ノ丸等の学術調査が端緒である。昭和50～ 61年には金沢大学が主体となり、大学施設設置工事に伴う調査を実施している。

平成４～６年には県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で調査を実施している。平成８年に石川県が金沢城跡の用地を国から取得したことに始まる金沢城公園整備事業に伴い、平成９～13年にかけて石川県立埋蔵文化財センター（平成10年以降は（財）石川県埋蔵文化財センター）が二ノ丸内堀・菱櫓、本丸附段、三ノ丸等の調査を実施した。

平成13 年、石川県教育委員会文化財課に金沢城研究調査室（平成19 年度に石川県金沢城調査研究所に改組）が開設され、翌年より絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の４分野から総合的な調査研究が開始された。埋蔵文化財確認調査事業は初期金沢城の解明を目的として平成14年度から継続的に実施されている。調査では本丸・東ノ丸を中心にして石垣の構築過程、本丸大手通路（虎口）の変遷過程、本丸の造成状況、庭園遺構の検出など多くの成果がある。

平成15 年度以降は公園整備事業に係る調査が再開され、いもり堀・河北門・玉泉院丸庭園・橋爪門・鼠多門で復元整備にかかる確認調査が実施された。このほか、都心軸整備推進事業として（財）石川県埋蔵文化財センターが城の外郭部にあたる堂形で調査している。

令和２年度からは、二ノ丸御殿復元にむけて確認調査が進められている。

２．玉泉院丸とその周辺の調査

（１）昭和 52 年度（二ノ丸学術調査）

昭和52年に金沢大学が学術調査として、数寄屋屋敷の一部の調査を行っており、建物の礎石及び石組排水溝や、明治14年の二ノ丸火災とみられる焼土層を確認している［佐々木達夫1981］。

（２）平成 13 年度（風呂屋口門等）

平成13年度に（財）石川県埋蔵文化財センターにより、金沢城公園の園路整備に伴う発掘調査を数寄屋屋敷で実施している。調査では、現存する風呂屋口門の石段の一部が近代以降改修されていることや、切手門周辺で近代以降の石組溝や、近世段階の建物に付随する施設の可能性がある敷石状遺構を確認した［金沢城調査研究所2016ｄ］。

（３）平成 17 ～ 19 年度調査（玉泉院丸南西石垣）

平成17年度から金沢城研究調査室（平成19年度より金沢城調査研究所）による玉泉院丸南西石垣の修築に伴う上面遺構調査及び石垣解体調査を実施した。

主な調査成果として、石垣の上面遺構として二重塀の基礎構造を確認し、解体範囲の石垣において近・現代を含め改修は４～５回行われたことを確認した。また、東側法面では、近世初期の自然石を積んだ石垣を検出した。［県土木部公園緑地課・金沢城調査研究所2010］

第 19 図　玉泉院丸南西石垣（整備後）

（４）平成 20 ～ 24 年度調査（玉泉院丸庭園）

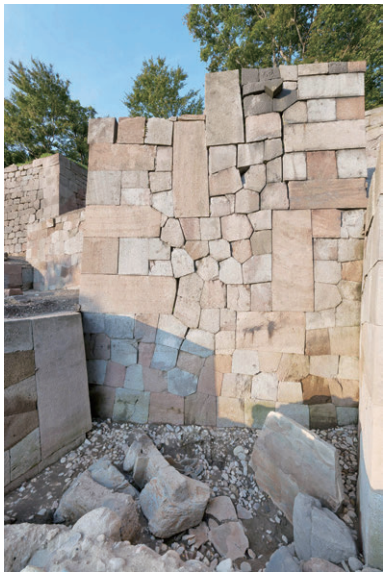
平成20年度から、旧県体育館跡地の玉泉院丸整備に先立ち、遺構確認調査を行い、平成23年度から玉泉院丸の復元のための調査を行った。

玉泉院丸北部の第１地点において、池跡東岸の石垣根石、作庭以前の堀跡等の一部を検出し、北部の池が作庭以前の堀を利用し構築されたこと、東岸の石垣が作庭時に構築されたこと等が判明した。

西部の第２地点・第３地点では、池跡、護岸石垣、中島（大）、出島、作庭以前の溝、竪穴状遺構等の一部を検出した。西部の池が作庭以前の盛土や地山を掘り窪めて造成されたこと、池の造成に伴い、中島（大）や出島を削り出していたこと等が明らかとなった。この他、ボーリング調査も実施しており、玉泉院丸全域の旧地形や主要な遺構の分布状況・変遷等を確認した。

池泉北東部とその東側斜面の第４地点では、池跡、護岸石組、滝石組および滝石組に至る導水路等を検出した。滝石組は４段程度の段落ちの滝とみられる。

色紙短冊積石垣周辺の第５地点では、色紙短冊積石垣下から滝壷、滝壷に伴う石組、石組の松坂側溝、護岸石垣、護岸石垣下に作られた暗渠等を検出した。色紙短冊積石垣及び周辺の石垣の調査では、創建時期の特定には至らなかったが、石加工の特徴等から寛文年間頃の可能性が考えられる。［金沢城調査研究所2015d、2018d］



第 20 図　玉泉院丸庭園　第5地点（滝壷）
※撮影：奈良文化財研究所

（５）平成 25 年度調査（玉泉院丸南石垣等）

玉泉院丸外周石垣整備に伴い、玉泉院丸南石垣で石垣の復元と、修築に伴う上面遺構調査と石垣解体調査を行った。また、石垣修景のため部分修理と詰石補修を４地点で行った。主な調査成果として、上面遺構では、二重塀の控柱跡や出窓の柱礎石を検出した。石垣解体調査では少なくとも近・現代を含め４回の改修が行われたことを確認した。［県土木部公園緑地課・金沢城調査研究所2017］

第 21 図　玉泉院丸南石垣（整備後）

（６）平成 26 ～ 30 年度調査（鼠多門・鼠多門橋）

鼠多門及び鼠多門橋の復元整備に伴い、埋蔵文化財確認調査を実施した。

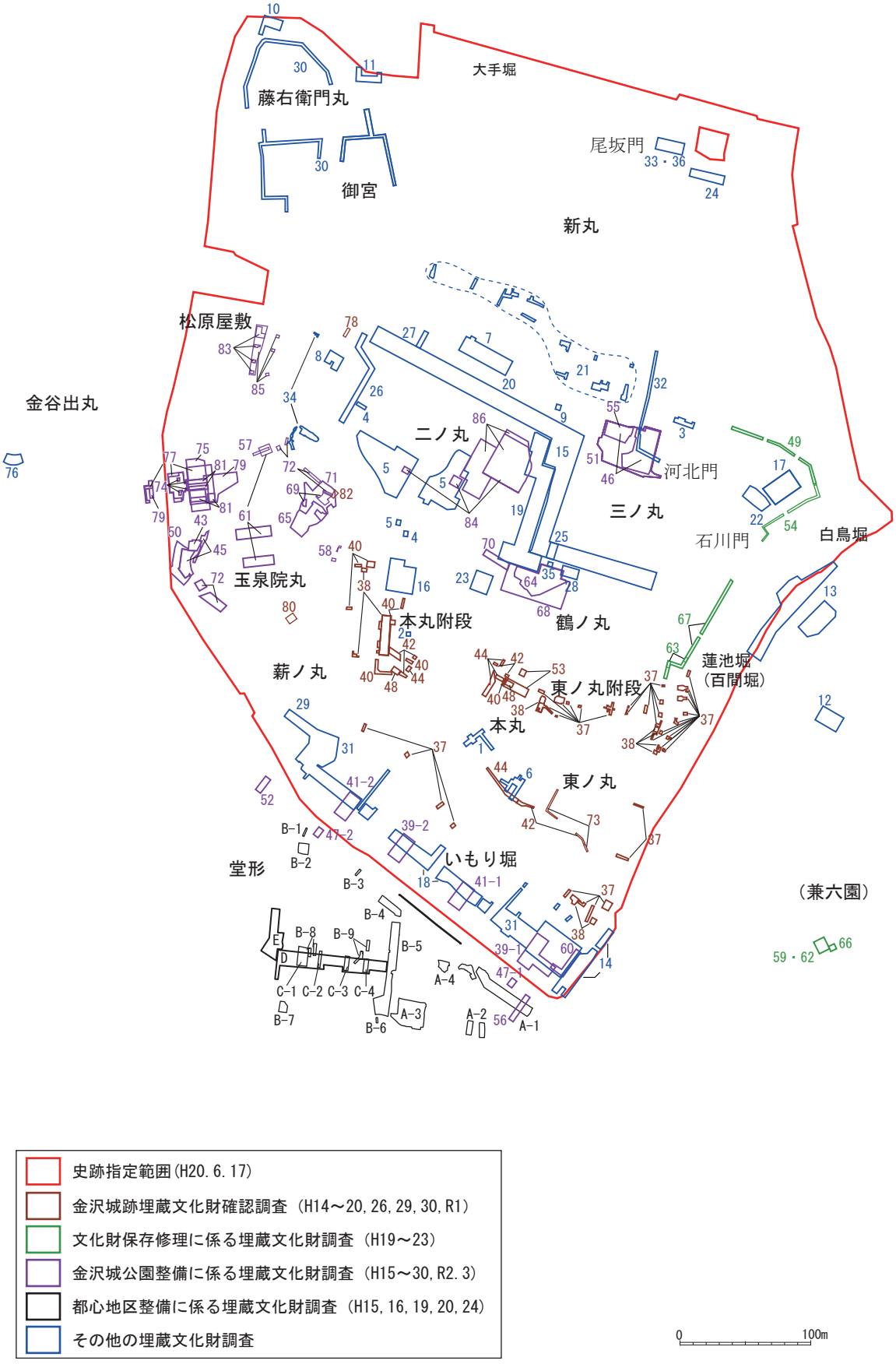
鼠多門では、側壁石垣（下部）の遺存、そして中央大柱礎石及び鏡柱・脇柱・背面大柱礎石の抜取痕跡を確認し、８本の柱位置を確定したほか、櫓の束柱礎石、中柱礎石の抜取痕跡、石垣に残る痕跡等から、その規模と構造を明らかとした。

鼠多門の東側にある紅葉橋へと至る坂道では延石の抜取痕跡、西側にある金谷出丸へと繋がる鼠多門橋では、最終段階に属する橋脚を構成する木柱や前段階の橋脚痕跡等も確認した［金沢城調査研究所2020d、2021c］。

第 22 図　鼠多門・鼠多門橋調査区（全景）

（７）平成 30 ～ 31 年度調査（切石積石垣）

金沢城調査研究事業「城郭庭園等の総合研究」に係る切石積石垣確認調査について、平成29年度に数寄屋屋敷北、平成30年度に玉泉丸庭園南東部の平成31年度は色紙短冊積石垣周辺を対象に調査を実施した。［石川県金沢城調査研究所2018e、2019d］詳細は本書にて報告する。



第 23 図　金沢城跡発掘調査位置図（～令和3年度）

第５表　金沢城発掘調査一覧（１）

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
1	本丸	昭和 43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	四脚門・礎石建物跡	井上 1969・吉岡 1985・増山 1999
2	本丸附段	昭和 43(1968)	金大金沢城調委	学術調査		井上 1969・吉岡 1985・増山 1999
3	三ノ丸	昭和 43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	川原石石積	井上 1969・吉岡 1985・増山 1999
4	二ノ丸	昭和 43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	能舞台跡・台所跡・極楽橋付近建物跡	井上 1969・吉岡 1985・増山 1999
5	二ノ丸	昭和 44(1969)	県教委・金大	校舎増築	殿舎跡・排水施設・用水路	県教委 1970・吉岡 1985・増山 1999
6	本丸	昭和 44(1969)	県教委・金大	学術調査	三階櫓・三十間長屋跡	県教委 1970・吉岡 1985・増山 1999
7	四十間長屋	昭和 50(1975)	金大	学生会館別館建設	長屋礎石・櫓石垣	上野 1976・吉岡 1985・増山 1999
8	二ノ丸	昭和 52(1977)	金大	学術調査	明治 14 年焼失の御殿跡	佐々木 1981・吉岡 1985・増山 1999
9	三ノ丸～四十間長屋間通路	昭和 54(1979)	金大考古学研究室	無線アンテナ設置	大型礎石	佐々木 1980・吉岡 1985・増山 1999
10	藤右衛門丸北側法面裾部	昭和 56(1981)	金大考古学研究室	擁壁設置	石垣列・瓦	貞末ほか 1986・増山 1999
11	黒門横北側懸崖部	昭和 61(1986)	金大考古学研究室	境界崖部崩落防止工事	石垣列・切石側溝、瓦	貞末ほか 1989
12	兼六園（江戸町推定地）	平成元年（1989）	県埋文センター	店舗改築	17 世紀初期の遺構面（礎石建物等）	県埋文センター 1992
13	石川門前土橋（石川橋）	平成 4-6(1992-94)	県埋文センター	道路整備	土橋の形成過程　16 世紀後半頃の鍛冶関連遺構等	県埋文センター 1997・1998
14	車橋	平成 6(1994)	県埋文センター	道路整備	石垣	県埋文センター 1996
15	内堀第１次・菱櫓	平成 9(1997)	県埋文センター	公園整備（復元整備）	堀・橋脚（埋置された刀・鏡・銭）・菱櫓礎石等	金沢城調査研究所 2011d・2012b
16	本丸附段	平成 10・12(1998・2000)	（財）県埋文センター	公園整備（復元整備）	階段跡	金沢城調査研究所 2019c
17	三ノ丸第１次	平成 10(1998)	（財）県埋文センター	公園整備（施設建設）	鉄砲所跡（鍛冶場遺構）、鉄砲部品	金沢城研究調査室 2006b
18	いもり堀第１次	平成 10(1998)	（財）県埋文センター	公園整備（復元整備）	天正～元和頃の堀･土橋、元和以後の堀･櫓台	金沢城調査研究所 2020c
19	五十間長屋	平成 10-11(1998-99)	（財）県埋文センター	公園整備（復元整備）	石垣内部構造　櫓・長屋礎石、17 世紀初頭の遺構面	金沢城調査研究所 2011d・2012b
20	内堀第２次	平成 11(1999)	（財）県埋文センター	公園整備（復元整備）	西半北側石垣の構造把握	金沢城調査研究所 2011d・2012b
21	新丸第１次	平成 11(1999)	（財）県埋文センター	公園整備（園路整備）	近代に埋没した堀の範囲確定	金沢城調査研究所 2016d
22	三ノ丸第２次	平成 11(1999)	（財）県埋文センター	公園整備（施設建設）	礎石建物（番所跡）、石組井戸	（財）県埋文センター 2002a
23	鶴ノ丸第１次	平成 11(1999)	（財）県埋文センター	公園整備（施設建設）	木樋・石樋（辰巳用水）	金沢城調査研究所 2016d
24	新丸第２次	平成 11(1999)	（財）県埋文センター	公園整備（施設建設）	16 世紀後半から末期頃の遺構面	（財）県埋文センター 2002a
25	橋爪門外橋橋脚基礎	平成 11(1999)	（財）県埋文センター	公園整備（復元整備）	橋脚基礎の構造把握	金沢城調査研究所 2011d・2012b
26	二ノ丸園路	平成 11(1999)	（財）県埋文センター	公園整備（園路整備）	礎石、石組遺構	金沢城調査研究所 2016d
27	三ノ丸第３次	平成 11(1999)	（財）県埋文センター	公園整備（設備設置）	土坑	金沢城調査研究所 2011d・2012b
28	鶴ノ丸第２次	平成 12(2000)	（財）県埋文センター	公園整備（復元整備）	16 世紀末期頃の遺構面	金沢城調査研究所 2015c
29	いもり堀第２次	平成 12(2000)	（財）県埋文センター	公園整備（園路整備）	慶長後半から元和年間の石垣	金沢城調査研究所 2020c
30	北ノ丸第１次	平成 12(2000)	（財）県埋文センター	公園整備（園地整備）	火葬遺構、空堀跡、石瓦等	金沢城調査研究所 2019c
31	いもり堀第３次	平成 12(2000)	（財）県埋文センター	公園整備（園路整備）	元和以前の堀・土橋・土俵護岸　金箔瓦	金沢城調査研究所 2020c
32	三ノ丸第４次	平成 12(2000)	（財）県埋文センター	公園整備（園路整備）	河北門石垣台・礎石、16 世紀後半～末頃の遺構面	金沢城調査研究所 2011c
33	新丸第３次	平成 12(2000)	（財）県埋文センター	公園整備（園路整備）	尾坂門石段、16 世紀後半～末期頃の遺構面 36 と合わせて尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所 2016d
34	風呂屋口門等	平成 13(2001)	（財）県埋文センター	公園整備（園路整備）	石段、石組溝 数寄屋屋敷調査区として報告	金沢城調査研究所 2016d
35	橋爪門枡形	平成 13(2001)	（財）県埋文センター	公園整備（園路整備）	土坑、ピット	金沢城調査研究所 2015c
36	尾坂門	平成 13(2001)	（財）県埋文センター	公園整備（植栽）	石組溝、路面 33 と合わせ尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所 2016d
37	本丸周辺	平成 14(2002)	金沢城研究調査室	保存目的調査	本丸虎口変遷の把握	金沢城調査研究所 2008d
38	本丸周辺	平成 15(2003)	金沢城研究調査室	保存目的調査	三十間長屋続櫓台石垣の調査等	金沢城調査研究所 2008d
39	いもり堀	平成 15(2003)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	鯉喉櫓台の検出	金沢城調査研究所 2020c
40	本丸周辺	平成 16(2004)	金沢城研究調査室	保存目的調査	寛永大火以前の２面の遺構面	金沢城調査研究所 2008d
41	いもり堀	平成 16(2004)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	築城当初の堀の規模を確認	金沢城調査研究所 2020c
42	本丸	平成 17(2005)	金沢城研究調査室	保存目的調査	本丸三階櫓石垣	金沢城調査研究所 2014d
43	玉泉院丸（南西石垣）	平成 17(2005)	金沢城研究調査室	公園整備（石垣修築）	近代の改修、石垣上部の二重塀の基礎構造の把握	公園緑地課・調査研究所 2010
44	本丸	平成 18(2006)	金沢城研究調査室	保存目的調査	元和期の大規模造成、初期金沢城の礎石建物	金沢城調査研究所 2014d
45	玉泉院丸（南西石垣）	平成 18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（石垣修築）	部分修理の把握、初期金沢城石垣	公園緑地課・調査研究所 2010
46	河北門	平成 18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	残存状況、規模、改修、創建時期の把握	金沢城調査研究所 2011c
47	いもり堀	平成 18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	南岸の位置確認	金沢城調査研究所 2020c
48	本丸	平成 19(2007)	金沢城調査研究所	保存目的調査	寛永８年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所 2014d
49	石川門（右方太鼓塀）	平成 19(2007)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所 2014c
50	玉泉院丸（南西石垣）	平成 19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（石垣修築）	改修範囲と時期、初期金沢城石垣の変遷の確認	公園緑地課・調査研究所 2010

第６表　金沢城発掘調査一覧（２）

№.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
51	河北門	平成 19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	枡形門創建前（慶長後期以前）の遺構確認	金沢城調査研究所 2011c
52	いもり堀	平成 19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	南岸の位置確認	金沢城調査研究所 2020c
53	本丸	平成 20(2008)	金沢城調査研究所	保存目的調査	寛永８年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所 2014d
54	石川門（右方太鼓塀）	平成 20(2008)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所 2014c
55	河北門	平成 20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	石垣解体調査（ニラミ櫓台、一ノ門頬当）	金沢城調査研究所 2011c
56	いもり堀	平成 20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	堀の南岸、辰巳用水石管、近世初期の石垣、石列等	金沢城調査研究所 2020c
57	玉泉院丸（泉水）	平成 20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	泉水北部の遺構確認	金沢城調査研究所 2015d
58	玉泉院丸（いもり坂石垣）	平成 20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	石垣変形箇所の基底部試掘	金沢城調査研究所 2019c
59	兼六園栄螺山	平成 21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修理（石垣修築）	石垣解体調査	管理事務所・調査研究所 2012
60	いもり堀	平成 21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	鯉喉櫓台石垣東部の残存状況確認、一部解体	金沢城調査研究所 2020c
61	玉泉院丸	平成 21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	泉水中央部、北部の遺構確認（中島、出島、景石等）	金沢城調査研究所 2015d
62	兼六園栄螺山	平成 22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理（石垣修築）	石垣解体調査	管理事務所・調査研究所 2012
63	石川門（左方太鼓塀）	平成 22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所 2014c
64	橋爪門	平成 22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠	金沢城調査研究所 2015c
65	玉泉院丸	平成 22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	泉水北東部の遺構確認（護岸石組・景石等）	金沢城調査研究所 2015d・2018d
66	兼六園栄螺山	平成 23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理（石垣修築）	石垣・石造物の解体調査	管理事務所・調査研究所 2012
67	石川門（左方太鼓塀）	平成 23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所 2014c
68	橋爪門	平成 23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠、近世初期遺構	金沢城調査研究所 2015c
69	玉泉院丸	平成 23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認・復元整備）	色紙短冊積石垣下の遺構確認	金沢城調査研究所 2018d
70	橋爪門	平成 24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	石組暗渠、石垣台、枡形路面	金沢城調査研究所 2015c
71	玉泉院丸	平成 24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	色紙短冊積石垣周辺と滝石組上部の遺構確認	金沢城調査研究所 2018d
72	玉泉院丸（南石垣）	平成 25(2013)	金沢城調査研究所	公園整備（石垣修築・復元整備）	石垣の解体調査、近世初期の土塁確認	公園緑地課・調査研究所 2017
73	東ノ丸	平成 26(2014)	金沢城調査研究所	保存目的調査	東ノ丸庭園の遺構確認	金沢城調査研究所 2018c
74	玉泉院丸	平成 26(2014)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所 2020d・2021c
75	玉泉院丸	平成 27(2015)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門の遺構確認	金沢城調査研究所 2020d・2021c
76	金谷出丸	平成 27(2015)	金沢市埋文センター	建物新築	塀または柵跡、瓦廃棄土坑、石組遺構	金沢市埋蔵文化財センター 2016a
77	玉泉院丸	平成 28(2016)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所 2020d・2021c
78	数寄屋屋敷北	平成 29(2017)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所 2018a
79	玉泉院丸	平成 29(2017)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所 2020d・2021c
80	玉泉院丸（南東）	平成 30(2018)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所 2018e・2019a
81	玉泉院丸	平成 30(2018)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門の遺構確認	金沢城調査研究所 2020d・2021c
82	玉泉院丸（北）	令和元（2019）	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所 2019d・2020a
83	数寄屋屋敷西	令和 2(2020)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	石垣保全に係る試掘調査	金沢城調査研究所 2021a
84	二ノ丸	令和 2(2020)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	御殿建物の遺構確認	金沢城調査研究所 2020e・2021a
85	数寄屋屋敷西	令和 3(2021)	金沢城調査研究所	公園整備（石垣修築）	石垣上面の遺構確認、斜面上部の石垣基部確認	
86	二ノ丸	令和 3(2021)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	御殿建物の遺構確認	金沢城調査研究所 2021d
A	県庁跡地（堂形）	平成 15(2003)	(財) 県埋文センター	都心地区整備（確認調査）	焼米（堂形米蔵関連遺物）、近世初期以前土塁遺構	(財) 県埋文センター 2010
B	県庁跡地（堂形）	平成 16(2004)	(財) 県埋文センター	都心地区整備（確認調査）	足軽番所、堂形馬場	(財) 県埋文センター 2010
C	県庁跡地（堂形）	平成 19(2007)	(財) 県埋文センター	都心地区整備（施設建設）	古代～近世の遺構面	(財) 県埋文センター 2012
D	県庁跡地（堂形）	平成 20(2008)	(財) 県埋文センター	都心地区整備（施設建設）	堂形建物、石垣、堀跡、古代～中世の遺構面	(財) 県埋文センター 2012
E	県庁跡地（堂形）	平成 24(2012)	(財) 県埋文センター	都心地区整備（施設建設）	石列、石組遺構	(公財) 県埋文センター 2014c

県教委：石川県教育委員会
県埋文センター：石川県立埋蔵文化財センター　　(財) 県埋文センター：石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター（2013 年度から公益財団法人）
金沢城研究調査室：石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室　　金沢城調査研究所：石川県金沢城調査研究所
管理事務所・調査研究所：石川県金沢城・兼六園管理事務所　石川県金沢城調査研究所

第３章　遺構

第１節　調査の概要

１．調査の目的

金沢城調査研究所では、平成 24 年度以後、金沢城の特質に深く関わると考えられる城内の庭園（城郭庭園）遺構を主な対象として城郭庭園等の総合研究として調査に取り組んできており、平成 29 年度に成果の取りまとめを行い、報告書を刊行した。

切石積石垣確認調査事業は上記の成果から、金沢城を特徴づける遺構であり、庭園や御殿空間の重要な構成要素である切石積石垣について更に調査を深めるため、とくに地上部分にはほとんど残っていない出現期について、発掘調査により意匠や範囲、出現時期等を確認することとした。

２．対象箇所と調査区の設定

平成 29 年度は数寄屋屋敷北、平成 30 年度は玉泉院丸南東、そして令和元年度は玉泉院丸北を対象とした（第 24 図）。平成 29 年度の数寄屋屋敷北は、雛土蔵下石垣は上部が布築積、下部が四方積、数寄屋屋敷北石垣は金場取残積といった、従来 17 世紀後半と評価していたこれらの石積について、より古い痕跡が認められるかどうかを確認するために両石垣の入角部に調査区を設定した。平成 30 年度は、これまで玉泉院丸庭園では北部の泉水や雛壇石垣周辺での発掘調査において石垣の創建時期に関する所見を得ていたが、南東部のエリアについては調査の手が及んでいなかったことから対象とした。令和元年度の玉泉院丸北は、平成 24 年に色紙短冊積石垣南面を調査しているが、遺構保護のため江戸後期の面で発掘を停止しており、石垣の創建に関する所見を得られなかったことから今回は東面について対象とした。いずれ調査も切石積石垣の根元部分で小規模なトレンチを設定しており、地上部の石垣の様相もふまえながら調査地点を選定した。

３．調査の方法

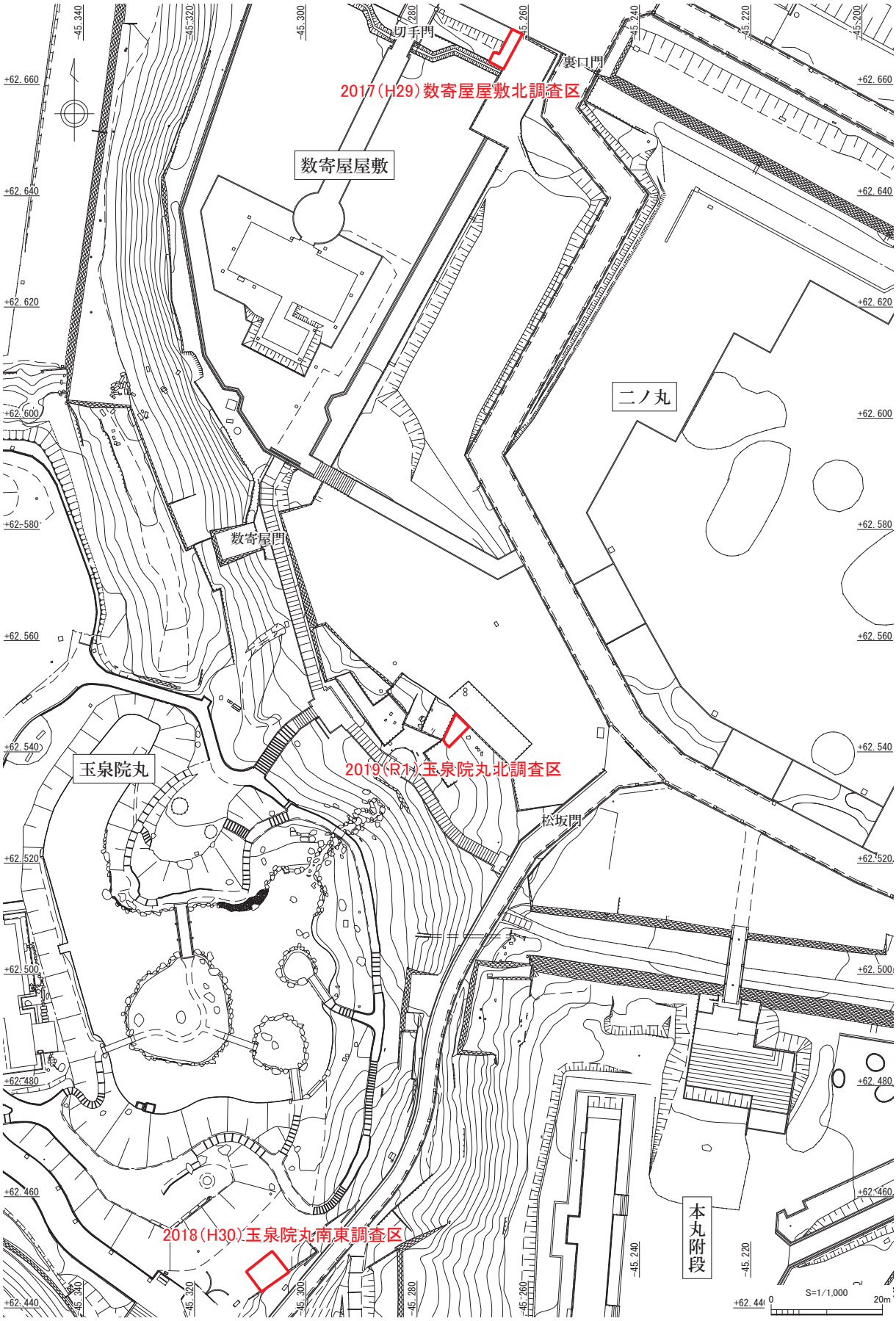
調査区の設定後は、現地表面から手掘りによって近代以降の埋土を除去した。ただし、平成 30 年度は公園整備時の造成土が厚く堆積していると想定されたので、その部分は重機掘削を行った。

調査は、石垣の創建時の様相を確認するため、石垣表面の加工痕や石積みの変化や土層観察を行いながら、必要に応じて断ち割りを入れていった。特に根石付近の掘削となるため、根石がむき出しになる部分を最小限にとどめるよう、留意しながら掘り下げを行った。

調査記録は、デジタル一眼レフカメラによる写真撮影と手実測による土層断面図の作成を直営で行った。調査区平面図及び石垣立面図・断面図（既存の石垣図面に合成）は委託業務としており、三次元レーザー計測によって行った。また、石垣石材や、トレンチ内の石加工といった記録については、通常の計測以外にもさらに詳細なデータ取得を目的としてハンディスキャナーによる計測や、一部、試験的に 3D プリンタ出力を行った。

調査区が小規模なため、グリッドは設定せず、遺物は、調査区の形状やアゼを区切りとして、層ごとに取り上げた。遺構については、個別名称をつけて取り上げた。

調査終了後の調査区については、調査前の状況に復旧としており、基本的には掘削による発生土による埋め戻し作業を行った。ただし、今回の調査による掘削範囲や深さを記録資料だけでなく、現地にも表示するため、遺構面の保護のために、断面やサブトレンチには土のうを入れ、発掘停止面には不織布や黄橙色砂を敷くなどした。


2017（H29）数寄屋屋敷北調査区
2019（R1）玉泉院丸北調査区
2018（H30）玉泉院丸南東調査区
数寄屋屋敷
数寄屋門
切手門
裏口門
二ノ丸
玉泉院丸
松坂門
本丸附段
S=1/1,000
0
20m

第 24 図　調査区位置図

第２節　数寄屋屋敷北調査区

１．調査区の位置と調査の概要（第 25・26 図）

本調査区は、二ノ丸裏口門の雛土蔵下石垣の西面（2710W）と数寄屋屋敷北石垣（2800N）の東端とが接し、入隅部となっている箇所にあたる。これより北側は三ノ丸、南側が二ノ丸となる。

今回の調査では、金沢城の切石積石垣の初現期の様相を探ることを目的としており、対象とした雛土蔵下石垣（2710W）と数寄屋屋敷北石垣（2800N）については、従来、17 世紀後半の様式として評価していたが、両石垣の埋没部分に、より古い時期の痕跡が認められないか確認することとした。

近世段階から現在に至るまで、絵図をみると、城内の火災や、地震といった災害によって、何回かの石垣修理願いが出されているが（第 12・44 図）、堀や石垣といった基本的な配置に大きな変化はみられないようである（第 43 図）。

調査区は雛土蔵下石垣西面（2710W）沿いに、南北７ｍ、東西２ｍのトレンチを設定した。調査の進捗に伴い、堀底の一部で数寄屋屋敷北石垣（2800W）に沿って西側にトレンチを 1.5 ｍ拡張した。

調査は表土除去から全て人力掘削で行った。調査では便宜的に法面上の平坦部と、法面、堀底に区分して遺物の取り上げを行った。

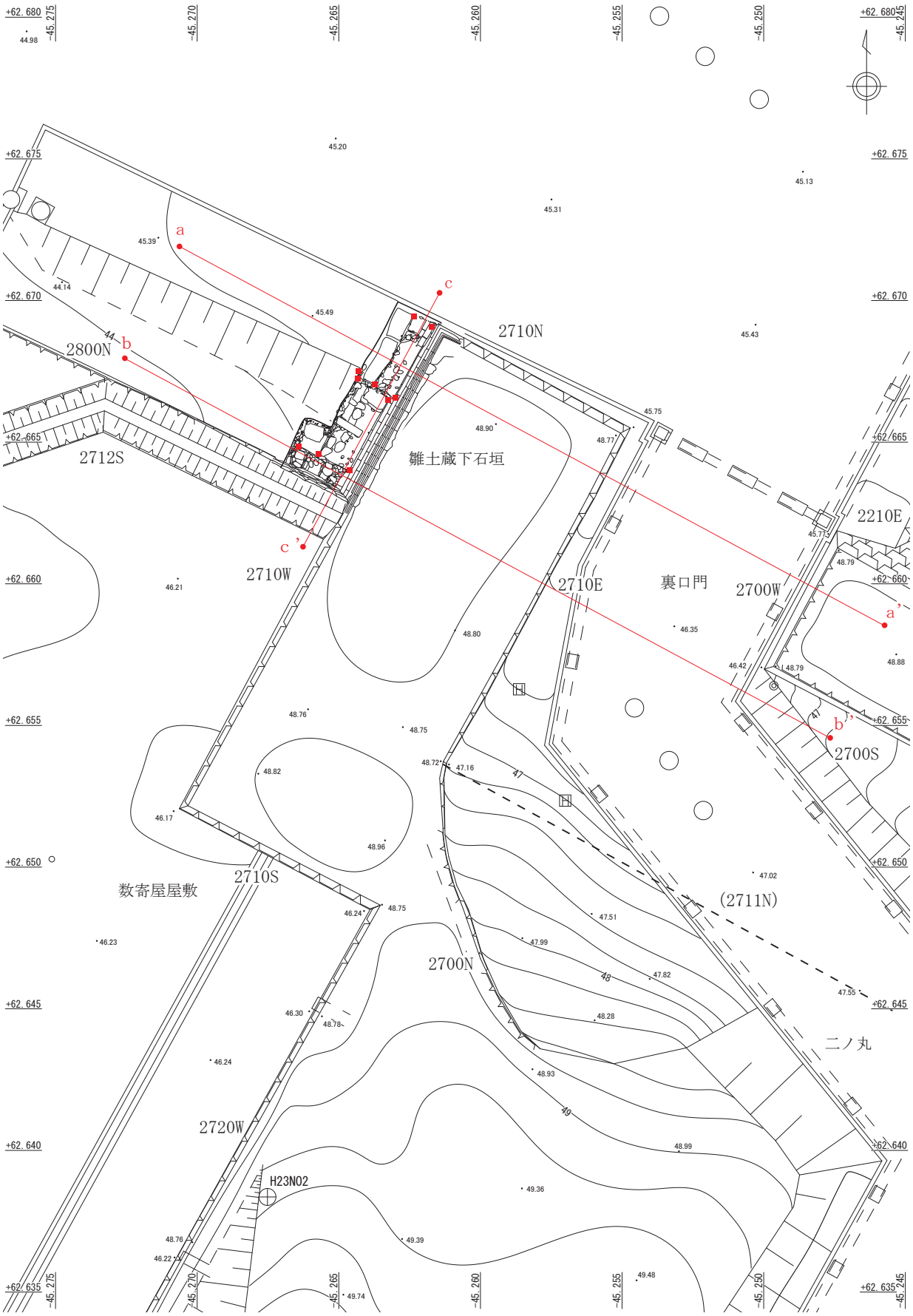
２．基本層序

本調査区の層序は、Ⅰ：近代以降の埋土層、Ⅱ：近世の整地土に大別した。

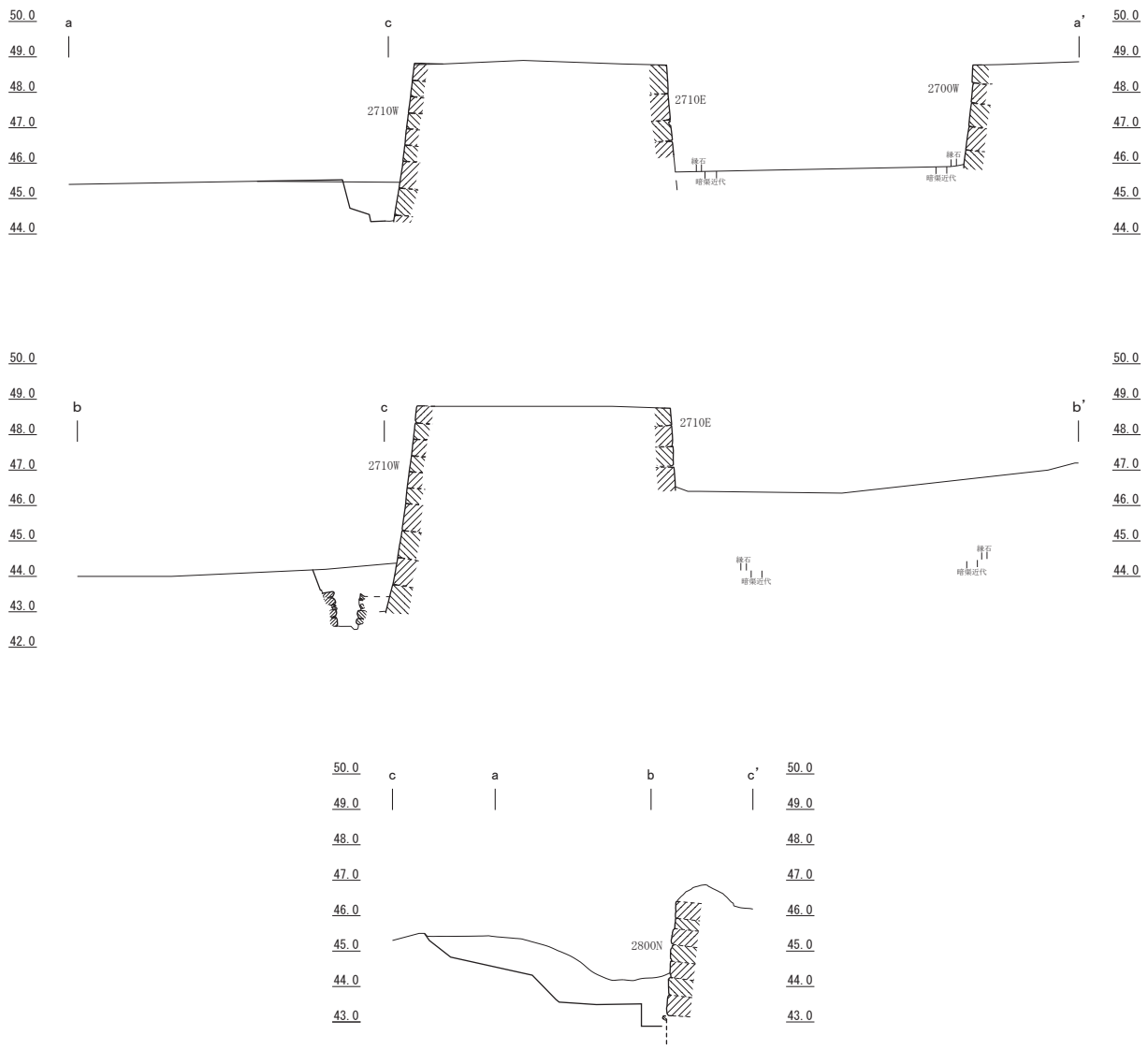
Ⅰ層はａ・ｂ層に細別し、ａ：公園整備時の造成土、ｂ：近代以降の造成土とした。ｂ層については、金沢大学期と陸軍期に細別可能と思われるが、調査区内では遺構の状況から７層までが大学期の可能性が高いが、明確な面としてとらえることが出来なかったことから一括した。

Ⅱ層についてはａ～ｃに細別でき、ａ：堀底の堆積土や整地土、ｂ：堀に直交する石組水路内の埋土、ｃ：石垣に伴う整地土や石組水路構築時の裏込め土などとした。

第 25 図　数寄屋屋敷北調査地点全景（調査前）



第 26 図　数寄屋屋敷北調査区位置図



第 27 図　数奇屋屋敷北調査区周辺地形断面図

３．遺構

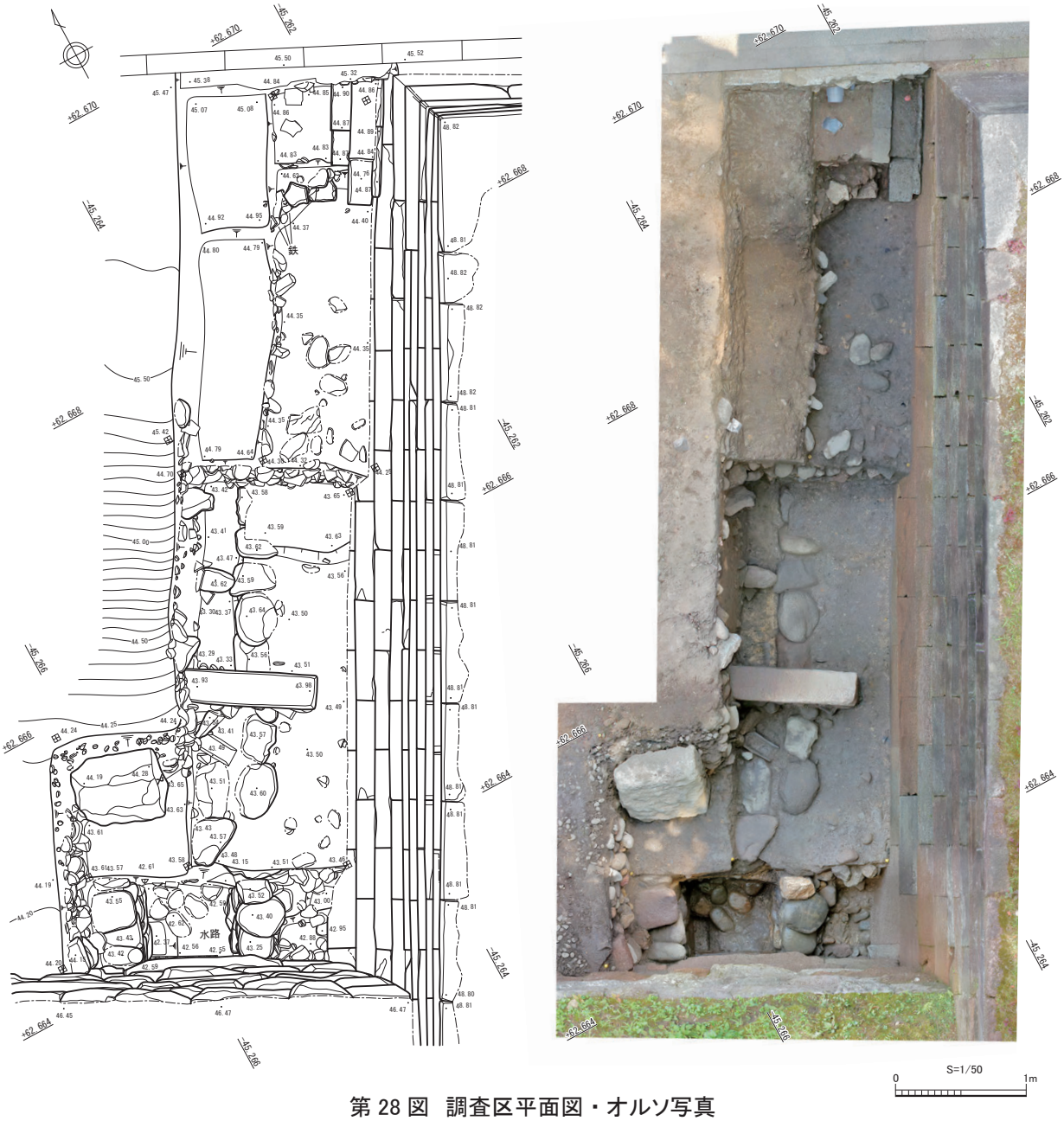
数寄屋屋敷北堀（第 28 図）

調査地点の現状は東と南を石垣に、西は空堀が延びている。調査区は南側が空堀の中で一段低くなっており、郭面の北側とは比高差約１ｍを測る。近世段階から堀・空堀として絵図に描かれており、基本的な位置や形状などは変化していないが、調査の結果から、何段階かの変遷があったことが明らかとなった。（以下、雛土蔵下石垣西面：2710W、数寄屋屋敷北石垣：2800N）

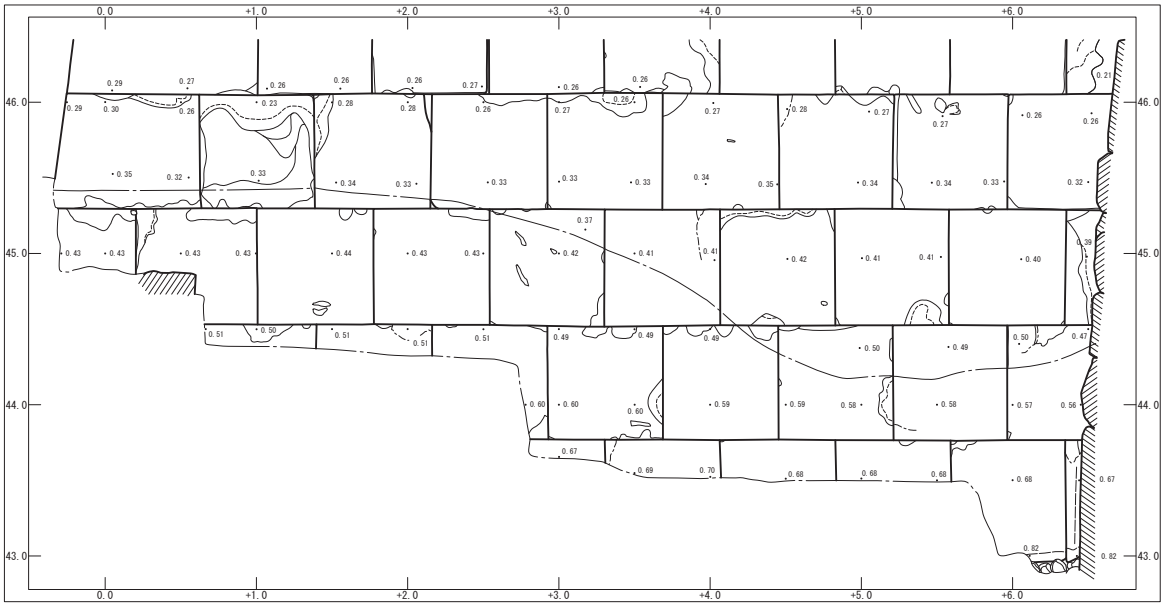
調査区の造成土等については、Ⅰ層については法面上と法面、堀底でそれぞれ堆積状況が異なるため、その３区画に分けて、Ⅱ層については、堀底のみで確認しているので分けずに記述していきたい。

Ⅰａ層は調査区全体に広がる公園整備時の造成土で、１から４層がそれにあたる。法面上の平坦部では厚さ５㎝程度の黄褐色の砂質土（クリカラ土）とコンクリート破片などを含む暗褐～黒褐色砂質土の盛土層からなる。北側では塩ビ管が残置されており、埋設の掘方がⅠｂ層とした整地土層の一部を掘り込んでいる。

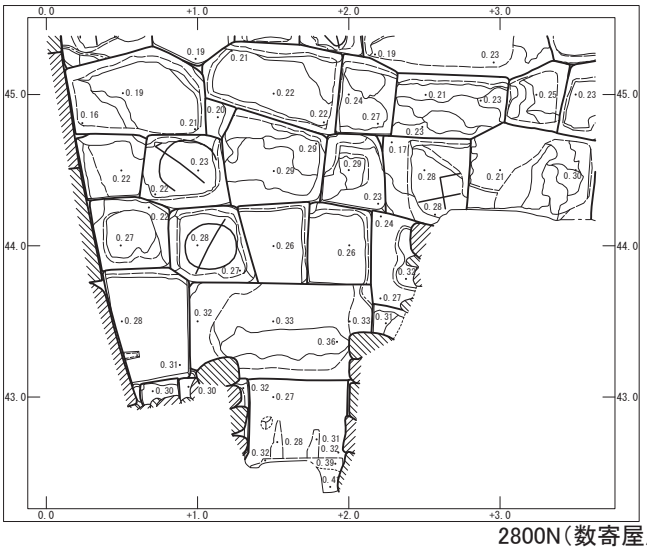
石垣入隅部（左2710W・右2800N）



第 28 図　調査区平面図・オルソ写真



2710W（雛土蔵下）



2800N（数寄屋屋敷北）

第 29 図　2710W・2800N　石垣（調査区内）立面図・オルソ写真

S=1/50

Ⅰｂ層は、陸軍期から金沢大学期と考えられる盛土層で、５層から26層がこれにあたる。５層は大学期の表土層とみられ、直径５㎜～１㎝大の小砂利を多く含む、しまりのある黒褐色土が均一に広がっており、ごく僅かではあるが調査区北端側から空堀側に向かって傾斜をもっている。

５層を掘り下げる途中で、雛土蔵下石垣西面に沿って、幅34㎝、厚さ７㎝のコンクリートが打設されており、調査区の北端から長さ約1.2ｍで途切れている。コンクリートは上面で標高が45～44.9ｍと、金沢大学期とした表土層とほぼ同レベルで、大学期には裏口門から2710Wの裾を巡る側溝があったことから、その残欠の可能性がある。コンクリートの下は、直径５㎝程度の円礫が敷かれていた。このコンクリート側溝とみられるその直下に、円礫と整地土を挟んで重複するように凝灰岩製の石組溝を検出した。石組溝は８層内に設置されており、周辺の整地と一体的につくられている。８層からはガラス片等も出土しており、近代以降に設置されたとみられる。

法面部分では、表土は薄く、それを除去すると３層とした礫を含む層が法面形状に沿って堆積している。プラスチックやガラス瓶の破片を含んでおり、これも公園整備の盛土層とみられる。

Ⅰａ層を取り除いていくと礫混じりの整地土中から、石積みが現れる（第45図－５）。石積みは人頭大の河原石を使用しており、打割によって面を作っている石材もある。15・16層を基盤層として構築されており、16層が西側に向かって高まるのと一致するように、石積み下段の位置も高くなり、西側に約1.5ｍ伸びたところで途切れる。背後の裏込め層はみられず、９・12層の造成土と一体で築かれており、盛土で嵩上げする際の簡易な土留めとして設置された可能性がある。この石積みの正面を埋めるよう法面から堀底にかけて礫を含む10層が広がっていく。（第45図－３）

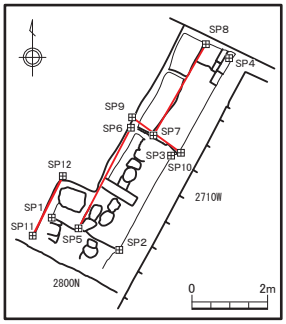
Ⅰｂ層の25・26層には焼土や炭化物が含まれ、堀底から法面方向にむかって斜めに立ち上がっている。焼土や炭化物の他に、釉薬瓦を多く含んでおり、出土状況からは２次的に入ったというよりも、火災後の片付けの際に廃棄されたものの可能性が高い。26層中からは軍隊茶碗と呼称する、アラビア数字を朱書きで上絵付した染付碗が出土していること（第94図　Ｐ04)、調査区東側の石垣台上にあった雛土蔵は、文化７（1805）年の火災後に土瓦葺きとされていることから［金沢城調査研究所2004b］、明治14年（1881）の二ノ丸火災後の廃棄層と考えられよう。この段階まで、堀底は緩く北側に向かって傾斜をもっており、明治14年以降に現状のような法面を造成したとみられる。

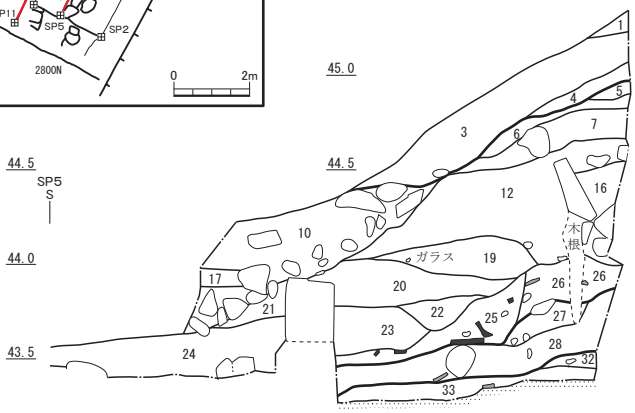
堀底では、最上面に直径３～５㎝大の円礫が敷かれており、その表層に薄く流土や腐植土が堆積している。この円礫は厚手の不織布の上に均一に置かれており、公園整備時に設置したものとみられる。

不織布の下は握りこぶし大の礫や、やや大振りな戸室石片を含んだ、粘性のある黒褐色土の10層がみられ、その下には、多量の礫を含んだ、砂混じりの暗褐色土である21層が厚く堆積する（第45図－４）。また、石垣前面において、直径５㎝程度の円礫と燻瓦や釉薬瓦片が局所的に集中している状況を確認した。

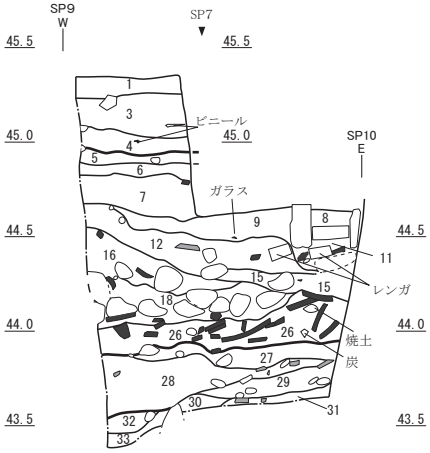
これらの堆積土を取り除くと強粘性土と砂質土が混在した暗褐色土（24層）となる。この面で雛土蔵下石垣に沿って南北方向の簡易な石組溝を検出した（第45図－６）。溝は堀底から法面に向かって緩く傾斜しているが、法面部分では石組は確認できなかった。法面上の凝灰岩製の石組側溝と連結していた可能性もある。石組溝は凝灰岩や戸室石の板材と河原石を使用しており、河原石はやや扁平で大型のものは側壁として小端立てした状態で並べられている。底面にも扁平な河原石が敷かれていた。掘方はみられず、溝の外側にみられる砂を多く含む整地土と一体的につくられたとみられる。溝の内部は礫と砂、粘質土が混在する土が堆積し、水が流れたり滞水したりを繰り返していたことが窺える。ビール瓶の破片などが覆土中から出土しており、近代以降に堆積したものとみられる。

Ⅱａ層は堀底部分の埋土及び自然堆積層とした層で、27～31層が対応する。焼土や釉薬瓦を大量に含む26層を境にして、堆積土の様相は大きく変化しており、27層は水の流れにより一時的に堆積した砂層とみられる。28層は同様の砂と粘質土が混在しており、こちらは滞水状態と水が流れ込ん

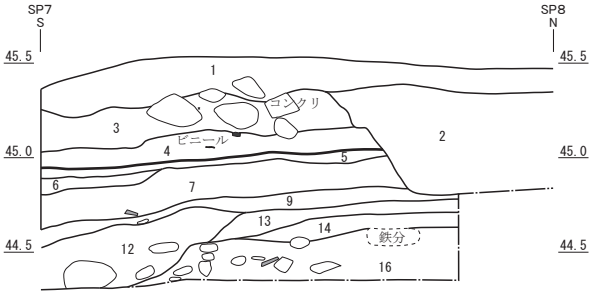




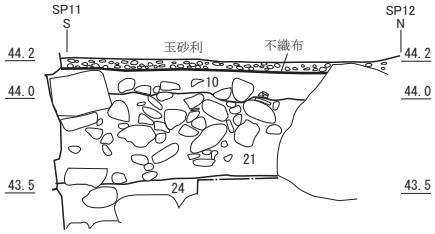
西壁 法面～堀底断面図



東西断面 南壁 法面・石組側溝断面図



西壁 法面上断面図



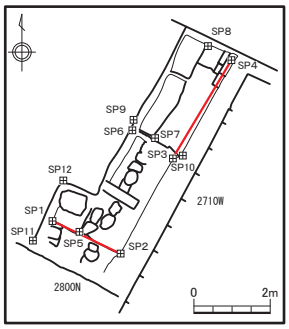
西壁 拡張部断面図

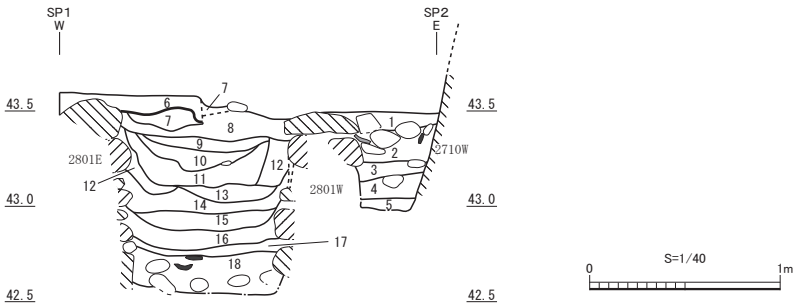
S=1/40
0
1m

1 10YR5/3 にぶい黄褐色土（砂質土、しまりあり）
2 10YR2/2 黒褐色土（礫を多く含む、ややしまる）塩ビ管埋設時の掘方
3 10YR2/2 黒褐色土（砂質土、しまりあり、５～ 10 ㎝大の礫を含む、ビニール片を含む）
4 10YR3/3 暗褐色土（砂質土、しまりあり、ビニールを含む層、径５㎝大の円礫を少量含む）
5 10YR3/2 黒褐色土（砂質土、しまりあり、４～５㎜大の砂利を含む）旧表土
6 10YR3/3 暗褐色土（粘質土、しまりあり、炭化物粒をごく少量含む、7 層よりやや汚れた土）
7 10YR2/3 黒褐色土（粘質土、しまりあり、0.5～２㎝大の黄橙色ブロックを含む、瓦片（釉薬瓦）を含む）
8 10YR2/2 黒褐色土（粘質土、しまりあり、炭化物を少量含む）石組溝埋め戻し土
9 10YR3/2 黒褐色土（粘質土、しまりあり、１～２㎝大の黄橙色ブロックを含む、炭化物を含む、ガラス片を含む）石組溝掘方埋土
10 10YR2/2 黒褐色土（粘質土、10 ～ 20㎝ 大の礫を多く含む、
11 10YR2/3 黒褐色土（粘質土、ややしまる、礫・レンガ・いぶし瓦を含む）石組溝の掘方
12 10YR3/3 暗褐色土（粘質土、砂を含む、２～３㎝大の礫を含む、炭化物・２～３㎝大の焼土・レンガ・釉薬瓦を含む）
13 10YR3/3 暗褐色土（粘質土、礫を多く含む、炭化物粒・焼土粒を含む、黄褐色クサリ礫少量含む）
14 10YR3/1 黒褐色土（粘質土、砂礫を少量含む、汚れた感じの土）
15 10YR2/3 黒褐色土（砂質土、同色の粘質土を含む、焼土粒をごく少量含む、釉薬瓦を含む）
16 10YR3/3 暗褐色土（砂質土、ややしまる、径 10 ～ 15 ㎝大の円礫を含む、焼土粒を含む､炭化物粒を少量含む､黄白色粘土粒（径１㎝）含む､瓦（燻･釉薬）を含む）
17 10YR2/2 黒褐色土（砂質土、薄い粘土層と互層状をなす）
18 10YR2/3 黒褐色土（粘質土、ややしまる、焼土粒、炭化物粒を少量含む、径 15 ～ 20 ㎝大の円礫が並ぶように入る）
19 10YR3/3 暗褐色土（砂質土）
20 10YR4/2 灰黄褐色土（砂質土、しまりあり）
21 10YR3/3 暗褐色土（砂質土）
22 10YR3/2 黒褐色土（砂質土、19・21・23 に比べるとしまりが弱い）
23 10YR3/2 黒褐色土（砂質土、しまりあり）
24 10YR3/3 暗褐色土（粘質土、しまりあり、砂礫・焼土粒・黄褐色粘土粒・鉄分含む）
25 10YR3/3 暗褐色土（粘質土、しまりあり、焼土粒を多く含む、釉薬瓦入る、砂を含む）
26 10YR3/3 暗褐色土（粘質土、ややしまる、焼土粒・釉薬瓦を多量に含む、炭化物を少量含む、焼土層、軍隊茶碗入る）
27 10YR2/3 黒褐色土（砂質土、細かい焼土粒、炭化物粒をわずかに含む、５～ 10 ㎝大の礫を含む）
28 10YR2/3 褐色土（粘質土、同色の砂質土を含む、細かい炭化物・焼土粒を少量含む、いぶし瓦を含む）
29 10YR3/3 暗褐色土（粘質土、５～７㎝の円礫を含む、いぶし瓦を含む）
30 10YR2/2 黒褐色土（粘質土、炭化物・焼土粒・白色粘土粒（いずれも径３～５㎜）を含む、しまりあり）
31 10YR5/3 にぶい黄褐色土（粘質土、10YR3/2 黒褐色粘質土と互層、いぶし瓦を含む、粘性が強い）
32 10YR3/2 黒褐色土（粘質土、砂混じり、焼土粒・炭化物粒（径３㎜くらい）を少量含む）
33 10YR3/2 黒褐色土（粘質土、粘性強い、ごくわずかに砂を含むが粘性土単一の層）

※Ⅰa 層：1 ～ 4 公園整備造成土、Ⅰb 層：5 ～ 26 近代以降の埋土
Ⅱa 層：27・28・29 堀の堆積層　30・31 堀底の整地土か
Ⅱb 層：32・33 石積水路の堆積土

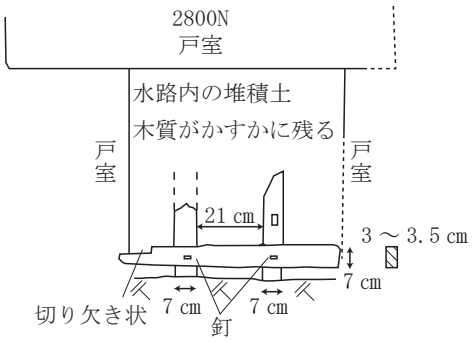
第 30 図 数寄屋屋敷北 土層断面図





1　10YR4/2　灰黄褐色土（粘質土、礫・炭化物粒（0.5 ㎝大）・黄褐色粘土粒（0.5～1㎝大）含む、とてもしまりある）旧堀底最上面・2 層との境に人頭大の礫多く入る
2　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、砂を含む、いぶし瓦片を多く含む（瓦当もあり））
3　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、砂礫を多く含む、鉄分と明黄褐色粘土粒（0.5㎝大）を含む、いぶし瓦の細片が入る）
4　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、砂礫を多く含む、明黄褐色粘土粒（1～2㎝大）を多く含む、とてもしまりある）
5　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、砂礫を多く含む、しまりあり）
6　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、砂礫を含む、鉄分・黄褐色粘質土・焼土粒を含む）堀底の焼土層としていた層にあたる
7　10YR4/2　灰黄褐色土（非常に強くしまる粘質土、、炭化物粒（0.5～1㎝）をごく少量含む）
8　10YR2/2　黒褐色土（しまりあり粘質土、、炭化物粒・黄褐色粘土粒（いずれも 1.0㎝以下）を含む、紅皿出土（元禄期））
9　10YR4/3　にぶい黄褐色土（粘質土、鉄分を多く含む、炭化物粒（0.5～1㎝を含む））
10　10YR4/2　灰黄褐色土（粘質土、炭化物粒（0.5～1㎝大）を多く含む）［炭層①］
11　10YR5/4　にぶい黄褐色土（粘質土、強粘、鉄分を含む、完形の土師器皿出土）
12　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、鉄分・炭化物粒（0.5㎝大）を含む）
13　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、しまりあり、炭化物粒（0.5～2.0㎝大とばらつく）を多く含む）［炭層②］
14　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、炭化物粒（0.5～1㎝）を含む、黄褐色粘土粒（1㎝大）をごく少量含む）
15　10YR4/2　灰黄褐色土（粘質土、しまりない土、砂を多く含む、炭化物粒を含む）
16　10YR5/2　灰黄褐色土（粘質土、しまりあり、鉄分を含む）
17　10YR4/1　褐灰色土（粘質土、炭化物粒（0.5㎝大）を少量含む）
18　10YR5/3　にぶい黄褐色土（粘質土、砂・鉄分を少量含む、円礫・いぶし瓦片入る）
※Ⅱc 層：1～5 石垣前面の整地土及び水路の石積裏込土
Ⅰ層：6 近代以降の埋戻し土（西壁 24 と対応）
Ⅱb 層：7～18 石積水路の堆積土

東西断面(南面) 堀底・断割り断面図



東西断面(北面) 堀底・断割り(樋門内)略図・写真

第 31 図　数寄屋屋敷北　土層断面図・略図

だ状態があったと考えられる。また、27 層以下からは釉薬瓦は出土しておらず、燻瓦のみとなる。31 層は後述する 2800N の樋門廃絶後の堀底の整地土と考えており、32・33 層は、その樋門から北方向に延びる水路の埋土である。（第 30 図）

堀底部分については、29 層を取り除いた段階で、2710W と並行し、2800N に取り付くような南北方向の河原石列を検出した。石垣の入隅部において、2710W の根石を探るために入角部に断ち割りを入れたが、この石垣前面の造成土は、根石を押さえるだけでなく、2710W に並行して流れる水路の石積みの裏込めも兼ねるようなものであることがわかった。最上層は地山質の粘土粒を含む、非常にしまりのある茶褐色土で、２層との間に多量の人頭大の礫と燻瓦がみられる。この層は面的に広がっており、下の層には連続しないことから、単なる裏込め層としてだけではなく最上面を固く均すための骨材のような目的もあったかもしれない（写真図版第 46 図 - ６）。入角部分で石垣の基底部を確認したところ、両石垣は、地上部では 2710W に、2800N が取り付くように積みあがっているが、すくなくとも根石部分においては、2800N が先行して設置されていることを確認した。根石のレベルでは 2800N の根石が一段低く、その根石前面を押さえる栗石に 2710W の根石下に敷設した栗石が乗ってきている。

また、基底部を覆う仕上げ土とみられる31層が両石垣面を覆っているといった点から、どちらかが後の付け足しや改修をうけたとはみえず、両石垣は一体的に施工されたと考えられる（第46図－７・８）。

樋門・水路（第31・32・47図）

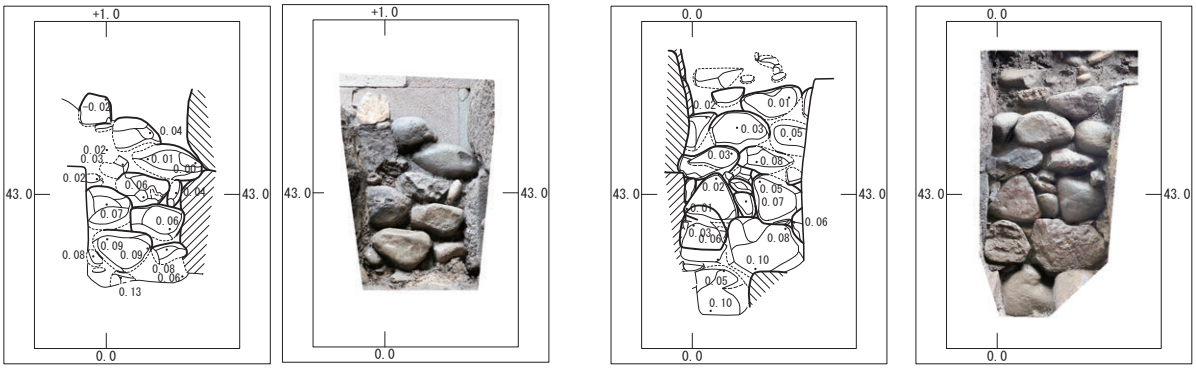
河原石を使用した石積みは、西側に平行した同様の石列があり、幅は約90㎝であった。また、この水路が2800Nと直交する地点は。石垣下部に樋門があることも判明した。そのことから数寄屋屋敷北堀は、数寄屋屋敷東辺の堀と繋がっていた段階と、樋門や石組をもつ溝が埋没した、現状とほぼ同様の形状の段階があったことがわかった。

堀底から検出した水路は、幅は約90㎝をはかり、長さは約４ｍ分検出した。南北方向に長軸をもつが、南側は2800N下の樋門から数寄屋屋敷の郭内部に続き、北側は現状の堀の法面よりも更に伸びているそのことから、水路が機能していた時期には堀の肩部はもっと北側にあった可能性が高く、法面周辺の堆積土をみても近世段階では北に向かい緩く上がっていくが、明確な立ち上がりは確認できなかった。元禄９～10（1697～98）年の二ノ丸御殿改修後の状況を示す絵図「金沢城座敷之図二之丸」（金沢市立玉川図書館蔵）では、数寄屋屋敷北の堀からそのまま雛土蔵下石垣の北面まで周辺より一段低い、土羽となっているような描き方をする唯一の絵図であるが、今回の調査所見から、このような状況があった可能性がある。

水路の両側にある石積みは、河原石を使用しており５ないし６段程度遺存している。石材は角が丸みを持った人頭大サイズで、面部分を打割により作り出している。水路は内法が90㎝、樋門の前面で深さが約90㎝である。長さは石積上部のみを検出した部分も含めて3.6ｍを確認したが、更に北側に伸びており、全長等の詳細は不明である。

水路内部は黒褐色土と茶褐色土の互層となっており、Ⅱｂ層とした。いずれの層も非常に粘性が強く、炭化物を多く含むという特徴をもっている。水路内の18層には砂がわずかに含まれ、扁平な円礫が敷かれたような状態を検出した。この石敷きを残すためと、18層で2800Nの根石を確認したことから、面的な掘り下げを停止した。この下の状況を確認するため、一部断割りを入れたところ、灰褐色粘質土、灰白色粘質土、砂と炭化物を多く含む灰褐色粘質土が厚さ20㎝程堆積し、それ以下は硬くしまった地山質の砂礫土となることを確認した。過去に行われた空堀の西側でのボーリングデータから、周辺の地山レベルは42.4ｍで、この砂礫土のレベルも42.4ｍであったことから、地山（卯辰山層）に達したと判断した。

樋門については、2800Nと一体構造となっており戸室石製である。内部は水路の断面同様に暗褐色粘質土と灰黄褐色粘質土が堆積しており、入口部では木組みも確認した。２本の縦木に横方向の材を釘で打ち付けてある。横木は一方に切欠きがされているが目的は不明で、転用材の可能性もある。



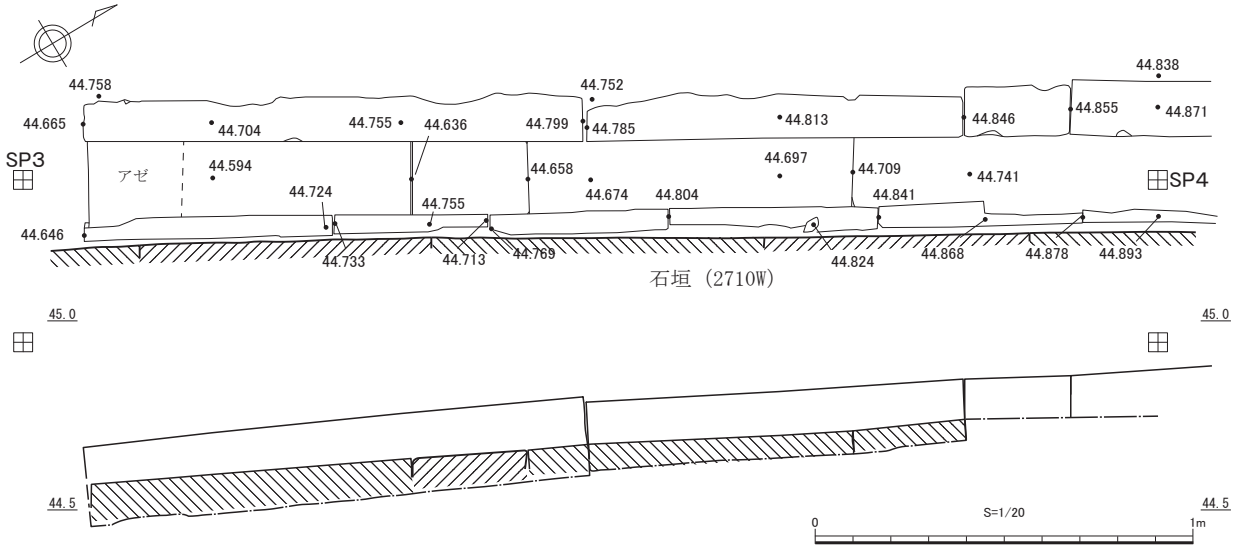
第32図　2801W・2801E　石垣立面図・オルソ写真

水路内の８層からは 17 世紀後半（元禄期頃）の紅皿､11 層からは完形の土師器皿が出土している。

この水路は江戸中期に埋められた数寄屋屋敷東石垣前面の堀と繋がっていたと考えられ、この堀の埋め立て時期とも大きく矛盾しない。

石組側溝（第 33 ～ 35 図）

調査区北端から法面上の平坦部で検出した。雛土蔵下石垣（2710W）に沿って敷設された凝灰岩製の板石を使用した石組側溝を確認した。全長 295 ㎝、幅 38 ㎝、内法幅 19 ㎝、深さ 11 ㎝前後を測る。石垣側となる東側壁の石材は長辺が 40 ～ 65 ㎝前後とばらつくが、短辺約 21 ㎝、厚さが６㎝前後である。反対側の西側壁は長辺が１ｍを超える長尺のもので、短辺が 20㎝前後、厚さ 12 ㎝前後と、長さや厚みに違いがある。底板についても、長さは計測した３個体のうち２つは 84 ㎝とほぼ同じ寸法であったが、１つだけ 30 ㎝と極端に短く、長辺は再利用の可能性も含め、使用時に長さを調節して使われていたと考えられる。幅は 17.6 ～ 19.1 ㎝と側壁材と比べてやや小さく、厚みは９㎝前後と、西壁と東壁の中間の値であった。石材は肉眼観察ではあるが、いずれも緑色凝灰岩（笏谷石）とみられる。石組の基礎部分にレンガを使用して高さ調整をしていることからも近代以降につくられた石組

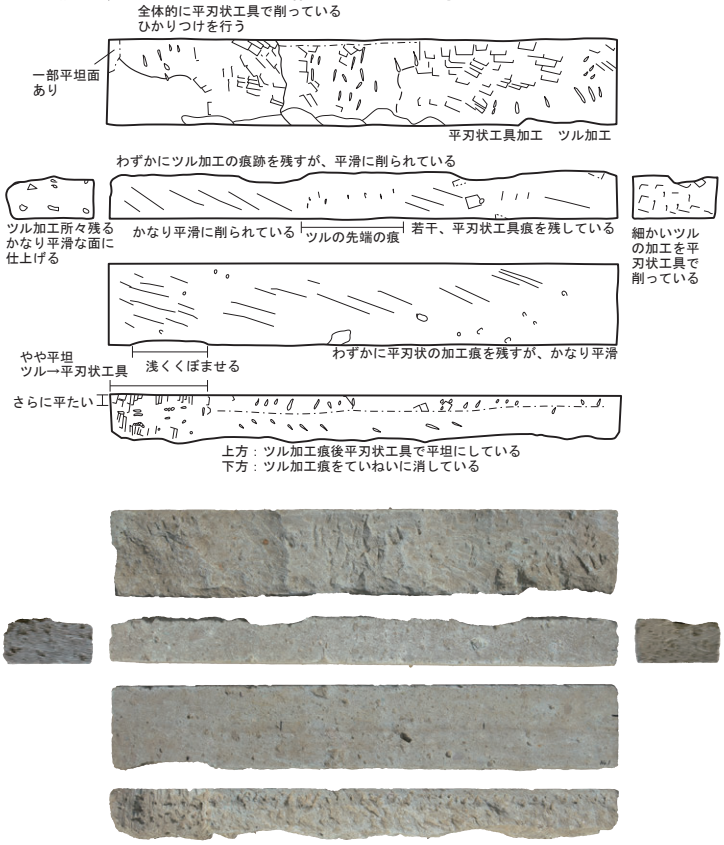


石組側溝平面図･断面図

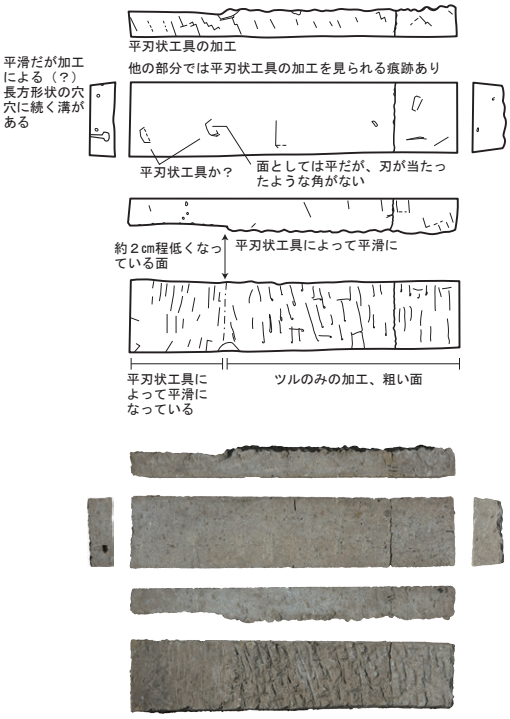
石組側溝（西から）

第 33 図　石組側溝

No.1
計測値　長辺：132.1cm　幅：12.2cm　厚：21.9cm

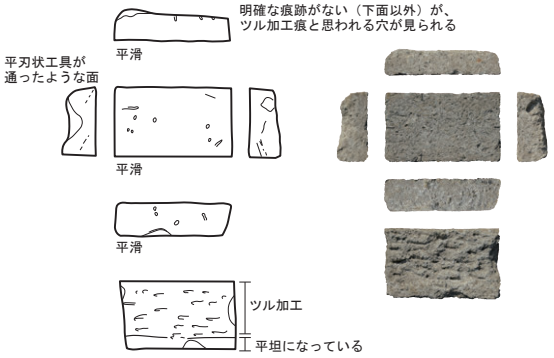


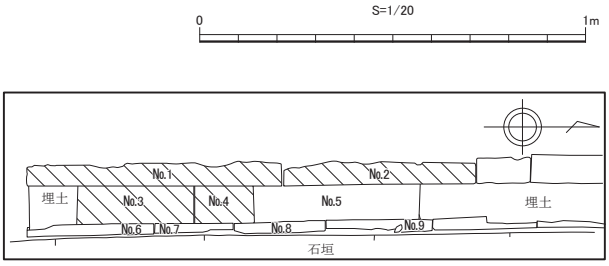
No.3
計測値　長辺：84.5cm　幅：19.1cm　厚：9.4cm



No.2
計測値　長辺：99.5cm　幅：11.7cm　厚：18.0cm

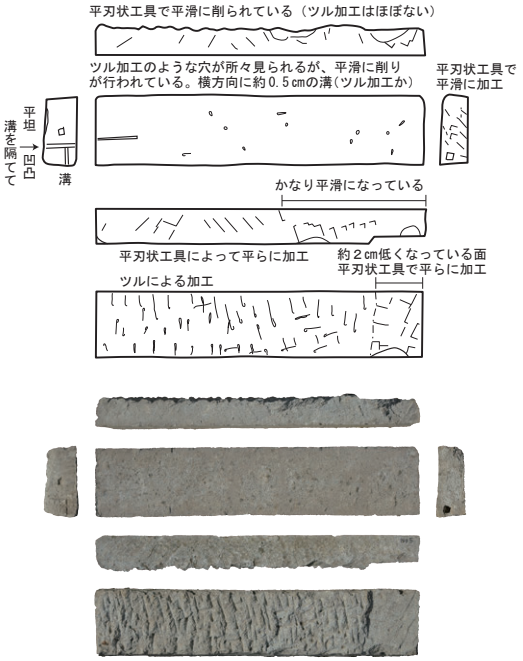
No.4
計測値　長辺：30.3cm　幅：17.9cm　厚：8.8cm



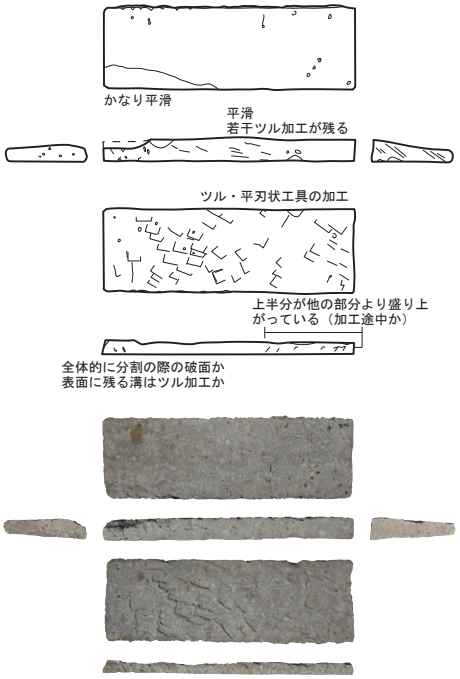


第 34 図　石組側溝　石材観察（No.1・2・3・4）

No.5
計測値　長辺：84.4cm　幅：17.6cm　厚：9.0cm



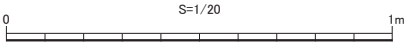
No.6
計測値　長辺：65.3cm　幅：6.0cm　厚：21.7cm

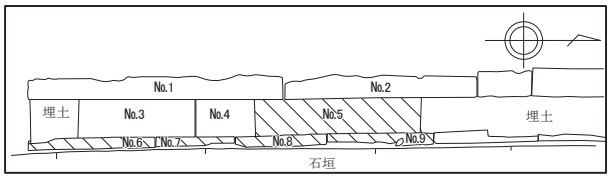


No.7
計測値　長辺：40.5cm
幅：5.6cm
厚：21.3cm

No.8
計測値　長辺：47.0cm
幅：6.4cm
厚：21.2cm

No.9
計測値　長辺：54.9cm
幅：5.7cm
厚：22.0cm





第35図　石組側溝　石材観察（No.5・6・7・8・9）

側溝と考えられる。また、近世段階の絵図にはこの地点に溝の描写はなく、昭和20年（1945）の陸軍期の図面にのみ二ノ丸裏口門から雛土蔵下石垣を取り巻くような側溝の表現が認められる。

調査の進捗によりこの石組側溝は一旦解体したが、調査終了後に原位置へ復旧したうえで、埋め戻しを行った。

個別石材の観察については、観察カードをまとめた。石材はいずれも側溝の内法にあたる面の加工が非常になめらかで、粗加工した際に深く入ったツルの刃先がわずかに窪みとなって残るが、粗加工の痕跡をほとんど消して、平滑にされている。一方で、外面にあたる部分はツルによる深い加工痕がみられる。部分的にこのツル加工による凹凸を平刃工具で平滑にしているが、石組溝の構造とは関係ないことから、それ以前の使用時に加工された可能性が高い。

加工痕として２種類の痕跡が認められる。一つは断面がＶ字形の溝状に入り、先端部が刺突痕として残るものである。柄付きで先端部が尖った「ツル」状の工具を想定している。

もう一つは、幅３㎝弱の平滑な痕跡で、こちらも柄付きで先端部が平刃を呈する「チョウナ」状の工具を想定している。幅３㎝、長さ２㎝程度の面的な痕と、幅は同様だが線状に近い痕跡が確認できるが、刃の入り方などをみると、同一の道具の使用方法の違いによるものであろう。

４．石垣

今回の調査の対象とした雛土蔵下石垣西面（2710W）と数寄屋屋敷北石垣（2800N）は、「金沢城中地割絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）において、それぞれ高さが二間五尺（5.1ｍ）、六尺二寸（1.88ｍ）とある。そのほかには、「加州金沢御城来因略記」（金沢市立玉川図書館蔵）において、2710Wの南側で三間（5.4ｍ）や北側で一間五尺（3.3ｍ）、2800Nは一間半（2.7ｍ）とある。

今回の調査の結果から、石垣構築時の根石からの高さは、2710Wが5.8ｍ、2800Nが3.9ｍ、石組水路構築時の石組天端を堀底と仮定すると、それぞれ5.4ｍと2.9ｍとなり、来因略記に近い数値となった。

雛土蔵下石垣西面（2710W）（第29・37図）

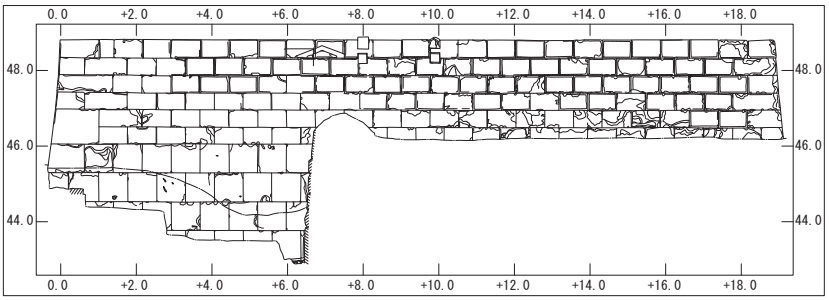
2710Wは、天端から根石下端まで5.83ｍ、南北方向の天端での長さ18.9ｍを測る。高さは現地表面までで4.64ｍ、地表より約1.2ｍ下がると根石となる。南北方向で数寄屋屋敷北の堀に面しているのは、石垣の北西角部から約6.5ｍまでで、残りの13ｍは数寄屋屋敷へと延びている。上部６段分は正面長方形、下部４段分（現状は３段）は正面正方形の石材を布積みとする。上部は「布築積」、下部は「四方積」と呼ばれる。隅角部を含めて、横目地が全て水平となる点が特徴で、現在、目にすることのできる石積としては城内でも唯一の石積である。

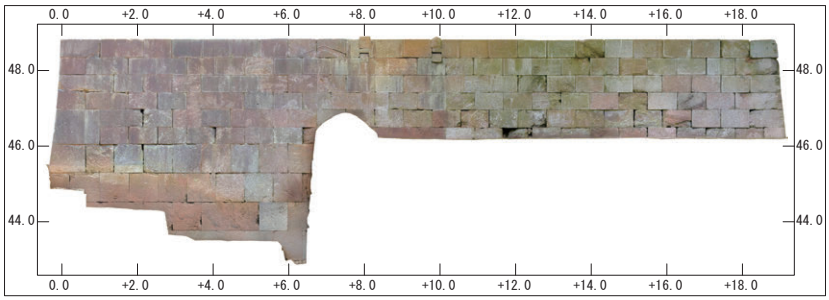
石材の高さ寸法については、段ごとに若干異なるが、概ね上部で45㎝前後（１尺５寸）、下部で76㎝前後（２尺５寸）を測り、同一の段では横目地のズレがないように調整されている。最上段のみ高さが48㎝（１尺６寸）となる。上部６段分の高さが2.76ｍ、下部４段分の高さが3.02ｍと、近似した高さとなっている。

石材の横幅の寸法は、最下段の根石に至るまで75.5㎝～76㎝（２尺５寸）を測り、誤差は極めて小さく、縦方向の目地にもズレは生じておらず、厳密に規格されていることが伺える。

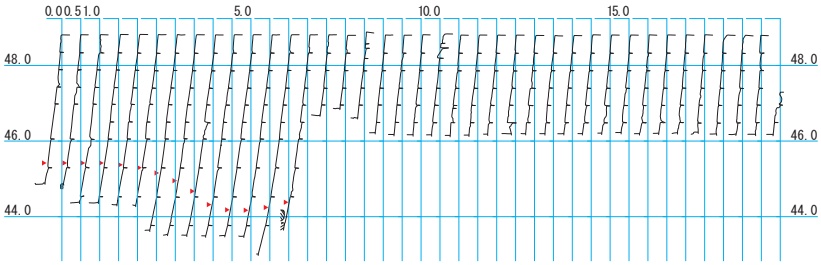
勾配は、最下段で75.5°で最上段は85°となる。根石から一段ごとに角度を変えており、下部の四方積み部分では、１石の築石の面で角度を変えて反りを作っているとみられるものもある。布築積みでは、ほぼ規勾配となっており、四方積と布築積との境で石垣面が一旦屈曲したようにみえる。

第36図　2710W　根石部分



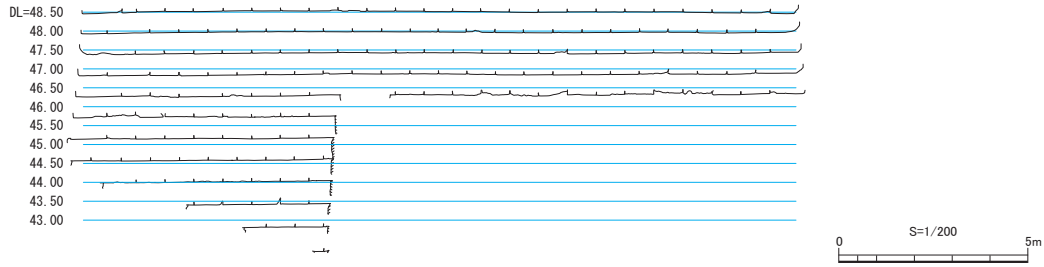


垂直断面図



▸は調査前の地表ライン

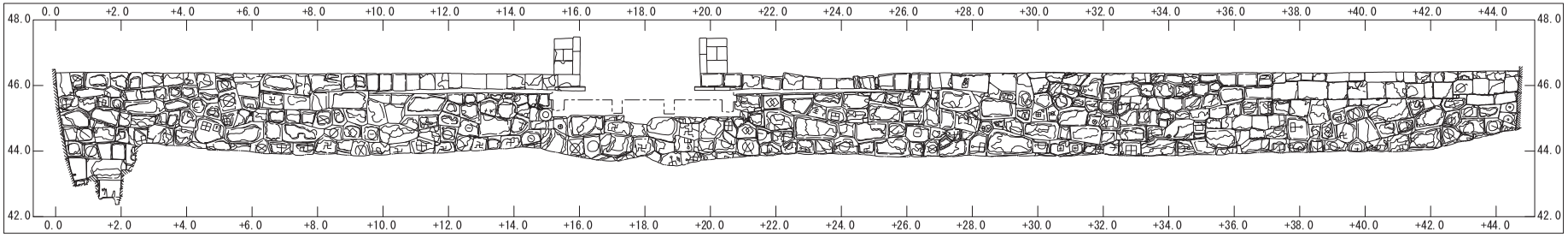
水平断面図

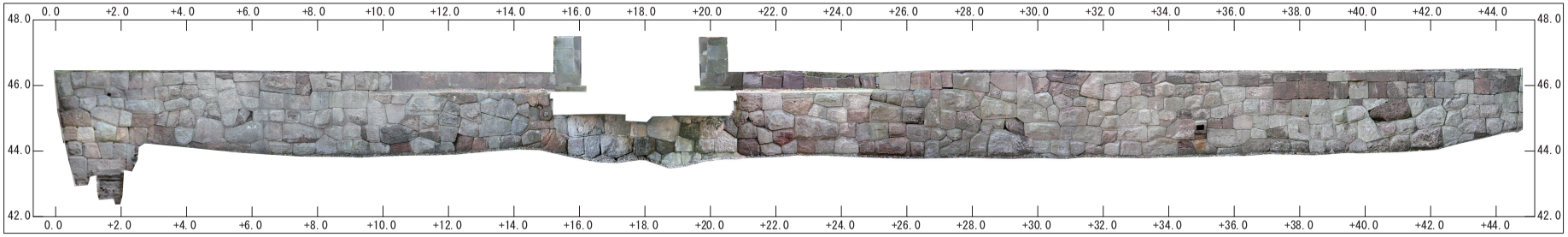


第 37 図　2710W　石垣立面・断面図・オルソ写真

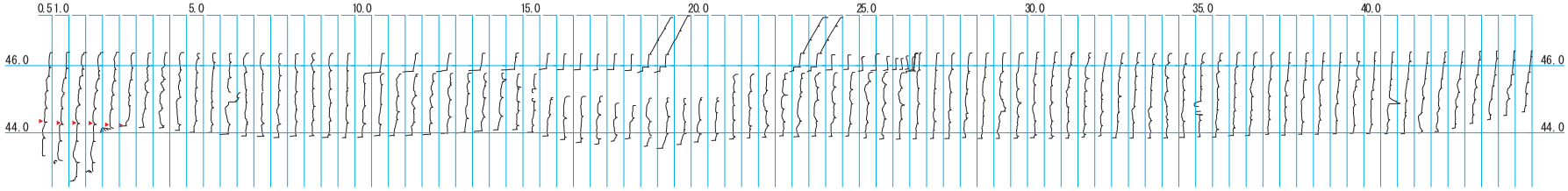
石材加工は根石を含めて全て切石で構成されており、根石の下端部に面の最終加工をせずに残した３～５㎝幅の凸部がみられる。石面には細かい点状の加工痕が密に入り、金沢城石垣の中でも最上級ともいえる非常に丁寧なノミ加工が施されている。石材の側面は平刃工具（タタキ）による平滑な合端加工がみられる。

西面の数寄屋屋敷側の石積み６段のうち上部３段までには、石材正面の周縁部にコタタキとよばれる加工がみられる。この周縁部の加工は平刃状工具によって行われ、金沢城石垣編年６期（宝暦期）以降の切石材の特徴である。石面には、鉛が面全体をうっすらと覆うように付着し、周縁部にタタキによって鉛を取り除いているものが最上段の石材にみられる。城内で通常目にする鉛の付着状況は、屋根の軒先から雨垂れが降り注ぐような位置に、鉛滴も付着することから、最上段にみられることは



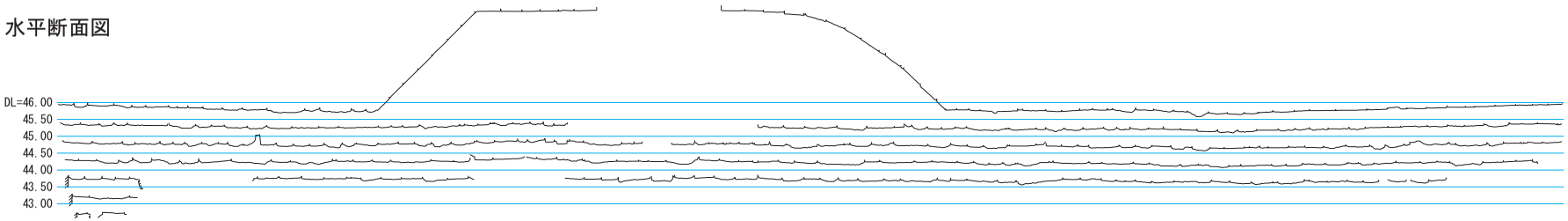


垂直断面図



▸は調査前の地表ライン

水平断面図



第 38 図　2800N　石垣立面・断面図・オルソ写真

S=1/200
0 5m

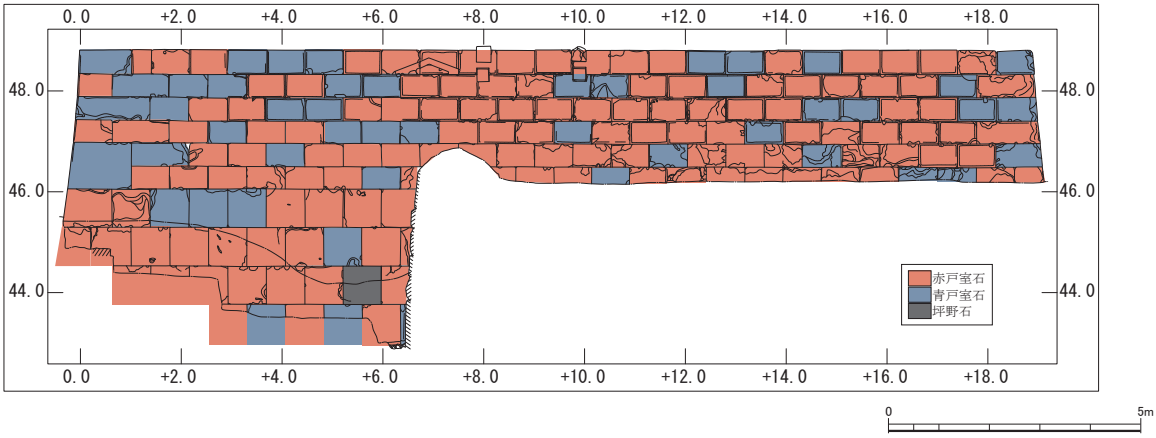
稀である。雛土蔵が火災にあった可能性は、宝暦９（1759）年、文化５（1808）年、明治 14（1881）年の３回あるが、文化の火災後に再建された雛土蔵の屋根は土瓦となっていることから、石垣に付着している鉛は、宝暦もしくは文化の火災の際に付着したと考えられる。

第 39 図　鉛付着状況

切石材については、従来周縁部内の面加工が粗いものが６期（宝暦期）、細かく丁寧なものが７期（文化期）としており、本石垣の石材についても、７期の石加工と考えてきており、現状で変更はない。

ただ近年、６期の切石積石垣に、場の性格による石材加工の精粗がある可能性が指摘されてきていることや、文献史料との比較から改修年代を見直す必要のある石垣もあることから、従来の見解を今一度検討する必要が生じてきており、今後の課題である。

石材については、戸室石（角閃石安山岩）がほとんどを占めるが、坪野石（溶結凝灰岩）が１点認められる。雛土蔵下石垣から数寄屋屋敷（数寄屋屋敷東石垣）へと同じ様式の石積みが連続するが、現状で地表面にわずかに頭をのぞかせる四方積石垣にも坪野石が点在しており、雛土蔵下石垣だけでなく数寄屋屋敷まで一連の石垣として石材を配していると考えられる。雛土蔵下石垣でも坪野石が確認できるのは西面のみである。また、2800N にも３石ではあるが坪野石を使用していることから、石垣材として坪野石を使用するのは、この数寄屋屋敷と玉泉院丸に面した石垣に限定され、戸室石の赤・青とともに、坪野石の黒を配置した、色彩を意識した意匠であったと考えられる。



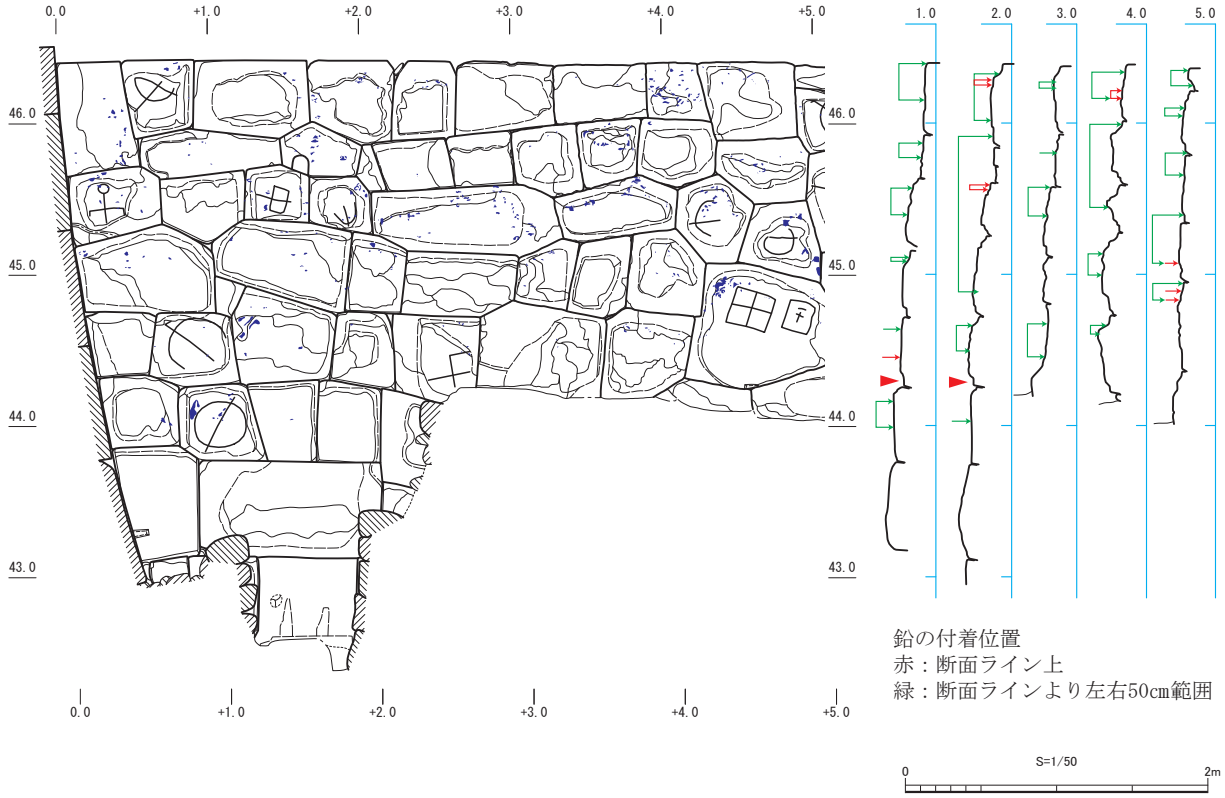
第 40 図　2710W（雛土蔵下）石材の色調

数寄屋屋敷北石垣（2800N）（第 29・48 図）

2800N は、現状の堀底から約 2.5 m、本調査で確認した石積み下端から天端までの高さが 3.56 m、東西方向の長さ 44.7 mを測る。現状は石垣のほぼ中央に切手門があるが、近世段階では、堀の西側にあった。近代以降に数寄屋屋敷内に作られた軍隊の建物の正面に門を移動したとみられる。

石積みは「金場取残積」と呼ばれる切石積石垣である。金場取残積石垣は石材正面の周縁部に３cm 程の一定の幅で平坦にはつり、内側の面はやや粗い加工を残したままで盛り上がったような状態となっており、旧材が再利用されているものが多い。旧材の面はノミ加工で、大型の刻印を持つものが多く、金沢城石垣編年４期（寛永期）の石材を転用したと考えられる。

石材は旧材の正面をそのまま縁取り加工をして使用したものと、旧材の天地を逆転したことで面が下を向くように配置したもの、旧材の側面を正面にし、横長の材として配置したものなど、バラエティ



第 41 図　2800N（数寄屋屋敷北）鉛付着状況

に富んでいる。また、ごく限られてはいるが坪野石も使用している。

安政３年（1856）の地震による石垣破損絵図では、石垣の破損については文化５年に届出はしたものの、未修理のままであったことがわかる（第 43 図－３）。現状の石垣には孕みや目立った破損は見られず、火災の際に塀の屋根に葺かれていたとみられる鉛瓦が被熱溶解したものが付着している。鉛滴は金場取残石材の瘤状の上部に付着しており、付着後に積み直し等で天地が入れ替わったような状況はみられない（第 41 図）。

石垣の上には二重塀が作られていたとされ、宝暦と文化期の両火災後の修補願図ではいずれも瓦塀が焼失したと記載されており（「金沢城之図」（公財）前田育徳会蔵、「加賀国金沢城絵図」石川県立図書館蔵）、文政 13 年（1830）の「御城中壱分碁絵図」では二重塀の表現がみえる。

現状では塀は残っていないが、雛土蔵下石垣の西面には塀の屋根とみられる抉り込みがみられるその痕跡からは、石垣天端から高さ約 2.1 m、柱があったと推定される位置は天端石端部から内側に 22 cmである。土台となる石垣との位置関係から、二重塀の屋根痕跡というよりは、もう少し簡易な塀と考えられるが、いつの段階につけられたものか不明である。

第 42 図　塀の取り付き痕

５．小結

本調査では 17 世紀後半（寛文期）とされてきた 2710W やそれよりも後出すると考えていた 2800N について所見を得たが、ここでは、改めて確認した事項を整理し、まとめとしたい。

まず、2710W に直交する 2800N は、寛永期の石材を転用するなどして、正面を多角形に整形し、その周囲を切り合わせ、中央部を旧材の面のままとする切石積（金場取残積）であり、正方形または長方形の石材で整然とした石積みをする 2710W とは対照的な特徴をもつ。

この対照的な石垣の入角部分の石垣基底部を確認したところ、両石垣は、石垣材を交互に設置していること、また前面の仕上げ土が両石垣面を覆っており、乱されていないこと等から、一体的に構築されたと考えている。

石垣の構築時期については、2800N に用いられている石材が、寛永期にみられる大型刻印が刻まれたものを転用している点からみて、寛永８年（1631）頃まで遡ることは考え難い。2710W にみられる精緻な調整加工や、厳密な規格性は、それまで知られていた五十間長屋下の切石積石垣と比較しても異例である。切石材に関しては根石となる石材の合端や縁辺部に平刃状工具が使用されている点も現状では、寛永期に遡る事例は確認されておらず、寛文期の技法といえよう。

出土遺物で時期を特定できるものは少ないが、石垣基底部を抑える河原石積水路の裏込土からは、17 世紀前半の瓦が出土している。

以上の点から両石垣ともに、当初は　寛永 15 年（1638）の前田利常の書状写「御歴代御書之写二」（金沢市立玉川図書館蔵）の記載から、寛永期に遡る可能性も考えていた。ただ後述するその後の２か年の調査成果を踏まえると、玉泉院丸庭園周辺の切石積石垣導入が金沢城石垣編年４期（寛永期・17 世紀前半）に遡ることはなく、現状は５期（寛文期・17 世紀後半）に構築されたとものと考えられることから、2710W と 2800N についても従来通り 17 世紀後半（寛文期）の構築と考えられる。

両石垣には、数量こそ少ないが、坪野石と呼ばれる黒色の溶結凝灰岩を使用している。城内でもこの石材を石垣に意図的に使用するのは、この数寄屋屋敷と玉泉院丸庭園に面する切石積石垣に限定されており、この石垣のもつ意味が単なる郭の仕切り以外のものであったことが窺える。

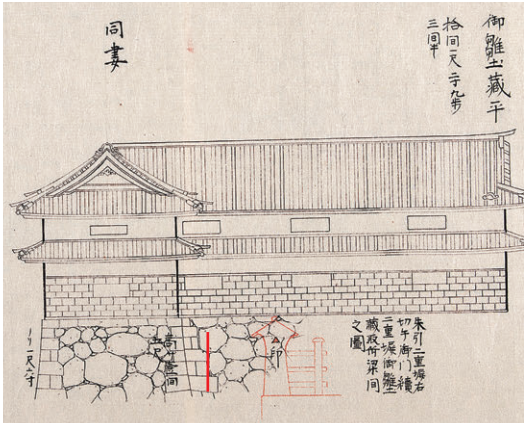
2710W は、最下部の根石から天端に至るまで、厳密な規格性を有した石垣であることが分かっており、入念な設計に裏打ちされた石垣であることが明確になったが、その一方で、一体的に構築されていた 2800N は金場取残積といった石積みや石加工が真逆といってもよい石垣となっている。これは様式の異なる二つの石垣を際立たせるよう、意図されたものと考えられる。

以上のことから、2710W と 2800N は、17 世紀後半に構築されたこと、選択的に石材を使用する点や規格､隣接した石垣が異なった石加工の石材を使用する点など､｢見せる石垣｣として明確な意図をもって造られたということが明らかとなった。

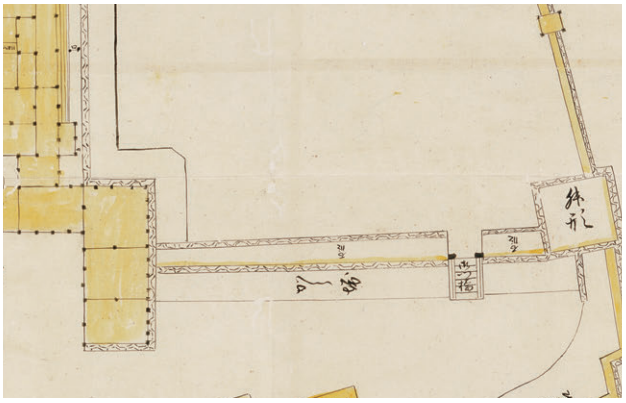
もう一つ今回の調査では、数寄屋屋敷北の東西方向の堀と、数寄屋屋敷東側の堀とが樋門を介して繋がっていた時期があることが明らかとなった。樋門と繋がっていたのは、堀底より一段深くなる石積み護岸をもつ水路であるが、この水路は現状の堀の中で西に折れたりせずに、そのまま北へと延びていく。さらにその先の延長方向や距離については、今回の調査では十分に追及できていないが、暗渠になるなどして、さらに北方向に延びていたもしくは、東におれて二ノ丸内堀へと続いていたと想定している。

石積みの水路は江戸前期の内に埋め立てられ、その後の堀については、先述の通り、雛土蔵下石垣の周辺のみ、緩やかな土羽であった可能性がある。調査では堀底から法面にかけては、北側に向かってレベルが高くなる傾向があるが、トレンチ内では法面の明確な立ち上がりを確認できなかった。現状に近い形状となったのは明治期、法面の盛土層の最下層には、焼土や炭化物、釉薬瓦が、軍隊茶碗と一緒に堆積しており、明治 14 年の二ノ丸御殿焼失以降とみられる。

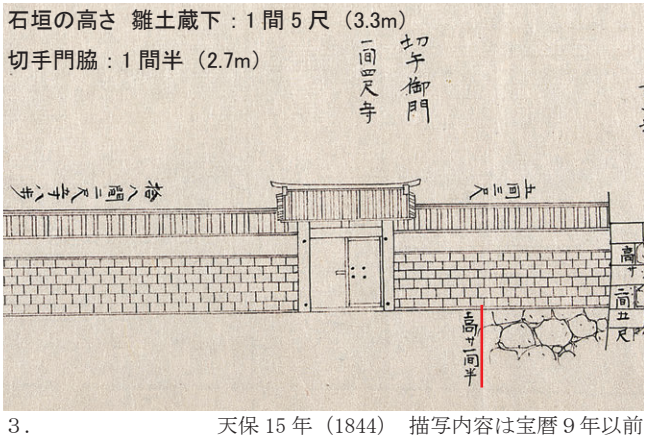
以上、平成 29 年度の調査では、玉泉院丸庭園に面した石垣以外についても、「見せる石垣」としてつくられた石垣があることが明らかとなった。また、これまで城内では検出例がなかった樋門を確認したこと、数寄屋屋敷北の空堀に変遷があったことについても所見を得ることができた。



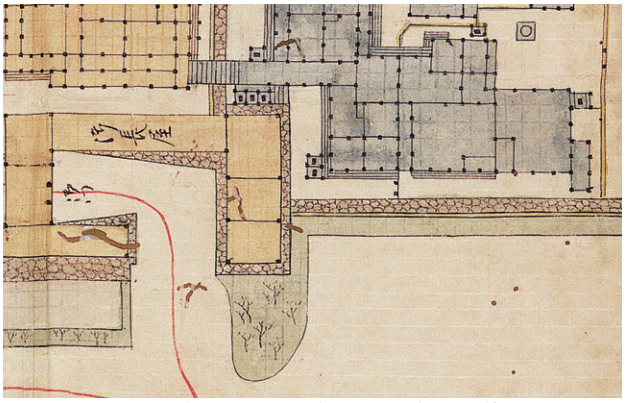
1．　延宝年間（1673-1681）
「金沢御城絵図（北西部）」（公財）前田育徳会蔵



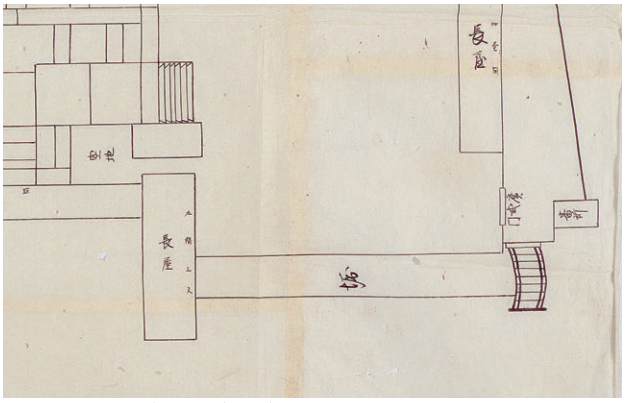
2．　17c 後半頃
「金沢城二之丸座舗之図」金沢市立玉川図書館蔵



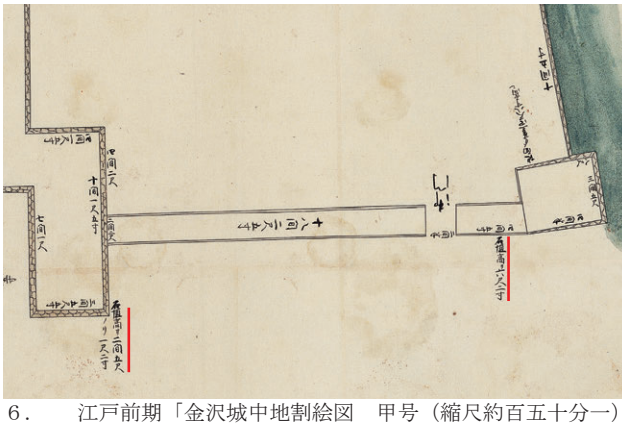
3．　天保 15 年（1844）　描写内容は宝暦 9 年以前
「加州金沢御城来因略記」石川県立図書館蔵



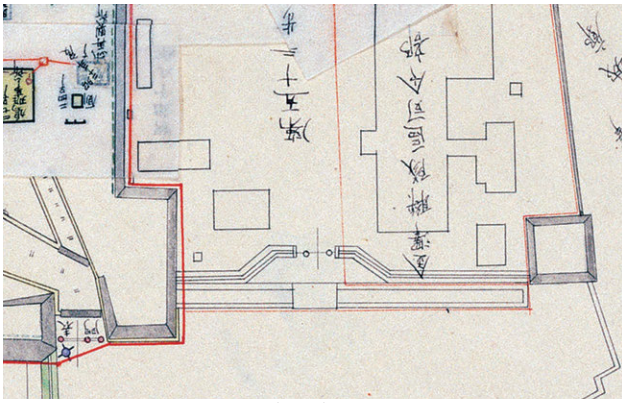
4．　元禄 9 ～ 10 年（1697 ～ 98）の改修後
「金沢城座敷之図二之丸」石川県立歴史博物館蔵



5．　明治 5 年（1872）
「金沢旧城廓総図並建物部分図等」石川県立図書館蔵



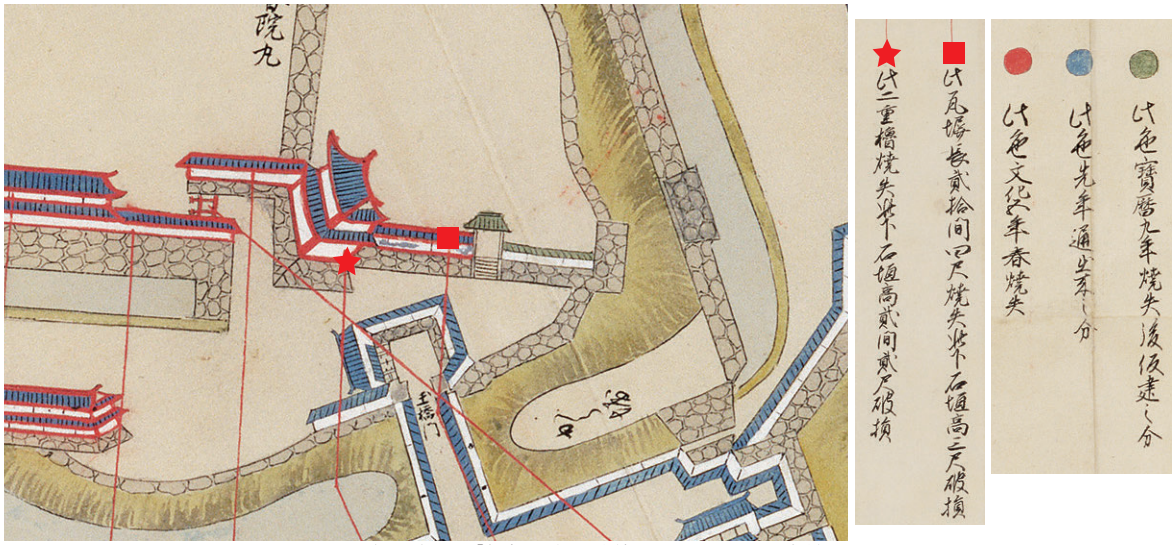
6．　江戸前期「金沢城中地割絵図　甲号（縮尺約百五十分一）
二之御丸・御数寄屋屋敷」金沢市立玉川図書館蔵



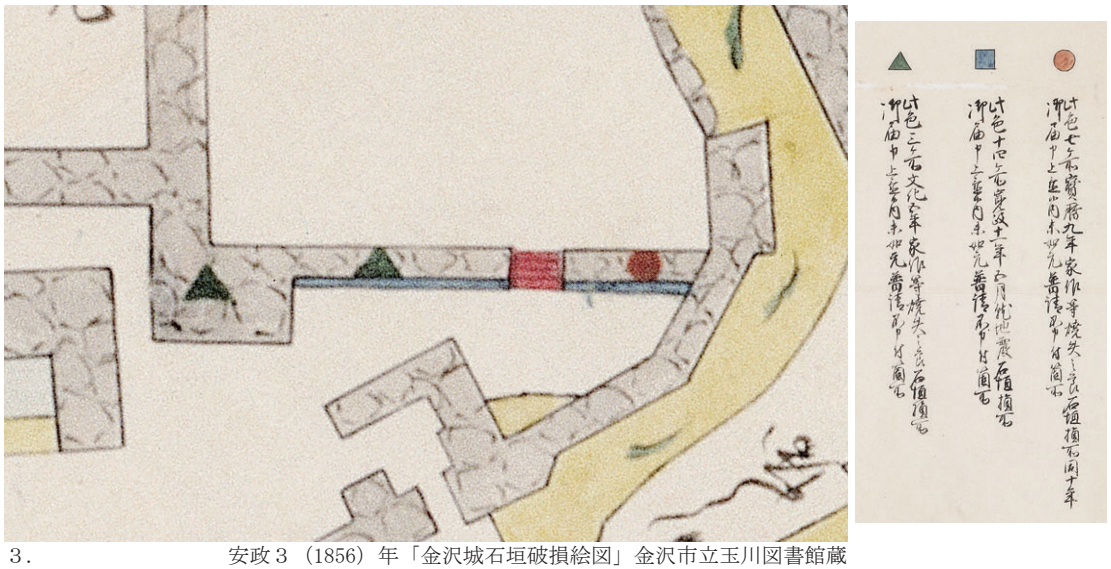
7．　昭和 20 年（1945）
「第五十二師団司令部図」石川県立歴史博物館蔵

第 43 図　数寄屋屋敷北絵図

1．　宝暦 10（1760）年「金沢城之図」（公財）前田育徳会蔵



2．　文化５（1808）年「加賀国金沢城絵図」石川県立図書館蔵



3．　安政３（1856）年「金沢城石垣破損絵図」金沢市立玉川図書館蔵

第 44 図　数寄屋屋敷北周辺の災害被災状況

1．Ⅰ層掘下げ　石組溝（南から）

2．コンクリート側溝・凝灰岩製石組溝検出状況（南西から）

3．法面の礫検出状況（南西から）

4．堀底の礫検出状況（西から）

5．法面石積み（南から）

8．堀底石組溝検出状況（西から）

7．堀底石組溝基盤層（砂層）（北から）

第 45 図　数寄屋屋敷北遺構写真1

1．法面上南北壁

2．法面南北壁

3．堀底　南北壁

4．調査区東西壁

5．東西壁　26層（焼土と瓦を多く含む）

7．入隅部断割り（南西から）

6．入隅部断割り　2710Wと2800N根石前面の整地土検出（北から）

8．2710W根石下部（西から）

第 46 図　数寄屋屋敷北遺構写真2

1．樋門全景（北から）

2．樋門掘り下げ　遺物検出状況

3．樋門内部の堆積土（北から）

4．樋門　木組（北から）

5．水路石積基底部（西から）

第 47 図　数寄屋屋敷北遺構写真3

1．水路検出状況（上から）

2．堀底部分全景（南から）

第 48 図　数寄屋屋敷北遺構写真4

第３節　玉泉院丸南東調査区

１．調査区の位置と調査の概要（第 49・50 図）

本調査区は、玉泉院丸の南東側に位置する。調査区周辺は、ボーリングデータにより、近世前期の絵図では、前面に泉水の南端が延伸しており、江戸後期には緑地として描かれている。現状は発掘調査や江戸後期の絵図をもとに玉泉院丸庭園が復元されているが、本来の遺構面は現状より約２ｍ低く、かさ上げした状態での整備のため、周辺の石垣群を含めた景観は往時とは異なっている。石垣背後には明治40年頃につくられた、いもり坂が南北方向に走っており、現状の石垣天端は、いもり坂造成時に坂の勾配にあわせて斜めに削られたものとみられる。

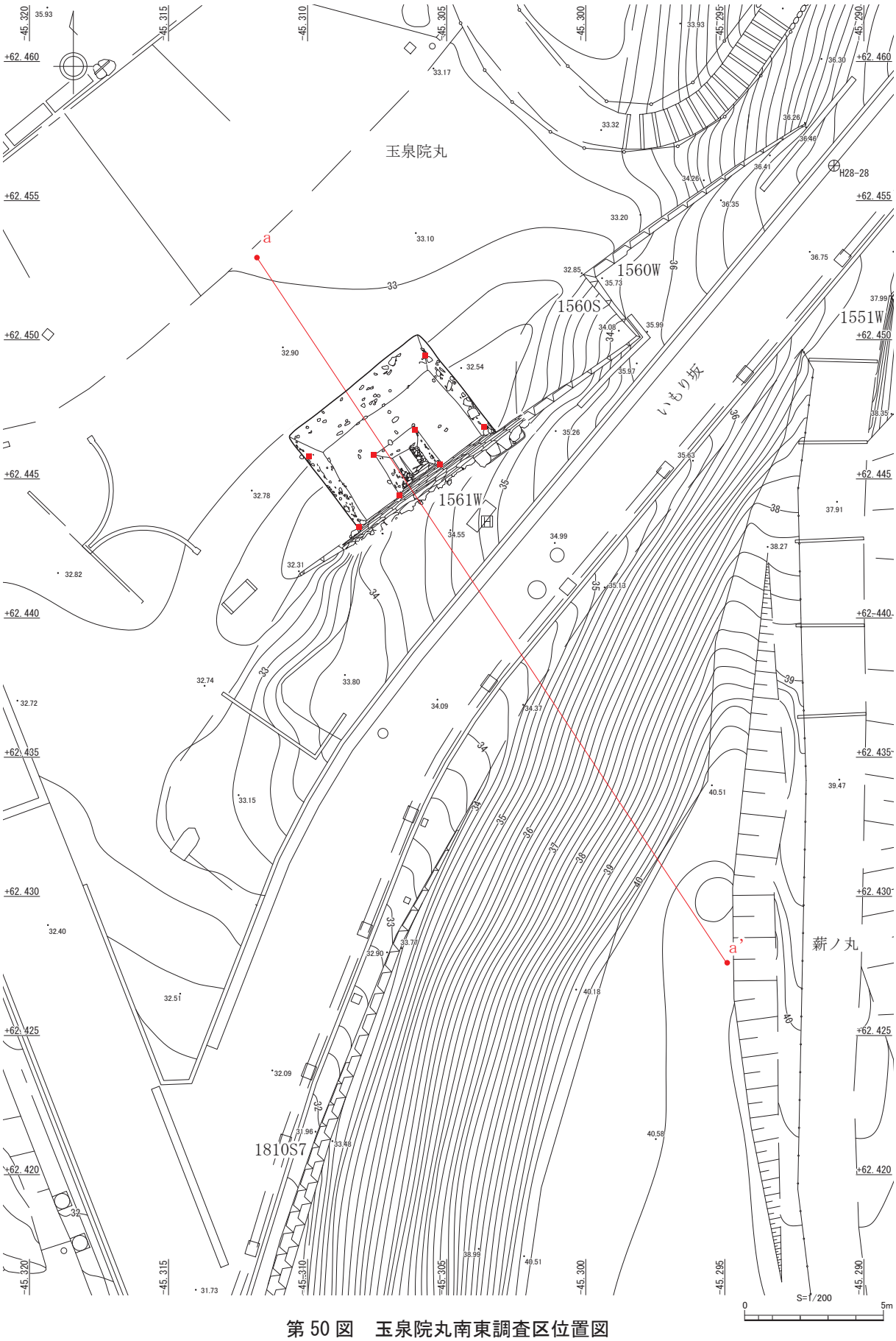
石垣は玉泉院丸東から南側に展開する石垣群の一角にあたり（石垣 ID 1561W）、従来、17世紀後半の様式として評価してきたが、埋没部分の様相についても同様なのか、それとも１段階古い様相（玉泉院丸庭園作庭時：17世紀前半）をとどめるのかを確認するため、発掘調査を行った。調査区は当初２ｍ四方としていたが、想定していたよりも石垣の埋没部分が深くなったため、トレンチの深さに応じて、随時調査区も拡張し、段掘りをしながら作業を進めていった。

調査区の埋め戻しは、発掘停止面を明示するため、不織布を敷いた後、黄褐色砂を5㎝程の厚さに入れた上で、掘削による発生土を使用して埋め戻しを行った。

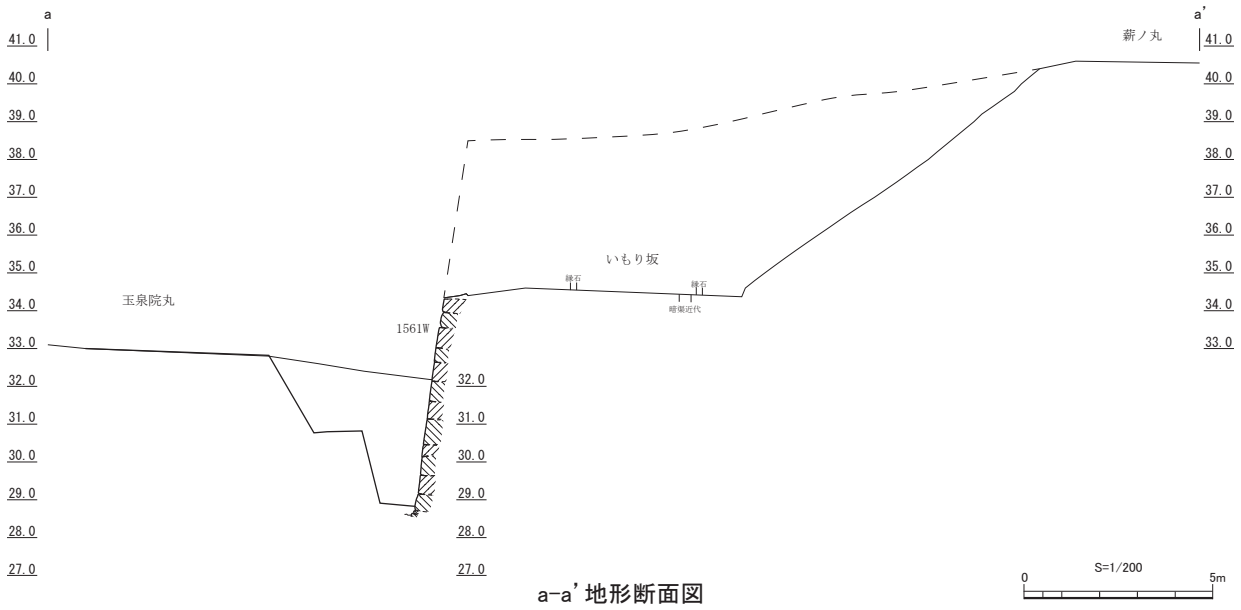
２．基本層序

本調査区の層序は、Ⅰ～Ⅳ層に大別した。Ⅰ層としたのは近代以降の造成土の層で、コンクリートや人頭大の礫を含み、調査区の北西側（庭園側）から土が盛られた堆積状況であった。Ⅱ～Ⅳ層は、近世段階と考えており、Ⅱ層は近世後期、Ⅲ層は17世紀後半の玉泉院丸庭園の再整備に伴う盛土層、Ⅳ層は17世紀前半の作庭当初の盛土層とした。時期を特定できるような出土遺物は無く、盛土と石垣の様相を対応させながら想定した。

第 49 図　玉泉院丸南東調査地点全景（調査前）



第 50 図　玉泉院丸南東調査区位置図

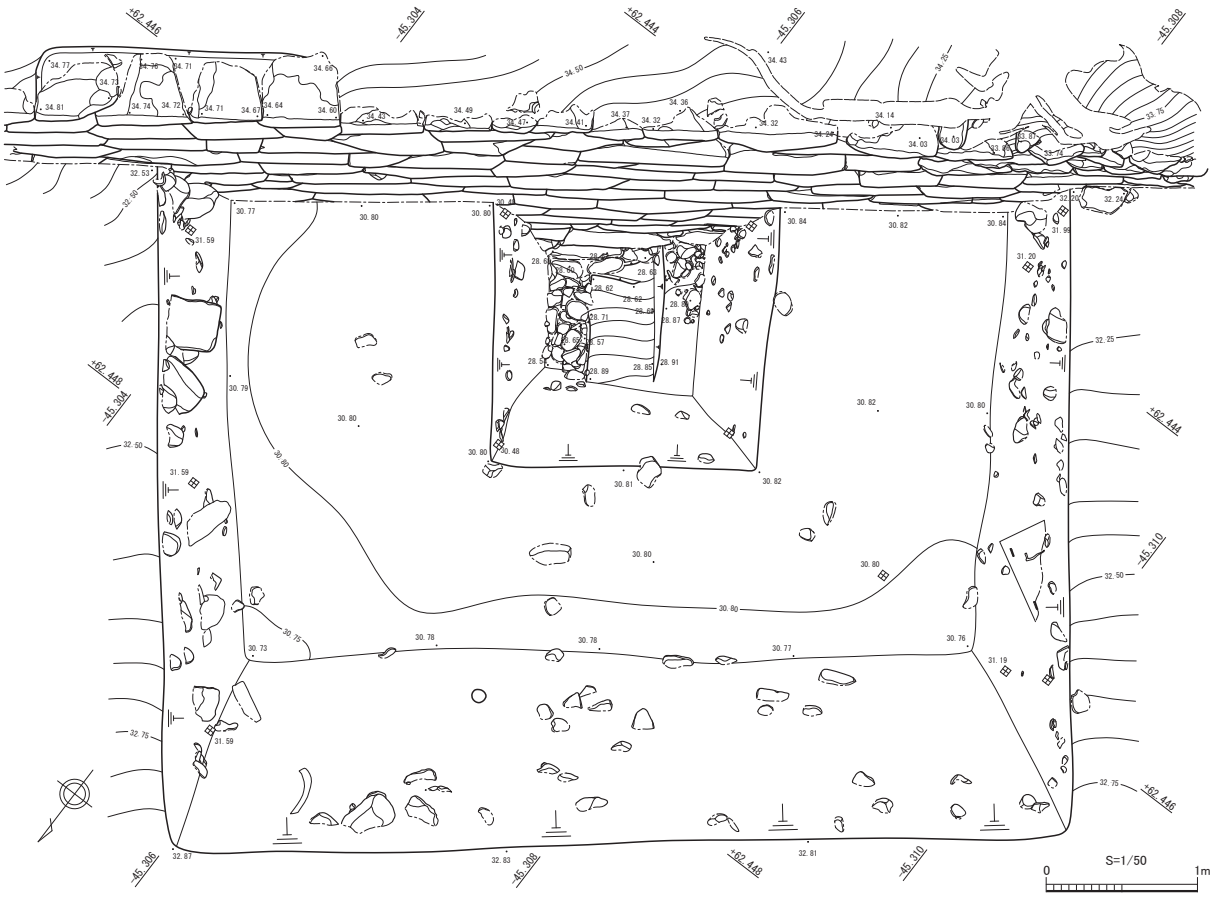


a-a' 地形断面図

第 51 図　玉泉院丸南東石垣周辺地形断面図

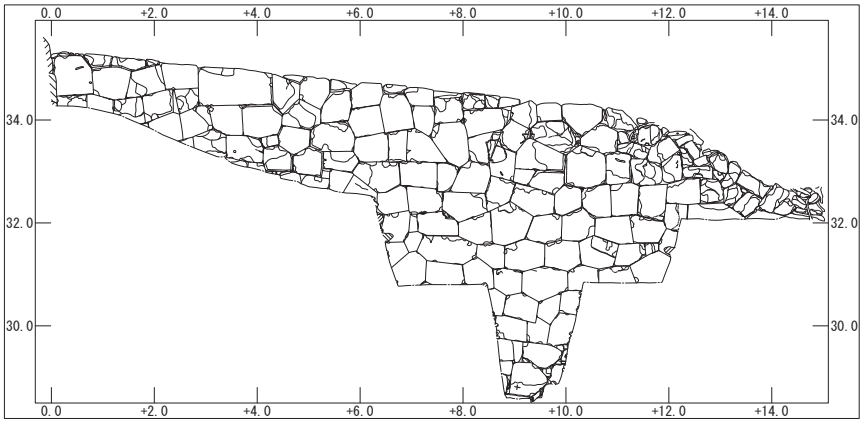
（人がいるのがいもり坂、その奥は薪ノ丸の石垣群、上段は本丸附段の三十間長屋、調査区は写真右側）

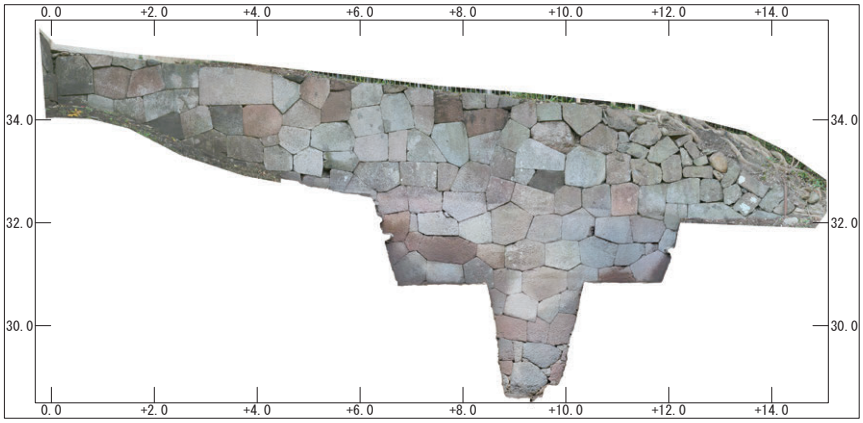
第 52 図　玉泉院丸南東調査区周辺の石垣



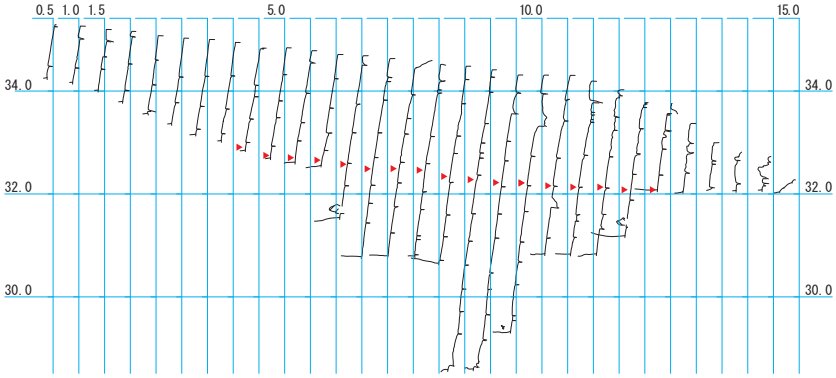
第 53 図　調査区平面図・オルソ写真

立面図

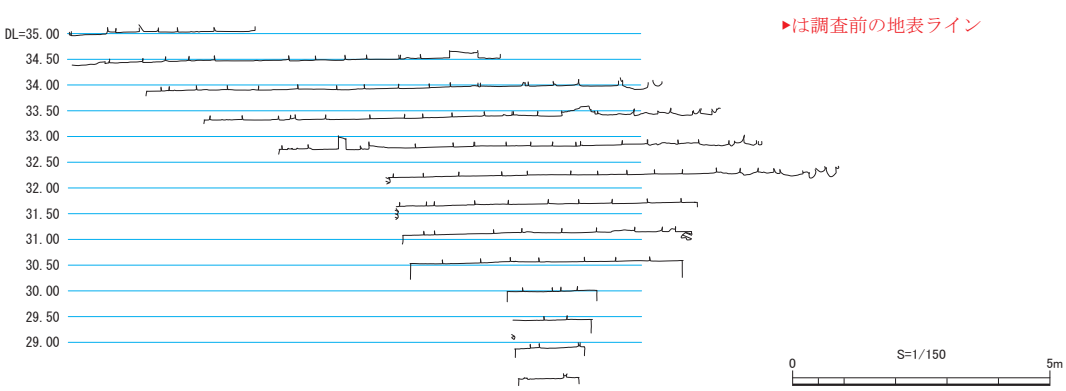




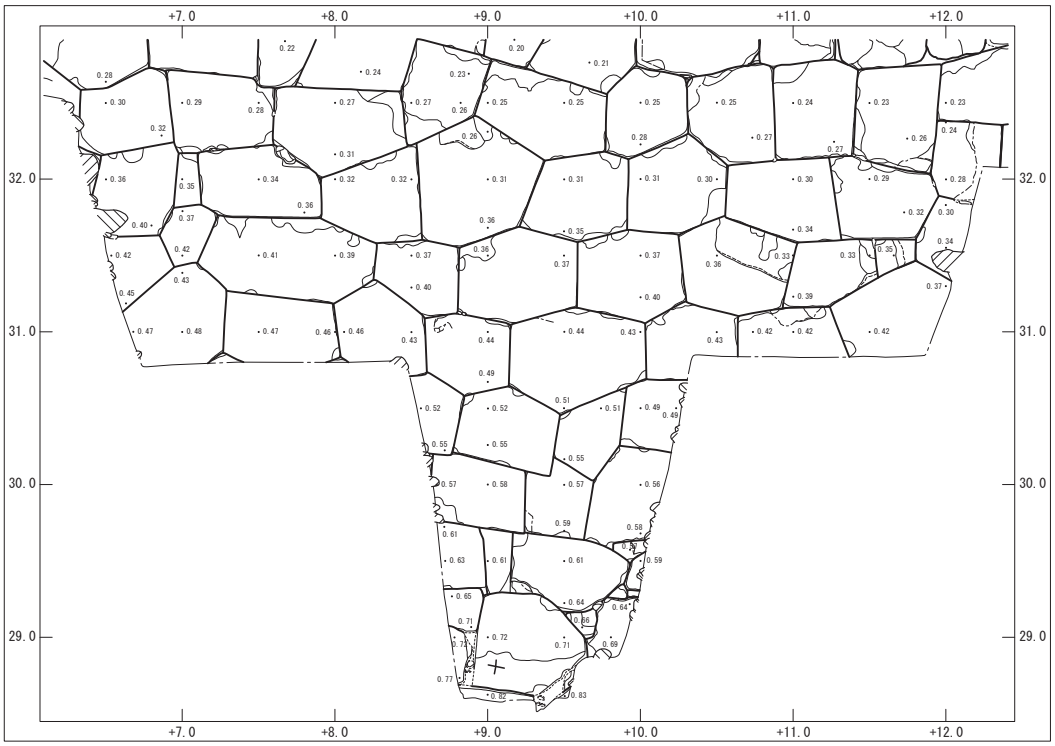
垂直断面図

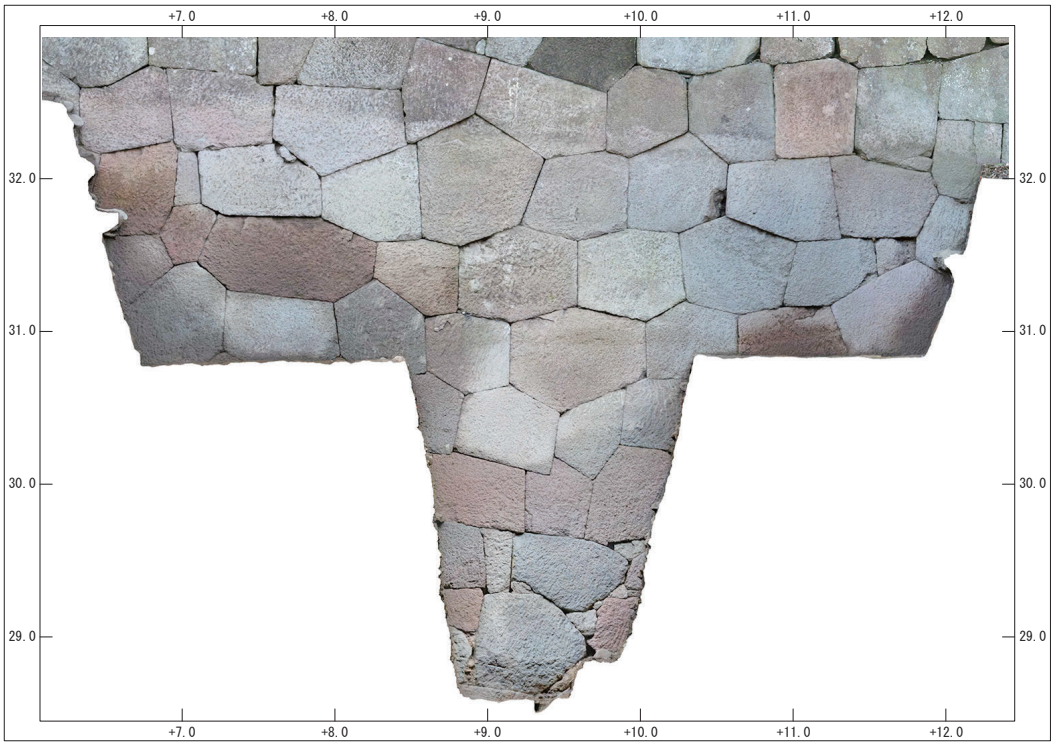


水平断面図



第 54 図　1561W　石垣立面・断面図・オルソ写真





S=1/50
0 1m

第 55 図　1561W　石垣（調査区内）立面図・オルソ写真

３．遺構

調査区は玉泉院丸庭園の南東にある薪ノ丸からの斜面地を画する石垣の根元を掘り下げた。石積みは現状で高さ約 2.2 ｍであったが、現地表より下に約 3.8 ｍまで続いており、６ｍを超える高さの石垣であることが判明した。先述の通り石垣の天端部分は、明治 40 年頃のいもり坂造成の際に、坂の勾配に合わせて斜めに削平されており、撤去部分の石積みを含めると、本来の石垣高は現況の３倍以上（約 7.5 ｍ）と推測できる。「金沢城中御石垣間数附絵図」（文化２年（1805）、金沢市立玉川図書館蔵）では「高二間二尺」（4.24 ｍ）となっており、想定した石垣天端からだと、ちょうど現地表面辺りで江戸後期の高さと大きく変わらないことになる。

トレンチは、表土から 1.5 ｍまでは６ｍ四方の調査区で掘り下げた。このレベルまでは、全てⅠ層とした近代以降の造成土である（第 57・58 図）。南壁１・２層は公園整備時の造成土、３層上面は県立体育館があった時期の地表面と考えられる。北壁１～４層が公園整備時の造成土と考えられる。陶磁器片や燻瓦などとともにガラスやコンクリートが出土した。

Ⅱ層はトレンチ土層の７～ 31 層が該当し、黒褐色粘質土を主体とした盛土層で、北から南側にむかってわずかに傾斜している。出土遺物は磁器片が１点のみで、時期は不明だが、Ⅰ層と比べて堆積土の土質や出土遺物の在り方が大きく変化することからも近世後期から明治期のいもり坂造成頃までと推測している。

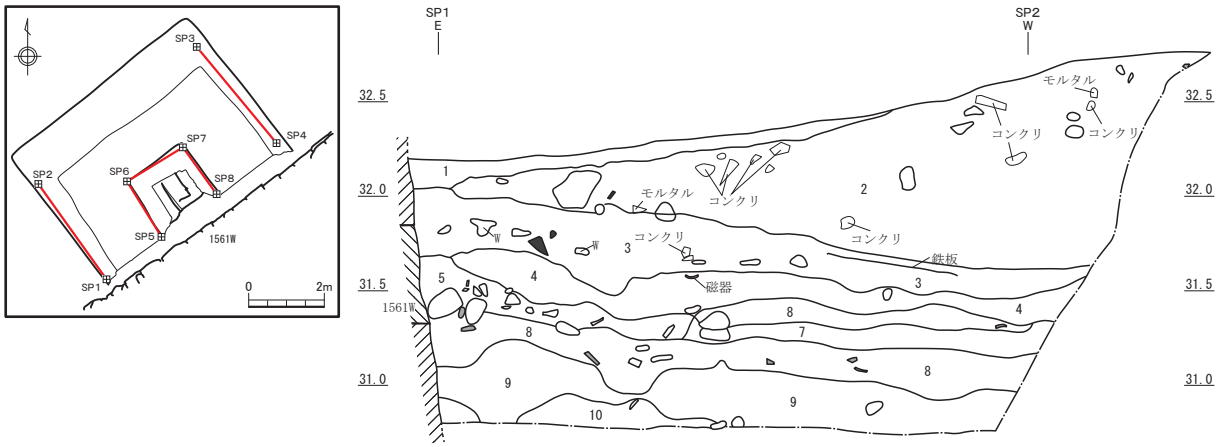
石垣（ID1561W）は、不定形な五～七角形の切石材を乱積みした、「乱切合せ」とも呼ばれ金沢城石垣においては寛文期の切石積石垣の典型例の一つである。現状の石垣は、本来の天端が削平されており、残存部分の最高所は北側に続く 1560S との入隅部で標高 35.3 ｍである。調査区内の石垣残存部分の天端は標高 34.5 ｍ前後で、現地表の高さが 32.5 ｍ前後なことから、地上部に見えるのは高さ約２ｍの石垣となる。調査では標高 28.6 ｍまで掘り下げており、約４ｍ下まで石垣は続いていた。トレンチ内で確認した最下段は根石とみられる石材の上部を確認したにとどまっているため、根石下端部まではもう少し下がることとなるが、今回の調査では、石積みの変化を確認することを目的としていることから、これ以上は掘り下げなかった。

石材は標高 29.6 ｍまでは、地上部からの加工・調整は変化せず、それ以下で切石材から粗加工石材に変化している。この粗加工石材の石積みは少なくとも２段続いており、面加工が丁寧に行われていることや、詰石が隙間に合わせて精加工された板状を呈する。金沢城石垣編年における５期石垣（寛文期）に該当し、その丁寧さからも地表面に露出していたと考えられる。

さらにその下、標高 29 ｍを境にもう一つ石垣石が変化する。上２段の粗加工石積と比べやや面加工が粗くなっており、詰石も精加工した板状詰石から、円礫となるなど、上段とは様相が異なっている。この石積は、トレンチ内では１段分確認したが、その下に続く段の石材が一部見えた状態で、前面は栗石の前込めで覆われていることから根石と考えられる。

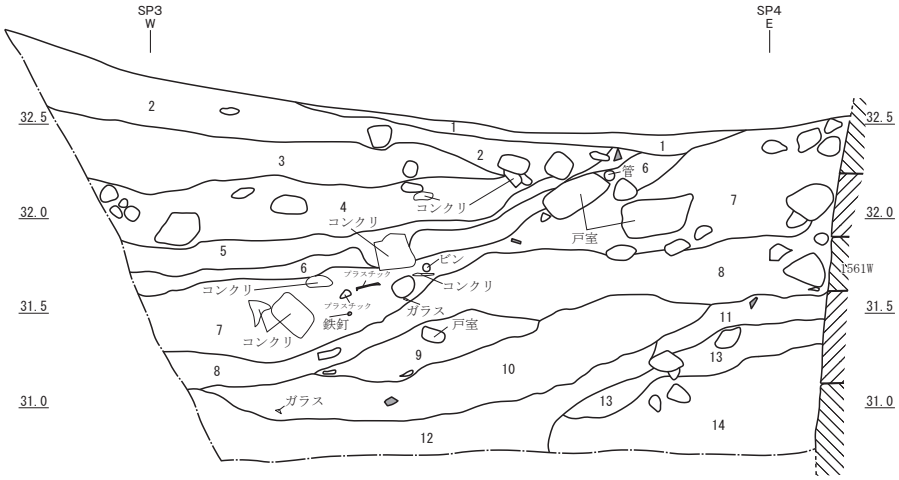
石積みの変化と対応して、トレンチ内の石垣前面の盛土の土層堆積状況も変化しており、標高 29.8 ｍを最高所とした石垣前面の盛土が確認されている。盛土上面は黄橙色の粘土が広がっており、石垣側から、庭園側に向かって胴が張ったように下がっていく。トレンチの東西両断面でも同様の粘土が薄く張り付くように盛土層を覆っている状況が確認でき、亀腹状を呈した盛土であったとみられる。この盛土層は 17 世紀後半の庭園再整備に

第 56 図　盛土上面の黄橙色粘土層（南西から）



1　10YR3/3　暗褐色土（砂質土、径 0.5 ～ 2 cm の礫を少量含む）
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土（砂質土、径 0.5 ～ 1 cm・径 2 ～ 3 cm・径 4 ～ 7 cm・径 10 ～ 14 cmの礫を少量含む、径 5 ～ 9 cm・径 11 ～ 16 cmのコンクリートが入る）
3　10YR2/2　黒褐色土（粘質土、ややしまりあり、10YR5/6 黄褐色の強粘土が部分的に層状に入る、径 0.5 ～ 2 cm・径 4 ～ 7 cm・径 9 ～ 11 cmの礫を少量含む、径 0.5 cm大のクサリ礫含む、径 4 cm大のコンクリート少量入る）
4　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、10YR5/6 黄褐色ブロックを多く含む、径 0.5 ～ 1 cm大のクサリ礫を含む、径 1 ～ 3 cm・径 5 ～ 7 cmの礫を少量含む）
5　10YR3/2　黒褐色土（径 2 ～ 4 cm・径 7 ～ 9 cmの礫を少量含む、戸室剥片を含む）
6　10YR2/1　黒色土（シルト質土、しまりが弱い、炭化物を層状にまんべんなく含む、径 2 ～ 4 cmの礫を少量含む）
7　10YR4/4　褐色土（粘質土、ややしまりあり、径 0.1 ～ 0.5 cm・径 2 ～ 3 cm・径 4 cm大の礫を少量含む）
8　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、しまりが弱い、黄褐色粘土粒含む、戸室剥片含む、径 1 ～ 3 cm・径 4 ～ 6 cm・径 12 cm大の礫を少量含む）
9　10YR5/6　黄褐色土（粘性やや強い、ややしまりあり、10YR3/2 黒褐色ブロックをまばらに含む、径 1 ～ 3 cm・径 4 ～ 6 cm・径 8 ～ 10 cmの礫を少量含む）
10　10YR4/3　にぶい黄褐色土（粘性強い、しまり弱い、径 0.5 ～ 2 cmの礫を少量含む、10YR5/6 黄褐色土（上の 9 層か）が混じっている）

調査区南壁土層断面図

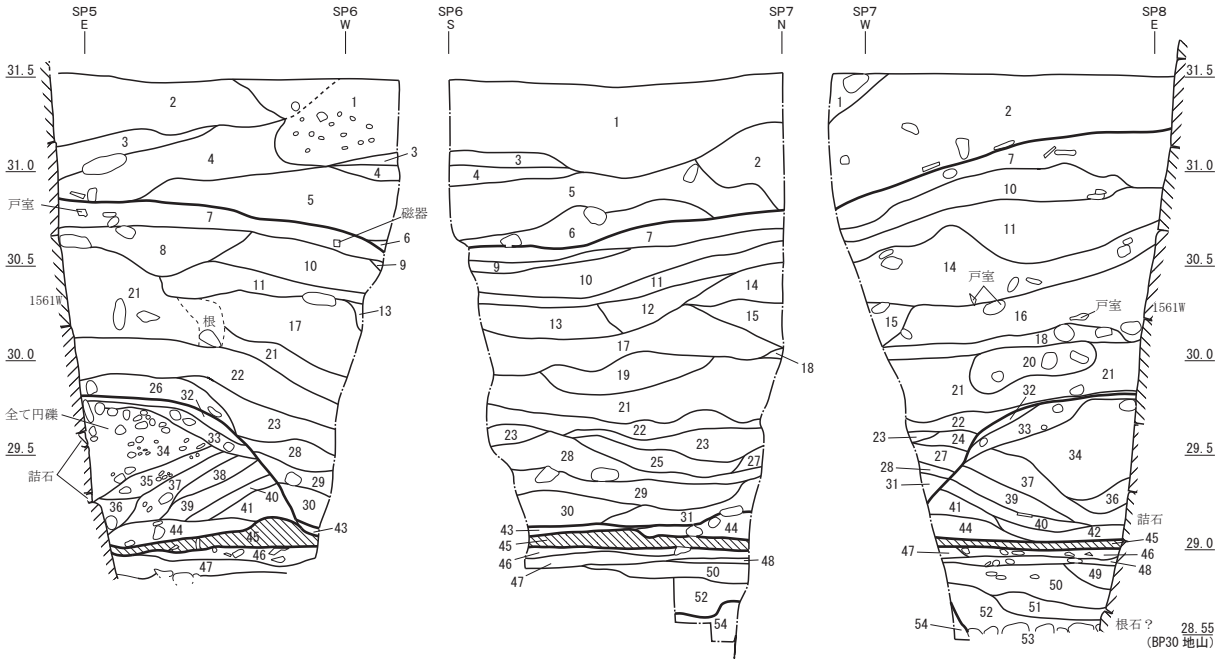


1　10YR3/2　黒褐色土（砂質土、径 1 ～ 4 cmの礫を少量含む）南壁 1 層と対応
2　10YR3/3　暗褐色土（砂質土、径 1 ～ 4 cmの礫を含む、径 5 ～ 6 cmの扁平礫を少量含む、径 13 ～ 17 cmの礫を少量含む）
3　10YR3/3　暗褐色土（砂質土、ややしまり弱い、径 1 ～ 3 cmの礫を多量に含む、径 4 ～ 7 cmの礫を少量含む、コンクリート片含む、径 10 cmの円礫少量入る）南壁 2 層と対応
4　10YR4/3　にぶい黄褐色土（砂質土、径 1 ～ 4 cmの円礫を非常に多量に含む、径 6 ～ 9 cmの礫を含む、径 12 ～ 21 cmの礫を少量含む、径 9 ～ 12 cmのコンクリートが入る）南壁 2 層と対応
5　10YR2/2　黒褐色土（粘質土、径 0.5 ～ 2 cmの円礫を少量含む、径 2 ～ 4 cmの礫少量含む、10YR5/6 黄褐色強粘質土が所々に入る）南壁 3 層と対応
6　10YR5/6　黄褐色土（強粘質土、南壁 3 層中にサンドイッチ状に入っていた粘土層が厚くなって単独の層状に堆積、ブロック状に崩れ易い）南壁 3 層と対応
7　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、コンクリート片が多量に入る、径 0.5 ～ 1 cmの円礫を少量含む、径 2 ～ 5 cmの扁平礫を少量含む、径 10 ～ 14 cm・18 ～ 22 cmの礫を少量含む）
8　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、径 0.5 ～ 3 cmの円礫少量含む、径 4 ～ 8 cmの扁平礫を少量含む、径 8 ～ 13 cmの礫少量含む、径 21 cm大の礫少量入る）
9　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、ややしまり弱い、10YR5/6 黄褐色土を粒状に含む、径 0.5 ～ 2 cmの円礫を少量含む、径 2 ～ 4 cm・径 7 ～ 12 cmの礫を含む）
10　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、径 1 cm大のクサリ礫を含む、径 0.5 ～ 2 cmの円礫を少量含む、径 2 ～ 4 cm・径 5 ～ 6 cmの礫を少量含む）
11　10YR4/3　にぶい黄褐色土（粘質土、10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック（地山由来の土か）がまんべんなく入る、径 2 ～ 4 cmの扁平礫を少量含む、径 0.5 ～ 2 cmの礫少量含む）
12　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、径 1 ～ 2 cm大のクサリ礫を含む、径 0.5 ～ 1 cm・径 3 ～ 4 cm・径 7 ～ 8 cmの礫を少量含む）
13　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、径 0.5 ～ 2 cm・径 4 ～ 7 cmの礫を含む、径 17 ～ 20 cmの礫を少量含む）
14　10YR5/4　にぶい黄褐色土（粘質土、径 0.5 ～ 2 cm・径 4 ～ 7 cm・径 9 ～ 10 cmの礫を少量含む、10YR3/2 黒褐色ブロックがまんべんなく入る）

調査区北壁土層断面図

S=1/40
0　1m

第 57 図　玉泉院丸南東　土層断面図 1



トレンチ南壁土層断面図　　トレンチ西壁土層断面図　　トレンチ北壁土層断面図

1　10YR3/1　黒褐色土（粘質土、径２～５cm礫多く含む、径 20 cmの礫少量含む）
2　10YR3/2　黒褐色土（弱粘質土、黄褐色粘土粒を含む、砂を含む、径３cm大の礫を少量含む、径 10 ～ 15 cm大の礫を少量含む）
3　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、黄褐色粘土ブロックを多く含む）
4　10YR3/2　黒褐色土（弱粘質土、黄褐色粘土粒を含む、径３cm大の礫を含む）
5　10YR3/2　黒褐色土(粘質土､黄褐色粘土粒と Fe を含む､砂礫をごく少量を含む)
6　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、砂礫を少量含む）
7　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、Fe を含む、砂礫を含む、戸室チップを少量含む、いもり坂造成頃までの旧表土か）
8　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、黄褐色粘土粒を少量含む）
9　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、しまりあり、黄褐色粘土を層状に含む）
10　10YR2/2　黒褐色土（粘質土、ややしまりあり）
11　10YR3/3　暗褐色土（黄褐色粘土ブロックを多く含む、黒色土のブロックを局所的に含む）
12　13 層に黄褐色粘土粒多く含む
13　10YR3/2　黒褐色土（粘質土、しまりあり、炭化物をごく少量含む）
14　10YR4/3　にぶい黄褐色土（粘質土、しまりあり、黄褐色のクサリ礫を含む、径５～ 10 cmの礫を含む、戸室石剥片含む）
15　10YR4/4　褐色土（粘質土、径５～７cmの円礫を多く含む、灰色粘土ブロックを含む）
16　10YR4/3　褐色土（しまりが弱い、戸室石剥片を含む、径 0.5 ～１cm大の小礫を多く含む）
17　10YR4/4　褐色土（粘質土、黄褐色粘土粒を多く含む、ややシルト質）
18　10YR4/2　灰黄褐色土（粘質土、しまりあり、径５～ 10 cm大の礫を含む）
19　10YR4/3　にぶい黄褐色土（粘質土､やや偏平な礫を含む､黄褐色粘土粒を含む）
20　10YR2/1　黒色土（粘質土、しまりあり、炭化物を含む、径 0.5 ～１cm大の黄褐色粘土粒を含む、径 10 ～ 15 cm大の礫を含む）
21　10YR4/4　褐色土（粘質土、しまりあり、黄褐色粘土粒を含む、砂礫を含む、径 10 cm大の礫を少量含む）
22　10YR1.7/1　黒色土（非常にしまる、径 0.2 ～ 0.5 cm大の黄褐色粘土粒をまばらに含む）
23　10YR4/3　にぶい黄褐色土（しまりあり、明黄褐色粘土のブロックを含む、同じ粘土粒も多く含む）
24　10YR3/2　黒褐色土（しまりあり、明黄褐粘土粒を少量含む）
25　10YR1.7/1　黒色土（しまりあり、黄褐色粘土粒を少量含む）
26　10YR2/2　黒褐色土（粘質土、しまりあり、黄褐色粘土粒を少量含む）
27　10YR2/2　黒褐色土（シルト質、しまりあり、明黄褐色粘土粒を多く含む）
28　10YR3/4　暗褐色土（粘質土、径 10 cm大の礫をまばらに含む、明黄褐色粘土粒を多く含む）
29　10YR2/2　黒褐色土（粘質土、しまりあり、黄褐粘土粒多）
30　10YR3/4　暗褐色土（粘質土、しまりあり、径１cm大の円礫を含む、黒褐色土をまばらに含む）
31　10YR2/2　黒褐色土（シルト質、しまりあり、明黄褐色粘土粒を少量、一部同粘土を層状に含む）
32　10YR5/8　黄褐色土（粘質土、しまりあり、同色の砂を含む、灰白色粘土粒を少量含む、黄橙色シルト質土粒を少量含む）**［化粧土］**
33　10YR2/1　黒色土（しまりあり、明黄褐色粘土粒を含む、径３～５cm大の礫を含む）
34　10YR5/6　黄褐色土（粘質土、黒色土粒が同比で含まれる、径 0.5 ～径１・３cm大の円礫をごく多量（こちらが主体？）含む）
35　10YR5/6　黄褐色土（しまり弱い、径１cm大の円礫多）
36　10YR2/1　黒色土（明黄褐色粘土粒を含む）
37　10YR2/2　黒褐色土（しまり弱い、黄褐色土粒をほぼ同比含む、径１～２cmの円礫を多く含む）
38　10YR2/2　黒褐色土（粘質土、しまり弱い、黄褐色粘土粒を含む）
39　10YR5/6　黄褐色土（しまり弱い、黒褐色土粒を多く含む、径 0.5 ～ 1.5 cmの円礫を含む）
40　10YR2/3　黒褐色土（黄褐色土細粒・砂を多く含む）
41　10YR3/2　黒褐色土（しまりあり、黄褐色土粒を含む、白色粘土粒を少量含む）
42　10YR2/2　黒褐色土（しまりあり、黄褐色土ブロックを含む）
43　10YR5/8　黄褐色土（粘質土、黒褐色土を薄く層状に含む）
44　10YR2/2　黒褐色土（しまりあり、黄褐色土ブロックを含む、黄褐色クサリ礫を含む）
45　10YR3/4　暗褐色土（粘質土、同色の細砂～シルト質土が層状に入る）**［池底の水成堆積層］**
46　戸室チップ層（径５cm大・径１～２cm大のチップを主体、石粉状のものも多く入る、しめかためられて非常にかたくしまる）
47　10YR5/8　黄褐色土（粘質土、しまりあり、同色の砂を含む、戸室チップを少量含む）
48　10YR5/8　黄褐色土（粘質土、しまりあり、黄白色粘土粒を多く含む、部分的にブロック状に入る）
49　10YR5/2　灰黄褐色土（しまり弱い、砂礫を多く含む、白色粘土粒を少量含む）
50　10YR5/4　にぶい黄褐色土（砂礫土、しまり弱い、粗砂が主体、径５cm大の偏平礫を少量含む、クサリ礫が多く地山由来）
51　10YR4/4　褐色土（砂礫土、しまりやや弱い、クサリ礫を含む、同色の粘質土を含む、直上に戸室チップがうすく堆積）
52　10YR5/6　黄褐色土（粘質土、しまりあり、同色の粗砂を含む）
53　10YR3/4　暗褐色土（粘質土、石垣根固栗石の隙間下半部に堆積（上部は 52 層に入り込む）［水成堆積］
54　10YR8/2　灰白色粘土（現状より -30 cmまでピンポールを刺しても手応え変わらず、レベル的にも 52 層の掘り込みから見ても地山の可能性高）［地山］

※Ⅰ層：1・2 現代～近代層
Ⅱ層：7・10・11・14 ～ 18・20 ～ 24・27・28・31　近世（後期）の盛土層
Ⅲ層：32 ～ 34・36・37・39 ～ 42・44 17 世紀後半の庭園再整備に伴う盛土層
Ⅳ層：45 ～ 53 17 世紀前半の作庭当初の整地層

S=1/40
0　1m

第 58 図　玉泉院丸南東　土層断面図２

伴うものと考え、Ⅲ層とした。

黄橙色粘土層は厚みが薄いが、層の上面にはごくわずかながら黒色の旧表土層が覆っている状況が確認できた。粘土層下位の盛土層は堆積方向が庭園側から石垣側へと低くなっており、石垣上方からの流土等の自然堆積層ではなく、意図的に盛土しているものとみられる。盛土層のなかには、直径が２～３㎝の円礫が特定の層にまとまって含まれているため、地山に含まれていたというよりも、庭園で使用されていた円礫がまとまって混入した、又は意図的に入れられた可能性がある。

Ⅲ層よりも下層の、標高約 29 ｍのレベルで、細砂が互層状に入る水成堆積層がⅢ層の盛土範囲を越えて広がっていることから、盛土以前は石垣前面まで水に浸かるような状況であったと考えられる。水成堆積土の下は、非常に硬くしまった戸室石のチップ層（46 層）と、黄褐色粘質土層（47・48 層）が水平かつ均一に広がる。このしまりのある土は、水の浸透を防ぐために施工されたと推測している。これより下の層も硬く締まっているが、一層ごとの単位は大きく、石垣側に向かって土を盛っているような堆積状況にみえる。水成堆積層以下はⅣ層としたが、この層に石垣前込めの栗石層は覆われており、トレンチの西端でこの栗石層の掘方を検出した。Ⅳ層上面を境として石垣の勾配が、Ⅳ層以下は 76°、Ⅳ層より上方は約 82°と、やや急角度に変化している。勾配が変化する境目は粗加工石積部分だが、上部を切石積へと改修する際に勾配を立てるために、一旦部分的に解体、据え直しを行った可能性がある。粗加工石積の勾配のままだと、石材上面の角度も石尻にむかって下がっているため、そのまま上に切石材を設置すると、上下の石材の石尻付近に大きな隙間が生じる恐れがある。それを解消するためにも石尻を上げるなどして調整したたとも推測できる。ただし、最終的にⅢ層によって覆われてしまうことから、切石材に交換まではしなかったとみられる。

平成 22 年度の玉泉院丸庭園確認調査の際に併せて実施されたボーリング調査のうち、一つがちょうど調査区の西端にあたることから、今回の調査状況と比較して改めてコアを確認してみた。黒色土と黄褐色土が混ざった整地土直下で、地山としていた 28.94 ｍ以下の 40 ㎝程度の厚みのある層に類似しており、今回のトレンチで確認した 47・48 層と対応し、盛土であった可能性が高いことがわかった。

第 59 図　46 層検出状況

３㎝以上

３㎝以下

第 60 図　46 層戸室石剥片

４．小結

今回の調査では、玉泉院丸庭園の作庭初期とみられる石垣を確認した。石垣は地上部及び埋没部の大部分が切石積石垣であったが、基部の３段分は粗加工石積にであった。この石積みは、切石積石垣に改変された際に、若干の手が入っているが、石材加工や積み方の特徴から、上部の切石積（５期）に先行する時期（４期）に位置づけられ、これまで評価が定まっていなかった作庭初期（寛永11年1634、加賀藩三代・前田利常による）の石垣の一部と考えられる。

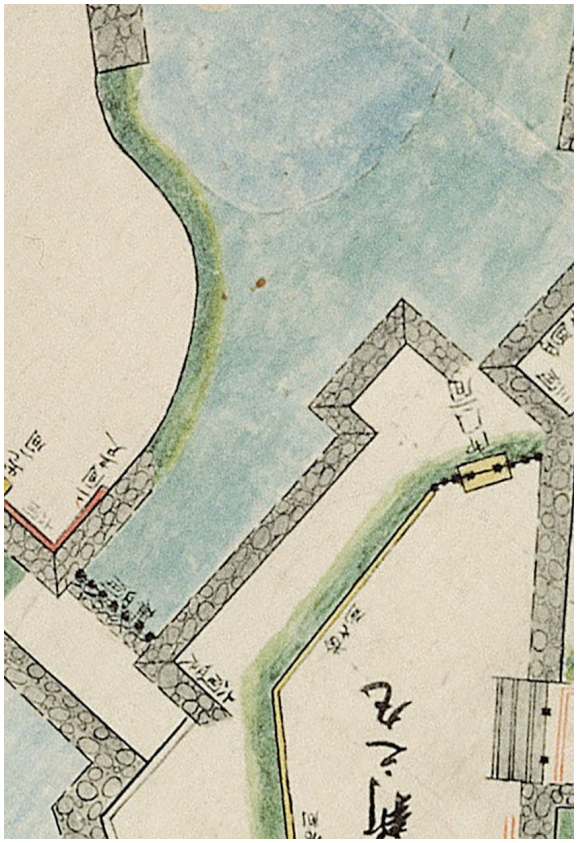
第 61 図　6430W　石垣裾整地土

第 62 図　6430W

これにより、池岸の石垣は、作庭後しばらくしてから石垣の基部を残して積み直され、現状の切石積となったことを確認し、その時期は、城内石垣との対比から、17 世紀後半（五代藩主・前田綱紀による）と推定され、庭園においての切石積石垣の出現期を特定した。

これらの様相は、平成 20 年度から行われた玉泉院丸北泉水縁石垣（6430W）の前面での確認調査でも同様の様相と変遷を確認している［金沢城調査研究所 2015d］。（第 61・62 図）

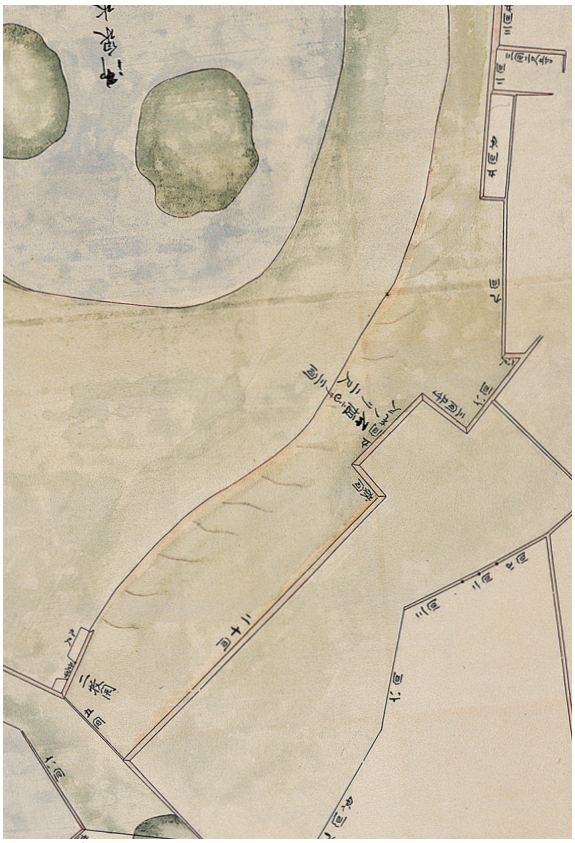
1561W は本来の石垣高が現況の３倍以上（約 7.5 ｍ）と推測できるが、そのことから、庭園の北部



1. 延宝4～元禄年間（1676 ～ 1704）
「金沢城絵図幅」石川県立歴史博物館蔵

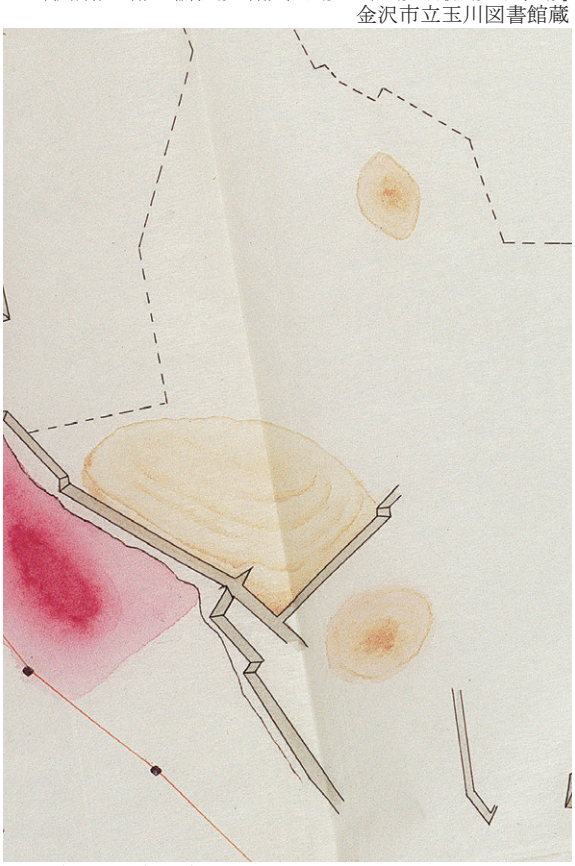
2. 天保4～9（1833 ～ 39）
「金沢御城内外御建物絵図　薪之御丸辺」（公財）前田育徳会蔵

第 63 図　玉泉院丸南東部の変遷 1

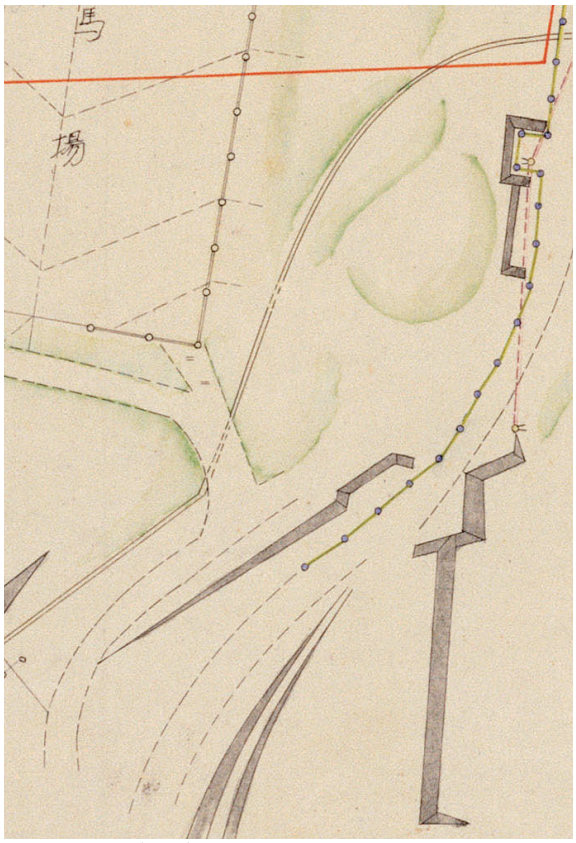


1. 江戸前期
「金沢城中地割絵図　甲号（縮尺約百五十分一）
玉泉院様御丸・薪丸・稲荷屋敷・御数奇屋屋敷・金谷屋敷・丹後屋敷・松原屋敷」
金沢市立玉川図書館蔵

2. 嘉永3年（1850）
「御城分間御絵図」（公財）前田育徳会蔵



3. 明治 40 年（1907）
「金沢城之図」防衛省防衛研究所戦史研究センター



4. 昭和 20 年（1945）
「第五十二師団司令部図」石川県立歴史博物館蔵

第 64 図　玉泉院丸南東部の変遷２

と同様、東部でも池岸に高い石垣を巡らせていた江戸期の庭園景観が明らかとなった。

また、庭園整備と一体的に石垣整備が行われていたことも明らかとなった。石垣改修と同時になされた盛土造成により、作庭当初は石垣際まで広がっていた池の汀が後退し、石垣と池との間が部分的に陸地化したと考えられる。

石垣の切石化は、庭園の大がかりな再整備の一環として実施され、初期の庭園景観を刷新して、今日見ることのできる切石積石垣の庭が成立したと推察される。

切石材の観察（第65・66図）

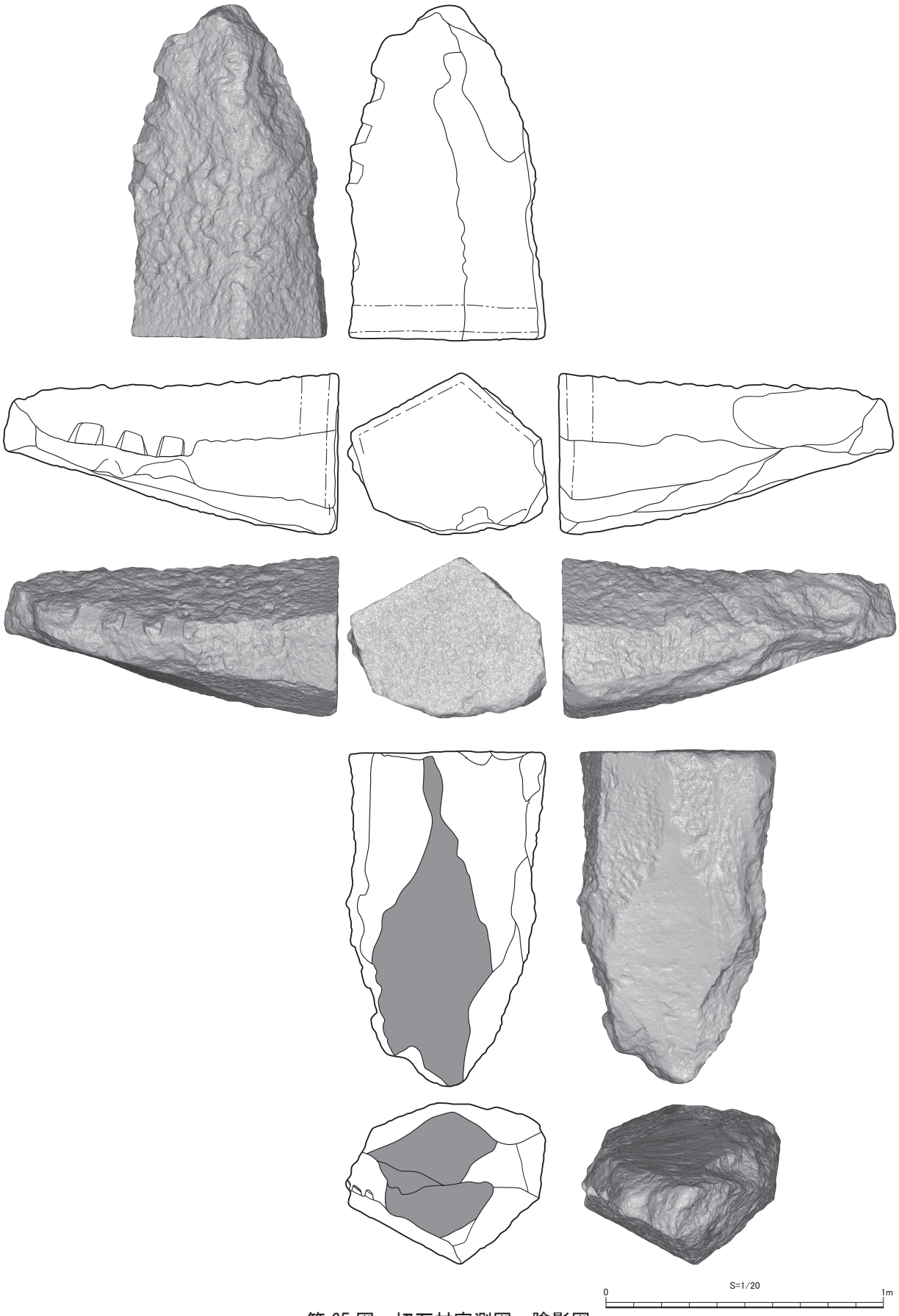
調査区の近接地に単独で残置されていた切石材である。石面の形状や加工痕などから本石垣の石材であったとものが、明治40年に上部が撤去された際に動かされたものと推測している。石材の特徴については解体調査でも行わないと、確認することが難しいことから、参考として当該期の石材と思しきこの切石材の観察を行うこととした。

石材は長さ120㎝、最大幅69㎝、高さ56㎝を測り、控えの長さは面の高さの約２倍と長い。正面形状は下半部の縁辺を一部欠損しているが、側辺が直線的な不整六角形を呈している。面から長さ(控え）の1/2程度までは側面は直線的だが、石尻にむかって幅・高さともに窄まっていく。石面を垂直に立てると上面がほぼ水平に、下面は石尻に向かって上がっており、石積の際に石面を石垣の勾配に合わせてねかせても、石尻が下段の石積等に干渉しないような形状となっている。

石材の正面は、前述のとおり側縁が直線的な不正六角形で、面の周縁部に約３㎝（１寸）幅で、平刃状工具により平滑にならした加工痕がみられる。それ他の部分は、幅３～５㎜、長さ１㎝程度の長楕円形を呈した細かなノミ痕が連続して筋状となっている。ノミ筋は面に対して縦方向に入る。面はかなり平坦になっており、中央部にむかって胴が張るような形状ではない。

上面は幅1.5㎝程度、長さ1.5～２㎝の滴形をしたノミ痕の連続したものが線状をなしており、石尻に向かって加工痕は粗くなる傾向があり、石尻周辺では割面もしくは自然面となる。左右の側面は、上面同様の粗いノミ筋がみられるが、それよりさらに幅の細いノミ痕がみられる。粗いはつりによって残った瘤状の盛り上がりが、それよりも細いノミ痕によって取り除いて、平らに仕上げている。上面と左右側面については正面側の縁辺約３㎝（１寸）幅で平刃状工具を用いて平滑に仕上げている。さらに上面については、縁辺部の平滑な仕上げに加えて、約15㎝(３寸)幅で、平刃状工具で加工を行っているが、縁辺部に比べると深いノミ筋が残り、平刃状工具を用いた平滑加工としては、やや粗い仕上がりとなっている。ノミ痕は正面中央部の痕跡に近い、細かなものである。下面は、石積の際に乗る下段の石積との接点について左右側面と同様の細いノミ筋が確認できるが、接点とならない範囲については、自然面を残している。石尻は自然面のままである。

この石材が積まれていた際の天地については、石材全体の形状と、面によって加工度合いが違ってきている点から判断している。そのことから、切石材は設置してからの合端加工が最も丁寧に行われている。石切丁場などで確認された寛永期の切石材は、石面の規格が優先され、控えの短いものであった。報告した石材は、その規格などからも切石材として石切丁場から調達されたものではなく、粗加工石を再加工したものと考えられる。



第 65 図　切石材実測図・陰影図

第 66 図　切石材オルソ写真・現況写真

1．調査着手前（北西から）

2．掘下げ完了時（北西から）

第 67 図　玉泉院丸南東遺構写真1

1．32層　黄橙色粘土層（上から）

2．調査区上半南壁

3．調査区南壁全景

4．46層検出状況（上から）

5．石垣前面段割り　前込め栗石検出（上から）

6．トレンチ北壁（Ⅲ～Ⅳ層）

7．トレンチ南壁

8．トレンチ北壁（Ⅳ層）

第 68 図　玉泉院丸南東遺構写真2

1．1561W　現状の天端（北から）

2．1561W　天端（上から）

3．1560W　現状の天端（北から）

4．1560W　天端（上から）

5．測量風景（北西から）

6．重機による表土除去（北から）

7．埋め戻し作業（不織布の上に黄橙色砂を入れる）（上から）

8．現地説明会（北から）

第 69 図　玉泉院丸南東遺構写真3

第４節　玉泉院丸北調査区

１．調査区の位置と調査の概要（第 70・71 図）

本調査区は、二ノ丸と玉泉院丸の境にある色紙短冊積石垣の東側に位置する。

今回の調査で対象とした色紙短冊積石垣は、玉泉院丸庭園石垣の中心部にあたり、従来、17世紀後半の様式として評価しているが、庭園が作庭された時期は17世紀前半（寛永11年）とされ、30年ほど時間差がある。その理由を探るために、現状で見えない基底部について改修の痕跡や作庭当初の特徴が認められるかどうか確認することとした。

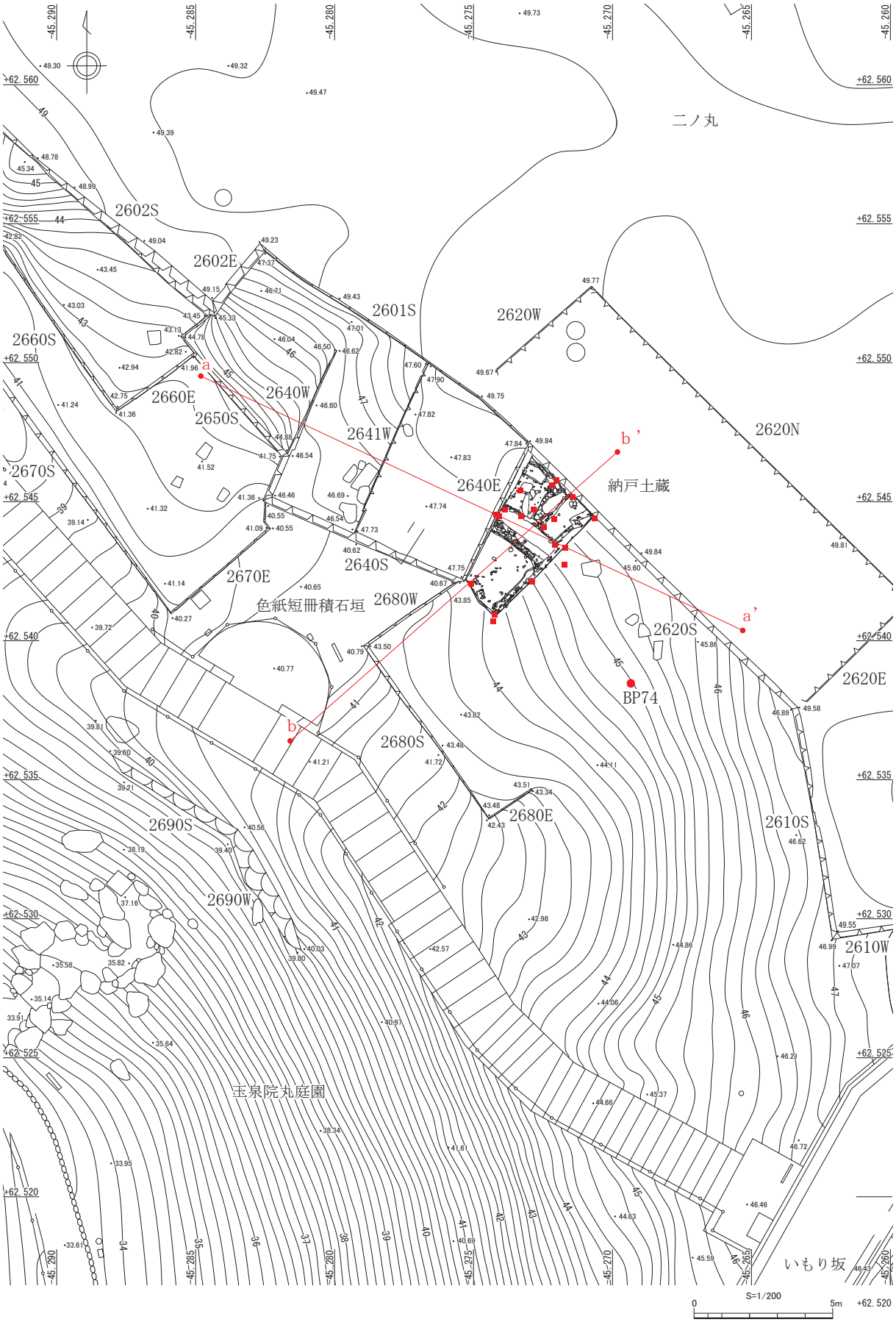
調査区は色紙短冊積石垣東面（石垣 ID2640E）と奥納戸土蔵下石垣（2620S）との入隅部に、南北５ｍ、東西３ｍの範囲で斜面上から下に向かい、2640E 沿いに長軸をもつように設定した。５ｍのトレンチ長は、2640E の南東隅角部から、2620S との入隅部までの距離ともほぼ一致する。トレンチの北端の標高は約45.4m、南端は約43.8m と比高差が1.5m を越える斜面地だが、トレンチ南端よりさらに南へ向かっては、緩やかな地形となり、雛壇石垣の東端にある石垣 ID3680（天端に面取りのある石垣）となる。

２．基本層序

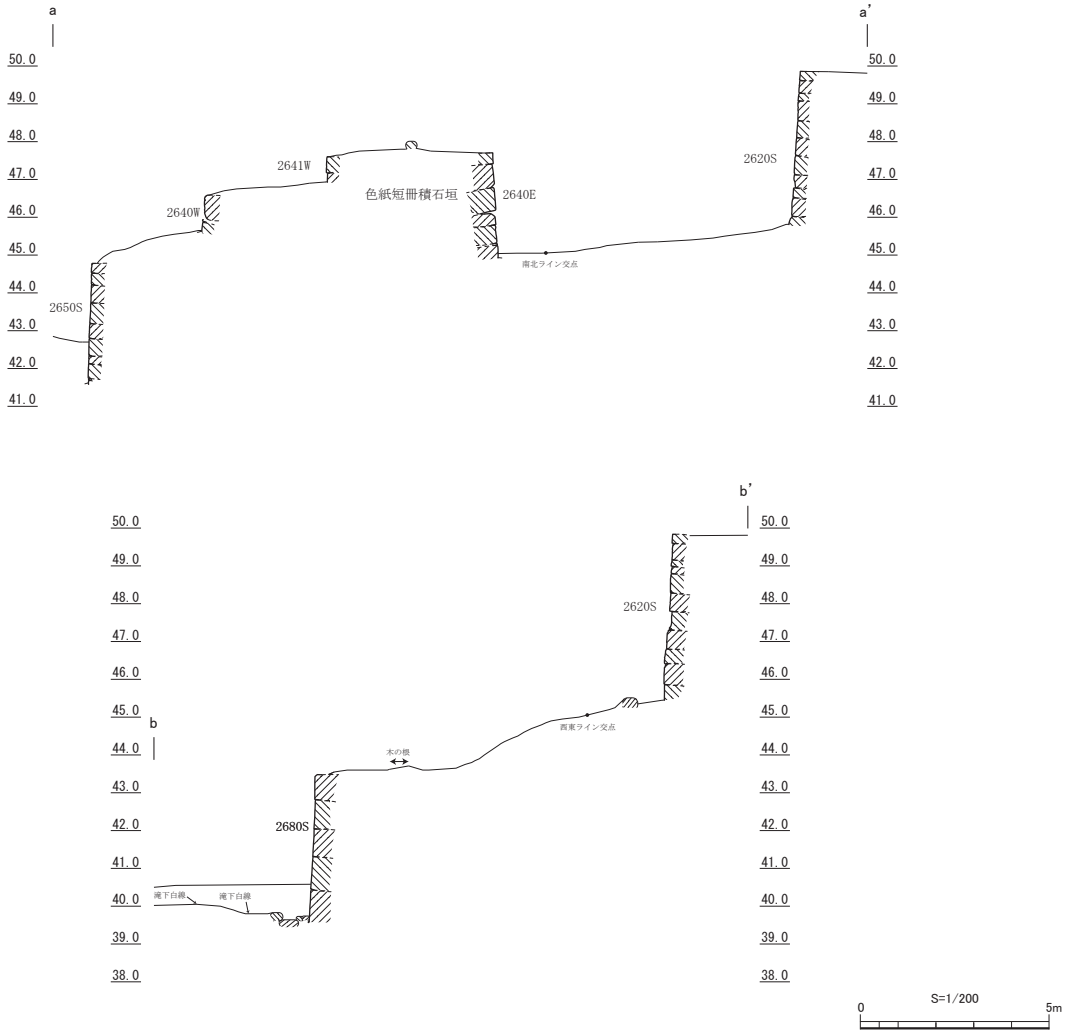
本調査区の層序は、Ⅰ：近代以降の埋土、Ⅱ：近世後期の整地土、Ⅲ：近世前期の整地土の大別３層とした。Ⅱ層は更に２つに細分した。

Ⅰ層は表土層と近代以降の遺構の掘り込み面にあたる層を含む。瓦以外の遺物の大半がⅠ層からの出土である。Ⅱ層は近世後期の石垣改築後の整地土とした。Ⅱ層とⅢ層の境は2640E 前面で明瞭な整地土を確認している。Ⅲ層は近世前期、石垣構築時の整地土とした。

第 70 図　玉泉院丸北調査地点全景（調査前）



第 71 図　玉泉院丸北調査区位置図



第 72 図　玉泉院丸北調査区周辺地形断面図

３．遺構

調査地点は、加賀藩三代前田利常によって寛永 11 年（1634）に作庭された玉泉院丸庭園にあたる。玉泉院丸庭園には、北辺を中心に切石積石垣の石垣群が展開しており、その中でも中心的な存在である色紙短冊積石垣の東面（石垣 ID2640E）と、この東面と入角になって南東に延びる石垣（ID2620S）、その前面に調査区は位置する。調査区周辺の石垣群は金沢城石垣編年５期（寛文年間頃、17 世紀後半）の石垣が現状で最も古い様相を示しており、６期（宝暦期、18 世紀後半）や７期（文化期、19 世紀前半）に部分的に修理を経たものが現在の姿と考えている。具体的に５期のいつ頃から石垣が築かれたかは不明だが、寛文２年（1762）の地震による石垣修補願図では、同所に石垣は描かれておらず土羽表現となっている（第 88 図 -1）。寛文７年（1667）の石垣修補願絵図である「加州金沢城絵図」では折れ曲がりをもつ石垣が描かれており、現状の石垣プランを模式的に描いているようにもみてとれる（第 88 図 -2）。これ以降の絵図においては、プランが大きく変わるような改変は確認できないことから、今回の発掘調査によって、地表面以下も含めてどのような様相の変化がみられるかが課題となった。トレンチ内の土層堆積状況はもとより、石垣の構築・改修との対応でとらえるため、石材の加工の変化にも留意しながら掘り下げを進めた。

大別のⅠ層は、近代以降の整地土及び自然堆積土と考えている。２層とした整地土中には凝灰岩の板石が釉薬瓦などとともに多量に含まれていた。これらは石垣の上部にあった納戸土蔵に使用された腰板が、廃棄されたものと推定している。

板石の多くは、長辺約 84 ㎝、短辺約 40 ㎝、厚み６㎝の規格品で、釘で留めるためと思しき穿孔もみられる。板材の短辺には切欠きがみられ、材を継いで使用したと考えられる。板材の表側が非常に平滑になっており、裏面はチョウナの痕跡が規則的に残る。

第 73 図　板石出土状況

石材の色調は黄白色と、褐色が強い黄褐色、やや青味がかった灰白色の３種類がみられ、黄褐色の材は他の２つよりも硬質な質感を呈している。

調査区の上部東側では、長軸 10 ㎝、短軸 7.7 ㎝、厚み 1.9 ㎝を平均とする、やや長楕円の扁平な円礫がごく限られた範囲に集中して出土した（第 74 図）。石同士の重なりが不規則で乱れているため、意図的に敷並べたものではないが、同じ形状の礫が集められている。どのような理由でこの場所に集中しているのか、目的等の詳細は不明である。

大別Ⅱ層は、やや様相の異なる２つの細別層からなる。Ⅱ -a 層としたのは東壁の 9 ～ 18 層で、調査区北半では表土から約 30 ㎝掘り下げた 16 層は特徴的な黄白色の粘土層が広がり、Ⅰ層との境とした。この土は両石垣の入隅部周辺から納戸土蔵下石垣沿いに幅１ｍ程で東側に伸びており、層の上面はやや平坦にみえる。狭い範囲で明瞭に確認できるが、調査区中央のアゼの手前で撹乱によって切られており、さらに斜面がやや急になる調査区南側では流出によるものか、粘土層はみられなくなる。この粘土層は厚さ 15 ㎝程度で、腰瓦片を多量に含んでいる（第 75 図）。腰瓦以外には銅釘などが出土したが、その他に時期を特定できるような出土遺物は確認できなかった。

第 74 図　円礫検出状況

第 75 図　黄白色粘土層と腰瓦

この黄白色粘土層の最下部では、やや汚れた黄白色粘土中に直径２～３㎝程度の玉砂利が入るが、ちょうどこの境目で 17 世紀前半の肥前陶器や軟質施釉陶が出土した。この層の下は境目が明瞭に剥がれるように固くしまった灰褐色砂質土層となる。掘り下げる際には、一定の厚さ・範囲で剥がれるように土が掘り下げられることから、たこ胴突きのなどで土をつき固めながら盛土していったのではないかと推測している。

Ⅱ -b 層とした土は東壁 19 ～ 22 層で、灰褐色砂質土に黒褐色土が混じり、戸室石の剥片や坪野石と呼ばれる黒色の溶結凝灰岩の剥片もみられる。遺物はⅡ -b 層から釉薬瓦が含まれず、燻瓦のみとなる。この灰褐色砂質土層の下位は、暗褐色土がみられるが、調査区中央に設定した東西方向のアゼの手前あたりで南側にむかって落ち込むような状況となっていた。この落ち込みは、調査区東壁や東西アゼにおいても確認できており、標高 44.2 ｍ付近から落ち込んでいるが、次に述べるⅢ層を掘り

第 76 図　調査区平面図・オルソ写真

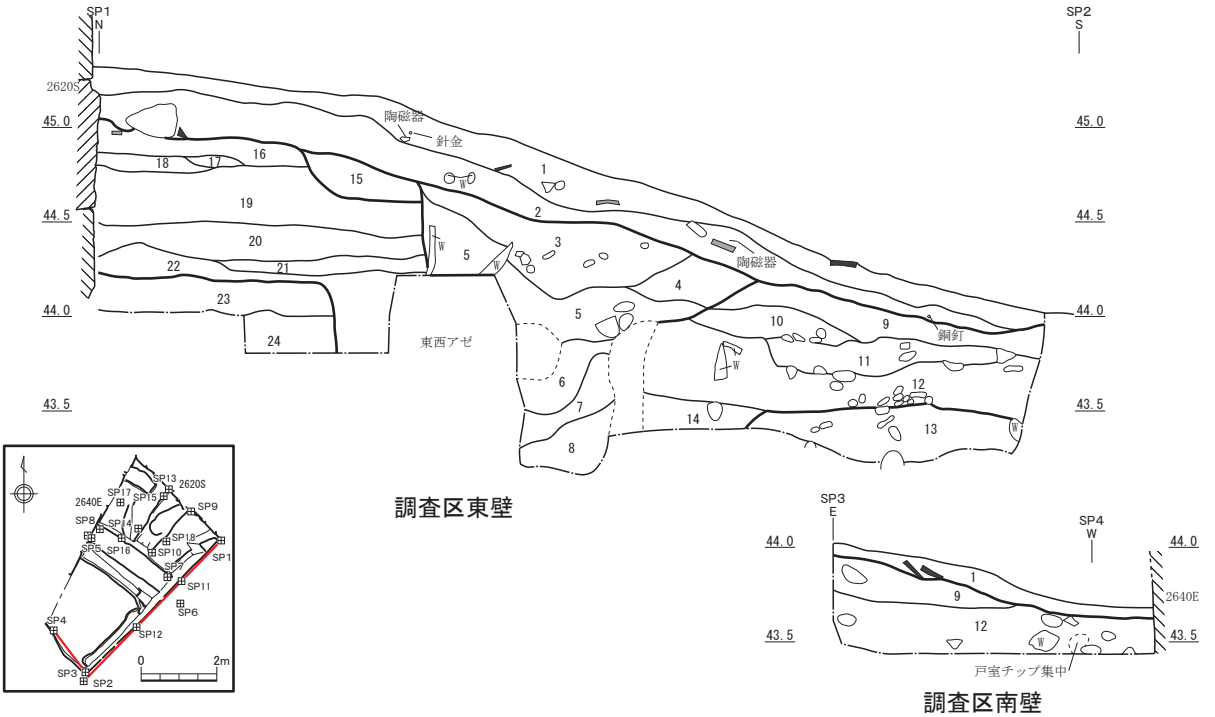
込んで、斜面下方に向かって面的に下がっている。この層を含めて大別Ⅱ層としており、近世後期の石垣改築時に石垣前面の土を徐々にかさ上げしていったものと考えている。

Ⅲ層は、一部断割りをいれて石垣前面の堆積状況を確認した。石垣構築時の整地土と考えられる。Ⅱ層を取り去ると薄い旧表土とみられるやや汚れた層があり、直下にはシルト質の化粧土と思しき整地土があり、その下は石積み時にでる石材の加工屑とみられる戸室石の剥片層がみられた。いずれも厚さが２㎝程度の薄い層であるが、水平かつ均一な堆積状況である。これより下は、栗石とシルト土が混在する 30 ㎝程の盛土がされ、更にその下は調査区の南側にある石垣（ID2680S・W）の裏込めとみられる栗石層となる。この栗石層は平成 24 年度に周辺で実施されたボーリング調査の所見とも矛盾しない［金沢城調査研究所 2015d］（第 89 図）

トレンチの北側にある 2620S（納戸土蔵下石垣）は、いわゆる「金場取残積」で、面加工に特徴をもつ石垣であるが、おおよそ標高 45 ｍを境に上下の段で、石加工に違いがみられる。この石加工の変化と前面の土層の堆積状況（Ⅱ層・黄白色粘土層）と対応しているものと考えている。石加工の詳細については後述する。

遺構№1

調査区の東側で一部を検出したが、東西アゼと東壁にかかっており、全体形状は不明である。東壁でみると上端で 1.9 ｍ、深さは 1.3 ｍを測る。斜面上側は垂直に、下方はかなり緩やかな掘り込み形状となっており、下半は一部木根によりかく乱を受けるが、ほぼ垂直に掘り込んでいるようにみえる。最上層には直径２㎝ほどの玉砂利が大量に含まれた土がみられる。覆土中からは、軍隊が使用したと



調査区東壁

調査区南壁

東壁・南壁共通土層注記

1　10YR3/2　黒褐色土（しまりなし、粘りややあり、釉薬瓦・いぶし瓦少量、針金等金属製品微量、５～10㎝程度の礫多量混じる）表土

2　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、遺構№1付近に褐色シルト集中、釉薬瓦・いぶし瓦微量、陶磁器微量、銅釘等金属微量、５㎝程度の礫少量、炭化物微量混じる）

3　10YR3/2　黒褐色土（しまりなし、径２㎝程度の玉砂利多量、４㎝程度の礫少量混じる）東西アゼ南面３層に対応

4　10YR3/2　黒褐色土（しまりなし、３～５㎝程度の玉石少量混じる）

5　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りややあり、10㎝程度の礫少量混じる）東西アゼ南面４層に対応

6　10YR4/2　灰黄褐色土（しまりあり、粘質土）東西アゼ南面５層に対応

7　10YR3/3　暗褐色土（しまりあり、粘質土、褐色粘土少量混じる）東西アゼ南面６層に対応

8　10YR3/2　黒褐色土（しまりややあり、粘りややあり、褐色粘土少量、炭粒微量混じる）東西アゼ南面８層に対応

9　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、３～７㎝程度の礫少量混じる）

10　10YR3/2　黒褐色土（しまりややあり、４～10㎝程度の礫多量混じる）

11　10YR3/4　暗褐色土（しまりあり、10㎝程度の礫少量混じる）

12　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、５～ 10 ㎝程度の礫多量混じる、部分的に戸室剥片入る）

13　10YR3/4　暗褐色土（しまりあり、粘りややあり、にぶい黄褐色粘土ブロック微量、５～10㎝程度の礫多量）東西アゼ南面25層に対応

14　10YR4/2　灰黄褐色土（しまりややあり、黒色シルト多、黄橙色粘土ブロック多、７～９㎝程度の礫少量含む）東西アゼ南面19層に対応

15　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りややあり、６～10㎝程度の礫多量、いぶし瓦少量混じる）

16　10YR4/3　にぶい黄褐色土（しまりあり、粘質土、下部ににぶい黄橙粘土ライン状に集中、いぶし瓦片少量、黒色シルトブロック少量混じる）

17　10YR3/3　暗褐色土（しまりあり、粘りややあり、にぶい黄褐色粘土多量、いぶし瓦片少量混じる）

18　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りややあり、黒色シルトブロック微量、１㎝以下の玉砂利右側に集中、４㎝程度の礫少量混じる）

19　10YR4/3　にぶい黄褐色土（しまりあり、粘りややあり、２～９㎝程度の礫多量混じる）東西アゼ南面10層に対応

20　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りあり、黄褐色粘土小ブロック少量、５㎝程度の礫少量、炭粒微量混じる）

21　10YR4/4　褐色土（しまりややあり、粘りあり、黄褐色粘土小ブロック少量、５㎝程度の礫少量混じる）

22　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りあり、黄褐色粘土小ブロック多量、５㎝程度の礫少量混じる）東西アゼ北面14層に対応

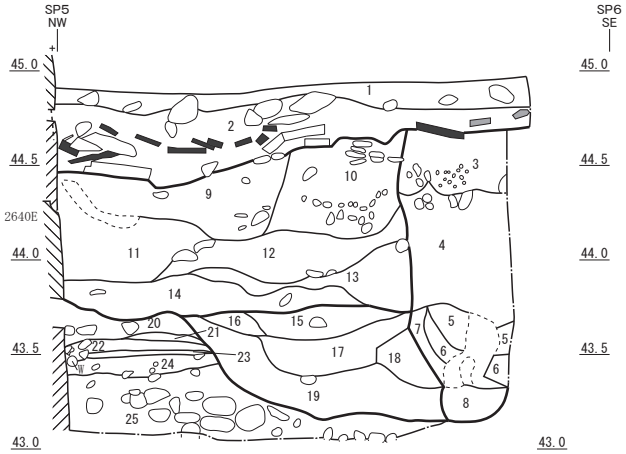
23　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りややあり、黒色粘土ブロック左側に微量、黄褐色粘土ブロック少量混じる）

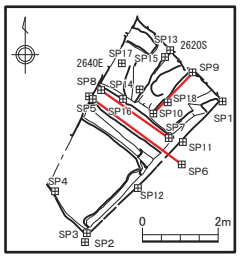
24　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りややあり、戸室石片多量混じる）

※Ⅰ層：1・2 近代以降の埋土、Ⅱ層：9～12・14～22 近世後期の整地土
Ⅲa層：13・23・24 近世前期の整地土、遺構№1：3～8 近代の土坑

S=1/40
0　1m

第 77 図　玉泉院丸北　土層断面図1

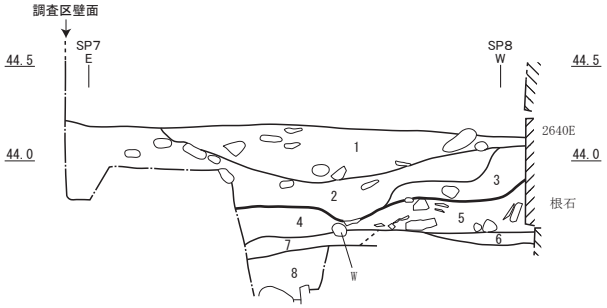




1　10YR3/2　黒褐色土（しまりなし、粘りややあり、釉薬瓦・いぶし瓦少量、針金等金属製品微量、５～10㎝程度の礫多量混じる）表土
2　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、遺構№1付近に褐色シルト集中、釉薬瓦・いぶし瓦微量、陶磁器微量、銅釘等金属微量、５㎝程度の礫少量、炭化物微量混じる、石垣側から1.5mあたりまで凝灰岩板石・戸室石・釉薬瓦集中）
3　10YR3/2　黒褐色土（しまりなし、径２㎝程度の玉砂利多量、４㎝程度の礫少量混じる）
4　10YR3/3　暗褐色土（上半分に径10㎝・厚さ2.5㎝程度の玉石が斜めに入り込む）
5　10YR4/2　灰黄褐色土（しまりあり、粘質土）
6　10YR3/3　暗褐色土（しまりあり、粘質土、褐色粘土多量混じる）
7　10YR3/2　黒褐色土
8　10YR3/2　黒褐色土（粘りややあり、炭粒微量混じる）
9　10YR3/4　暗褐色土（径10㎝程度の川原石少量混じる）
10　10YR3/3　暗褐色土（径７㎝程度の川原石多量混じる）
11　10YR3/2　黒褐色土（径７㎝程度の川原石・砂利多量混じる）
12　10YR3/3　暗褐色土（しまりあり、粘りあり、黄褐色粘土粒少量含む、径５㎝程度の礫少量混じる）
13　10YR3/2　黒褐色土（径５㎝程度の礫多量混じる）
14　10YR3/3　暗褐色土（粘りややあり、にぶい黄橙色粘土ブロック多量、黒褐色シルトブロック少量、径７㎝程度の川原石多量）
15　10YR3/3　暗褐色土（やや粘りあり、黄橙色粘土ブロック少量、径５㎝程度の礫多量混じる）
16　10YR2/2　黒褐色土（黄橙色粘土多量、径１㎝程度の礫少量混じる）
17　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りややあり、黄橙色粘土ブロック多量、径９㎝程度の戸室石片少量、径７㎝程度の礫多量混じる）
18　10YR2/1　黒色土（しまりややあり、黄橙色粘土ブロック少量、３㎝程度の礫少量混じる）
19　10YR4/2　灰黄褐色土（しまりややあり、粘りややあり、黒色シルト多量、黄橙色粘土ブロック多量、７～９㎝程度の礫少量混じる）
20　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りややあり、黄橙色粘土ブロック・炭粒微量、灰黄褐色粘土ブロック少量、戸室石片少量）江戸後期改修時の戸室剥片を含む
21　10YR3/4　暗褐色土（しまりややあり、黄橙色粘土ブロック少量）旧表土的なヨゴレた土
22　10YR4/4　褐色土（しまりややあり、粘りややあり、灰黄褐色粘土多量）化粧土
23　10YR3/3　暗褐色土（しまりややあり、粘りややあり）赤戸室のチップ層
24　10YR3/3　暗褐色土（しまりなし、５～６㎝程度の礫多量（戸室石含む）、褐色シルトブロック少量）
25　10YR3/4　暗褐色土（しまりなし、石垣側 15 ㎝以上の大きな川原石入る、壁側には10㎝程度の礫入る）栗石層

※Ⅰ層：1・2 近代以降の整地土、遺構№1：3～8 近代
Ⅱ層：9～19 近世後期の整地土
Ⅲ層：20～25 近世前期の石垣前面整地土

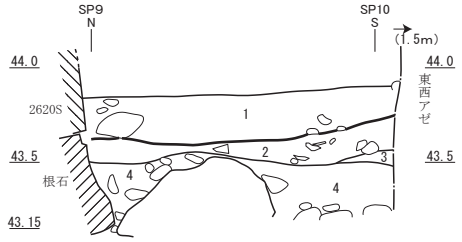
東西アゼ南面土層断面図



1　10YR3/4　暗褐色土（しまりあり、径１㎝大・５㎝大の円礫を含む、径１㎝以下の小礫を少量含む、10YR6/3明黄褐色粘土粒を少量含む）
2　10YR3/3　暗褐色土（しまりあり）2620S前面断割１層と対応
3　10YR3/4　暗褐色土（しまりやや弱い、10YR6/6明黄褐色粘土を多量に含む、砂礫を含む）
4　10YR4/3　にぶい黄褐色土（しまりあり）2620S前面断割２層と対応
5　10YR3/3　暗褐色土（粘質土、土はしまりがあるが戸室チップ・剥片が多量に含まれるためにボロボロを崩れやすい、空隙多い）江戸後期の改修（2620S）の加工クズか
6　10YR4/4　褐色土（シルト質土、ややしまりあり、径 0.5～１㎝大の円礫をごく少量含む）５期石垣前面の化粧土、上部は流出か
7　10YR6/4　にぶい黄橙色土（粘土層）2620S前面断割３層と対応
8　10YR4/4　褐色土（しまりなし）2620S前面断割４層と対応

※Ⅱ層：1～3 近代の盛土、Ⅲ層：4～8 近世前期の整地土

東西アゼ北面下部土層断面図



1　10YR3/3　暗褐色土（しまりあり、径0.5㎝以下の小礫を多く含む、10YR6/6明黄褐粘土粒を含む、石垣際で人頭大の礫が入る）
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土　（しまりあり、径 0.5～１㎝の円礫をまばらに含む、径５㎝大の偏平礫を含む）
3　10YR6/4　にぶい黄橙色土（粘土層、10YR4/4 褐色土を含む、前込め上面に広がる粘土層、2640Eにつくものか）
4　10YR4/4　褐色土（しまりなし、10YR2/1 黒色粘土粒を含む、石垣の前込め栗石層を埋める土、前押さえ石をパック、2620S根石との間の土は栗石が入っているのでボソボソ）

※Ⅱ層：1、Ⅲ層：2～4

南北断割土層断面図

S=1/40
0　1m

第78図　玉泉院丸北　土層断面図2

みられる白色のボタンが複数出土しており、近代以降の遺構と考えられるが、用途や目的については不明である。

植栽痕

Ⅱ層の黄白色粘土は納戸土蔵下石垣面から約１m幅でほぼ水平に広がるが、そこからは緩斜面となることから、明確に追えなくなる。植栽痕はこの傾斜が変化する調査区ほぼ中央上寄りに位置する。Ⅱ層以下を掘り下げる際にも、不明瞭な輪郭の汚れのように広がっており、プランを抑えきれなかった。Ⅲ層の面をやや掘り下げた段階で、根巻きとみられる黒色土の広がりを確認できた。掘方は直径1.4ｍを測る。底面は、近世前期の盛土層に達している。木根が四方に伸びたためか、掘方壁面には不規則に細い黒色土の帯が入り込んでいる様子がみられた。

第 79 図　植栽痕上部でのプラン

第 80 図　植栽痕検出状況

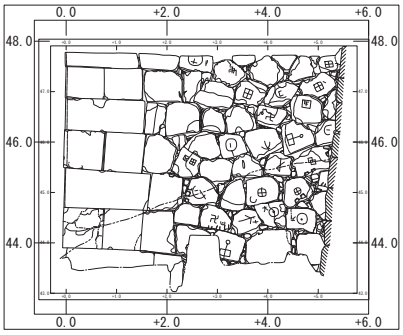
色紙短冊積石垣東面（石垣 ID2640E）（第 81・82・84・85 図）

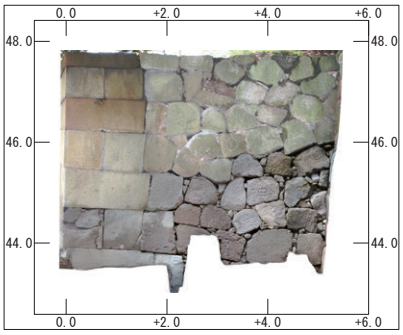
玉泉院丸庭園を代表する切石積石垣としての色紙短冊積石垣は、石垣南面は意匠的な切石積石垣であるのと異なり、東面は石面に刻印のある粗加工石積である。現況の高さは南東隅角部で 3.5 m、2620S（納戸土蔵下石垣）との入隅部で 2.1 m、南北方向の長さは 5.5 mを測る。南面同様に金沢城石垣編年５期（17 世紀後半・寛文期）の様相を留めている石垣で、外観の観察からは明確な改修痕跡を認めることが出来なかった。今回の調査で下部の土を取り除いていったが、地中に埋もれていた部分も様相は変わらず、刻印が大きく中央に入った石材を多く使用した、粗加工石積みであったことがわかった。刻印は東面を通して特定の紋が集中せず、ばらつきがある。また、刻印が表面加工により部分的に消えているものや、必ずしも石面の中央になっていないものもあることから、再利用された刻印石とみられる。

入角部側からの２石は、切石材が使用されている。奥から２石目の切石材は、角が一部欠損しているが、上下と左右の側辺がそれぞれ平行に見えるので、やや横長の方形の石材であったと推測する。石面はノミによって平坦に、丁寧に加工されており、側面の加工もノミを使用したとみられる。寛文期の切石材は、数寄屋屋敷北調査でも確認したように、平刃の工具によりしっかりと平滑にして合端を合わせるが、ノミであったことからこの切石材も寛永期の石材を転用しているとみられる。加工の点だけでなく、石材の設置方法についても、この２石は側面同士が接しておらず、詰石がいれられている。通常

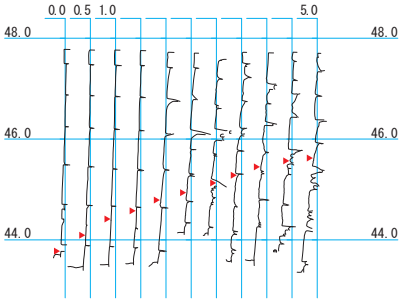
第 81 図　2640E　根石の切石材

立面図



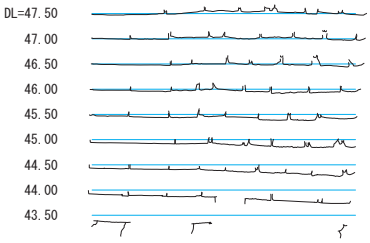


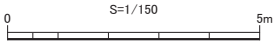
垂直断面図



▸は調査前の地表ライン

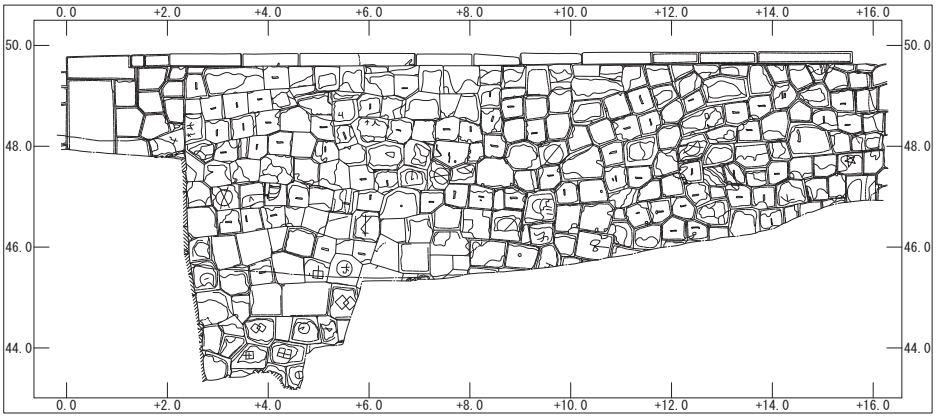
水平断面図

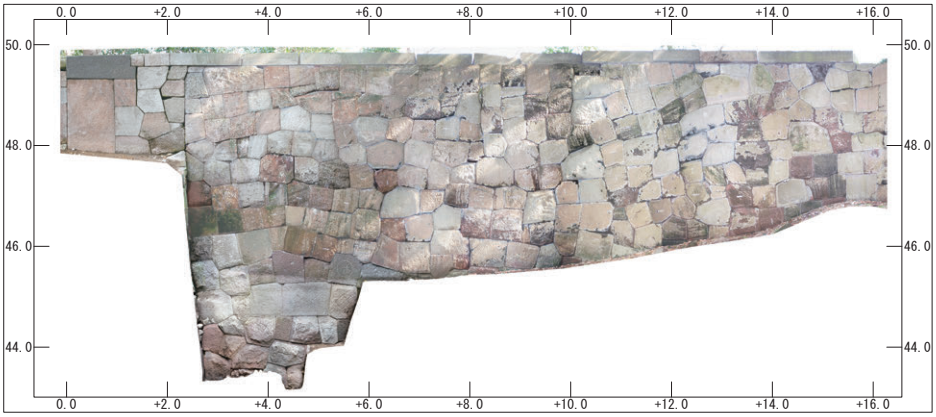




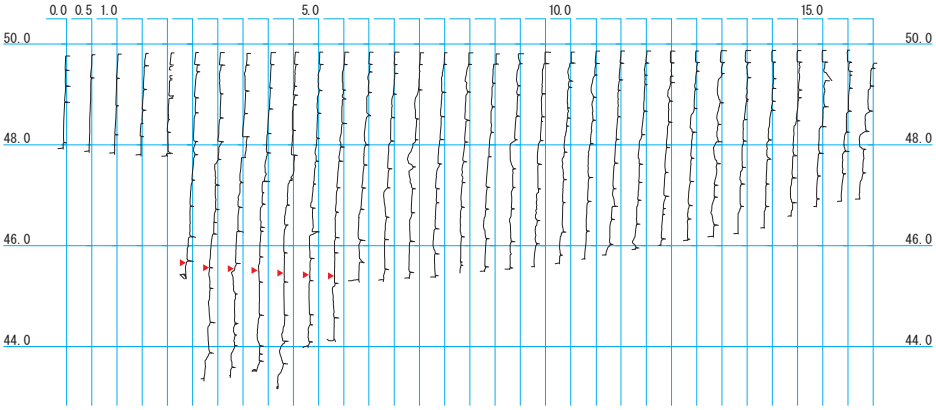
第 82 図　2640E　石垣　立面・断面図・オルソ写真

立面図



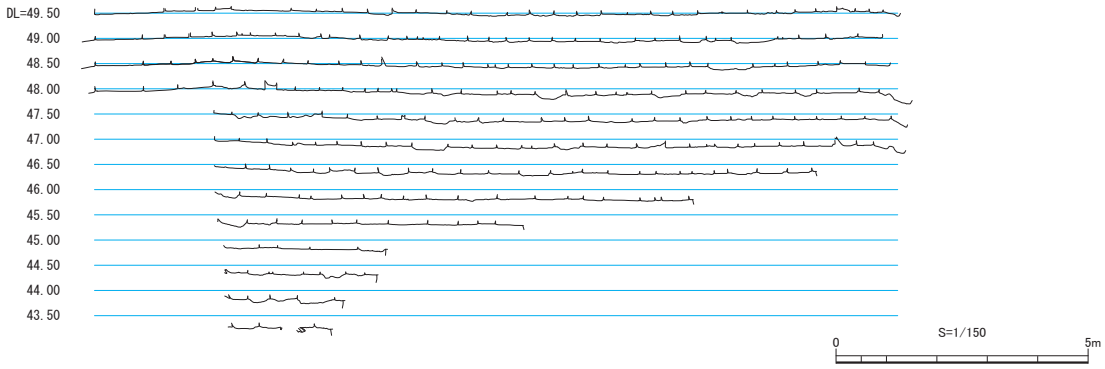


垂直断面図

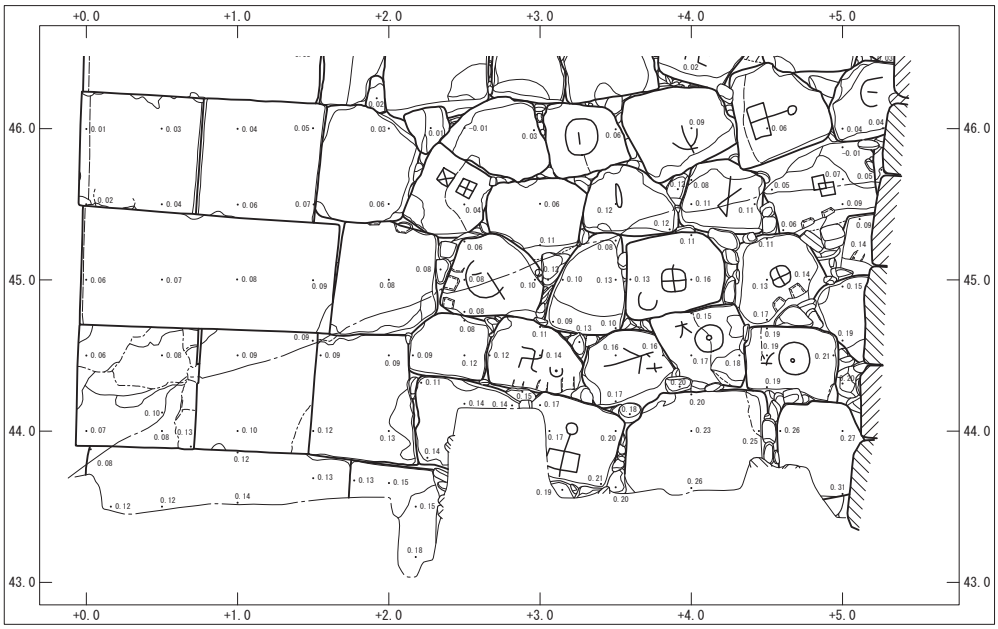


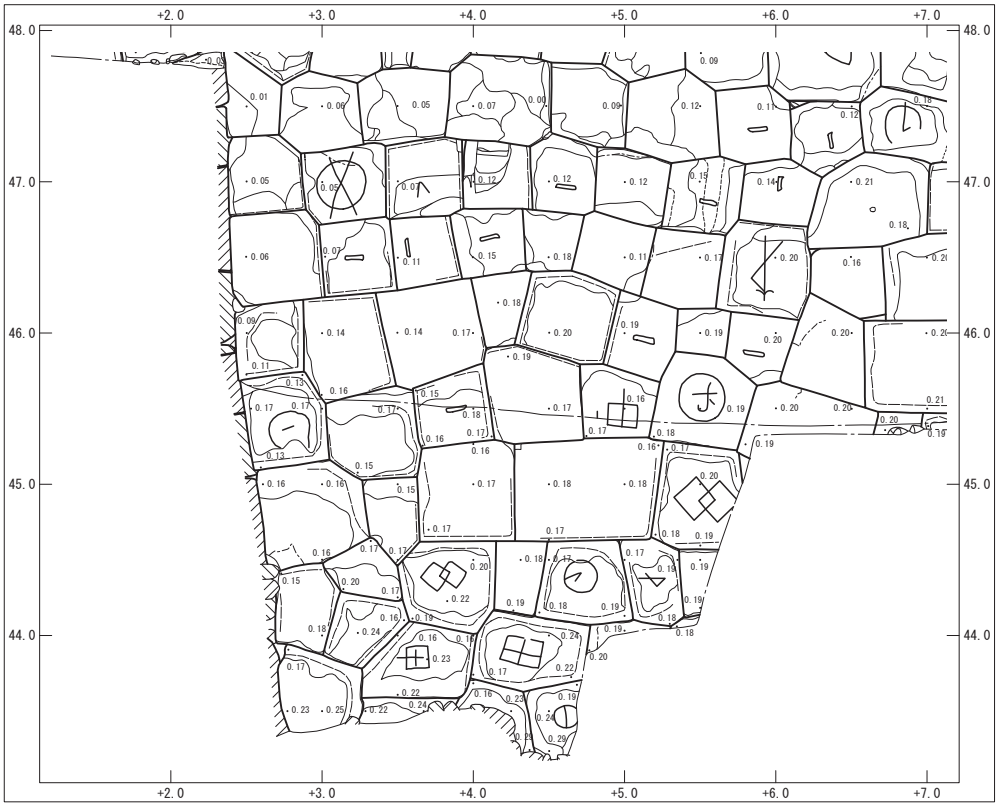
▸は調査前の地表ライン

水平断面図



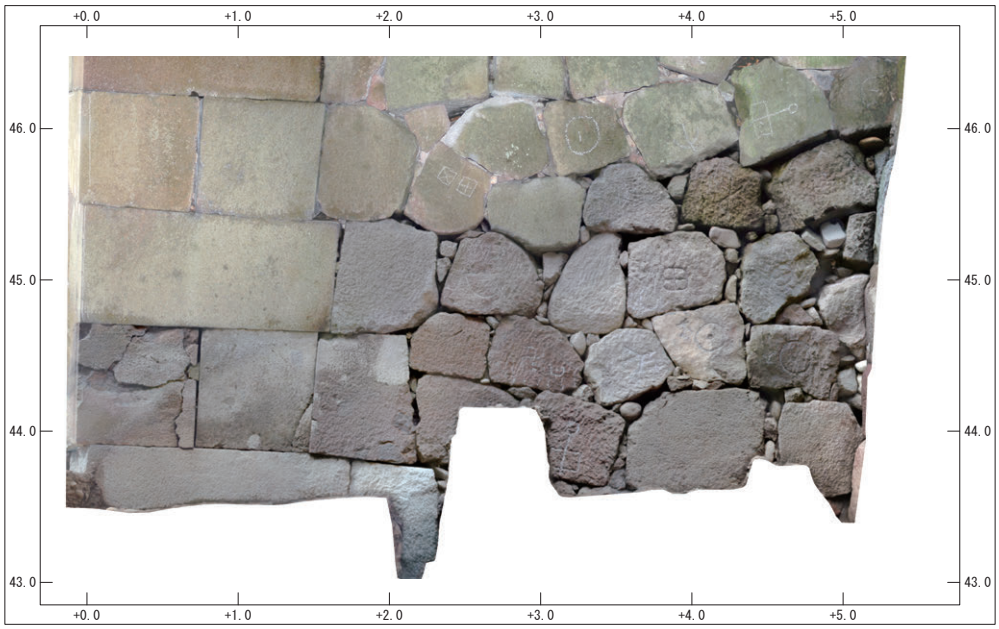
第 83 図　2620S　石垣　立面・断面図・オルソ写真

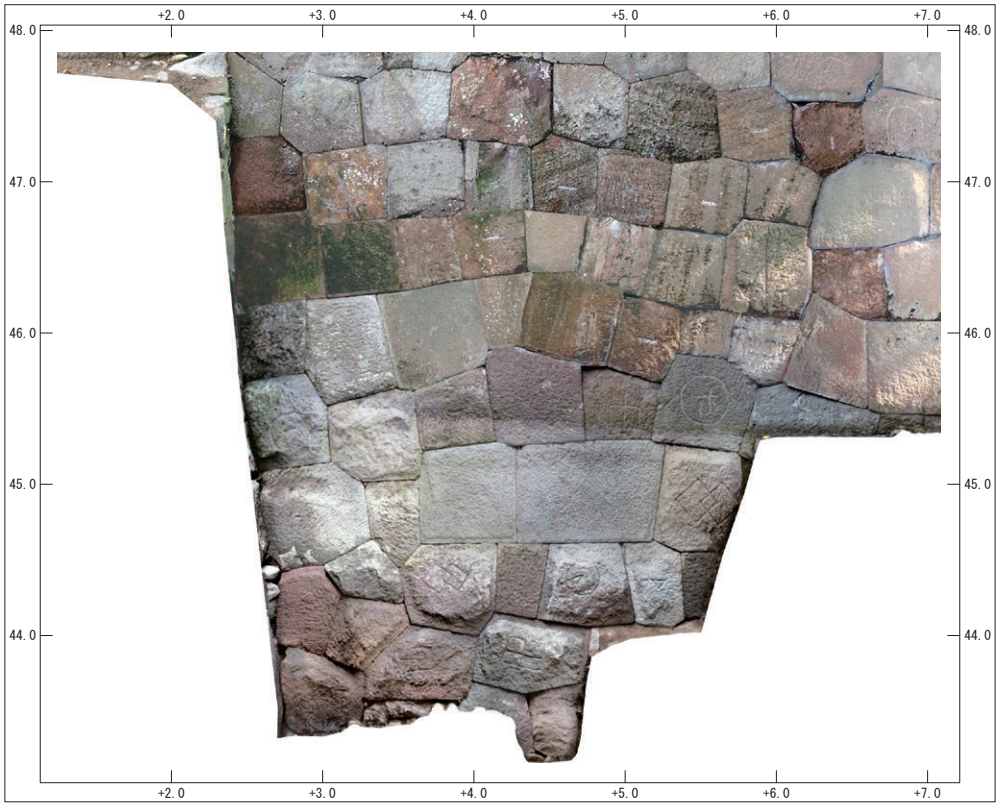




S=1/50
0 1m

第 84 図　2640E・2620S　石垣（調査区内）立面図





S=1/50
0 1m

第 85 図　2640E・2620S　石垣（調査区内）立面オルソ写真

の切石積石垣の石積や、石加工にも則していないことからも、現状の粗加工石積のとなる以前に切石積石垣があり、その一部が残された状態とは考えづらい。また、石面の通りもズレはなく、一段毎の構成、勾配などからも粗加工石積みと一体的とみたほうがよく、寛永の切石材を寛文期に構築された粗加工石積みに転用したものと思われる。この切石材の下部は大きな石材が入っているようには見えないことから、根石とみられる。これよりも南側の斜面下方にむかっては、この段の下に小型の石材が見えることから、根石は斜面形状に沿って、階段状に低くなっていくと推測される。

現状の東面石垣は、石積の連続性や石材の状況等をふまえると、寛永期に遡るとは考えにくく、寛文期に創建された可能性が高い。平成24年度に実施した、玉泉院丸庭園整備に伴う確認調査において、色紙短冊積石垣の南西側にある石垣2670S前面にトレンチをいれており、根石部分を含めて寛文期に新たに築いた石垣であるとの所見を得ていた［金沢城調査研究所2016d］。今回の確認調査の結果からも、色紙短冊積石垣を含めた周辺の石垣は、寛文期に現状のようなプランで創建された可能性が高くなった。

奥納戸土蔵下石垣（ID2620S）（第81・83～86図）

二ノ丸の南、玉泉院丸に面した郭境に築かれた東西方向に延びる切石積石垣で、西に色紙短冊積石垣が、東は松坂門大将櫓が取り付く。現況の高さは4.5ｍ、東西方向の長さはゆるく折れる入角まで13.7ｍを測る。

金場取残積石垣と呼称される様式の石積みで、金場とよばれる石材正面の周縁部を平刃の工具によって縁取るように平滑に加工するが、取り残した石面の盛り上がりとの段差はやや低い。一方で、現在の地表面より下位においては、平刃状の工具による加工痕ではなく、ノミによるとみられる縁取り加工が周縁部に施されており、取り残し部分との段差も大きいものが主体となる。同じ金場取残積ではあるが上部と下部で加工痕に様相差がみられた。この石加工の差は前面盛土のⅡ層とした黄白色粘土層と対応するとみられる。またこの両者は、石面に残る刻印も上部は漢数字の「一」をつけるものが多いが、下部についてはトレンチで一部を確認したに過ぎないが、「一」はみられない。

城内の他の金場取残積石垣の石材周縁部の加工をみると、17世紀後半（金沢城石垣編年５期・寛文期）と考えている数寄屋屋敷北石垣（本章第２節で報告）やいもり坂東石垣などはノミによる加工痕がみられ、宝暦期とされる河北一ノ門や三十間長屋などには平刃の工具を使用した周縁加工がみられるので、この石垣の上部も宝暦期以降に改修されたものと推測される。2620Sについては、石垣の上面に奥納戸土蔵とよばれる建物があることから、石垣単独の改修は不可能で、建物修理と同じタイミングで修築された可能性がある。

改修時期の具体的な年代については、いくつか候補があり、修理履歴等をみても、本地点の石垣修理を示す資料は見当たらないが、石垣上部にある奥納戸土蔵の建て替えが石垣改修の契機となった

上部（改修後）　平刃加工　　下部（改修前）　ノミ加工

第86図　石材の周縁部の加工

可能性がある。土蔵の建て替えについては、一つは宝暦９年（1759）の火災後に提出された修理願において焼失とあることから、これを契機に石垣修理・土蔵再建が考えられる。文化５年（1803）の二ノ丸火災の際に納戸土蔵が焼失したかどうかは不明であるが、文政年間頃とされる二ノ丸の絵図では、土蔵への入口は従前通り、北側に描かれるが、ある時期から東側に描かれるようになる。文政 13 年（1830）の「御城中壱分碁絵図」では（第 87 図３）、同じく東側に入口があることから、文政年間中に改築されたものとみられる。その際に建物の土台を含めた改築が行われていれば、石垣も一体的に改修された可能性が考えられよう。

寛文期の金場取残積石垣については、断ち割りをいれて根石部分まで確認した。地表面から 2.3m で根石下端部となり、根石は栗石層上に設置されている。根石前面には前込めの栗石とともに大型の自然石が前押さえとして置かれており、石垣前面の盛土と同時施工されている。前押さえの石材は戸室石で、断ち割りの外でもほぼ一列に並ぶのが確認できる。2640E 前面では前押さえ石を確認できなかったが、2620S は緩斜面上にあたるため前方への滑りを防止するために、設置した可能性が高い。

根石等の状況から、本石垣も現状は 17 世紀後半（石垣編年５期・寛文期）に築かれ、江戸後期に上部を修築したと考えられる。

調査終了後、2620S 前面の断ち割りを埋め戻す際には、前込めの栗石取り上げ範囲を明示するため、取り上げた栗石に、「〇」を墨書して埋め戻した。

４．小結

色紙短冊積石垣の東面において、土に埋まっていた基礎部を掘り下げたところ、上部と同じ様相の石積が最下段まで続いている状況を確認した。

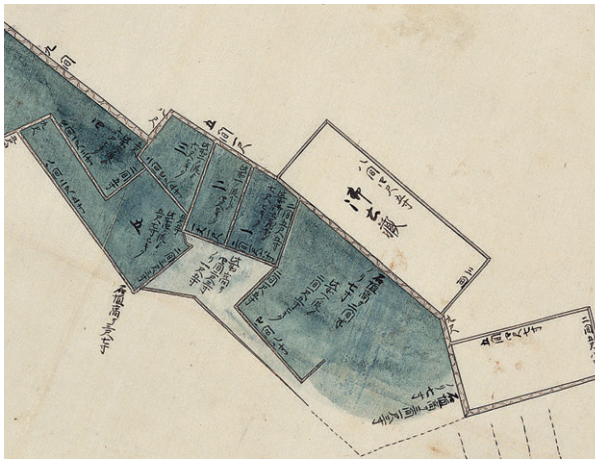
このことから、色紙短冊積石垣は、平面の設計プランも含めて 17 世紀後半（石垣編年５期）に新設されたと考えられる。

色紙短冊積石垣に隣接する納戸土蔵下石垣は、「金場取残積」と称される切石積の要素をもつもので、近世後期（18 世紀後半以降）の特徴がうかがえるが、その基礎部を掘り下げたところ、石垣編年５期に位置づけられる、典型的な金場取残積の石垣が確認された。

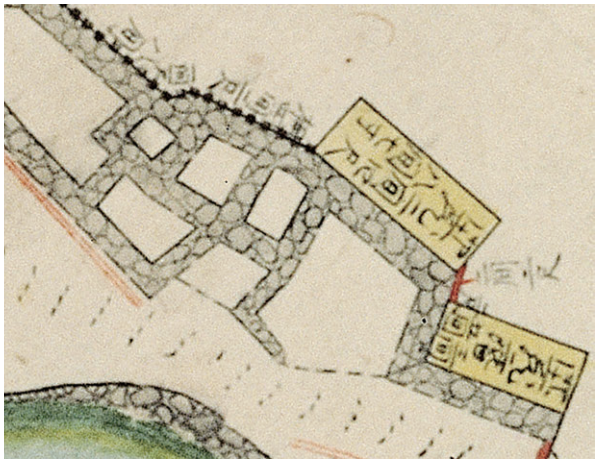
石垣が据えられた地盤の状況も含めて、納戸土蔵下石垣は、色紙短冊積石垣と同時期に構築されたと考えられる。今回の調査により、色紙短冊積石垣や付近の二ノ丸西側一帯において、切石積を核とした、多様でデザイン性に富む石垣景観が成立した時期は、17 世紀後半であることが明らかとなってきた。

寛文年間（1661 ～ 73）は、江戸で生まれ育った五代前田綱紀が入国し（寛文元年）、改めて金沢城の整備を進めた時期にあたり、玉泉院丸庭園における景観の一新も、その一環であったと考えられる。その具体的な年代については不明だが、先述したように、寛文２年（1662）と寛文７年（1667）に幕府へ提出する石垣修理願に添付するため作成された絵図面では、寛文２年は土羽、寛文７年では石垣が描かれている。寛文２年の絵図自体は省略された石垣も多く、土羽表現もそのためかと考えていたが、今回の調査成果を勘案すると、寛文２年段階では二ノ丸との境は土羽であったものが、寛文７年までの間に色紙短冊積石垣や周辺の雛壇石垣などの切石積石垣群に整備されたともみてとれる。

また昨年度の調査において、池周囲の石垣が 17 世紀後半に切石化し、池の形状変化とも連動していたとものと考えられ、これらのことから、玉泉院丸庭園では、作庭時（17 世紀前半）に匹敵する大規模な整備が、17 世紀後半に行われたことがうかがえる。

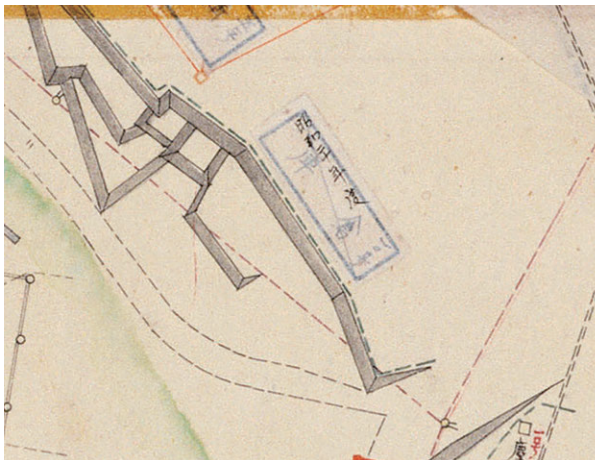


1．江戸前期（宝暦大火前）
「金沢城中地割絵図甲号（縮尺約百五十分一）　二之御丸・御数寄屋屋敷」
金沢市立玉川図書館蔵

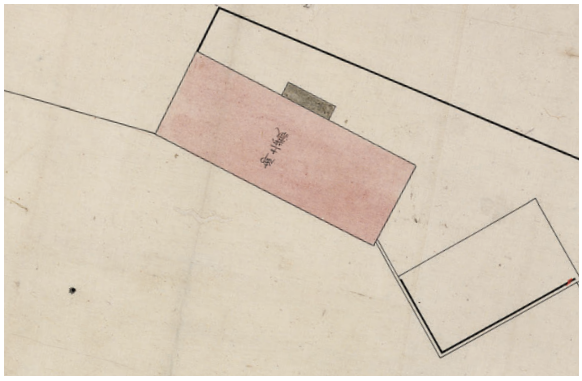


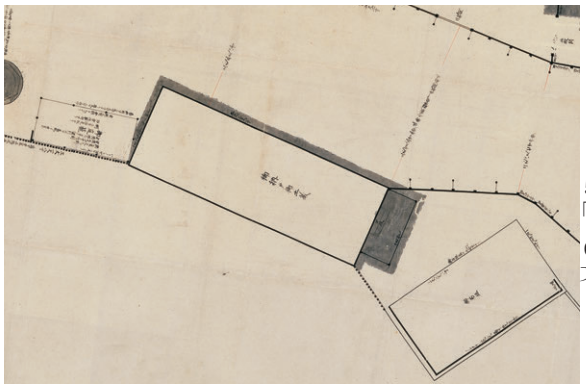
2．延宝４～元禄年間（1676 ～ 1704）　「金沢城絵図幅」
石川県立歴史博物館蔵

3．文政 13 年（1830）　「御城中壱分碁絵図」横山隆昭氏蔵



4．昭和 20（1945）年　「第五十二師団司令部図」
石川県立歴史博物館蔵

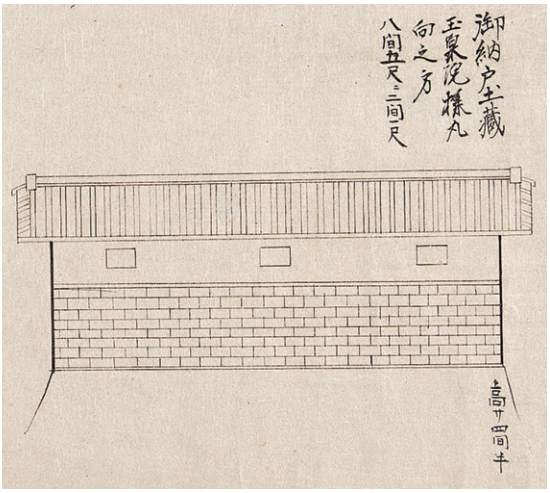




5．（上）北に出入口
「金沢城二の丸地図」石川県立歴史博物館蔵

6．（下）東に出入口
文政年間頃（1818 ～ 30）「金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図」
金沢市立玉川図書館蔵

納戸土蔵の入口の変遷



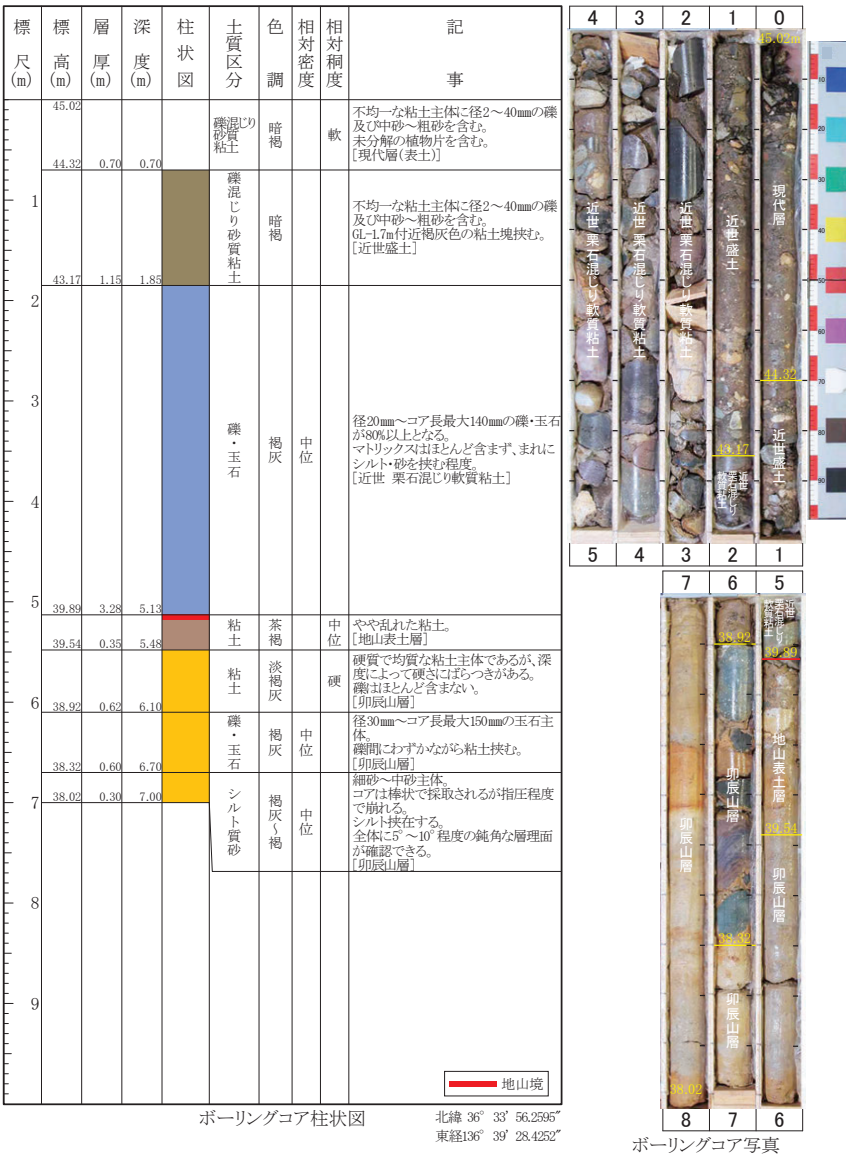
7．天保 15 年（1844）「加州金沢御城来因略記」石川県立図書館蔵

納戸土蔵立面図

第 87 図　玉泉院丸北周辺の変遷1

1．寛文２年（1662）「加州金沢城絵図」（公財）前田育徳会蔵　2．寛文７年（1667）「加州金沢城絵図」（公財）前田育徳会蔵

第 88 図　玉泉院丸北周辺の変遷2



第 89 図　納戸土蔵下前面ボーリングコア（BP74）

1．調査区全景（南東から）

2．調査区全景（東から）

第 90 図　玉泉院丸北遺構写真1

1．2640E（東から）

2．2640E前面断割り（東から）

3．2640E前面断割り　前込め検出状況（南から）

4．東西壁（南面）

5．東西壁（南面）Ⅲb層

第 91 図　玉泉院丸北遺構写真2

1．2620S（南から）

2．調査区東壁（東西アゼ上）

3．調査区東壁（東西アゼ下）

4．2620S前面断割り（前押さえ石）（西から）

5．2620S前面断割り（南から）

第 92 図　玉泉院丸北遺構写真3

1．表土層　板石検出状況（東から）

2．円礫検出状況（南から）

3．黄白色粘土層に含まれる腰瓦（南から）

4．遺構№1断面（西から）

5．2640W（色紙短冊積石垣西面）（西から）

第 93 図　玉泉院丸北遺構写真4

第４章　遺物

第１節　概要

切石積石垣確認調査の、数寄屋屋敷北、玉泉院丸南東、玉泉院丸北の３つの調査区から出土した遺物は、瓦を中心として、陶磁器、金属製品、石製品が認められる。テンバコ（内寸 540 × 340 × 150㎜）で、陶磁器類が４箱、瓦が 62 箱、金属製品３箱、石製品 36 箱である。第 94 図から 99 図、第 104 から 136 図は遺物の実測図及び写真、第７表から 24 表は計測値等を記載した観察表である。掲載方法は、材質ごとに分け、調査区ごとに土層・遺構単位でまとめ、更に器種や種別ごとに掲載している。遺物の計測箇所については、巻頭の凡例を参照していただきたい。瓦の分類については、瓦の図版の前に掲載した（第 100 ～ 103 図）。

第２節　陶磁器・土器

１．数寄屋屋敷北（第 94 図）

P01 ～ P05 は数寄屋屋敷北堀の上層、近代以後の堆積層であるⅠ層から出土した。このうち P03 は中国陶器華南三彩壺である。釉薬はほとんど剥落もしくは変色しているが、貼花文により唐草や蓮弁が表現されている。P04 は明治 14 年（1881）の二ノ丸火災に係る焼土層から出土した。瀬戸産とみられる既製の磁器染付碗に赤の上絵付で圏線や縦線、算用数字の「２」を施した製品である。算用数字が特徴的な碗・皿は、この他に染付と色絵（青）の製品があり、城内各所から出土している。陸軍第七連隊に関わる食器類と考えられるが、採用の経緯や出現から廃絶までの動向、具体的な使用状況など不明な部分が多い。

P06 ～ P09 は、近世の堆積層であるⅡ層から出土した。P06・P07 は同巧の磁器染付皿で、再興九谷のひとつ若杉窯の製品とみられる。Ⅰ層出土の P05 も同様の文様をもつ若杉窯製品で、本来はⅡ層に包含されていたものであろう。P08・P09 は、Ⅱ層の下部、堀底に構築された河原石積水路の埋土に包含されていた。P08 は肥前磁器白磁の小皿である。P09 は在地産の土師器皿で、小型の平坦な底部から体部がやや開き気味に立ち上がる器形から、17 世紀後半の年代的特徴が窺える。水路やこれに接続する数寄屋屋敷北石垣下部の樋門、ひいては数寄屋屋敷北の堀とつながっていた数寄屋屋敷東の堀（中央部）の廃絶年代を示唆するものである。

２．玉泉院丸南東（第 95・96 図）

P10 ～ P16 は表土層、P17 ～ P20・P22 ～ P24 は近代の盛土層から出土した。P13 は近代の色絵磁器製品、P22 は古代の須恵器蓋、その他は近世の製品である。P10・P11 は肥前磁器染付皿・蓋物蓋、P19 は碗である。P14・P17・P18・P20 は陶器で、P14 は再興九谷灰釉碗、P17 は産地不明端反碗、P18 は肥前陶胎染付碗、P20 は瀬戸・美濃灰釉碗である。P12・P16・P23 は 17 世紀前半の土師器皿、P15・P24 は土器火鉢である。P21・P25 は 17 世紀後半に施された盛土層（Ⅲ層）から出土した。P21 は土師器皿、P25 は肥前磁器染付碗で、17 世紀前半代に製作されたとみられる。P26 は土人形である。表土～近代盛土層の出土品であるが、玉泉院丸は城内で土人形が最もまとまって出土している地点であり、二ノ丸御殿からの廃棄、玉泉院丸庭園での遊興などとの関連が想定される。

３．玉泉院丸北（第 97 ～ 99 図）

P27 ～ P37 は表土及びⅠ層から出土した。このうち P33 は肥前陶器灰釉碗で、17 世紀後半～ 18 世

紀前半に属する。その他はおよそ明治初期を主体とする年代が考えられる。P27 は瀬戸・美濃磁器染付皿、P30 は再興九谷磁器の色絵碗で、高台内に「九谷庄三」銘がある。P28・P29・P31 は、既製の瀬戸・美濃染付磁器碗・皿に赤絵の上絵付で圏線・縦線・算用数字（「１」「３」「４」）等を描いた製品である。このうち P29 は、P27 と同巧の製品に絵付したものである。P32 は粒子が目立つやや質の悪い白磁皿で、再興九谷の製品と思われる。本個体には絵付の痕跡は認められないが、同様の白磁に青の上絵付で算用数字等を描くタイプの製品も存在する。本個体が、本来は絵付まで施される素材であったとすると、上絵付が城内で行われていた可能性も考えられる。P34・P35・P37 は角形の火鉢類である。P36 は円筒形の火鉢で、近世に遡る可能性がある。

P38・P39 はⅡ層の下部から出土した土師器皿である。P38 が 17 世紀初期、P39 が 17 世紀前半の製作年代を示す。ただしⅡ層は石垣との関係から近世後期に造成されたと考えられ、施工の年代を反映するものではない。

D01 は遺構№.1、D02 はⅠ層から出土した。白色半透明を呈する陶磁器製のボタンである。1850 年代以降欧米で広く普及したプロッサーボタン（Prosser Buttons）と呼ばれる製品で、陸軍の被服品として使用されたと想定される。D03 はビーズである。

第３節　瓦

１．数寄屋屋敷北（第 104 ～ 108 図）

T01 ～ T08 は、堀底入隅部で石垣基礎前面の整地土（Ⅱ層）から出土した。このうち T06 は石組水路（河原石積）裏込めから出土した。いずれも燻瓦である。T01 は軒丸瓦で、瓦当は珠文を巡らす左回りの三巴文（巴Ⅱ -1）である。T02 は丸瓦である。全体的に重厚な作りで裏面（凹面）の切り離しはコビキ B を示す。T03 ～ T05 は軒平瓦で、瓦当文はそれぞれ三葉文Ⅲ・Ⅳ・Ⅴに相当する。T03 には瓦当本体右側に丸に十字の刻印がある。T06 は平瓦で、前方の狭端面が平滑に調整され、上辺が小さく面取りされている。T07 は道具瓦、T08 は鬼瓦である。T26 は平瓦の小片で狭端面に刻印がある。

Ⅱ層出土の燻瓦は、年代的特徴にまとまりがあり，17 世紀前半に盛行していた一群と考えられる。この頃付近の建物に葺かれた瓦とすると、17 世紀後半の石垣構築時に整地土に含まれたとしても矛盾はない。

T09 は石組水路埋土から出土した丸瓦である。Ⅱ層出土資料の T02 と類似した特徴を示す。

T10 ～ T20・T22・T23 は、Ⅰ層に含まれる焼土層とその下位から出土した。焼土層出土の瓦は、T15･T17 のような腰瓦を除くと釉薬瓦が主体である。T10･T22 は軒丸瓦で、瓦当文は剣梅鉢（梅鉢文Ⅲ）である。T11 ～ T13･T23 は丸瓦である。光沢の乏しい黒褐色の釉薬が、表面（凸面）の全体に掛かる。裏面は玉縁側から頭に向かって流し掛けられた状態となっている。T12 の玉縁端面、T23 の裏面側縁上部に㐅の刻印がある。T14 は軒平瓦で、瓦当文は梅鉢文Ⅲである。裏面（凸面）の釉薬は前面の瓦当付近のみに掛かる。T15・T17 は腰瓦で、ともに燻瓦であるが、T17 は被熱により大部分が赤色化している。T16 は軒桟瓦で、瓦当文は菊文Ⅵの可能性がある。T18・T20 は熨斗瓦、T19 は棟瓦である。T21 の軒丸瓦・T24 の軒桟瓦は焼土層より上位から出土した。

焼土層については、先述のとおり明治 14 年（1881）の二ノ丸火災に関連して形成されたと考えられる。瓦の構成をみると、屋根瓦は釉薬瓦であり、本瓦葺と桟瓦葺の二種が存在するが、出土量からすると前者が優勢な状況にある。なお、調査対象とした石垣上に建つ雛土蔵は、文化５年（1808）の二ノ丸火災後の再建において屋根は土瓦葺とされた（『御造営方日並記』［石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004b］）。また文化７年（1810）の景観を描く『金沢城二之丸御殿明細図』（金沢市立玉川図書館蔵）では、雛土蔵の屋根は本葺（本瓦葺）との記載がある。さらに嘉永３～５年（1850 ～ 52）頃の景観を示す『金沢城二之御丸三歩碁図』Ａ（石川県立図書館蔵）でも、土瓦葺の表現となっ

ている。

出土した資料自体が、再建時当初のものかどうかは検討を要するが、雛土蔵等調査区周辺の建造物で使用されていた可能性が考えられる。

２．玉泉院丸南東（第 108・109 図）

T27 ～ T33 は近代の黄褐色盛土層、T34 ～ T40 は表土から出土した。近世前期～後期までの資料が混在している。T27・T34 の軒丸瓦、T29 の軒平瓦、T30 ～ T32・T37 ～ T40 の平瓦は、17 世紀前半から半ばまでに製作されたと考えられる。T35 の腰瓦も、側辺に配された窪みの形状から、近世前期に遡るとみられる。T33 は軒桟瓦の小丸部とみられるが、燻製品の数量は少ない。T28 は丸瓦、T36 は熨斗瓦で、いずれも釉薬瓦である。

３．玉泉院丸北（第 109 ～ 121 図）

T41 はⅡ層、T42・T87 はⅡ -b 層から出土した。T41 は小型の腰瓦である。T42 は唐草文の瓦当を有するもので種類は判然としない。T87 は道具瓦で、花文の刻印がある。

T43 ～ T55 はⅡ -a 層（黄白色粘土層）から出土した腰瓦である。T43・T54 はおおよそ全容が窺える個体で、一辺約 30cm、厚さ２cm 台を測るほぼ正方形の板状を呈する。四方の側縁中央に長軸約 2cm、深さ 1cm 程度の半円形の窪みが施されている。T44 ～ T47・T49・T52・T53・T55 も同様の腰瓦であるが、一辺のみ残し、対辺側を打ち欠き削って長方形となるよう加工されている。また T48 は鍵型に整形されている。T50・T51 は、建物や塀の隅に使われた腰瓦である。これらは腰瓦を取り付ける壁面の寸法や、通風孔等に対応するよう二次的に調整されたものと考えられる。T44 や T52 では、海鼠漆喰で塗りこめられた範囲と、露呈していて表面の黒色が薄れた範囲との差異が明瞭であり、新材であっても調整処理されていると考えられる。黄白色粘質土出土の腰瓦には、このように調整された材の比率が高い。元の建物（この場合、すぐ上位に建つ納戸土蔵が想定される）の壁の端に相当する部分がまとまって堆積したか、あるいは黄白色粘質土に意図的に混ぜ込む骨材として、扱いやすい寸法のものを選別したか、いくつかの可能性が考えられる。

T56 ～ T86、T88 ～ T92 はⅠ層から出土した。Ⅰ層は近代以後に形成された土層で、新旧の遺物が混在している。燻瓦は軒丸瓦（T56・T89・T90）、軒平瓦（T88・T91・T92）、丸瓦（T57）、平瓦（T58・T68・T69）、熨斗瓦（T84）等が若干あるが、多くは腰瓦（T63・T64・T75 ～ T82）である。下層にあたるⅡ層・黄白色粘土層出土資料に比べ、四辺中央の凹みはやや小型で浅いものが多い。ただし T77 は凹みの平面が矩形を呈し、他と異なる。

Ⅰ層では燻瓦より釉薬桟瓦類が主体となっている。T60 ～ T62・T70 は軒桟瓦である。これらの瓦当は、T60 は菊文Ⅲ -1、T61 が菊文Ⅲ -3、T62 が一文字瓦、T70 は桜文である。T60 は尻側に２箇所小孔がある。裏面後半部が露胎となり、釉薬の色調は暗赤褐色とやや明るい。T61・T62・T70 は全体に釉薬が掛かり、色調は黒褐色を呈する。T61 の尻側の小孔は１箇所である。T71 ～ T74 は桟瓦である。T71・T74 は裏面後半部が露胎、T72 は全体に釉が掛かる。T73 は桟部に雪止めを伴う。T59・T83 は棟と桟瓦の隙間を塞ぐ面戸瓦である。T85・T86 は熨斗瓦である。これら釉薬桟瓦類は、近世末期～近代にかけての使用年代が考えられる。P70 については、瓦当文の様式からみて陸軍営所期に下ると思われるが、その他も含め詳細な時期の特定が課題である。

４．小結

切石積石垣確認調査では、瓦が多数出土したが、石垣構築と強く関連するものは少ない。このうち数寄屋屋敷北調査区において、雛土蔵下石垣西面・数寄屋屋敷北石垣北面の基礎前面を抑える造成土

中から出土した燻瓦の一群は、17 世紀前半を使用時期とするもので、石垣の構築年代を瓦の盛行時期より降る 17 世紀後半とするのに矛盾のない結果を得た。

この他、玉泉院丸北調査区において、腰瓦を多数包含していた黄白色粘土については、近世後期の石垣改修と関連して施工されたと考えられるが、腰瓦の年代観は近世前期の範疇で考えざるを得ず、詳細な特定は困難である。

調査目的と直結しないが、数寄屋屋敷北調査区の上層で認められた明治 14 年（1881）の焼土層に伴う瓦については貴重な所見が得られた。文化６・７年（1809・10）の二ノ丸御殿再建時の普請作事史料である『御造営方日並記』では、調査区に接する雛土蔵の屋根について、鉛瓦がすぐに用意できず、当分の間土瓦とすること、また同じ頃の『金沢城二之丸御殿明細図』には本葺（本瓦葺）であったことなどが記されている。ただし 1850 年代の景観を描いた絵図においても、雛土蔵は土瓦葺の表現となっている。

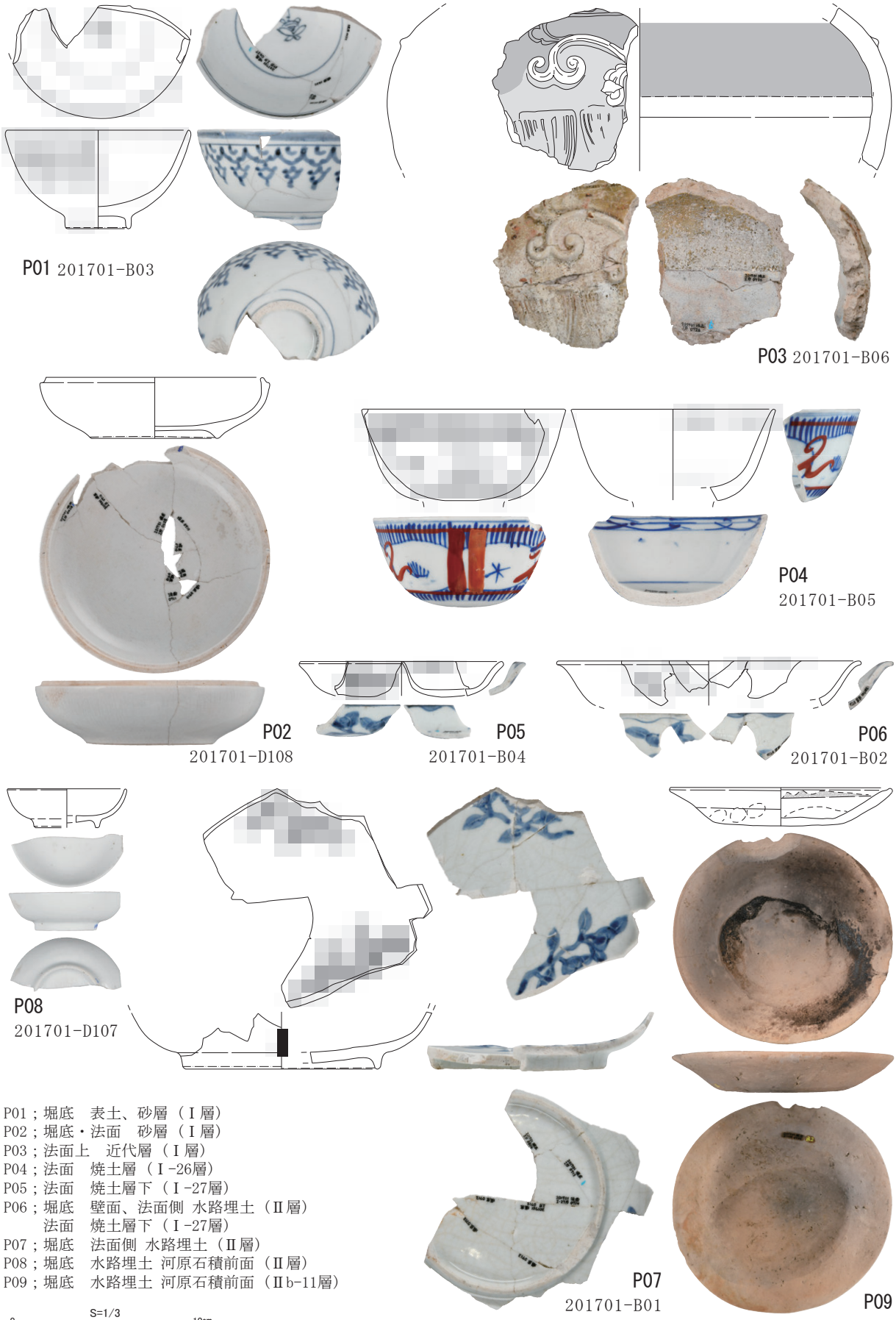
発掘調査では、明治 14 年（1881）に廃棄された釉薬瓦（陶器瓦）の軒丸瓦・丸瓦が出土した。なお『御造営方日並記』では、雛土蔵等の屋根瓦を納入した人物として「八幡村彦八」を挙げている。焼土層に伴う釉薬瓦は、小松市八幡で生産された瓦と考えられる点も整合的である。

上記文献記載には、燻・釉薬の別が示されていないが、現在知られている八幡産瓦は釉薬を施した陶器瓦であり、19 世紀初頭の金沢城では、釉薬瓦が用いられたとみるのが妥当であろう。なお、八幡瓦の年代観では、大別して近世に属するものは赤褐色の釉薬により、近代以降、黒褐色系統の釉薬が流行するとの見方がある。金沢城内で出土している八幡瓦は、大半が暗褐色～黒褐色を呈しており、これらが 19 世紀初頭に遡るのかどうかが課題となっている。

この点について、鶴ノ丸第１次調査区において検出された辰巳用水の導水管本体直下において、黒褐色の釉薬が施された瓦片を検出した事例がある。この調査区では、用水経路が複数確認されたが、対象の部分は、遺構間の切合関係や年代が特定できる絵図との照合から、文化～天保初め頃に機能していたと考えられている［石川県金沢城調査研究所 2016d］。この瓦片については取り上げていないため詳細が不明であり、文化初年の八幡瓦の釉薬が、黒褐色主体であったとは言い切れないが、19 世紀前半には黒褐色の釉薬瓦が存在していたことは確かである。

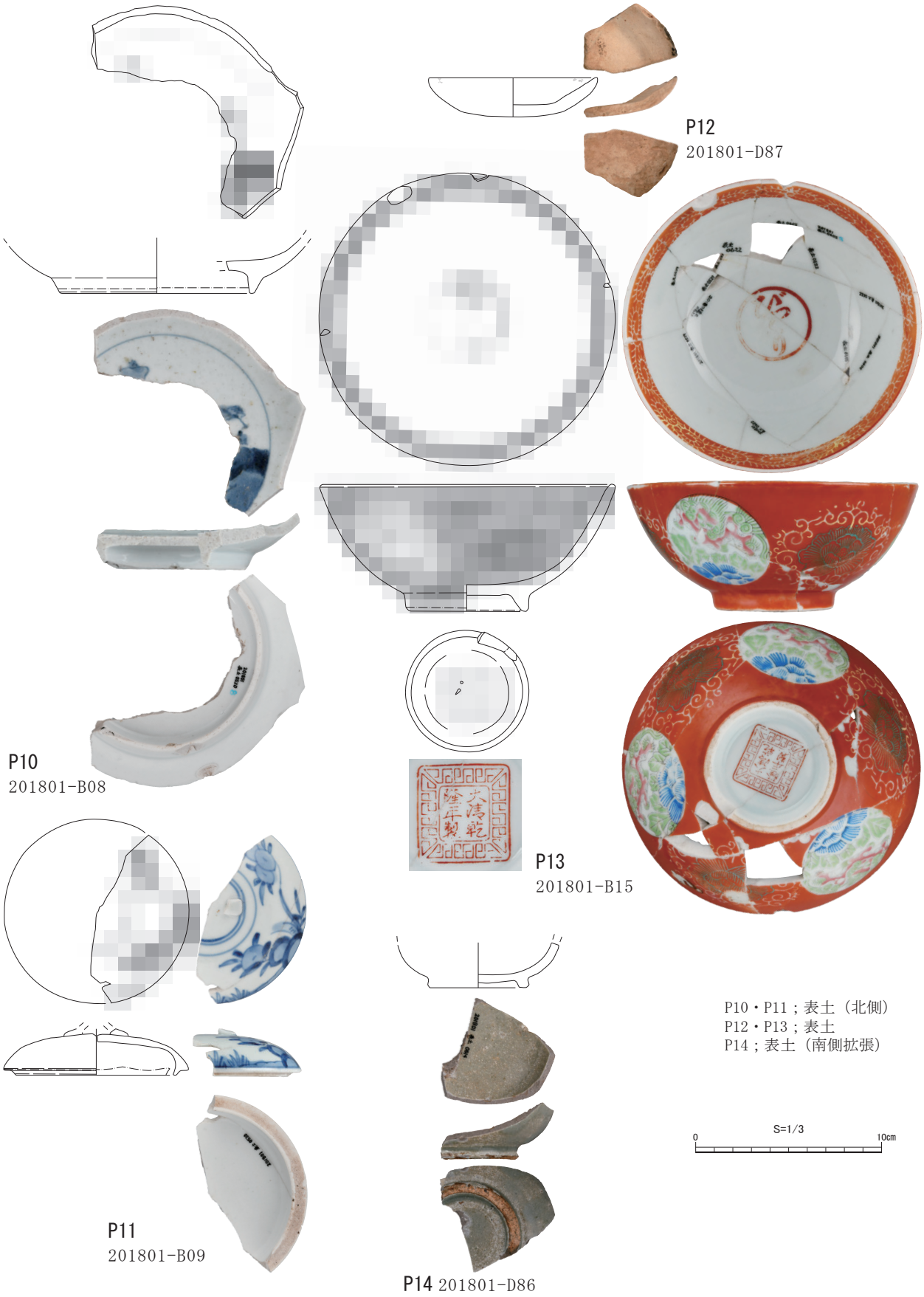
釉薬瓦についてはこの他、玉泉院丸北調査区のⅠ層において、調査区北側上部の二ノ丸石垣縁辺に建っていた納戸土蔵のものとみられる石製腰板とともに、桟瓦葺に係る種類がある程度まとまって出土している。ただし近代に下る製品が含まれることも十分考えられる。

瓦の産地については、瓦当文や調整技法、胎土や釉薬の状況や、文献の記載等から、複数グループの存在が想定されるが、確定に至っていないものが多い。『御造営方日並記』には、瓦の供給地、あるいは供給者に関わり、本吉（能美市）、八幡村（彦八）・蓮代寺村（作右衛門、以上小松市）といった地名が見える。また「瓦師平兵衛」として記載される人物は、別史料より金沢城下卯辰山山麓に窯を構えた卯辰平兵衛に比定される。このうち八幡については、伝世品や出土資料［（財）石川県埋蔵文化財センター 2013］等があり、現地で生産された製品の特徴が明らかで、金沢城跡出土資料との対比が進んでいる。そのほか卯辰山製品など、刻印を有する資料などからおおよそ比定し得るものもあるが、なお課題が多いのが実情である。

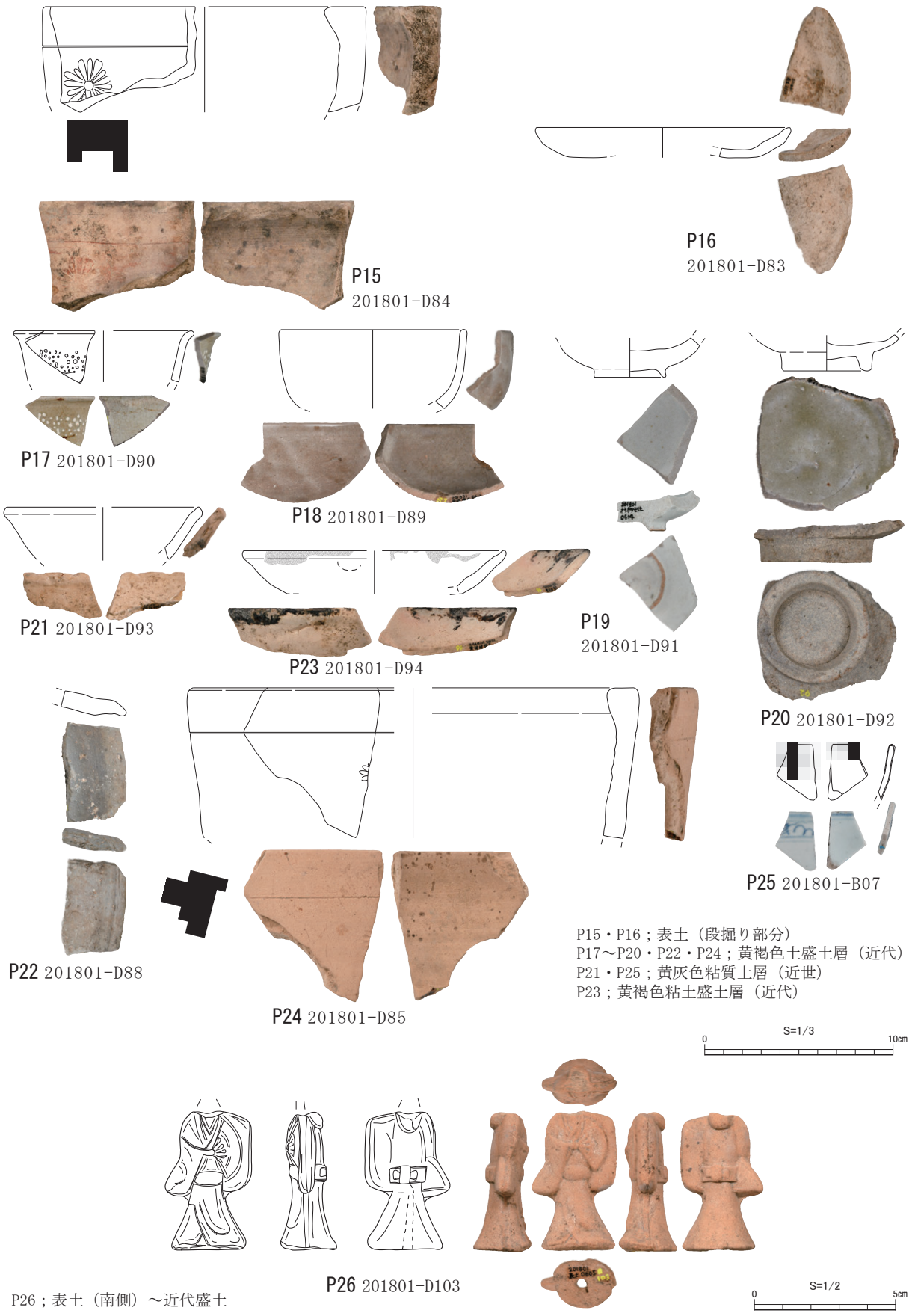


P01；堀底　表土、砂層（Ⅰ層）
P02；堀底・法面　砂層（Ⅰ層）
P03；法面上　近代層（Ⅰ層）
P04；法面　焼土層（Ⅰ-26層）
P05；法面　焼土層下（Ⅰ-27層）
P06；堀底　壁面、法面側 水路埋土（Ⅱ層）
　　法面　焼土層下（Ⅰ-27層）
P07；堀底　法面側 水路埋土（Ⅱ層）
P08；堀底　水路埋土 河原石積前面（Ⅱ層）
P09；堀底　水路埋土 河原石積前面（Ⅱb-11層）

第 94 図　出土遺物　陶磁器・土器1　数寄屋屋敷北



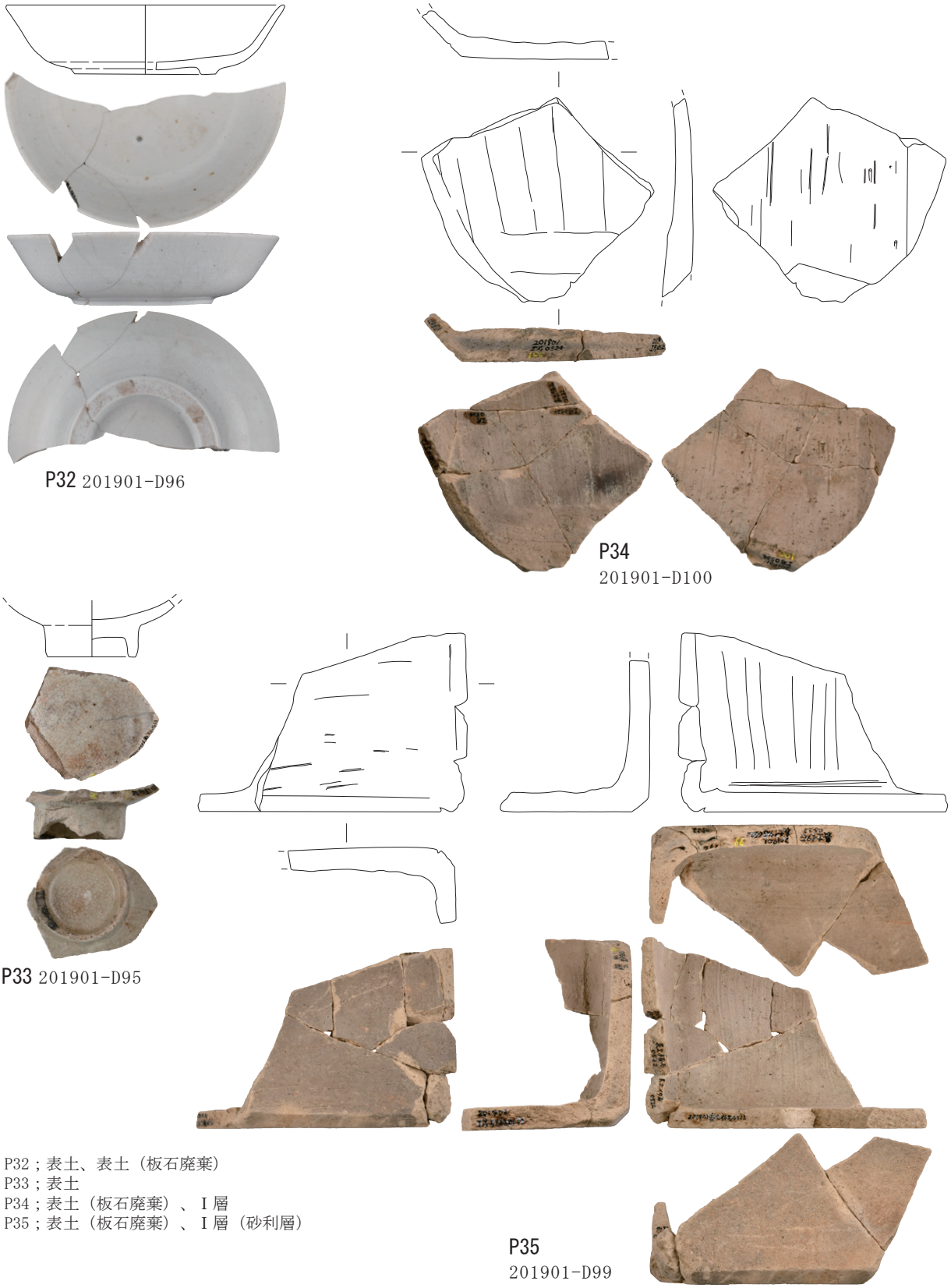
第 95 図　出土遺物　陶磁器・土器2　玉泉院丸南東



第 96 図　出土遺物　陶磁器・土器3　玉泉院丸南東

P27；表土、表土（板石廃棄）、Ⅰ層
P28；表土（板石廃棄）
P29；表土、表土（板石廃棄）
P30・P31；表土

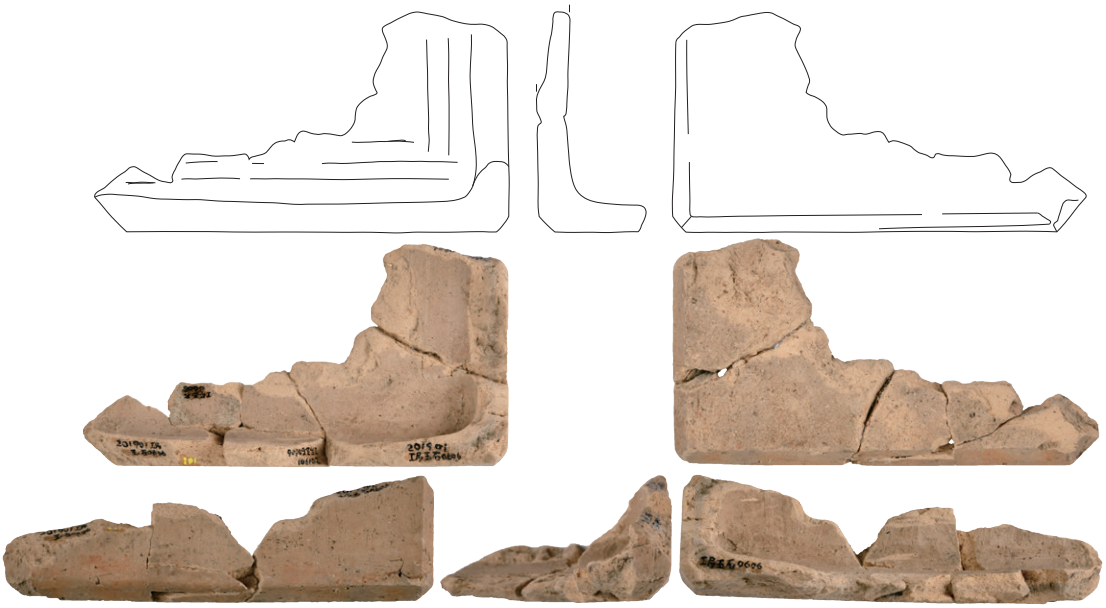
第 97 図　出土遺物　陶磁器・土器4　玉泉院丸北



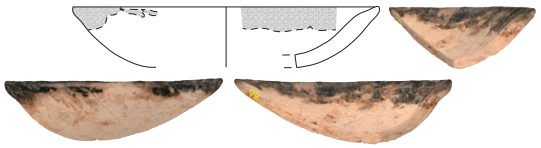
P32；表土、表土（板石廃棄）
P33；表土
P34；表土（板石廃棄）、Ⅰ層
P35；表土（板石廃棄）、Ⅰ層（砂利層）

第 98 図　出土遺物　陶磁器・土器5　玉泉院丸北

P36
201901-D102



P37 201901-D101



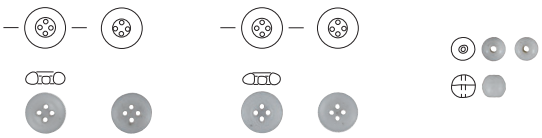
P38 201901-D98

P39 201901-D97

S=1/3

0 10cm

P36；表土（板石廃棄）、黄白色粘土層 断割り
P37；Ⅰ層（玉石）
P38；Ⅱ層 サブトレ（アゼ下）
P39；Ⅱ層 サブトレ（アゼ下）、Ⅱ層（黄橙色粘土粒含む）（アゼ下）



D01
201901-D109

D02
201901-D108

D03
201901-D107

S=1/2

0 5cm

D01；遺構No.1
D02；Ⅰ層（砂利層）
D03；表土（板石廃棄）

第 99 図 出土遺物 陶磁器・土器6 玉泉院丸北

巴文Ⅰ

200603-D097

・珠文なし
・巴　左回り

巴文Ⅱ-1a

200703-D003

・珠文あり
・巴　左回り
・前の尾部が次の巴頭部まで

巴文Ⅱ-1b

200703-D016

・珠文あり
・巴　左回り
・前の尾部が次の尾部の中程まで

巴文Ⅱ-1c

200003-D081

・珠文あり
・巴　左回り
・前の尾部が２つ目の巴頭部まで

巴文Ⅱ-2a

199801-D122

・珠文あり
・巴　右回り
・前の尾部が次の巴頭部まで

巴文Ⅱ-2b

200703-D011

・珠文あり
・巴　右回り
・前の尾部が次の尾部の中程まで

巴文Ⅱ-2c

200703-D010

・珠文あり
・巴　右回り
・前の尾部が２つ目の巴頭部まで

梅鉢文Ⅰ-1a

200703-D018

・軸なし
・花弁と花芯が同じ大きさ
・花弁から花芯までの距離短い

梅鉢文Ⅰ-1b

200703-D013

・軸なし
・花弁と花芯が同じ大きさ
・花弁から花芯までの距離長い

梅鉢文Ⅰ-2

200703-D019

・軸なし
・花弁より花芯が小さい

梅鉢文Ⅱ-1

200703-D001

・軸あり
・花弁と花芯が同じ大きさ

梅鉢文Ⅱ-2

200703-D017

・軸あり
・花弁より花芯が小さい

梅鉢文Ⅲ

201204-T011

・軸あり
・花芯側軸間に突起（剣）あり

※瓦の文様分類については、 石川県金沢城調査研究所 2019c から転載した。

第 100 図　軒丸瓦　瓦当文様分類

三葉文Ⅰ

199801-D149

200704-D215

中心飾りの三葉文の横に、下向きに２本、唐草が巻く。その外側下向きの唐草の巻きは繋がっていて、上方先端は枝毛状。

三葉文Ⅱ

200704-D216

中心飾りの三葉文の横の下向き唐草は１本。その外側は唐草が「川」の字状に伸びる。上方先端は枝毛状。

三葉文Ⅲ

200704-D217

中心飾りの三葉文の横の下向き唐草は１本。先端まで数本の唐草で構成されている。三葉間はあまり開かない。

三葉文Ⅳ

200704-D218

中心飾りの三葉文の間が開き、唐草は繋がっていない。全体的に簡略化される。

三葉文Ⅴ

200201-D052

中心飾りの三葉文が花弁のように幅を持ち、唐草は全て下向きに巻く。

三葉文Ⅵ

200301-D057

中心飾りの三葉文の間は開き、唐草は１本ずつ独立して、上下交互に巻いている。

三葉文Ⅶ

200201-D053

中心飾りの三葉文は開き、横の下向き唐草は１本で巻きが浅い。その外側の唐草は、２本が交差して延び、下向きに浅く巻いている。その外側にも下向きの唐草がある。

垂下型三葉文

201204-T029

中心飾りの三葉文が下を向き、上に小さな葉が２枚つく。第１唐草が下向きに深く巻き、途中から上向きの唐草が枝分かれしている。第２唐草も第１唐草から枝分かれして、先端は上下に分かれて巻き、間に蕾状のものがある。

半葉文

200201-D140

中心飾りは輪郭線で描かれた葉の上半分。外側に、下向きに巻く葉と上向きに巻く唐草がある。

※瓦の文様分類については、 石川県金沢城調査研究所 2019c から転載した。

第 101 図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類1

梅鉢文Ⅰ

200703-D024

中心飾りは梅鉢文。第１唐草が第２唐草に添って上下に巻く。第２唐草は末端が上向きに巻く。

梅鉢文Ⅱ

200703-D025

中心飾りは梅鉢文。唐草は中心飾りに近い側で３本。第１唐草は上が下より開く。第２唐草は末端の巻きが大きく、下向きに巻く。

梅鉢文Ⅲ－１

200503-D011

中心飾りは梅鉢文。第１唐草の開きは上下同幅。下が上に比べ潰れている。末端の巻きは浅く、上を向く。

梅鉢文Ⅲ－２

200503-D013

中心飾りは梅鉢文。第１唐草は下が上より開き、上に比べ潰れている。末端の巻きは浅く、上を向く。

梅鉢文Ⅳ

199801-D156

中心飾りは梅鉢文。唐草は菊文Ⅲ－３と類似して、中心飾りを包むような第１唐草と屈曲の深い第２唐草からなる。

桜文

200603-D049

中心飾りは桜文。 第１唐草から第２唐草へは途切れずに続いている。

九曜文

200003-D147

中心飾りは九曜文。唐草は簡略化され、第１唐草から第２唐草へは途切れずに続いている。菊文Ⅲが変化したものかもしれない。

星文

200003-D148

中心飾りは星文。唐草は巻きが浅く、第１唐草が下に巻き、第２唐草が上に巻いて枝分かれしていて、他の唐草文とは逆になっている。

※瓦の文様分類については、 石川県金沢城調査研究所 2019c から転載した。

第 102 図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類2

菊文Ⅰ

201106-D071

中心飾りの菊は花弁 10 枚。線は華奢で、稜がはっきりしている。唐草は上向きに巻く。

菊文Ⅱ

200802-D001

中心飾りは 10 弁の菊花文。唐草は巻きが浅く、第 2 唐草は末端が下を向く。

菊文Ⅲ－１

200603-D050

中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は幅があり、輪花状になっている。第１唐草は中心飾りの菊花文を包むように上に延びて、第２唐草は下向きに巻いて、先端で枝分かれしている。

菊文Ⅲ－２

200603-D052

中心飾りはⅢ－１より丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は簡略化され、先端で枝分かれしなくなる。

菊文Ⅲ-3

201106-D026

中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は簡略化されて輪花状ではなくなり、第２唐草の屈曲が深い。

菊文Ⅲ－４

201204-T014

中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。第２唐草は第１唐草の途中から出て、横へ延びた後、上に延びる。

菊文Ⅳ－１

200802-D003

中心飾りは稜のはっきりした 8 弁の菊花文。第 1・第 2 唐草とも枝分かれせず、第 2 唐草は曲がりながら上へ延びる。

菊文Ⅳ－２

200802-D005

中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は菊文Ⅳ－１と同じ。

菊文Ⅴ

200802-D004

中心飾りは 8(?) 弁の菊花文。第 1 唐草は上下に緩く巻き、第 2 唐草は、枝分かれしたものが上に強く巻いている。

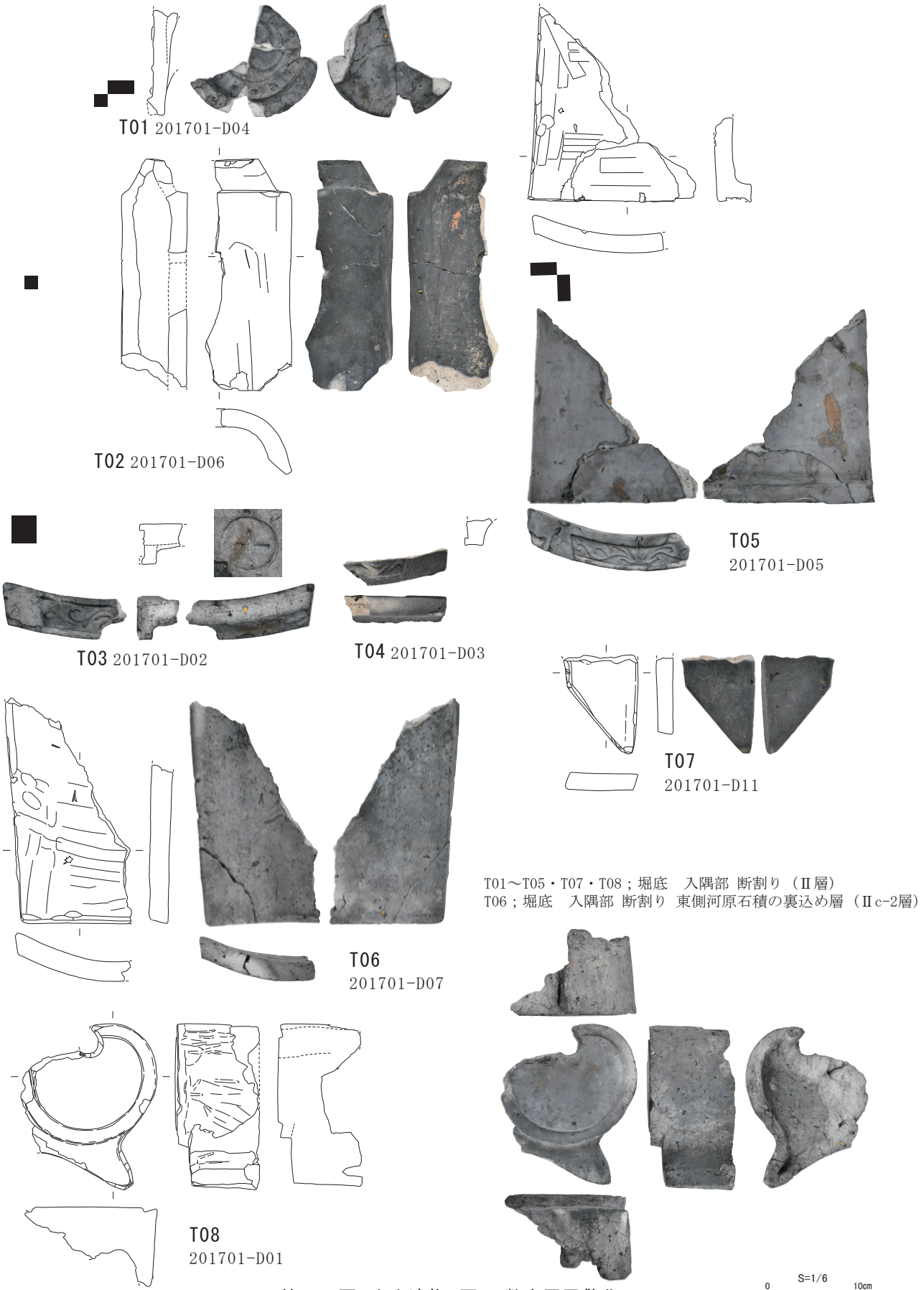
菊文Ⅵ

199904-D295

中心飾りは稜のはっきりした 8 弁の菊花文。唐草は、梅鉢文Ⅲ－１と同じく、第 1 唐草の開きが上下同幅で、下が上に比べ潰れ、末端の巻は上を向く。

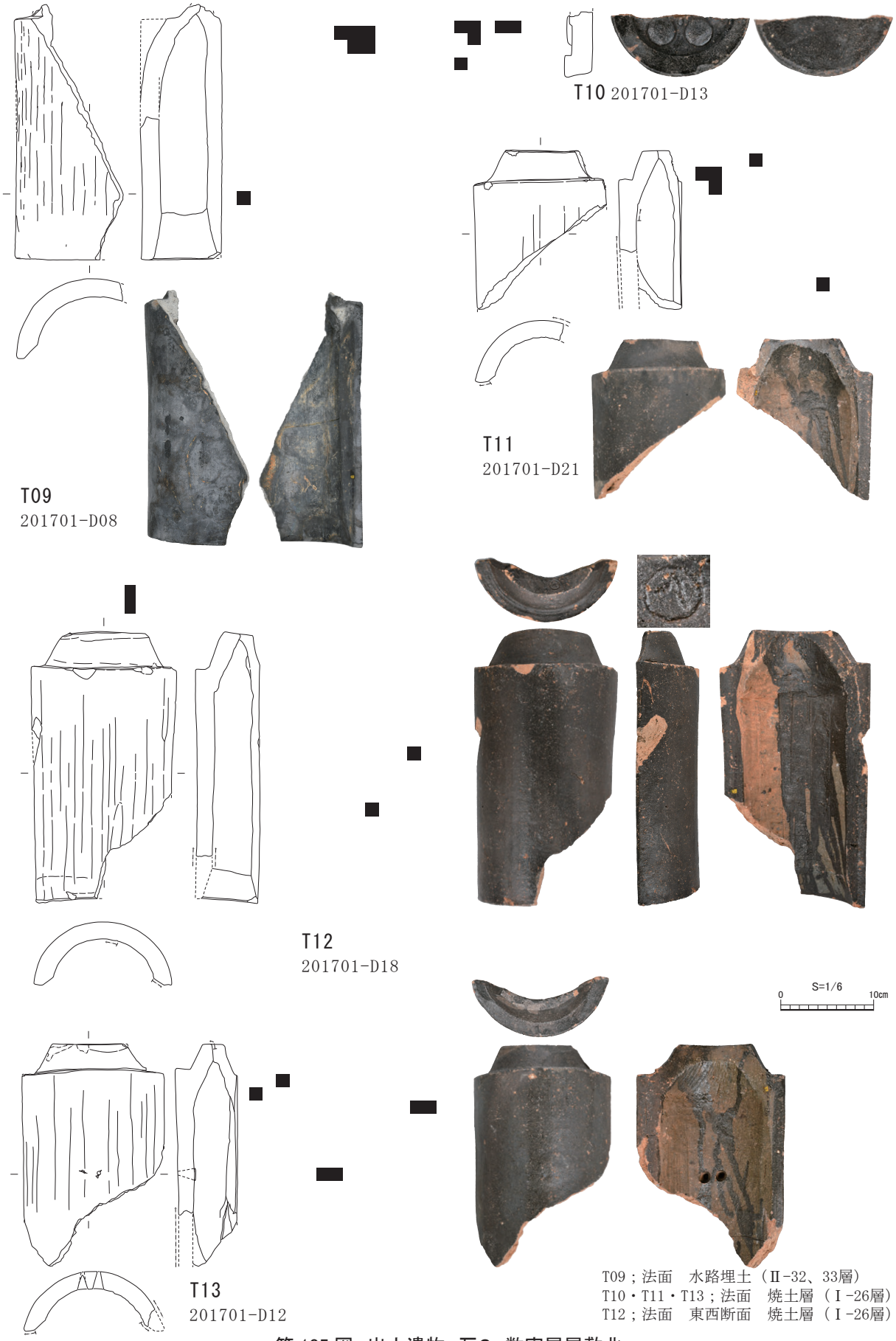
※瓦の文様分類については、 石川県金沢城調査研究所 2019c から転載した。

第 103 図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類3



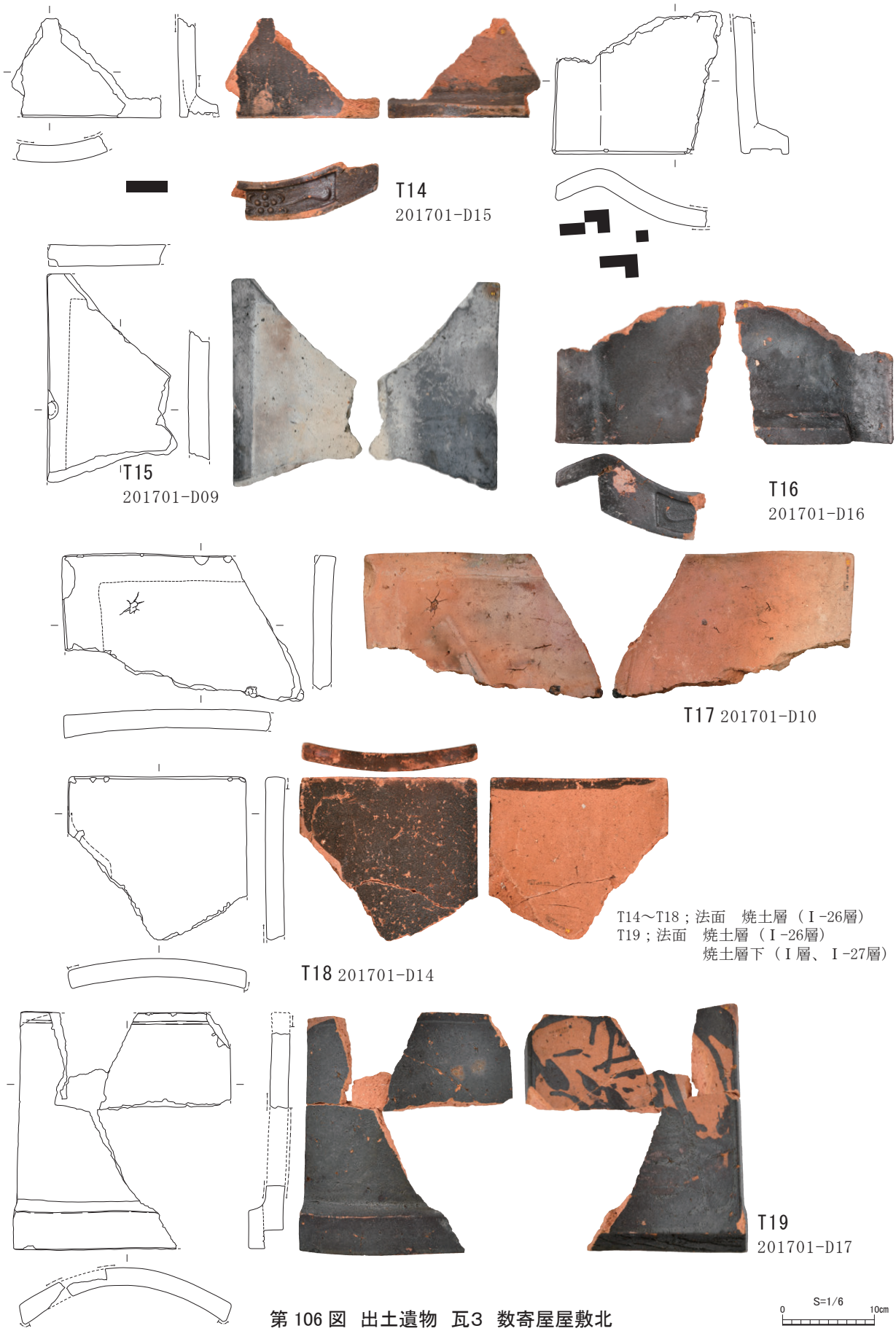
T01～T05・T07・T08；堀底　入隅部 断割り（Ⅱ層）
T06；堀底　入隅部 断割り 東側河原石積の裏込め層（Ⅱc-2層）

第 104 図 出土遺物 瓦1 数寄屋屋敷北

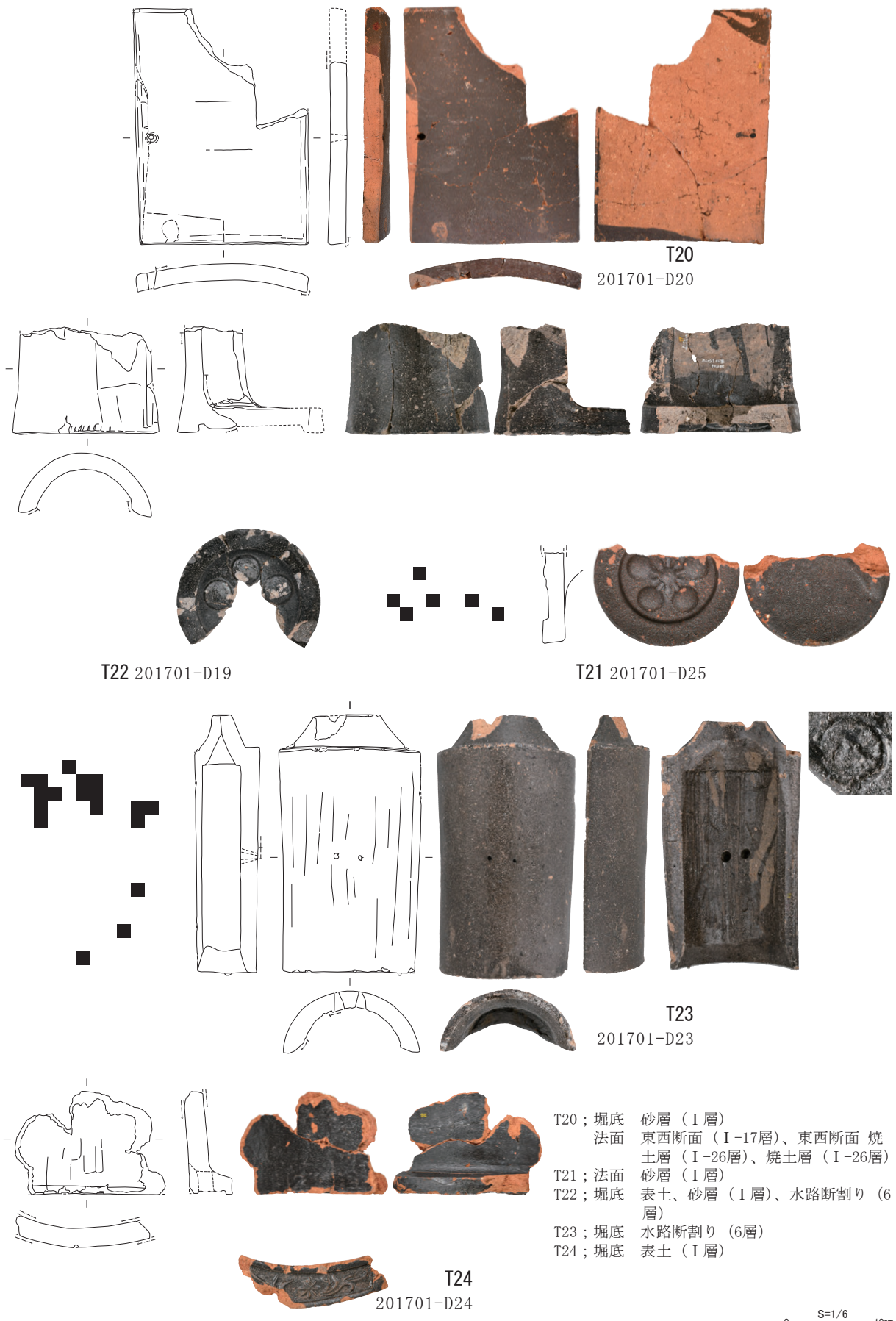


T09；法面　水路埋土（Ⅱ-32、33層）
T10・T11・T13；法面　焼土層（Ⅰ-26層）
T12；法面　東西断面　焼土層（Ⅰ-26層）

第 105 図　出土遺物　瓦2　数寄屋屋敷北

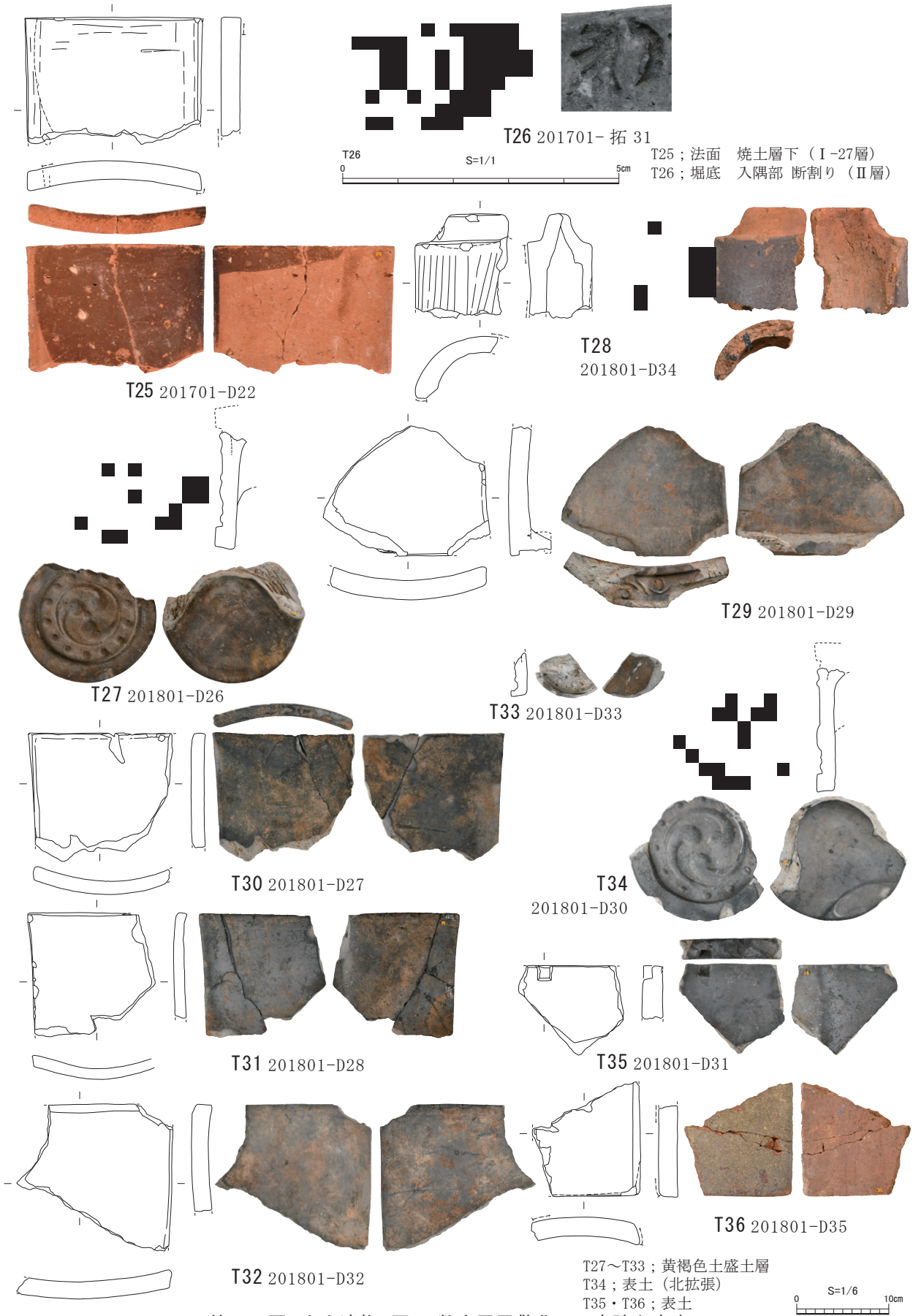


第 106 図　出土遺物　瓦3　数寄屋屋敷北

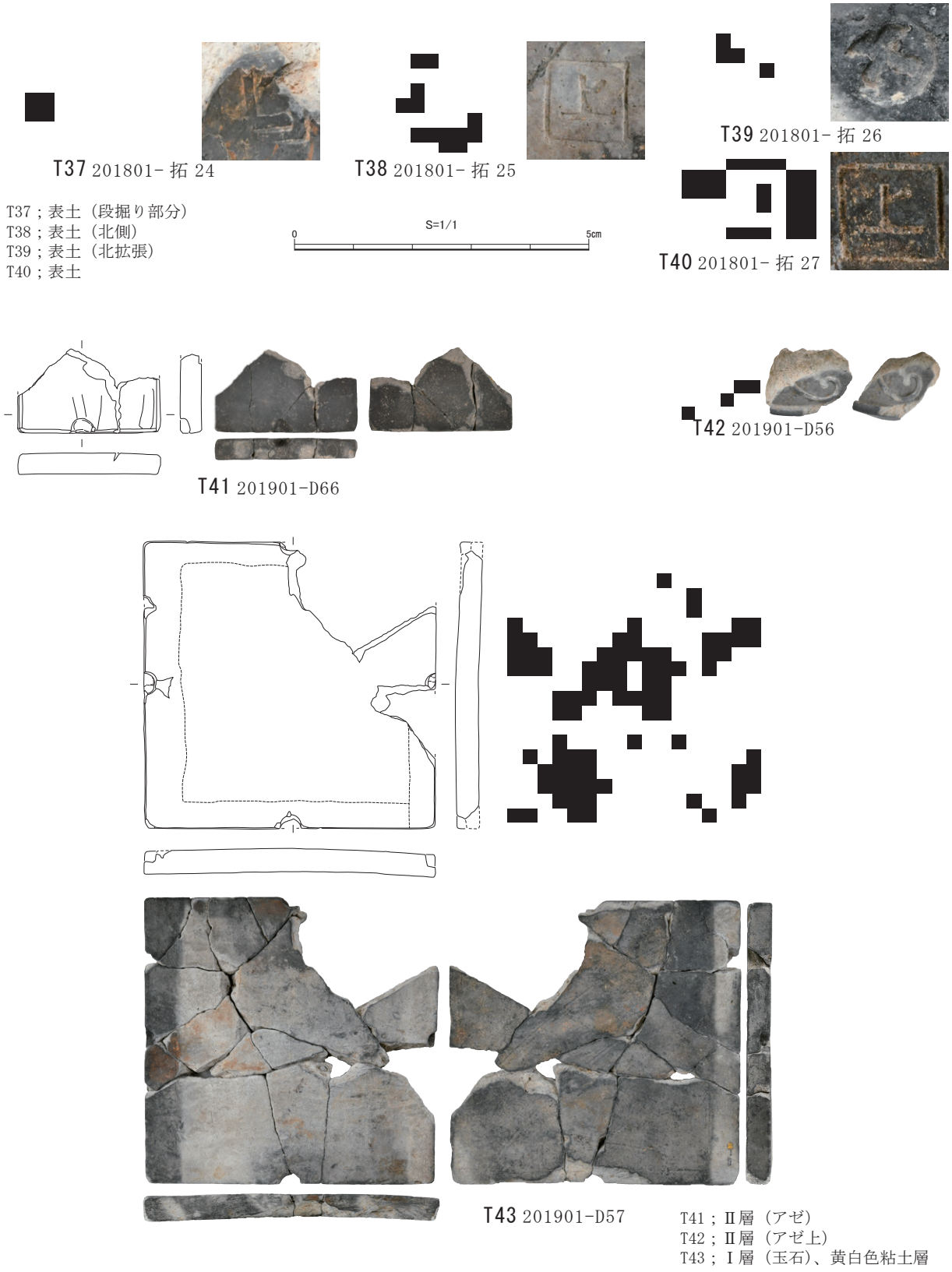


T20；堀底　砂層（Ⅰ層）
　　法面　東西断面（Ⅰ-17層）、東西断面 焼土層（Ⅰ-26層）、焼土層（Ⅰ-26層）
T21；法面　砂層（Ⅰ層）
T22；堀底　表土、砂層（Ⅰ層）、水路断割り（6層）
T23；堀底　水路断割り（6層）
T24；堀底　表土（Ⅰ層）

第 107 図　出土遺物　瓦4　数寄屋屋敷北



第 108 図　出土遺物　瓦5　数寄屋屋敷北・玉泉院丸南東

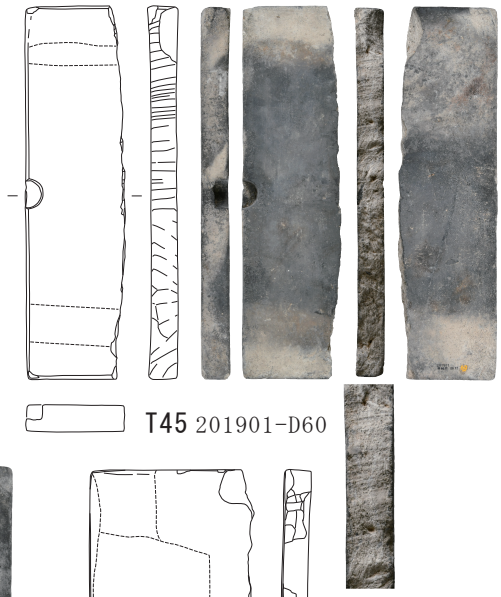


T37；表土（段掘り部分）
T38；表土（北側）
T39；表土（北拡張）
T40；表土

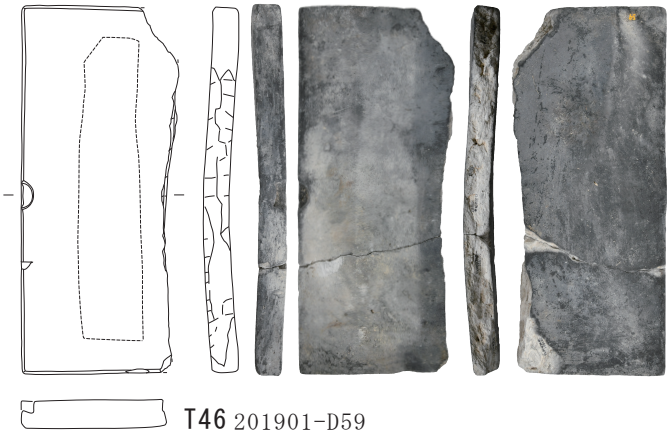
T41；Ⅱ層（アゼ）
T42；Ⅱ層（アゼ上）
T43；Ⅰ層（玉石）、黄白色粘土層

第 109 図　出土遺物　瓦6　玉泉院丸南東・玉泉院丸北

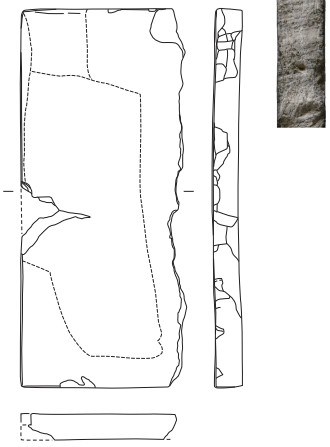
T44 201901-D58



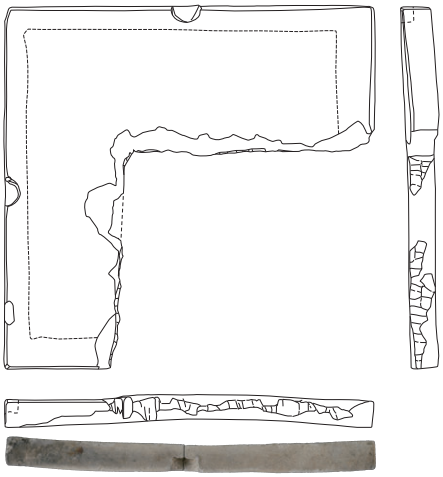
T45 201901-D60



T46 201901-D59



T47 201901-D61



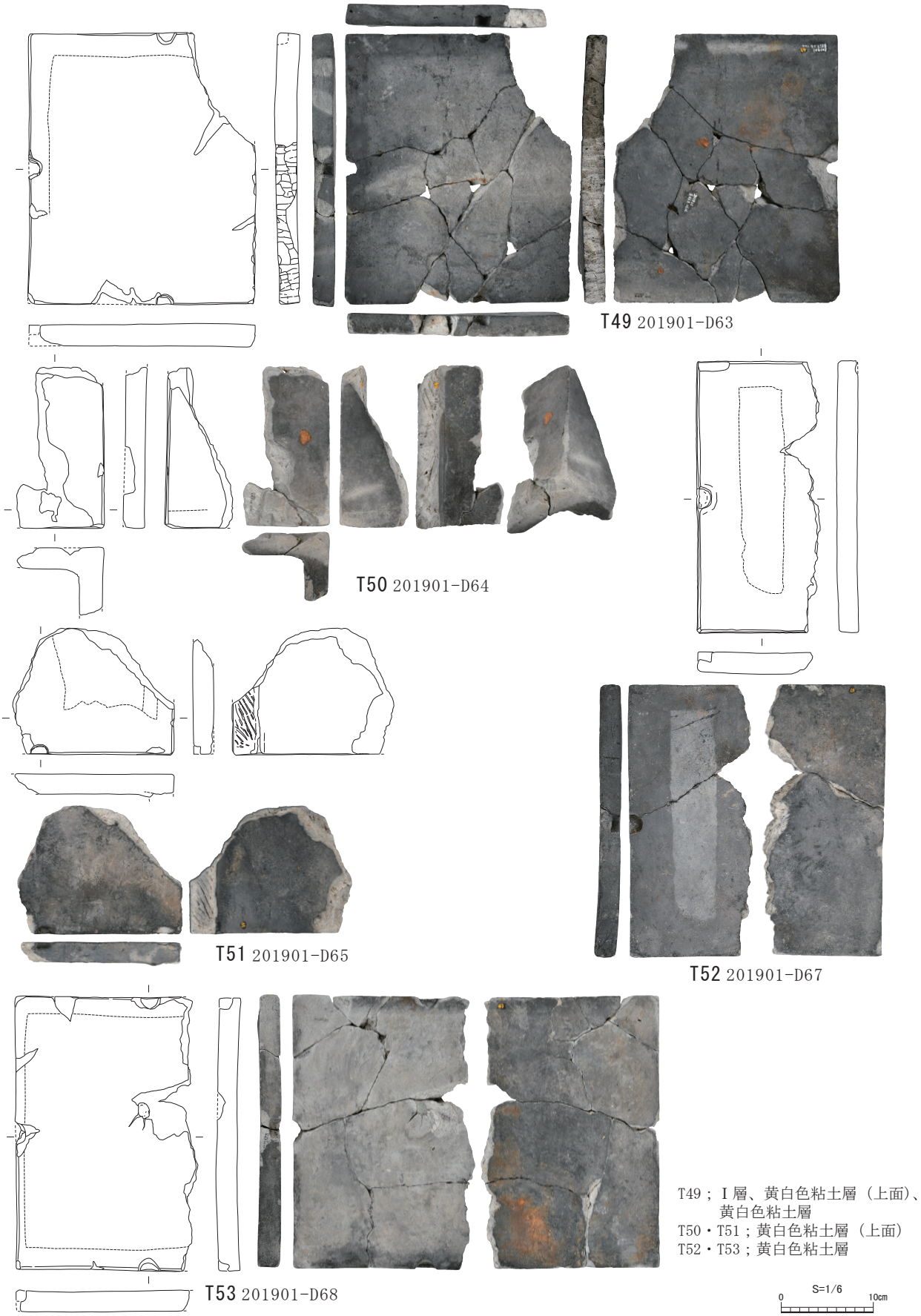
T48 201901-D62

T44～T48；黄白色粘土層

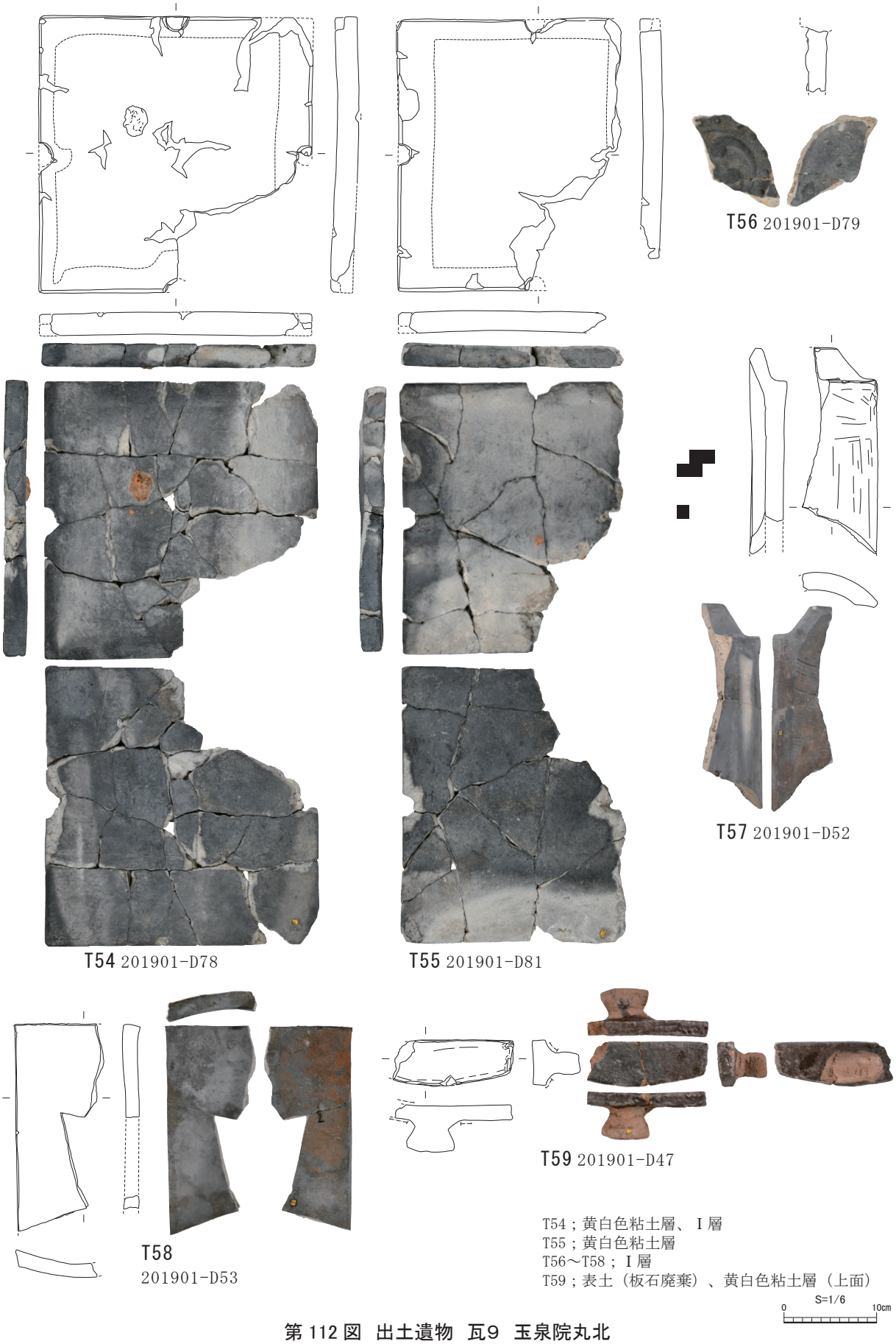
S=1/6

0 10cm

第 110 図　出土遺物　瓦7　玉泉院丸北



第 111 図　出土遺物　瓦 8　玉泉院丸北



第 112 図　出土遺物　瓦9　玉泉院丸北

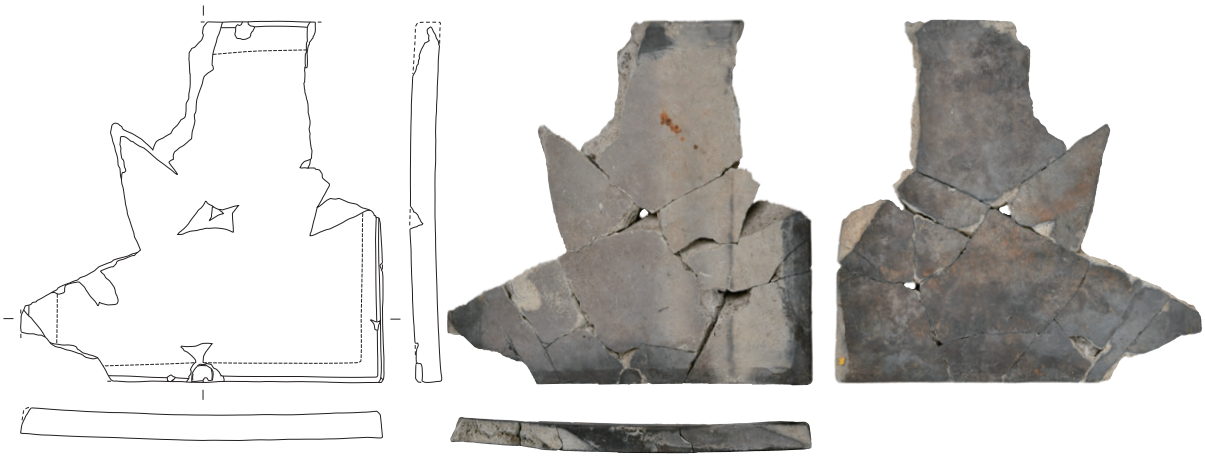
T60；表土（板石廃棄）、Ⅰ層
T61；表土、Ⅰ層

S=1/6
0 10cm

第 113 図　出土遺物　瓦 10　玉泉院丸北

T62 201901-D43

T63 201901-D71

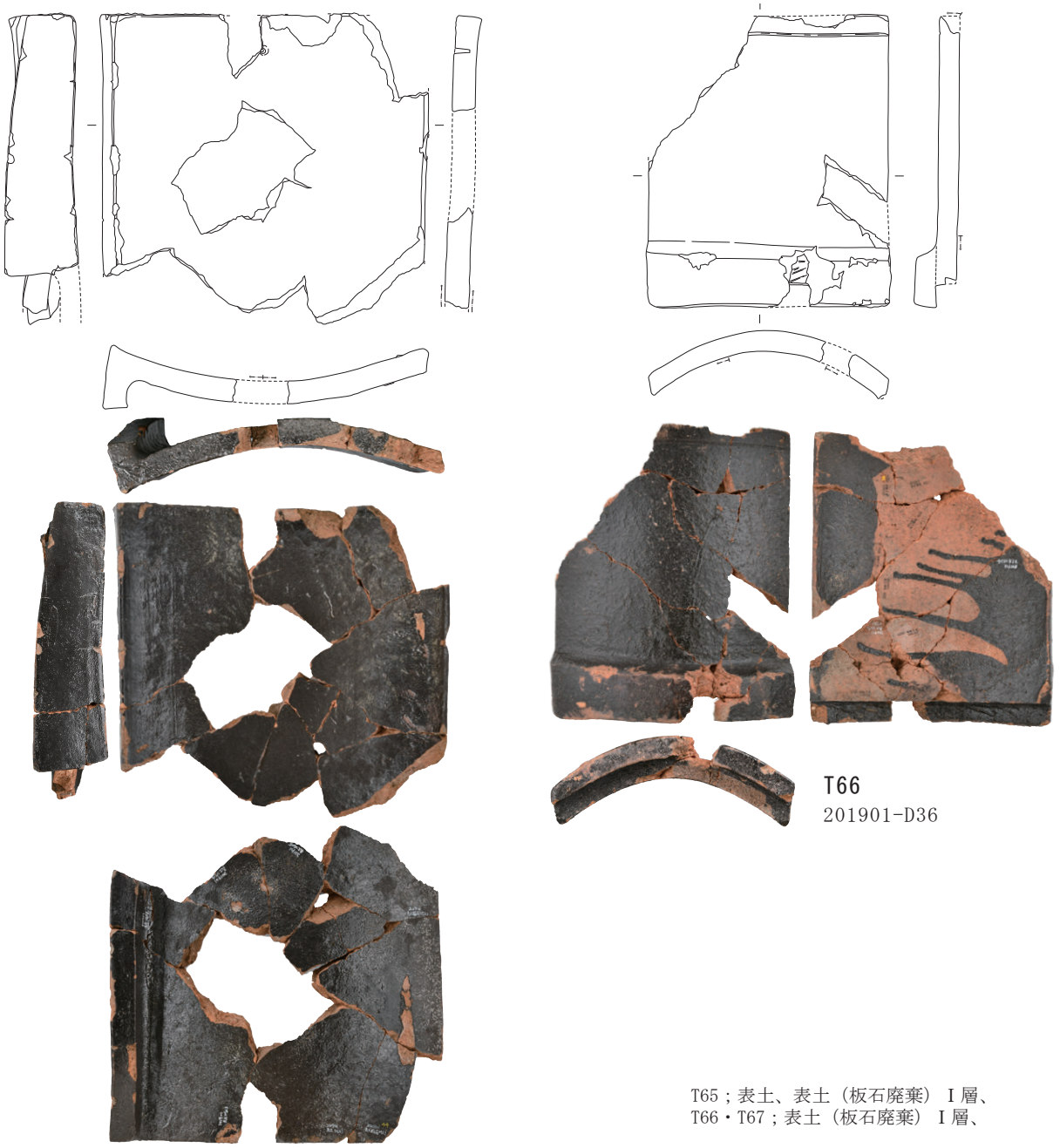


T64 201901-D74

T62・T64；表土、Ⅰ層
T63；表土（板石廃棄）、Ⅰ層、Ⅰ層（玉石）

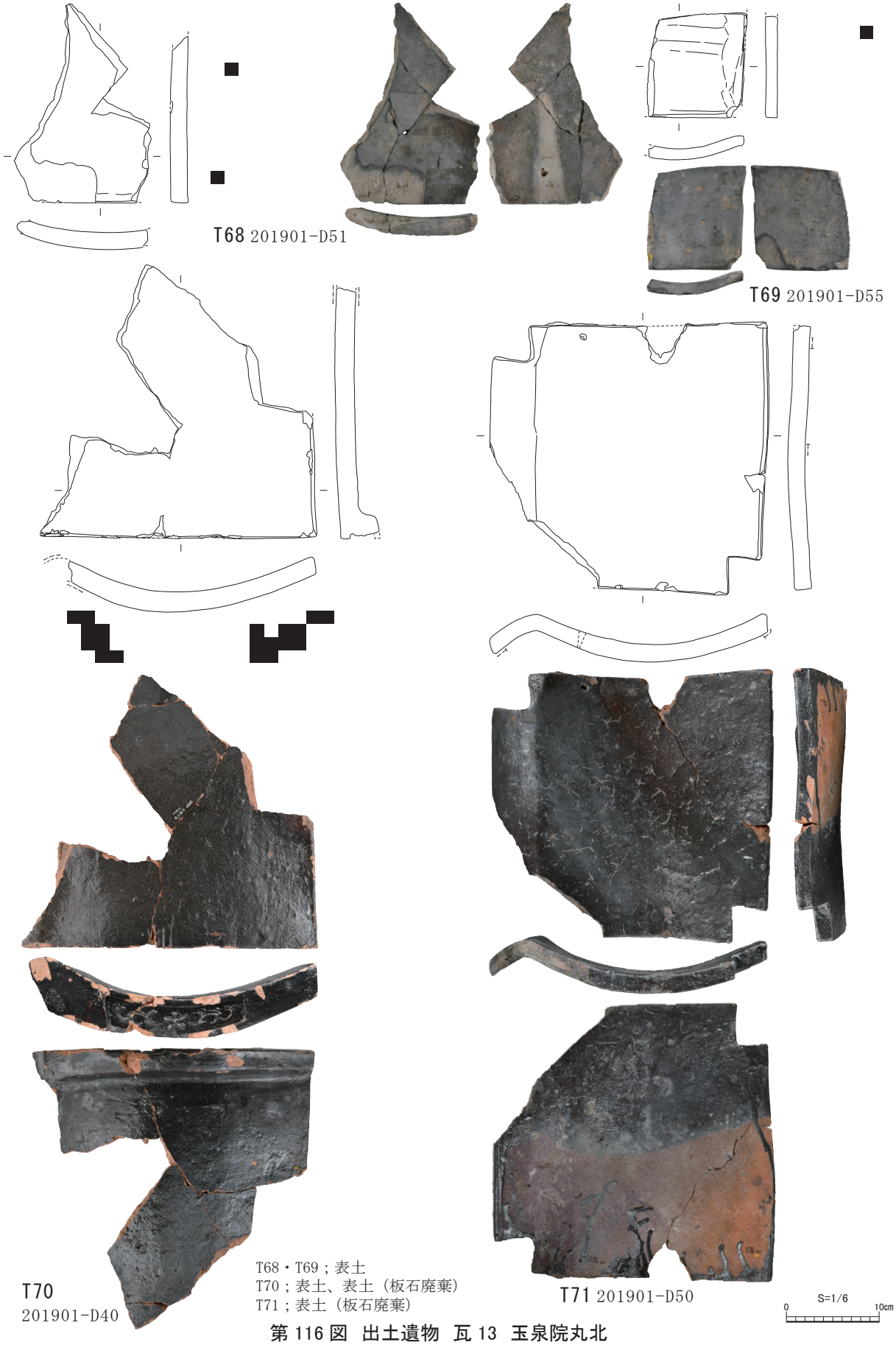
S=1/6
0 10cm

第 114 図　出土遺物　瓦 11　玉泉院丸北



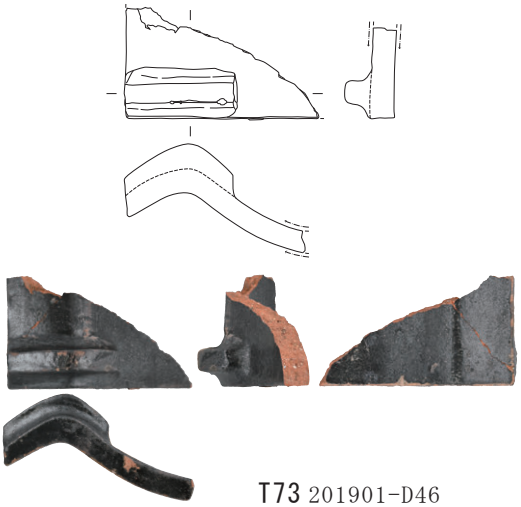
T65；表土、表土（板石廃棄）Ⅰ層、
T66・T67；表土（板石廃棄）Ⅰ層、

第 115 図　出土遺物　瓦 12　玉泉院丸北



T68・T69；表土
T70；表土、表土（板石廃棄）
T71；表土（板石廃棄）

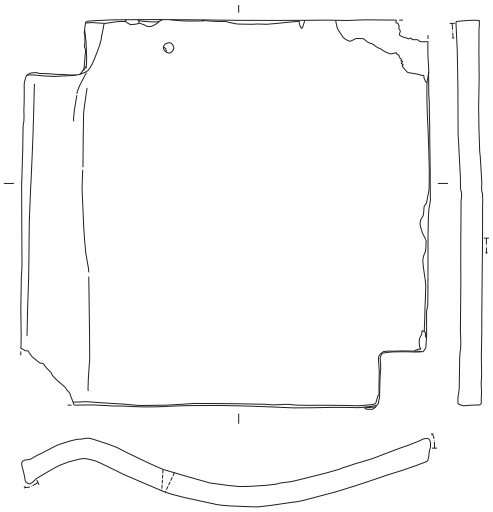
第 116 図　出土遺物　瓦 13　玉泉院丸北

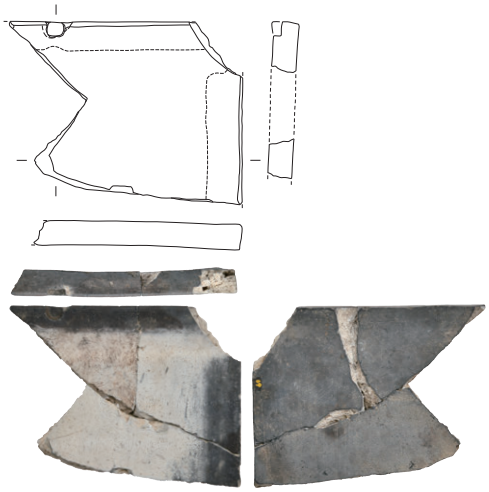


T72；表土（板石廃棄）
T73；表土

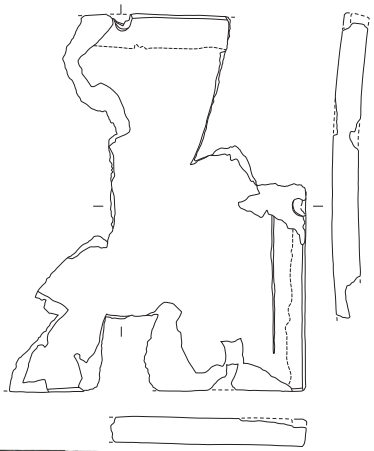
S=1/6
0 10cm

第 117 図　出土遺物　瓦 14　玉泉院丸北

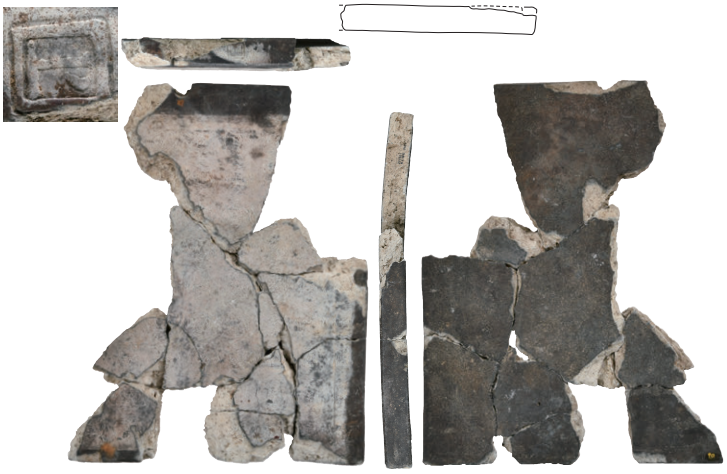




T75 201901-D69



T74 201901-D41



T76 201901-D70

T74；表土（板石廃棄）
T75・T76；表土、表土（板石廃棄）
T77；表土

T77 201901-D73

S=1/6
0 10cm

第 118 図　出土遺物　瓦 15　玉泉院丸北

T78 201901-D72

T79 201901-D75

T80 201901-D80

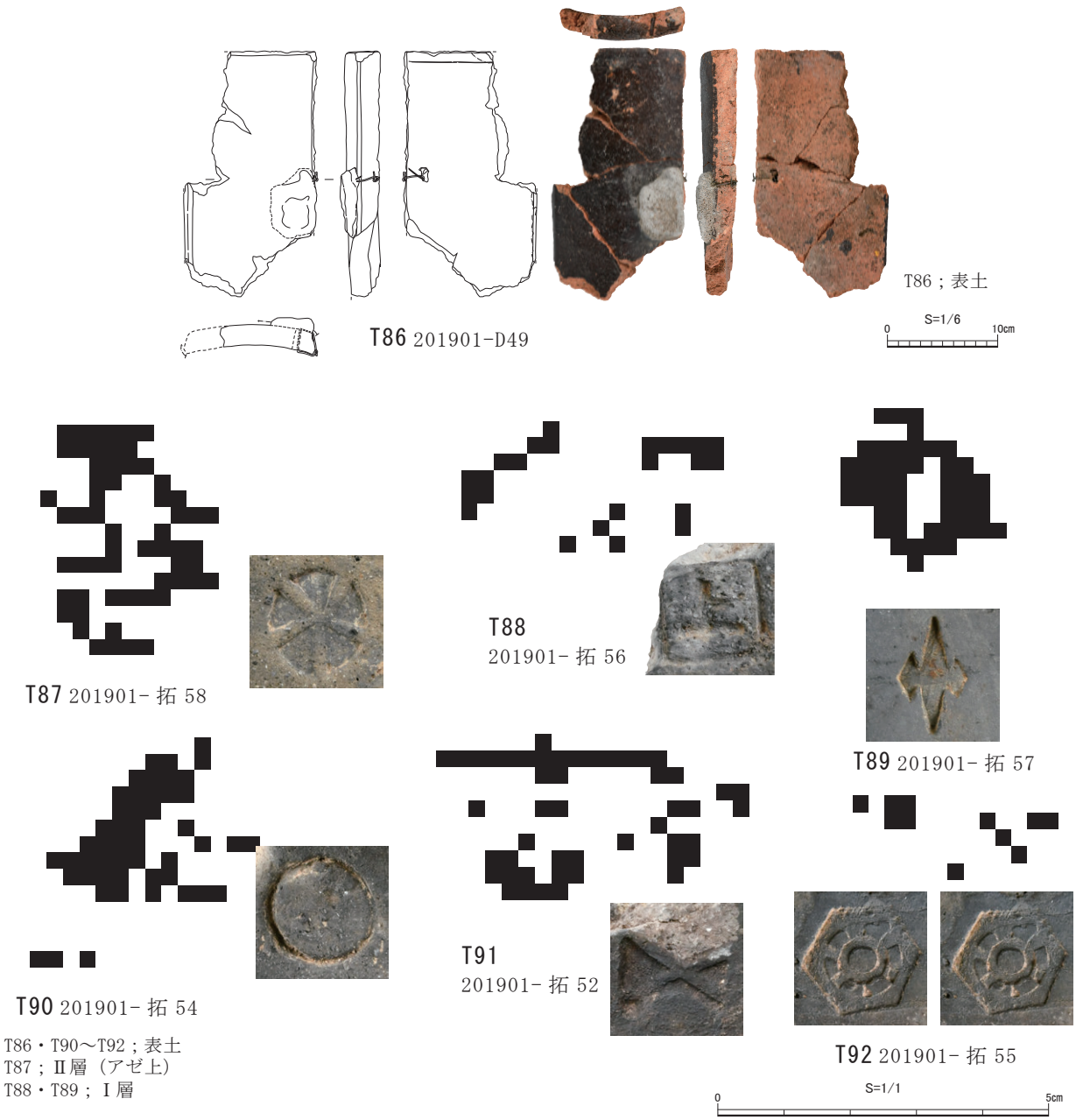
T78～T80；表土

S=1/6

0 10cm

第 119 図　出土遺物　瓦 16　玉泉院丸北

第 120 図　出土遺物　瓦 17　玉泉院丸北



T86・T90～T92；表土
T87；Ⅱ層（アゼ上）
T88・T89；Ⅰ層

第 121 図　出土遺物　瓦 18　玉泉院丸北

第４節　石製品

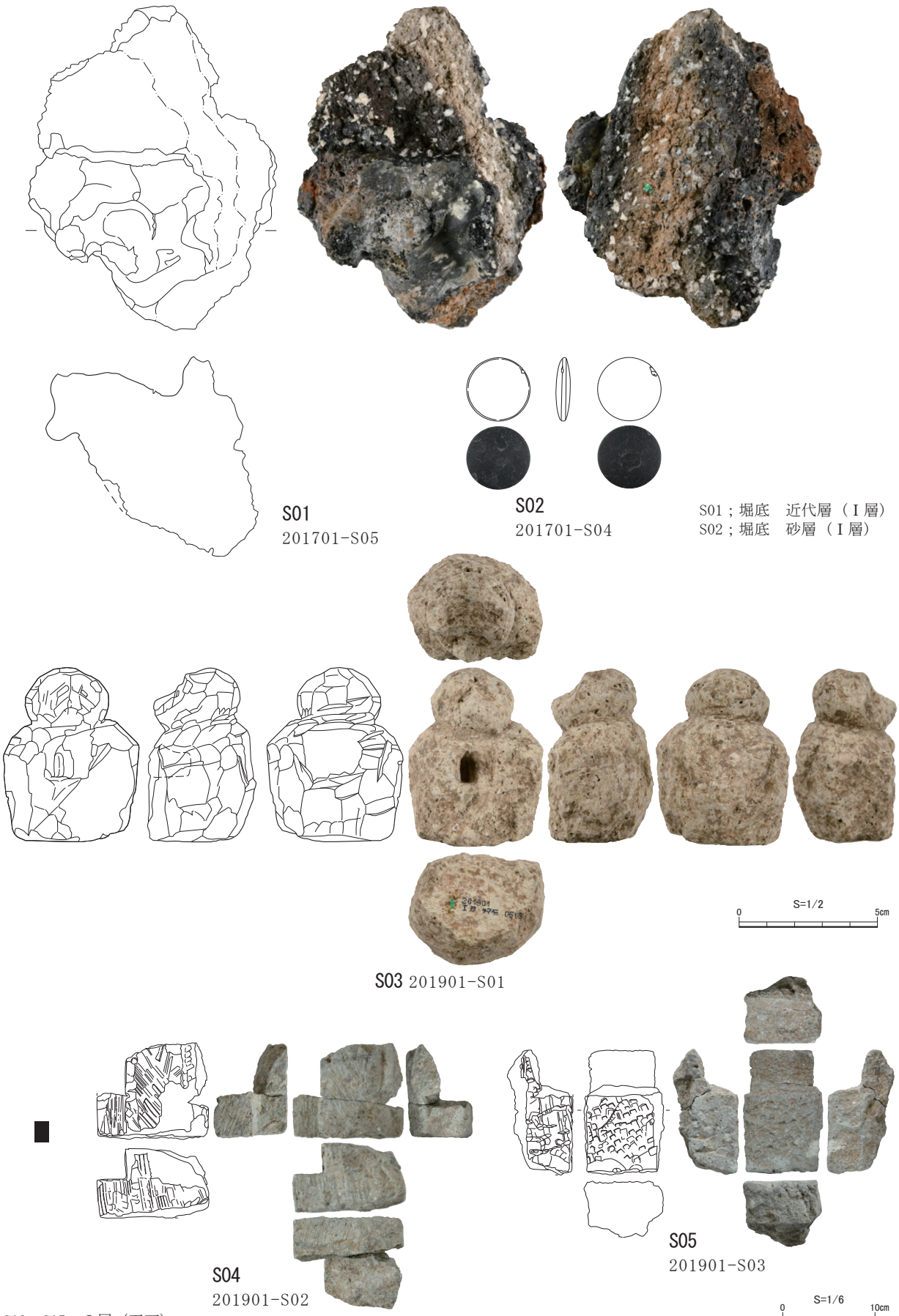
石製品は、玉泉院丸北調査区において板材を中心に出土しており、数寄屋屋敷北調査区で２点、玉泉院丸北調査区で11点、合計13点の実測を行った。

１．数寄屋屋敷北調査区（第 122 図 S01・02、第 16 表）

S01は、戸室石片であるが、破断面以外が全て比熱により黒色に変色している。鉱滓状の付着物がみられることから、鍛冶炉のようなものに使用されていた可能性もある。S02は黒の碁石である。

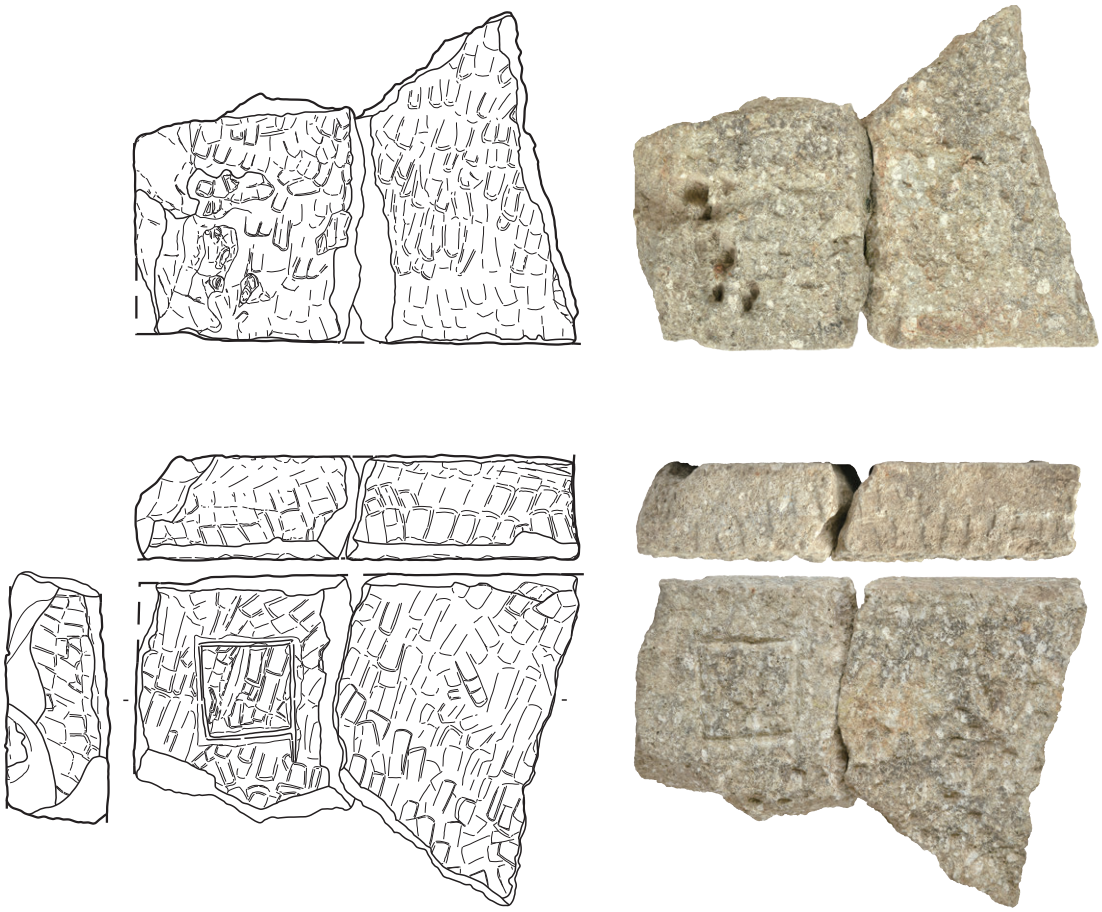
２．玉泉院丸北調査区（第 122 ～ 133 図 S03 ～ 013、第 16 表）

S03は凝灰岩製の人形で、猿と思われ、粗い加工ではあるが、丸みをもった頭部に、顔には鼻とみられる彫り込みがみられる。頭部と胴部の間の首にあたる部分は削り込んで、くびれを作り、胸部にあたる箇所に穿孔がみられることから、棒状のものを差し込んでいたのかもしれない。彩色はみられない。S04と05は凝灰岩製の部材破片である。硬質で緻密な石質で、緑色を呈するので福井産の笏谷石とみられる。S04は上面がやや湾曲した形状で角柱状の突起が側面にみられる。この突起部分は上下側面に平刃の工具（タタキ）による工具痕がみられることから、この部分を他の部材と組み合わせて使用するものと推測される。S05は上面にうろこ状にみえるやや規則的な加工痕がみられ、左側面は上面側が平滑にされるが、下面（破断面）に向かって粗い加工となる。上面と左側面以外は破損していることから、全体形状等不明である。加工痕が特徴的であったので実測した。S06～12は凝灰岩製の板材である。石質はやや軟質で灰白色のものとやや硬質で赤みを帯びた白色に大別できる。いずれも南加賀産（鵜川石か）とみられる。規格には大小２種類がみられるが、短辺（縦）の長さは１尺３または４寸で共通する。長辺（横）が大は２尺８または９寸で、小は１尺４寸、１尺６寸、１尺８寸と２寸刻みの規格がある。材の厚みは、大が２寸と揃うが、小は２寸４分、２寸６分、３寸となり、小は厚みに関しては大よりもやや厚い。大に比べて小はサイズにばらつきがある。いずれの板材も表面と裏面の加工痕の違いが明瞭である。表面はチョウナとみられる工具により非常に平滑に整えられており、粗加工時に使用したツルが深く入ったものが消しきれずに残っている。S07については表面の四方を額縁状にさらに平滑に均している。裏面は、粗加工時のツルの痕跡が明瞭に残り、概ね材の短辺と平行な方向で加工痕がみられる。小規格の裏面はツルによる粗加工の後に、もう一手間をかけており、S11・12はチョウナとみられる加工痕が長辺に平行して一定幅でみられ、中央部が削り残しとしてツル痕跡を残し、やや盛り上がった状態となっている。S10については、ツル痕跡がみられず、裏面も全面にわたってチョウナによって削られている。ただし、表面に比べるとやや粗い。側面については、長側面・短側面ともに平滑仕上げられているが、短側面については切り欠きがみられる。大規格のものは一方が受けならば、もう一方は被せるようになっている。小規格のものでは、S10と12は被せるタイプだが、S10はもう一方に切り欠きが無い。S11は両端とも受けるタイプである。これらの板材はいずれも調査区の石垣上方にあった土蔵の腰板として使用されていたものと考えているが、建物に留める際に使用した釘の痕跡や、釘の頭部が壁から飛び出さないように埋め込むための窪みがみられた。S07・09・11・12の板材のほぼ中央部には留釘を入れるための穿孔がみられる。留釘は後述するが、頭部がＴ字状になったものと考えている。また、S07～11いずれも側辺に釘をうつための窪みが彫り込まれている。腰瓦のように釘の頭部だけを埋め込むのではなく、板材の左右をぴったりと合うように、溝状の彫り込みがされる。今調査で出土した板材は２つの規格がみられたが、単なる規格の違いだけではなく、裏面の加工痕や切り欠きなどから、大規格に比べて小規格の板材の使用方法が単純ではないようにも感じられた。土蔵などでの使用時は、大規格で腰板を巡らせたあと、余白となった部分に小規格をあてはめていったと想定するが、微妙な幅のずれに対応するため、長辺が２寸刻みの規格をもっているとみられる。裏面のチョウナによる加工を追加する理由は不明であるが、別の使用方法もあったのかもしれない。S13は戸室石製の縁石とみられる。



S03～S05；Ⅰ層（玉石）

第 122 図　出土遺物　石1　数寄屋屋敷北・玉泉院丸北

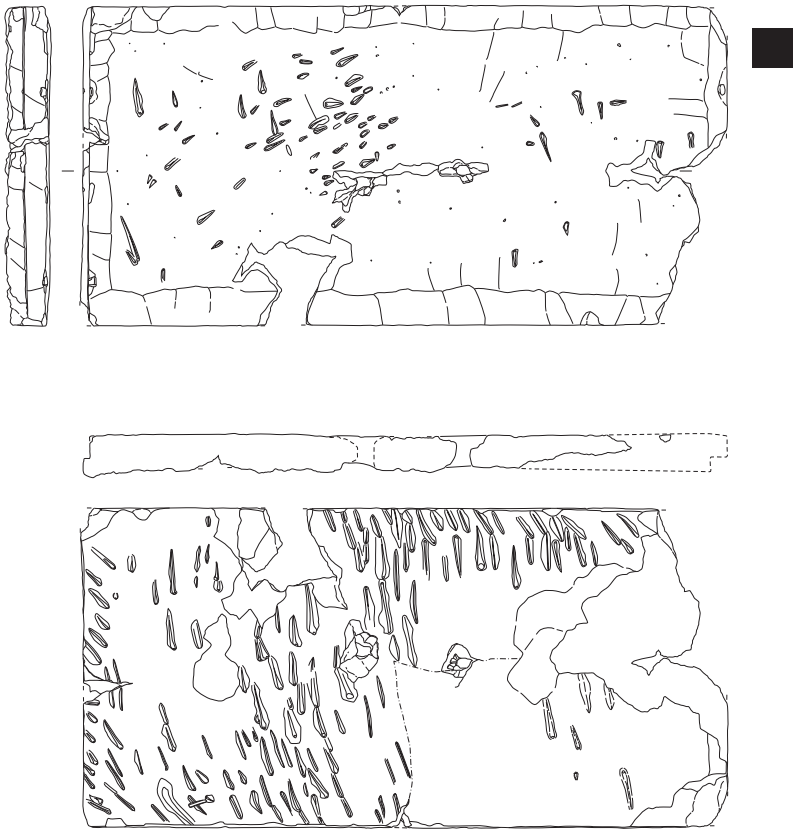


S06；Ⅰ層、黄白色粘土層

S06 201901-S07

S=1/6
0 10cm

第 123 図　出土遺物　石2　玉泉院丸北



S07
201901- 大 S01

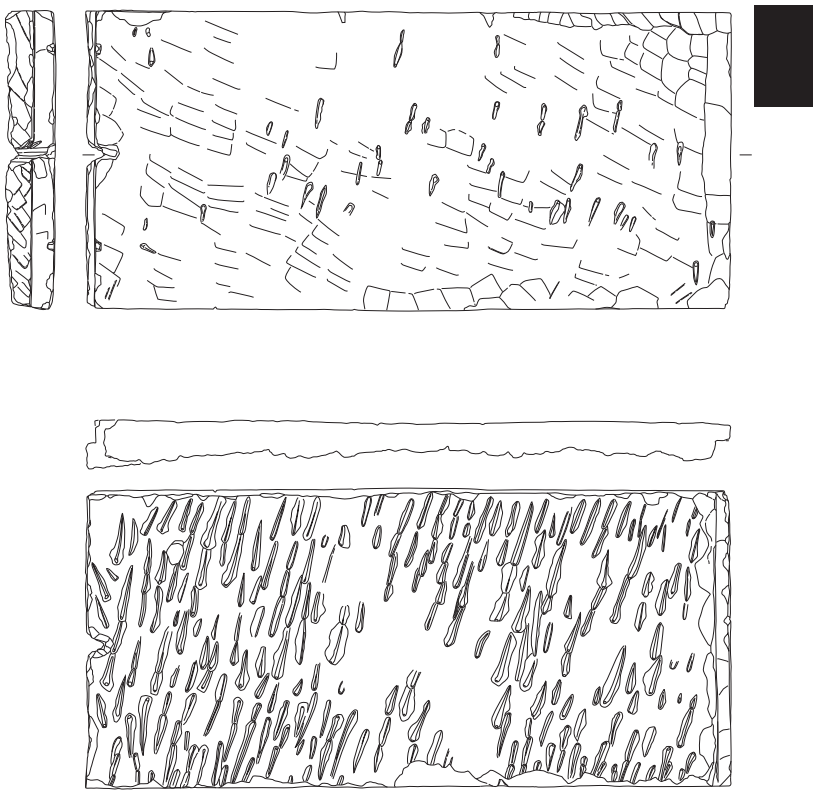
S07；表土、表土（板石廃棄）

S=1/10
0 20cm

第 124 図　出土遺物　石3　玉泉院丸北

S07
201901- 大 S01

第 125 図　出土遺物　石4　玉泉院丸北



S08
201901- 大 S02

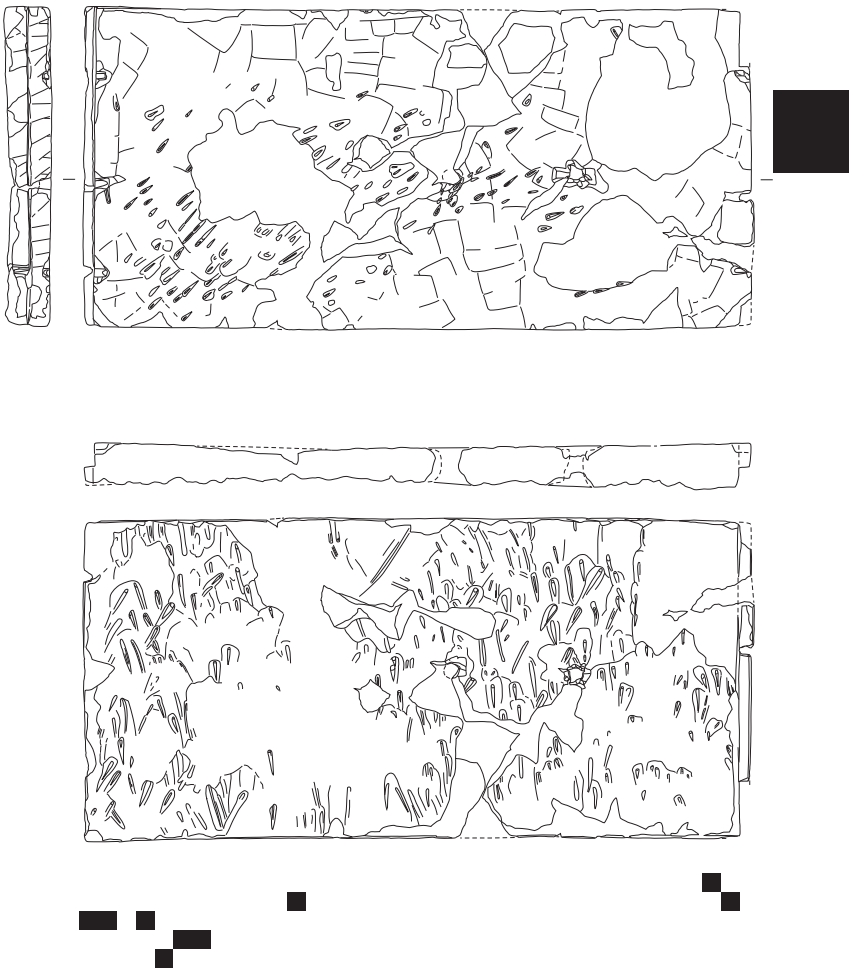
S08；表土、表土（板石廃棄）

S=1/10
0 20cm

第 126 図　出土遺物　石5　玉泉院丸北

S08
201901- 大 S02

第 127 図　出土遺物　出土遺物　石6　玉泉院丸北



S09 201901- 大 S03

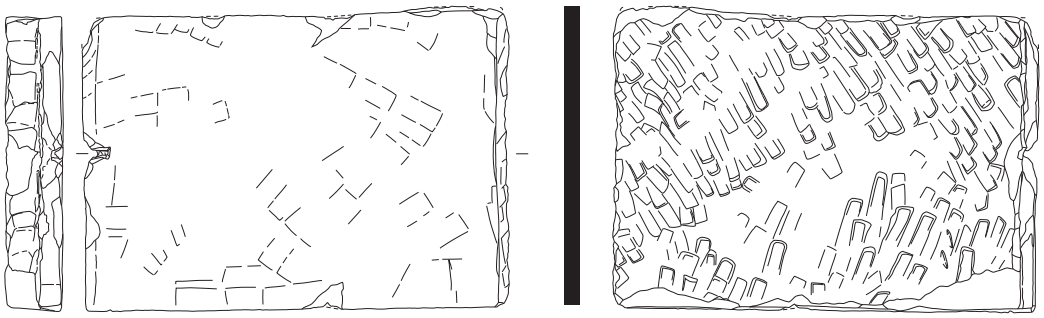
S09；表土、表土（板石廃棄）、Ⅰ層

S=1/10
0 20cm

第 128 図　出土遺物　石7　玉泉院丸北

S09 201901- 大 S03

第 129 図　出土遺物　石8　玉泉院丸北



1断面

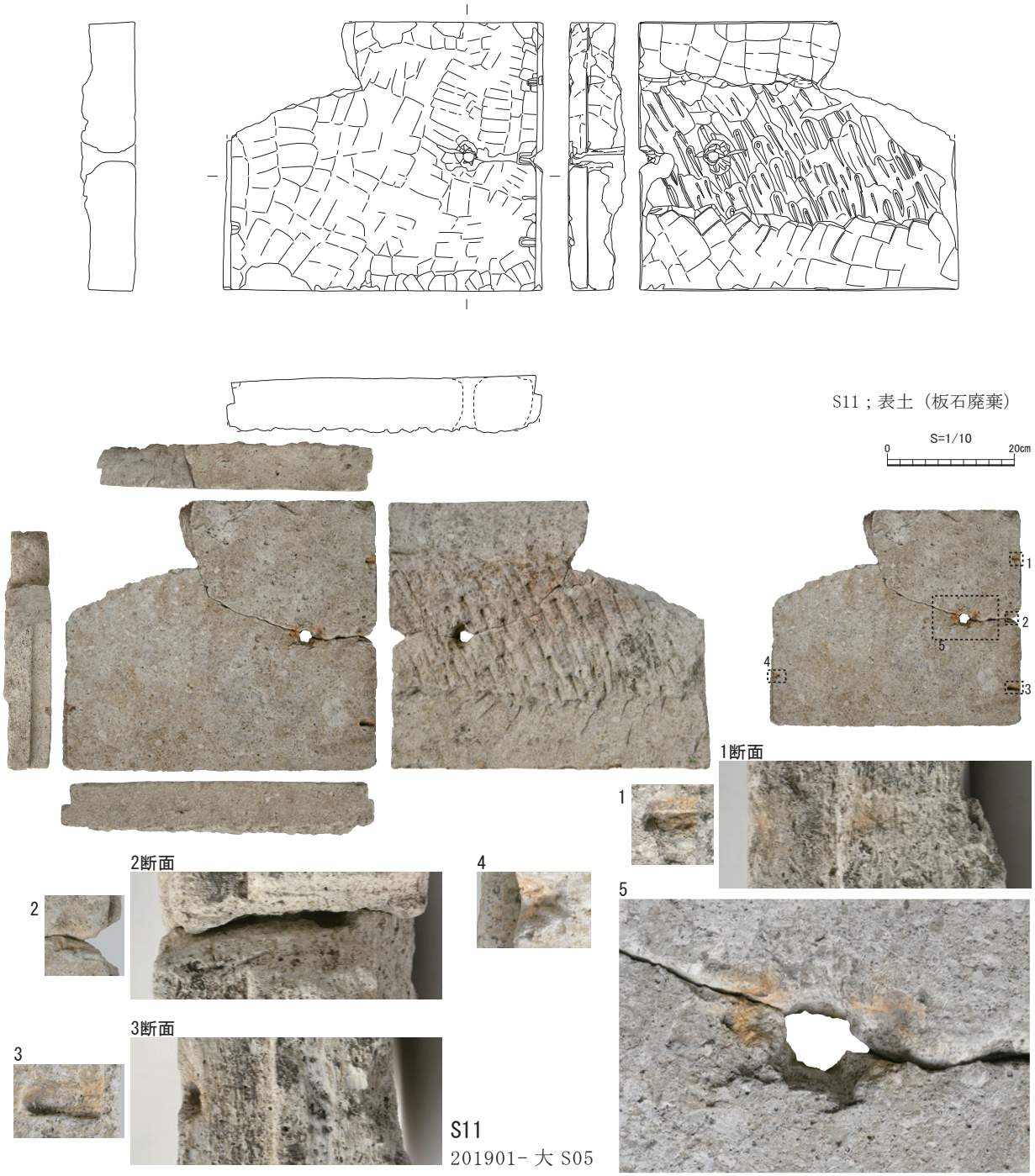
1

S10；表土（板石廃棄）

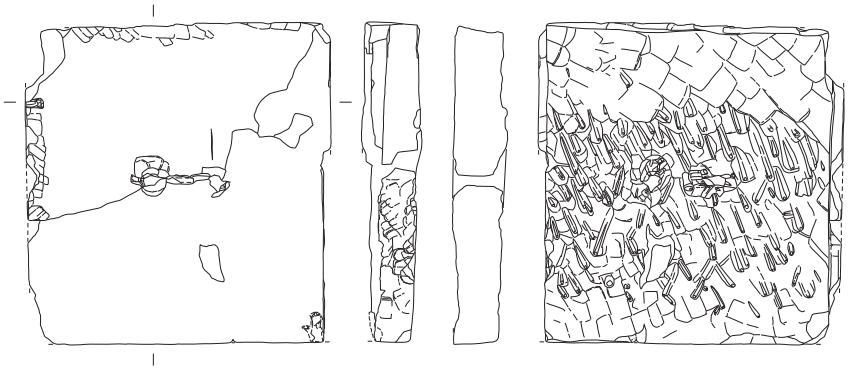
S10 201901- 大 S04

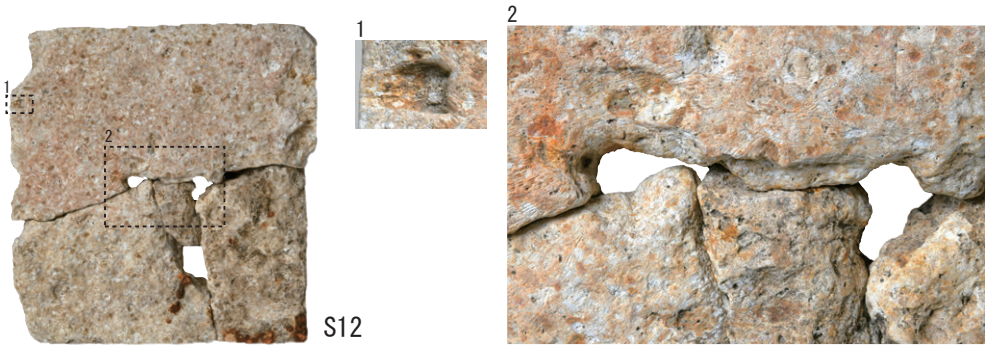
S=1/10
0 20cm

第 130 図　出土遺物　石9　玉泉院丸北



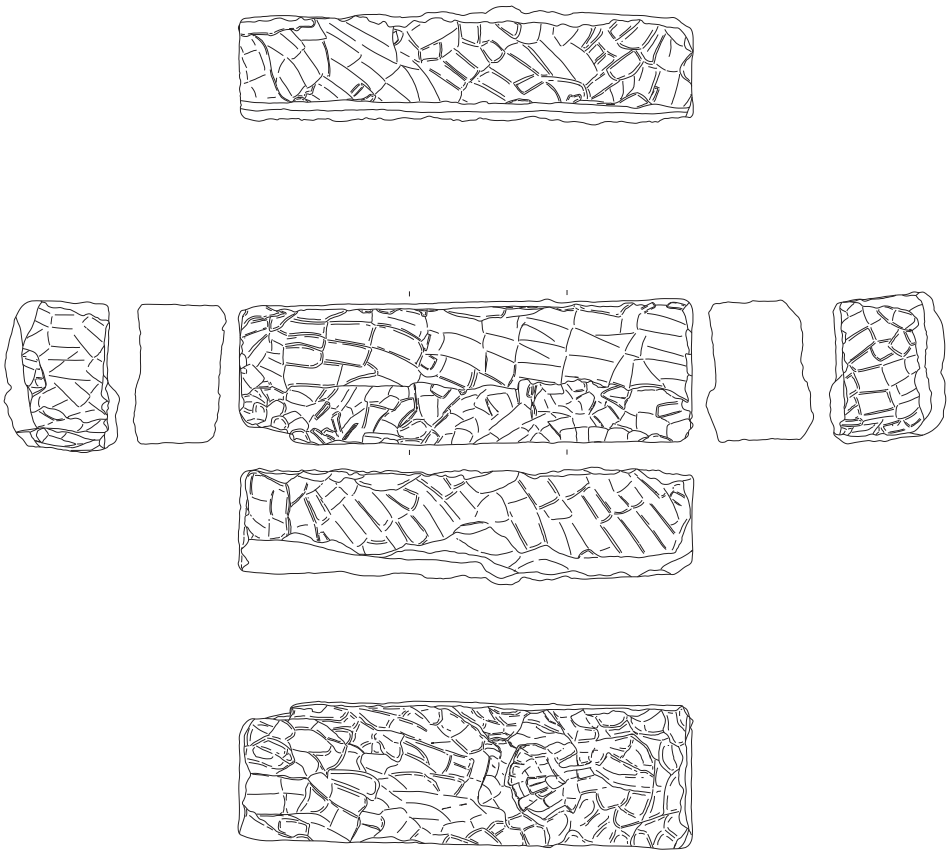
第 131 図　出土遺物　石 10　玉泉院丸北





S12
201901- 大 S06

第 132 図　出土遺物　石 11　玉泉院丸北



S13；表土

S13 201901-S08

第 133 図　出土遺物　石 12　玉泉院丸北

第５節　金属製品

金属製品は、玉泉院丸北調査区で釘がまとまって出土しているが、石垣天端にあった納戸土蔵に関するものとみられる。数寄屋屋敷北や玉泉院丸南東調査区では形状や種別が判別できるような金属製品は少なかった。

３つの調査区併せて41点の実測を行ったが、そのうち35点が銅釘であった。そのほかは小型の鉄滓が３点、鎹１点、銅線１点である。

１．　数寄屋屋敷北調査区（第 134 図 M01 ～ 04、第 17 表）

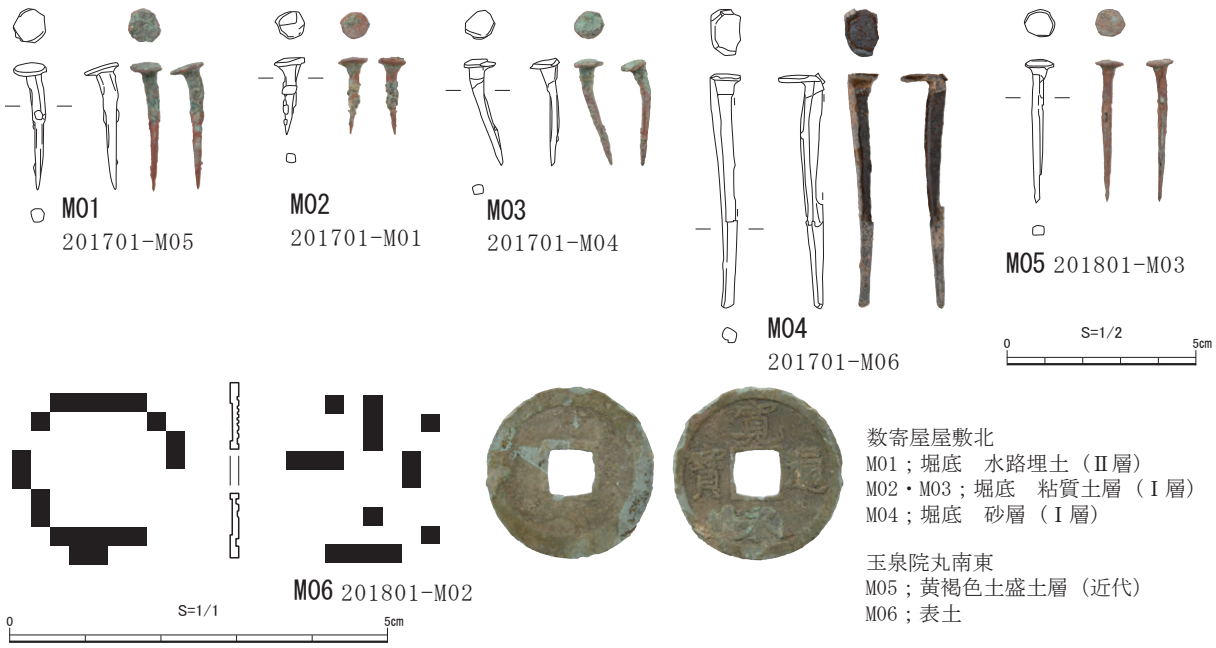
M01からM03の３点とも銅釘で、いずれも軸部がやや曲がっている。M04の貝折釘は鉄釘である。M01は17世紀末には廃絶したと考えている水路の埋土より出土した。

２．　玉泉院丸南東調査区（第 134 図 M05・06、第 17 表）

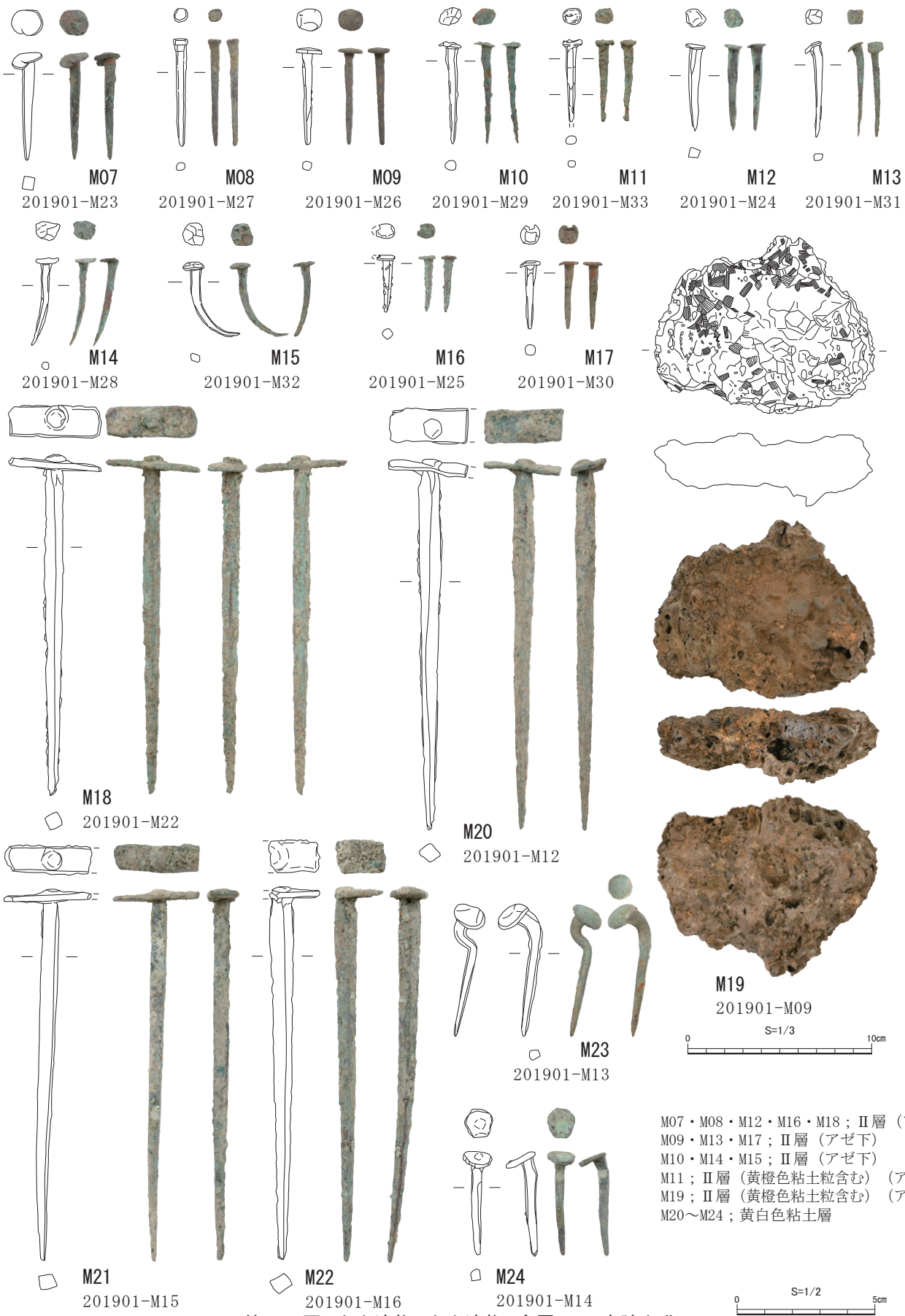
M05は銅釘であるが、表面に黒い塗膜状のものが付着しているようにみえる。

３．　玉泉院丸北調査区（第 135・136 図 M07 ～ 41、第 18・19 表）

銅釘が多く出土した。大別Ⅱ層とした近世後期の盛土層からの出土が多い。M07～17は大別Ⅱ層出土で、11点実測した。M30･31はⅠ層、M33は植栽痕、M34～41は遺構№１から出土した。M23･24は黄白色粘土層から出土した銅釘である。長さは概ね１寸を中心に、７分と１寸２分のものがみられる。M35は頭部に「×」印が入っている。M41のみ頭巻釘である。M18･20～22･29は頭部がＴ字の形状をした留釘である。頭部の金具は一体ではなく、別の板状の材を組み合わせている。長さは４寸５分を基本としている。先述した土蔵などの側壁として使用した腰板の石材を留めるために使用したと考えている。M28は貝折れ釘である。M19、25、27は鉱滓である。いずれも薄い半球状を呈している。石垣周辺で鍛冶作業を行っていた形跡は、今回の調査範囲では確認できず、他の出土品同様、上方からの流れ込みと考えている。M26は鉄製の鎹で、断面形状は方形、先端部は欠損している。刻印等は確認できなかった。M32は太さが1mm程の細い銅製の針金で、２本の針金の端部をねじって結束している。屋根瓦を留める際に使用したものと推測される。

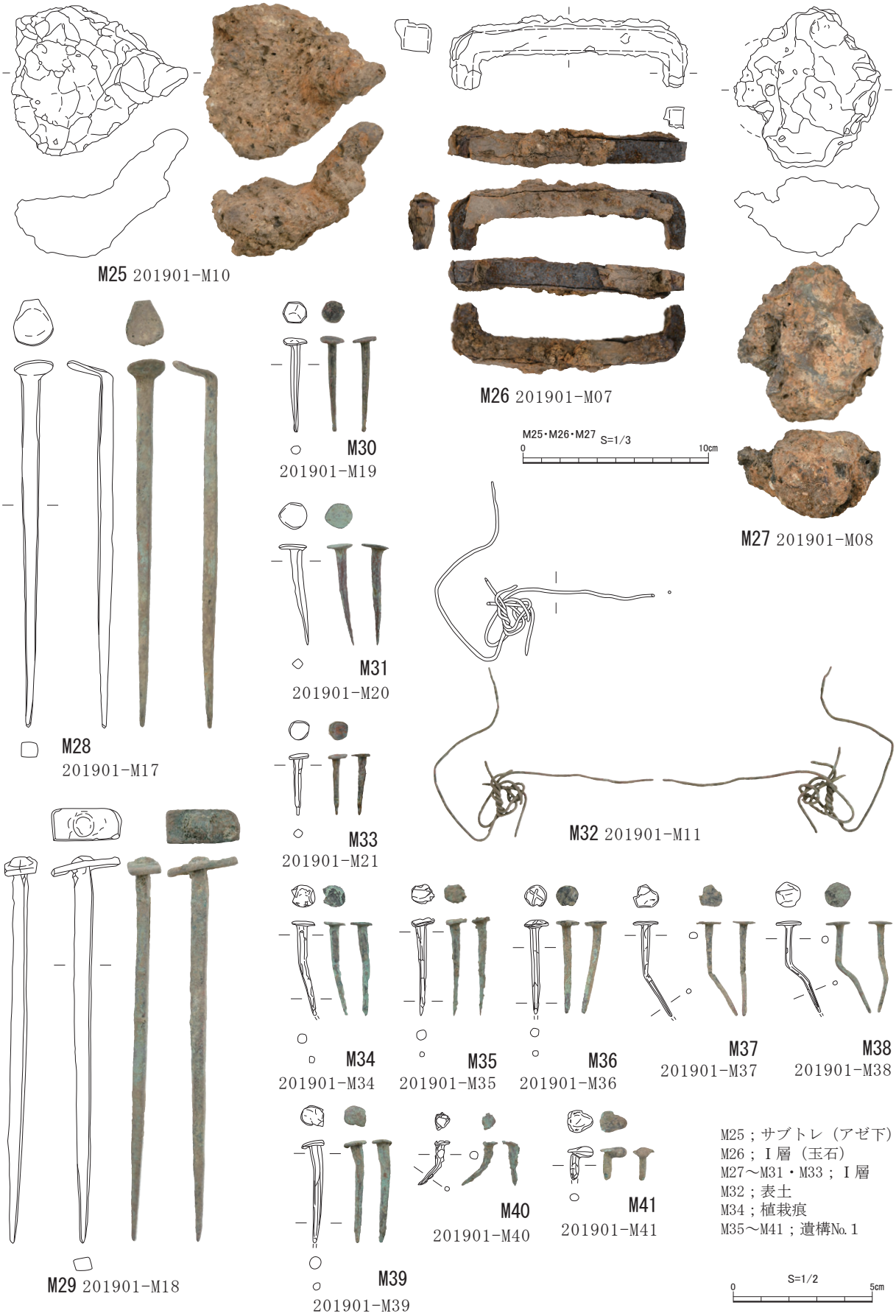


第 134 図　出土遺物　金属1　数寄屋屋敷北　玉泉院丸南東



M07・M08・M12・M16・M18；Ⅱ層（アゼ上）
M09・M13・M17；Ⅱ層（アゼ下）
M10・M14・M15；Ⅱ層（アゼ下）
M11；Ⅱ層（黄橙色粘土粒含む）（アゼ下）
M19；Ⅱ層（黄橙色粘土粒含む）（アゼ上）
M20～M24；黄白色粘土層

第 135 図　出土遺物　出土遺物　金属2　玉泉院丸北



第 136 図　出土遺物　金属3　玉泉院丸北

第７表　出土遺物観察表　陶磁器・土器１

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	調査区 遺構等	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	成形・　整形	釉薬・装飾等	胎土・色調	形状特徴	産地	年代等	特記事項	ＩＤ
94	P01	数寄屋屋敷北 堀底　表土（Ｉ層）・砂層（Ｉ層）	Ｉｂ	磁器	碗	9.8	3.4	5.3	口縁 5/12 底部 2/12	ロクロ	透明 薄く均一	白色 緻密		肥前		畳付釉かきとり	201701-B03
	P02	数寄屋屋敷北 堀底　砂層（Ｉ層）・法面　砂層（Ｉ層）	Ｉｂ	磁器	合子？ （堀底No.９）	11.8 12.4	7	3.3	口 8/12 底 12/12	外：施釉 内：施釉 型作り	透明	5Y8/1 灰白					201701-D108
	P03	数寄屋屋敷北 法面上　近代層（Ｉ層）	Ｉｂ	陶器	壺	—	—	(8.7)	体部小片	ロクロ	緑釉－透明感あり、細かい貫入あり 黄釉－不透明	灰白		中国		華南三彩 トラディスカント ２次的に被熱 赤色溶着物あり	201701-B06
	P04	数寄屋屋敷北 法面　焼土層（Ｉ-26 層）	Ｉｂ	磁器	碗	10.8	—	(4.9)	口 4/12	ロクロ	透明	白		瀬戸・ 美濃		内外面染付、外面赤上絵付「２」	201701-B05
	P05	数寄屋屋敷北 法面　焼土層下（Ｉ-27 層）	Ｉｂ	磁器	皿	10.8	—	(1.9)	口縁 1/12	ロクロ	透明 薄く均一	白色 緻密	端反り	若杉		墨はじき	201701-B04
	P06	数寄屋屋敷北 法面　焼土層下（Ｉ-27 層）・堀底　壁面・法面側 水路埋土（Ⅱ層）	Ｉｂ	磁器	皿	16.1	—	(2.4)	口 1/12	ロクロ	透明	白	端反り	若杉		内外面染付、墨弾き、焼継、貫入	201701-B02
	P07	数寄屋屋敷北 堀底　法面側 水路埋土（Ⅱ層）	Ⅱｂ	磁器	皿	—	10.4	(3.1)	底部 7/12	ロクロ	透明	灰白 やや堅い感じ		若杉		施釉－明緑灰、ムラなく均一、ツヤ有 貫入有　呉須絵	201701-B01
	P08	数寄屋屋敷北 堀底　水路埋土 河原石積前面（Ⅱ層）	Ⅱｂ	磁器	紅猪口	(6.5)	(3.4)	2.1	1/2	ロクロ	白磁（明緑灰）	白色、細黒色粒		肥前		やや端反り	201701-D107
	P09	数寄屋屋敷北 堀底　水路埋土 河原石積前面（Ⅱb-11 層）	Ⅱｂ	土器	土師器皿	12.0	7.0	2.1	ほぼ完形	手づくね		均質（粉質） 細砂多→Ｄ？＝Ｂ類 浅黄橙		在地	17 ｃ～	Ｃ類か 油煙痕 86.5g	201701-D82
95	P10	玉泉院丸南東 表土（北側）	Ⅰ	磁器	皿	—	10.2	(3.0)	底部 5/12	ロクロ	透明釉－灰白	素地－灰白、堅緻、砂粒含まず		肥前		施釉－ムラなく均一、ツヤ有、気泡含む、呉須絵 砂目跡一ヶ所有 圏線内に岩山か	201801-B08
	P11	玉泉院丸南東 表土（北側）	Ⅰ	磁器	蓋	9.9	8.4	(2.5)	4/12	ロクロ	透明釉－灰白	素地－灰白、堅緻、砂粒含まず		肥前		施釉－ムラなく均一、ツヤ有、気泡含む、ピンホール有、呉須絵	201801-B09
	P12	玉泉院丸南東 表土	Ⅰ	土器	土師器皿	(9.0)	5.5	(2.1)		手づくね		細砂粒多 にぶい黄橙		在地		焼成良 口縁部に油煙痕	201801-D87
	P13	玉泉院丸南東 表土	Ⅰ	磁器	鉢	15.6	6.2	6.8	12/12 ほぼ完形	ロクロ	透明	白色、堅緻				内面－施釉に少しムラ有 高台内銘有	201801-B15
	P14	玉泉院丸南東 表土（南側拡張）	Ⅰ	陶器	碗	—	5.2	(2.4)	底部 4/12	ロクロ		褐灰色		再興 九谷			201801-D86
96	P15	玉泉院丸南東 表土（段掘り部分）	Ⅰ	土器	火鉢	(17.2)	—	(5.6)	口縁小片	ロクロ	印花文・沈線・赤彩	粗砂少・赤色粒少 灰黄褐色		在地		焼成良	201801-D84
	P16	玉泉院丸南東 表土（段掘り部分）	Ⅰ	土器	土師器皿	(13.6)	(10.0)	(1.5)	口縁 3/12	手づくね		粗砂粒多、赤色粒少 浅黄橙		在地		焼成良	201801-D83
	P17	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層（近代）	Ⅰ	陶器	碗	(9.6)	—	(2.7)	口縁小片	ロクロ	灰釉	灰白				貫入あり	201801-D90
	P18	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層（近代）	Ⅰ	陶器	碗	(10.0)	—	(4.2)	口縁 3/12	ロクロ	灰釉	灰黄褐色		肥前		貫入あり	201801-D89
	P19	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層（近代）	Ⅰ	磁器	碗	—	3.8	(2.4)	底部 3/12	ロクロ	白磁（明緑灰）			肥前		染付の可能性あり	201801-D91
	P20	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層（近代）	Ⅰ	陶器	碗	—	4.8	(1.9)	底部完形	ロクロ	灰釉（内側のみ）	灰白		瀬戸・ 美濃			201801-D92
	P21	玉泉院丸南東 黄灰色粘質土層（近世）	Ⅰ	土器	土師器皿	(10.5)	—	(2.8)	口縁小片	手づくね		砂粒少ない、均質？ にぶい黄橙		在地		焼成良	201801-D93
	P22	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層（近代）	Ⅰ	須恵器	蓋	—	—	(1.3)	口縁小片	ロクロ		均質 礫少量 灰				焼成良	201801-D88

第８表　出土遺物観察表　陶磁器・土器２

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	調査区 遺構等	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	成形・　整形	釉薬・装飾等	胎土・色調	形状特徴	産地	年代等	特記事項	ＩＤ
96	P23	玉泉院丸南東 黄褐色粘土盛土層（近代）	Ⅰ	土器	土師器皿	(14.0)	—	(2.3)	口縁 3/12	手づくね		緻密、均質 浅黄橙		在地		焼成良 内外綿油煙痕	201801-D94
	P24	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層（近代）	Ⅰ	土器	火鉢	(24.0)	—	(8.0)	口縁小片	ロクロ	印花文・沈線・赤彩	粗砂多・赤色粒少 にぶい黄橙		在地		焼成良	201801-D85
	P25	玉泉院丸南東 黄灰色粘質土層（近世）	Ⅰ	磁器	碗	—	—	(3.0)	口縁小片	ロクロ	透明	素地－灰白、堅緻、 砂粒含まず		肥前		色調－内外面＝明緑灰 施釉－ムラなく均一、ツヤ有、気泡含む、呉須絵 17ｃ後半以後の埋戻土中	201801-B07
	P26	玉泉院丸南東 表土（南側）～近代盛土	Ⅰ		土人形	高4.9	幅3.0	厚2.0				7.5YR7/4 に ぶい橙	中実型合せ	在地		キラコ雲母、底面に穴有、重量20g	201801-D103
97	P27	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）・Ⅰ層	Ⅰ	磁器	皿	(13.9)	6.0	3.6	口縁 4/12 底部 12/12	ロクロ	透明 （わずかに青みがかった） 呉須発色良	灰白 砂粒微 堅緻		瀬戸・ 美濃		外面の高台付近に貫入有 見込み使用痕有 蛇ノ目凹型高台	201901-B12
	P28	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）	Ⅰ	磁器	碗	10.8	—	(3.3)	口縁 2/12	ロクロ	透明	白色、堅緻		瀬戸・ 美濃		内面－粗く貫入有 呉須の発色→良 赤上絵付「１」	201901-B14
	P29	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）	Ⅰ	磁器	皿	13.4	5.8	3.7	口縁 7.5/12 底部 12/12	ロクロ	透明 不均一	灰白		瀬戸・ 美濃		内外面染付 赤上絵付「３」 蛇ノ目凹型高台	201901-B11
	P30	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	磁器	碗	9.1	3.1	5.7	底部 12/12	ロクロ	透明 色絵	灰白 砂粒微 堅緻		再興 九谷		高台内銘「九谷庄三」 「九谷栄山」（底部付近側面）か	201901-B13
	P31	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	磁器	有台碗	10.3	3.8	5.5	口縁 9/12 底部 10/12	ロクロ	透明 （わずかに青みがかった） 色絵	灰白、堅緻		瀬戸・ 美濃		釉－気泡有 赤上絵付「４」 見込み寿	201901-B10
98	P32	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）	Ⅰ	磁器	皿	(14.2)	(7.2)	3.5	口縁 8/12 底部 6/12	ロクロ		白色		再興 九谷?		貫入あり	201901-D96
	P33	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	陶器	碗	—	4.5	(2.9)	底部完形		灰釉	浅黄橙		肥前			201901-D95
	P34	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）・Ⅰ層	Ⅰ	土器	火鉢	—	—	(10.1)				粗砂、海面骨針含む にぶい黄橙		在地		焼成良 ナデ・ケズリ明瞭	201901-D100
	P35	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）・Ⅰ層（砂利層）	Ⅰ	土器	火鉢	—	—	(8.1)		タタラ作り		細砂多 灰黄褐		在地		焼成良	201901-D99
99	P36	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）・黄白色粘土層 断割り	Ⅱ	土器	火鉢	—	(19.2)	(8.6)		ロクロ		灰黄橙		在地		焼成良	201901-D102
	P37	Ⅰ層（玉石）	Ⅰ	土器	火鉢	—	—	(8.7)		タタラ作り		細砂粒多 にぶい黄橙		在地		焼成良	201901-D101
	P38	玉泉院丸北 Ⅱ層 サブトレ（アゼ下）	Ⅱｂ	土器	土師器皿	(12.2)	—	(2.4)	口縁 3/12	手づくね				在地		油煙痕	201901-D98
	P39	玉泉院丸北 Ⅱ層 サブトレ（アゼ下）・Ⅱ層（黄橙色粘土粒含む）（アゼ下）	Ⅱｂ	土器	土師器皿	(15.4)	—	(2.7)	口縁 3/12	手づくね		細砂粒多、黒雲母粒多 にぶい黄橙		在地			201901-D97

図版	番号	調査区 遺構等	層位	種別	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	特記事項	ＩＤ
99	D01	玉泉院丸北 遺構№.１		陶器	ボタン	1.1	1.1	0.35	0.5	色調：9/ 白	201901-D109
	D02	玉泉院丸北 Ⅰ層（砂利層）	Ⅰ	陶器	ボタン	1.1	1.1	0.6	0.4	色調：9/ 白	201901-D108
	D03	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）	Ⅰ		ビーズ	0.6	0.62	0.62	0.3	色調：9/ 白	201901-D107

第９表　出土遺物観察表　瓦１

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	表面処理	釉色焼成色調	瓦当文様	寸法（cm）										珠文径他	胎土	内面調整	線刻・刻印	特記事項	ＩＤ
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						
104	T01	数寄屋屋敷北 堀底　入隅部 断割り（Ⅱ層）	Ⅱc	軒丸瓦	燻	暗灰	巴Ⅱ	(12.6)	(10.7)	(9.8)	(2.0)							珠文：14個 珠文径 0.85	灰白／シマ無	礫ー少、粗砂ー少、細砂ー少			201701-D04
	T02	数寄屋屋敷北 堀底　入隅部 断割り（Ⅱ層）	Ⅱc	丸瓦	燻	灰		(25.6)	(9.5)	3.5	(6.2)	7.3	2.0	4.8					灰白／シマ無	礫ー並、粗砂ー少、細砂ー並		コビキＢ	201701-D06
	T03	数寄屋屋敷北 堀底　入隅部 断割り（Ⅱ層）	Ⅱc	軒平瓦	燻	灰	三葉文Ⅲ	(12.6)	(9.9)	4.0	—	(8.3)	2.9	4.5	2.0	1.8	—		灰白／シマ無	礫ー微、粗砂ー多、細砂ー少	⊕		201701-D02
	T04	数寄屋屋敷北 堀底　入隅部 断割り（Ⅱ層）	Ⅱc	軒平瓦	燻	灰	三葉文Ⅳ	—	(9.3)	—	(4.6)	—	(1.8)	(2.6)	—	2.1	—		浅黄橙／シマ無	礫ーわずか、粗砂ー少、細砂ー少、褐色粒有			201701-D03
	T05	数寄屋屋敷北 堀底　入隅部 断割り（Ⅱ層）	Ⅱc	軒平瓦	燻	灰	三葉文Ⅴ	(18.5)	(17.3)	5.1	—	(12.4)	2.1	3.6	1.8	1.9	2.2		灰白	礫ー少、粗砂ー少、細砂ー少、海綿骨針ー少			201701-D05
	T06	数寄屋屋敷北 堀底　入隅部 断割り　東側河原石積の裏込め層（Ⅱc-2層）	Ⅱc	平瓦	燻	灰		(24.9)	(13.9)	(12.2)	3.1	2.3							灰白	礫ー少、粗砂ー並、細砂ー少			201701-D07
	T07	数寄屋屋敷北 堀底　入隅部 断割り（Ⅱ層）	Ⅱc	道具瓦	燻	暗灰		(11.0)	(8.2)	1.9									灰白／シマわずかに有	礫ー並、細砂ー並、褐色（赤色？）粒有			201701-D11
	T08	数寄屋屋敷北 堀底　入隅部 断割り（Ⅱ層）	Ⅱc	鬼瓦	燻	暗灰		(18.3)	(15.2)	5.7	9.4								灰／シマ無	礫ー並、粗砂ー多、細砂ー多			201701-D01
105	T09	数寄屋屋敷北 法面　水路埋土（Ⅱ-32、33層）	Ⅱb	丸瓦	燻	暗灰		(27.5)	(11.7)	(1.3)	(2.3)	(8.8)	1.95						灰白／シマ無	粗砂ー多			201701-D08
	T10	数寄屋屋敷北 法面　焼土層（Ⅰ-26層）	Ⅰb	軒丸瓦	釉薬	黒	梅鉢Ⅲ	(7.0)	(4.7)	(3.3)	2.9								にぶい赤褐色／シマ無	粗砂ー並、白い粒少し有		周縁部欠けているように見えるが釉がかかる 釉がしみ込んだようになっている。元々亀裂があったのか？ ヘラ状工具痕あり 光沢有	201701-D13
	T11	数寄屋屋敷北 法面　焼土層（Ⅰ-26層）	Ⅰb	丸瓦	釉薬	黒褐色		(17.5)	(14.3)	3.4	(11.35)	6.8	1.9	4.15					にぶい橙色／シマ無	礫ー少、粗砂ー多、白い粒ー並		内面：棒状圧痕 釉：Ⅰ(a～c) コビキＢ後うちたたき	201701-D21
	T12	数寄屋屋敷北 法面　東西断面 焼土層（Ⅰ-26層）	Ⅰb	丸瓦	釉薬	黒褐色		24.2	15.7	3.7	12.8	6.9	1.9	3.8					橙色／シマ等無	礫ーわずか、粗砂ー多、細砂ー多	㊅	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ウチタタキ、棒状圧痕、コビキＢ、指頭圧痕有	201701-D18

第１０表　出土遺物観察表　瓦２

（　）は遺存値　「　」は復元値
腰瓦くぼみ部分：縦×横×深cm

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	表面 処理	釉色 焼成 色調	瓦当 文様	寸法（cm）										珠文 径他	胎土	内面調整	線刻・ 刻印		ＩＤ
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						
105	T13	数寄屋屋敷北 法面　焼土層（Ｉ-26 層）	Ｉｂ	丸瓦	釉薬	黒褐色		(23.9)	15.3	2.9	12.0	6.7	1.9	3.75					赤褐色／シマ有	礫－少、粗砂－並、白色の粒有		内：さし縫痕、棒状圧痕 釉：Ｉａ～ｃのいづれか	201701-D12
106	T14	数寄屋屋敷北 法面　焼土層（Ｉ-26 層）	Ｉｂ	軒平瓦	釉薬	暗赤灰色	梅鉢Ⅲ	(16.2)	(13.7)	—	—	(9.8)	(2.75)	(4.2)	2.45	1.45	—		橙色／シマ無均一	礫－少、粗砂－並		釉：Ⅲ 光沢有	201701-D15
	T15	数寄屋屋敷北 法面　焼土層（Ｉ-26 層）	Ｉｂ	腰瓦	燻	灰白		(14.2)	(22.7)	2.2									灰白／シマ有	礫－少、粗砂－並		円形凹Ａか 側辺のナデていねい くぼみ部分：(2.0)×1.2×0.9 cm	201701-D09
	T16	数寄屋屋敷北 法面　焼土層（Ｉ-26 層）	Ｉｂ	軒桟瓦	釉薬	黒褐色	梅鉢Ⅲ or Ⅳ	(18.6)	(9.1)	—	10.9	(3.8)	3.5	5.2	3.5	1.95	—		橙色／シマ無	礫－微、粗砂－並			201701-D16
	T17	数寄屋屋敷北 法面　焼土層（Ｉ-26 層）	Ｉｂ	腰瓦	燻	にぶい橙		(16.1)	(26.3)	2.0									橙／シマ有	礫－並、粗砂－並、混入物大(1.7 cm)		縦長凹(浅、皿状) くぼみ部分： 1.7×1.0×0.6 cm	201701-D10
	T18	数寄屋屋敷北 法面　焼土層（Ｉ-26 層）	Ｉｂ	棟瓦	釉薬	黒褐色		(17.8)	19.55	1.95									橙色／シマ無均一	礫－少、粗砂－並、白い粒－並		裏面：ヘラ状工具のナデ、縦方向 施釉：ヒビ割れ多い 光沢有	201701-D14
	T19	数寄屋屋敷北 法面　焼土層下（Ｉ-27 層）・焼土層（Ｉ-26 層）・焼土層下（Ｉ層）	Ｉｂ	棟瓦	釉薬	暗赤灰色		26.1	23.7	3.7/1.95									橙色／サンドイッチ状	礫－微、粗砂－少		釉かかりⅣか	201701-D17
107	T20	数寄屋屋敷北 堀底　砂層（Ｉ層）・法面　東西断面（Ｉ-17 層）・東西断面 焼土層（Ｉ-26 層）・焼土層（Ｉ-26 層）	Ｉｂ	棟瓦	釉薬	暗赤褐色		25.4	19.1	1.8									明赤褐色	礫－少、粗砂－並、細砂－多		指痕有か？	201701-D20
	T21	数寄屋屋敷北 法面　砂層（Ｉ層）	Ｉｂ	軒丸瓦	釉薬	暗赤褐色	梅鉢Ⅲ	15.8	10.7	—	2.5								橙	礫－少、粗砂－並、細砂－並		外面：釉のヒビ多い	201701-D25
	T22	数寄屋屋敷北 堀底　表土（Ｉ層）・砂層（Ｉ層）・水路断割り(6 層)	Ｉｂ	軒丸瓦	釉薬	黒	梅鉢	(15.7)	(11.3)	—	(2.6)								黄灰	礫－多		外面：全面、内面：瓦当付近→黒灰色、光沢有	201701-D19
	T23	数寄屋屋敷北 堀底　水路断割り（6 層）	Ｉｂ	丸瓦	釉薬	黒灰		28.1 (付着物含む) 27.9 (本体)	14.2	3.6	(12.4)	7.1	1.8	3.8					橙	礫－多	㊅	全面 透明感有 光沢有 1.757 kg	201701-D23
	T24	数寄屋屋敷北 堀底　表土（Ｉ層）	Ｉａ	軒桟瓦	釉薬	オリーブ黒	菊(分類に該当無)	(12.2)	(13.9)	—	(1.7)	(12.5)	3.0	(4.6)	2.4	1.7	—		橙～明赤褐／ややマーブル	礫－多		瓦当－菊、稜はっきり、８枚の花弁 第１唐草－枝分かれ(上下) 第２唐草－枝分かれまかない 全長：(11.1)幅：(16.2) 全面施釉 光沢有	201701-D24

第１１表　出土遺物観察表　瓦３

（　）は遺存値　「　」は復元値
腰瓦くぼみ部分：縦×横×深cm

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	表面 処理	釉色 焼成 色調	瓦当 文様	寸法（cm）										珠文 径他	胎土	内面調整	線刻・ 刻印	特記事項	ＩＤ
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						
108	T25	数寄屋屋敷北 法面　焼土層下（Ⅰ-27 層）	Ⅰb	棟瓦	釉薬	にぶい赤褐		(14.0)	19.3	2.1									橙	礫ー並、 粗砂ー並、 細砂ー並			201701-D22
	T26	数寄屋屋敷北 堀底　入隅部 断割り（Ⅱ層）	Ⅱc		燻	灰													浅黄橙	礫ー少、 粗砂ー少、 細砂ー並	有	梵字　千手観音菩薩か	201701-拓 31
	T27	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層	Ⅰ	軒丸瓦	燻	灰黄褐	巴Ⅱ-1ｂ(左)	14.9	10.6	7.0	2.2							珠文：14 個 珠文径 0.9 巴頭径 2.0	灰白／シマ無	礫ー少、 粗砂ー少		巴中心に珠文 周縁に沿ってナデ	201801-D26
	T28	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層	Ⅰ	丸瓦	釉薬	暗赤灰		(11.3)	(9.0)	3.0	(8.4)	7.0	1.9	4.6					にぶい褐／シマ無	礫ー並、 粗砂ー多		内：棒状圧痕	201801-D34
	T29	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層	Ⅰ	軒平瓦	燻	黄灰	三葉文Ⅲ？	(16.5)	(16.6)	—	—	(9.5)	2.7	4.4	2.2	(1.4)	(1.4)		灰／シマ無	粗砂ー並			201801-D29
	T30	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層	Ⅰ	平瓦	燻	暗灰		(14.0)	(15.6)	—	1.1	1.4							灰／シマ無	粗砂ーわずか			201801-D27
	T31	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層	Ⅰ	平瓦	燻	暗灰		(13.5)	(12.0)	—	(1.5)	1.2							灰／シマ無	粗砂ーわずか			201801-D28
	T32	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層	Ⅰ	平瓦	燻	黄灰		(16.0)	(9.4)	—	1.2	1.8							灰／シマ有	粗砂ー少、 細砂ー並			201801-D32
	T33	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層	Ⅰ	軒桟瓦	燻	灰	巴Ⅱ-1 小巴か？	(9.8)	(8.5)	(5.0)	1.8							珠文：12 個 珠文径 0.7	灰白／シマ無	礫ー少、 粗砂ー少			201801-D33
	T34	玉泉院丸南東 表土（北拡張）	Ⅰ	軒丸瓦	燻	灰	巴Ⅱ-1ｂ(左)	(16.2)	(12.2)	13.6	1.9							珠文：12 個 珠文径 0.8 巴頭部幅 2.3	灰白／シマ無	粗砂ー少			201801-D30
	T35	玉泉院丸南東 表土	Ⅰ	腰瓦	燻	暗灰		(9.7)	(11.3)	2.3									灰白／シマ無	礫ー少、 粗砂ー並		くぼみ部分：1.6×1.5×1.0 cm	201801-D31
	T36	玉泉院丸南東 表土	Ⅰ	熨斗瓦	釉薬	灰黄		(12.5)	(11.8)	2.0									にぶい赤褐／シマ無	礫ー少、 粗砂ー並			201801-D35
109	T37	玉泉院丸南東 表土（段掘り部分）	Ⅰ	平瓦	燻																有		201801-拓 24
	T38	玉泉院丸南東 表土（北側）	Ⅰ	平瓦	燻																有		201801-拓 25
	T39	玉泉院丸南東 表土（北拡張）	Ⅰ	平瓦	燻																有		201801-拓 26
	T40	玉泉院丸南東 表土	Ⅰ	平瓦	燻																有		201801-拓 27

第１２表　出土遺物観察表　瓦４

（　）は遺存値　「　」は復元値
腰瓦くぼみ部分：縦×横×深cm

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	表面 処理	釉色 焼成 色調	瓦当 文様	寸法（cm）										珠文 径他	胎土	内面調整	線刻・ 刻印	特記事項	ＩＤ
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						
109	T41	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ）	Ⅱａ	腰瓦	燻	黒褐		(8.6)	(14.5)	2.2									灰黄褐	礫ー少、 粗砂ー多、 細砂ー少、 石英？ー 並		くぼみ部分： 2.3×1.5×1.0㎝	201901-D66
	T42	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ上）	Ⅱｂ		燻	灰													にぶい 黄橙	礫ー少、 粗砂少、 細砂ー多		唐草文	201901-D56
	T43	玉泉院丸北 Ⅰ層（玉石）・黄白色粘土層	Ⅱａ	腰瓦	燻	灰～ 灰白 色		30.2	29.9	2.85									灰白色／ シマ有 サンド イッチ 状	粗砂ー微		裏面に工具痕有 くぼみ部分：A(1.0) ×(1.9)×(1.1)㎝、B (1.2)×2.3×1.0、C (1.4)×(2.1)× (0.8)、D(1.0)× (1.55)×1.3 白く退色部分有：(表 面も少しあれている) 退色していない所(漆 喰のあった部分)とは 少し違う状態	201901-D57
110	T44	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	腰瓦	燻	暗灰		29.8	11.8	2.2									灰白／ シマ有 マーブ ル状	礫ー少、 粗砂ー少、 細砂ー並		円形凹Ａ くぼみ部分：(2.1)× 1.3×1.1㎝ 1.105㎏	201901-D58
	T45	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	腰瓦	燻	暗灰		29.7	8.0	2.2									灰白／ シマ有	礫ー少、 粗砂ー並		円形凹Ａ(底面粗いま ま) くぼみ部分： 2.4×1.3×1.3㎝ 図の上下だけ退色(こ ちらが出ていたか？) 通常の漆喰痕と逆転 している 0.746㎏	201901-D60
	T46	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	腰瓦	燻	灰		29.4	12.5	2.3									灰白／ シマ有	礫ー少、 粗砂ー少		円形凹Ａ くぼみ部分： 2.3×1.1×0.9㎝ 1.080㎏	201901-D59
	T47	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	腰瓦	燻	灰白 ～灰		30.1	13.2	2.0									灰白／ シマ有	１㎝大の 礫わずか に含む、 細砂多い		円形凹Ａ くぼみ部分：(1.1)× (0.9)×(0.9)㎝ 半分に割って使用 割面の方に漆喰	201901-D61
	T48	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	腰瓦	燻	灰白 ～灰		28.9	29.4	2.1									灰白／ シマ少 し有	礫ー少、 細砂ー多		円形凹Ａ (深い)雑 くぼみ部分： 2.3×1.2×1.1㎝、 2.4×1.2×1.0 1.522㎏ コーナ部に使用か	201901-D62
111	T49	玉泉院丸北 Ⅰ層・黄白色粘土層（上面）・黄白色粘土層	Ⅱａ	腰瓦	燻	灰		29.6	24.8	2.5									灰白／ シマ有	１㎝大の 礫含む、 細砂多い		円形凹Ａ くぼみ部分：(1.3)× 1.1×0.9㎝、 2.1×1.2×1.2、2.4× (1.4)×(1.0) 焼成後(使用時)に削 ってサイズを調整し ている	201901-D63

第１３表　出土遺物観察表　瓦５

（　）は遺存値　「　」は復元値
腰瓦くぼみ部分：縦×横×深cm

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	表面処理	釉色 焼成 色調	瓦当文様	寸法（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	珠文径他	胎土	内面調整	線刻・刻印	特記事項	ＩＤ
111	T50	玉泉院丸北 黄白色粘土層（上面）	Ⅱa	腰瓦	燻	灰		(15.4)	(9.5)	(7.4)									灰／シマ無	礫ー少、細砂ー多		腰瓦コーナ部分	201901-D64
	T51	玉泉院丸北 黄白色粘土層（上面）	Ⅱa	腰瓦	燻	灰		(13.8)	(17.5)	2.3/2.2									灰白～灰／シマ少し有	礫ー少、細砂ー多		円形凹Ａ くぼみ部分： 1.9×1.05×0.8cm 腰瓦コーナ部分	201901-D65
	T52	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱa	腰瓦	燻	黒、灰		29.6	13.5	2.2									灰白／シマ有、斜め	礫ー並、粗砂ー多、細砂ー多		円形凹Ａ 分割していると思われるが調整痕見当たらず くぼみ部分： 2.4×1.4×0.7cm	201901-D67
	T53	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱa	腰瓦	燻	灰		29.9	(19.8)	2.2									灰白／シマ有	礫ー少（礫大有）、粗砂ー並		くぼみ部分：(2.1)×1.2×1.3 cm、2.5×(0.7)×1.2、2.4×1.4×1.2	201901-D68
112	T54	玉泉院丸北 Ⅰ層・黄白色粘土層	Ⅱa	腰瓦	燻	灰		29.9	29.6	2.4									灰白／シマ有	粗砂ー少、細砂ー並		くぼみ部分：(2.6)×1.6×1.0 cm、(1.2)×1.7×1.1、(1.6)×(1.6)×(0.6)、(1.7)×(1.5)×(1.0)	201901-D78
	T55	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱa	腰瓦	燻	灰白		29.5	24.3	2.1									灰白／シマ有	粗砂ー並		くぼみ部分：2.3×(1.5)×(1.5)cm、(0.9)×(1.4)×?、(1.8)×(1.4)×(1.0)	201901-D81
	T56	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	軒丸瓦	燻	灰	巴Ⅱ-2	(7.8)	(6.8)	(5.1)	—							珠文：16個？	灰白／シマ無	礫ーわずか、細砂ー多			201901-D79
	T57	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	丸瓦	燻	灰		(22.2)	(8.2)	3.4	(5.7)	(4.0)	2.0	(2.4)					灰色／シマ無	木片、粗砂ー少、細砂ー少、空洞多い			201901-D52
	T58	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	平瓦	燻	灰白		(22.3)	(9.6)	(9.3)	(1.5)	(1.4)							灰色／シマ無	礫ーわずか、細砂ー多			201901-D53
	T59	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）・黄白色粘土層（上面）	—	面戸瓦	釉薬	黒褐色		5.0	(13.0)	1.6	5.1								にぶい赤褐／シマ無	礫ー微、粗砂ー並、細砂ー並			201901-D47
113	T60	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）・Ⅰ層	Ⅰ	軒桟瓦	釉薬	暗赤褐色	菊Ⅲ-1	26.4	—	6.5	7.2	8.0	3.0	4.7	2.9	1.7	3.7		明赤褐／シマ無	礫ーわずか、粗砂ー並、細砂ー並		釉Ⅲ 3.475 kg	201901-D39
	T61	玉泉院丸北 表土・Ⅰ層	Ⅰ	軒桟瓦	釉薬	黒褐	菊Ⅲ-3	30.1	27.6	11.1	8.1	11.8	2.6	4.7	3.2	1.9	3.9		にぶい黄橙～明赤褐／シマ無	礫ー少、粗砂ー多		全面施釉 光沢有 3.176 kg	201901-D38
114	T62	玉泉院丸北 表土・Ⅰ層	Ⅰ	一文字瓦	釉薬	黒褐色		(22.3)	(22.4)	1.9	9.1								橙色／シマ無均一	礫ー並、粗砂ー並		全面施釉 光沢有	201901-D43
	T63	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）・Ⅰ層・Ⅰ層（玉石）	Ⅰ	腰瓦	燻	暗灰、灰白		28.5	(17.8)	1.9									灰／シマ有、サンドイッチ	粗砂ー多、細砂ー多		円形凹形（少し浅め） くぼみ部分：2.1×1.4×0.7 cm、2.1×1.3×0.5 側辺中央の凹部が一部残る	201901-D71

第１４表　出土遺物観察表　瓦６

（　）は遺存値　「　」は復元値
腰瓦くぼみ部分：縦×横×深cm

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	表面 処理	釉色 焼成 色調	瓦当 文様	寸法（cm）										珠文 径他	胎土	内面調整	線刻・ 刻印	特記事項	ＩＤ
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						
114	T64	玉泉院丸北 表土・Ｉ層	Ｉ	腰瓦	燻	黄灰		28.5	28.8	2.0									灰白／ シマ有	礫－少、 粗砂－並		円形凹Ａ（浅い） くぼみ部分：(1.7)×(1.4)×0.5 ㎝ 表：四辺をきちんと面取りする	201901-D74
115	T65	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）・Ｉ層	Ｉ	袖瓦	釉薬	黒褐色		(28.3)	29.7	2.2	(6.7)								にぶい橙色／ シマ無	礫－微、 粗砂－並		孔１つ残存（貫通せず） 全面施釉 光沢有	201901-D44
	T66	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）・Ｉ層	Ｉ	棟瓦	釉薬	黒褐		26.7	22.3	4.2									にぶい赤褐／ シマ無	礫－並、 粗砂－多			201901-D36
	T67	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）・Ｉ層	Ｉ	棟瓦	釉薬	黒褐		26.9	23.2	2.0									橙／シマ無	礫－微		全面施釉 2.274 kg	201901-D37
116	T68	玉泉院丸北 表土	Ｉ	平瓦	燻	灰		(21.4)	—	(14.8)	—	1.8							灰／シマ無	礫－微、 粗砂－少、 細砂－少、 粘土きめ細かい		裏面：布圧痕	201901-D51
	T69	玉泉院丸北 表土	Ｉ	平瓦	燻	暗灰		(11.3)	—	(10.7)	1.5	1.2							灰白／ シマ無	粗砂－少、 細砂－少、 粘土きめ細かい		裏：縦→端横 うすく、小さい、調整の跡多く残る	201901-D55
	T70	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）	Ｉ	軒桟瓦	釉薬	黒褐	桜文	(29.9)	27.5	8.0	8.0	14.0	2.5	4.1	(2.4)	2.3	4.1		にぶい赤褐／ シマ有	礫－並、 粗砂－並		全面施釉	201901-D40
	T71	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）	Ｉ	桟瓦	釉薬	暗灰		29.5	29.8	3.7	3.6	3.3	3.9	3.4	3.2	1.9			にぶい褐／シマ無	礫－少、 粗砂－多		やや光沢有	201901-D50
117	T72	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）	Ｉ	桟瓦	釉薬	黒灰		32.5	32.9	4.2	4.3	4.1	4.1	4.3	4.3	2.0			にぶい橙／シマ無	礫－多、 粗砂－多		全面施釉 光沢有 3.539 kg	201901-D42
	T73	玉泉院丸北 表土	Ｉ	桟瓦	釉薬	黒褐色		(8.95)	(15.4)	—	—	—	—	(4.7)	—	1.85/ 4.8			明赤褐色／シマ無 均一	礫－少、 粗砂－少		雪止か？ 光沢有	201901-D46
118	T74	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）	Ｉ	桟瓦	釉薬	黒褐		30.8	32.4	4.2	3.6	4.1	4.7	3.8	3.8	1.6			にぶい褐／シマ無	礫－少、 粗砂－多		施釉：表ほぼ全面 裏 2/5 程度 2.808 kg	201901-D41
	T75	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）	Ｉ	腰瓦	燻	灰白、黒		(14.5)	(18.5)	2.0									灰白／ シマ無	粗砂－並、 細砂－並、 空洞やや多くあり		円形凹Ａ（やや浅め） くぼみ部分： 1.5×1.3×0.7 ㎝	201901-D69
	T76	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）	Ｉ	腰瓦	燻	赤灰		30.0	(23.5)	2.0									灰白／ シマ無、 やや粗	礫－並、 粗砂－多、 細砂－並		円形凹Ａ（浅め） くぼみ部分：(1.5)×(0.7)×(0.7)㎝、 (1.3)×(1.1)×(0.7)	201901-D70
	T77	玉泉院丸北 表土	Ｉ	腰瓦	燻	灰		(9.3)	(18.2)	2.1									灰白／ シマ無	礫－少、 粗砂－並		方形凹 くぼみ部分：(1.2)×1.3×1.0 ㎝ 表：格子状の細かい圧痕	201901-D73

第１５表　出土遺物観察表　瓦７

（　）は遺存値　「　」は復元値
腰瓦くぼみ部分：縦×横×深cm

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	表面処理	釉色 焼成 色調	瓦当文様	寸法（cm）										珠文径他	胎土	内面調整	線刻・刻印	特記事項	ＩＤ
								a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						
119	T78	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	腰瓦	燻	褐灰		29.1	29.4	2.3									にぶい 黄橙	礫－少、 粗砂－並、 細砂－少、 海綿骨針 微		円形凹Ａ くぼみ部分： 2.1×1.1×0.8㎝、 (1.8)×1.0×(0.5)、 (1.0)×(1.0)× (0.6)、2.0×1.0×0.6	201901-D72
	T79	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	腰瓦	燻	黒褐		28.9	28.8	2.1									にぶい 黄橙	礫、粗砂、 細砂	有	円形凹Ａ くぼみ部分：(0.8)× (0.9)×(0.2)㎝、 (2.0)×1.0×0.7、 2.1×(1.1)×0.6、 2.2×1.0×0.7 漆喰部分との境に同 方向の線状の痕がつ くものが一定量みら れる。 やや外側へ張り出す ように湾曲 布目痕有 2.659 kg	201901-D75
	T80	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	腰瓦	燻	黒褐		(24.5)	(15.7)	2.0									褐灰	礫－少、 粗砂－少、 細砂－並		円形凹Ａ(浅め) くぼみ部分：(2.0)× 1.1×0.6㎝	201901-D80
120	T81	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	腰瓦				29.1	(28.9)	2.1									灰白／ シマ無	礫－少、 粗砂－多		円形凹Ａ(浅め) くぼみ部分：(2.3)× 1.0×0.7㎝、(1.9)× (0.9)×0.8、 2.3×0.9×0.17	201901-D76
	T82	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	腰瓦	燻	黄灰		(25.1)	(16.9)	1.9									黄灰／ シマ無	礫－少、 粗砂－並		強めのナデ有 面取り有	201901-D77
	T83	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）	Ⅰ	面戸瓦	釉薬	赤褐		5.0	18.6	1.9	(5.2)								にぶい 黄褐／ シマ無	礫－並、 粗砂－多		漆喰付着か？ ナデ痕残る 0.270 kg	201901-D48
	T84	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	熨斗瓦	燻	灰		(13.0)	10.9	1.9									にぶい 黄橙	礫－、粗 砂－少、 細砂－少	有 （末広）		201901-D54
	T85	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	熨斗瓦	釉薬	黒褐 色		23.6	12.7	2.05									橙色／ シマ無 均一	礫－多、 粗砂－多			201901-D45
121	T86	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	熨斗瓦	釉薬	暗赤 灰色		(22.2)	12.2	1.85									橙色／ シマ無 均一	礫－多、 粗砂－多			201901-D49
	T87	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ上）	Ⅱｂ	道具瓦	燻	黄灰													浅黄	礫－少、 粗砂－少、 細砂－並	有		201901-拓58
	T88	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	軒平瓦	燻																「上」		201901-拓56
	T89	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	軒丸瓦	燻																有		201901-拓57
	T90	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	軒丸瓦	燻																有		201901-拓54
	T91	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	軒平瓦	燻	黒褐													褐灰	礫－少、 粗砂－少、 細砂－並、 石英？微	有		201901-拓52
	T92	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	軒平瓦	燻																有		201901-拓55

第１６表　出土遺物観察表　石

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量(g)	特記事項	ＩＤ
122	S01	数寄屋屋敷北 堀底　近代層（Ｉ層）	Ｉｂ		11.7	8.9	7.2	430	上下方向からの被熱 特に上方は相当の高温となっている	201701-S05
	S02	数寄屋屋敷北 堀底　砂層（Ｉ層）	Ｉｂ	碁石	2.3	2.3	0.55	3.6	碁石（黒） 玩具 表面はなめらかで摩耗か、側面は横方向の擦痕が残る	201701-S04
	S03	玉泉院丸北 Ｉ層（玉石）	Ｉ	石人形	6.2	4.9	(3.9)	88.7	人形（猿？） 玩具？	201901-S01
	S04	玉泉院丸北 Ｉ層（玉石）	Ｉ		10.4	12.1	7.5	669.5		201901-S02
	S05	玉泉院丸北 Ｉ層（玉石）	Ｉ		13.5	8.7	7.1	740.2		201901-S03
123	S06	玉泉院丸北 Ｉ層・黄白色粘土層	Ｉ		35.3	26.2	8.3	6,575		201901-S07
124 125	S07	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）	Ｉ	板石	42.4	85.7	6.1	24,150	軽石凝灰岩（淡灰白色） 白色と緑色の礫含む（緑色が多） うすい黄褐色部分、被熱か	201901-大S01
126 127	S08	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）	Ｉ	板石	39.7	85.4	6.6	23,850	軽石凝灰岩（淡灰白色） 白色と緑色の礫含む（白色が多）	201901-大S02
128 129	S09	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）・Ｉ層	Ｉ	板石	42.9	88.9	6.6	26,400	軽石凝灰岩（灰白色） 白色と緑色の礫含む（緑色が多）	201901-大S03
130	S10	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）	Ｉ	板石	40.4	56.6	8.1	23,600	軽石凝灰岩（灰白色） 緑～青色の礫含む	201901-大S04
131	S11	玉泉院丸北 表土（板石廃棄）	Ｉ	板石	42.4	50.4	9.1	(19,800)	軽石凝灰岩（灰白色） 白色の礫含む	201901-大S05
132	S12	玉泉院丸北 表土・表土（板石廃棄）	Ｉ	板石	40.5	42.5	7.4	13,600	軽石凝灰岩（淡赤白色） 白色の礫含む	201901-大S06
133	S13	玉泉院丸北 表土	Ｉ	縁石か	36.1	11.4	9.2	5,015	戸室石（赤）	201901-S08

第１７表　出土遺物観察表　金属１

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量(g)	特記事項	ＩＤ
134	M01	数寄屋屋敷北 堀底　水路埋土 河原石積前面（Ⅱ層）	Ⅱｃ	銅・銅合金製品	釘	3.3	0.85	0.35	2.09		201701-M05
	M02	数寄屋屋敷北 堀底　粘質土層（Ｉ層）	Ｉｂ	銅・銅合金製品	釘	2.1	0.8	0.27	1.08		201701-M01
	M03	数寄屋屋敷北 堀底　粘質土層（Ｉ層）	Ｉｂ	銅・銅合金製品	釘	2.8	0.77	0.23	1.28		201701-M04
	M04	数寄屋屋敷北 堀底　砂層（Ｉ層）	Ｉｂ	銅・銅合金製品	釘（貝折れ）	6.2	0.81	0.4	4.1		201701-M06
	M05	玉泉院丸南東 黄褐色土盛土層（近代）	Ｉ	銅・銅合金製品	釘	3.8	0.79	0.25	1.62	表面の黒色の付着物	201801-M03
	M06	玉泉院丸南東 表土	Ｉ	銅・銅合金製品	寛永通宝	2.3	1.95	0.1	1.97	穴部 0.6 × 0.6 cm	201801-M02

第１８表　出土遺物観察表　金属２

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量(g)	特記事項	ＩＤ
135	M07	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ上）	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	3.9	1.1	0.5 (0.4)	3.33		201901-M23
	M08	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ上）	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	3.9	0.5	0.3	1.97	断面は略方形 角が少し丸味おびる	201901-M27
	M09	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ下）	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	3.5	0.9	0.35	2.28		201901-M26
	M10	玉泉院丸北 Ⅱ 層（アゼ下）	Ⅱｂ	銅・銅合金製品	釘	3.7	0.8	0.35	1.33		201901-M29
	M11	玉泉院丸北 Ⅱ 層（黄橙色粘土粒含む）（アゼ下）	Ⅱｂ	銅・銅合金製品	釘	(3.0)	0.35	0.35	1.1		201901-M33
	M12	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ上）	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	3.2	0.7	0.4	2.0		201901-M24
	M13	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ下）	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	3.4	0.6	0.25	1.25		201901-M31
	M14	玉泉院丸北 Ⅱ 層（アゼ下）	Ⅱｂ	銅・銅合金製品	釘	3.2	0.95	0.3	1.2	先端部まで良好に残る	201901-M28
	M15	玉泉院丸北 Ⅱ 層（アゼ下）	Ⅱｂ	銅・銅合金製品	釘	2.7	0.8	0.45	1.73	断面はやや歪んでいるが、基本は方形	201901-M32
	M16	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ上）	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	2.05	0.65	0.35	0.79		201901-M25
	M17	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ下）	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	2.95	0.7	0.4	1.4	頭部との接続部付近はやや丸味のある断面 先端部にむかっては方形で角もしっかりたっている	201901-M30
	M18	玉泉院丸北 Ⅱ層（アゼ上）	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	12.4	3.3	0.6	21.2		201901-M22
	M19	玉泉院丸北 Ⅱ 層（黄橙色粘土粒含む）（ アゼ上 ）	Ⅱｂ	鉄製品	鉄滓	9.6	11.9	4.0	331.5	木炭片多く含む	201901-M09
	M20	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	13.5	(2.9)	0.7	24.7	断面菱型	201901-M12
	M21	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	13.5	(3.2)	0.6	23.6		201901-M15
	M22	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	13.5	(1.9)	0.7	23.5		201901-M16
	M23	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	4.8	1.6	0.4	6.3	最大長１寸６～７分	201901-M13
	M24	玉泉院丸北 黄白色粘土層	Ⅱａ	銅・銅合金製品	釘	3.8	1.1	0.5	3.5		201901-M14
136	M25	玉泉院丸北 サブトレ（アゼ下）	—	鉄製品	鉄滓	8.1	9.4	7.3	298.61	椀型	201901-M10
	M26	玉泉院丸北 Ⅰ層（玉石）	Ⅰ	鉄製品	鎹	4.05	12.8	2.0	181.7	推定 1.25 × 1.25　0.75 × 0.8	201901-M07
	M27	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	鉄製品	鉄滓	8.7	7.9	4.3	305.9	椀型	201901-M08
	M28	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	13.2	1.4	0.55	22.6	貝折釘	201901-M17
	M29	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	13.9	2.5	0.6	25.7		201901-M18
	M30	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	3.45	0.85	0.3	1.8		201901-M19
	M31	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	3.6	1.0	0.3	2.2		201901-M20

第１９表　出土遺物観察表　金属３

（　）は遺存値　「　」は復元値

図版	番号	調査区 遺構等	層位	器種	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量(g)	特記事項	ＩＤ
136	M32	玉泉院丸北 表土	Ⅰ	銅・銅合金製品	針金	(6.5)	(7.9)	0.1	2.2	瓦固定用の針金か	201901-M11
	M33	玉泉院丸北 Ⅰ層	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	2.25	0.7	0.3	0.9		201901-M21
	M34	玉泉院丸北 植栽痕	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	(3.4)	0.35	0.35	1.7		201901-M34
	M35	玉泉院丸北 遺構No.１	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	3.5	0.35	0.35	1.4		201901-M35
	M36	玉泉院丸北 遺構No.１	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	(3.4)	0.35	0.35	1.9		201901-M36
	M37	玉泉院丸北 遺構No.１	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	(3.4)	0.35	0.35	1.2		201901-M37
	M38	玉泉院丸北 遺構No.１	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	3.3	0.3	0.3	1.5		201901-M38
	M39	玉泉院丸北 遺構No.１	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	(3.7)	0.4	0.4	2.7		201901-M39
	M40	玉泉院丸北 遺構No.１	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	1.6	0.35	0.35	0.7		201901-M40
	M41	玉泉院丸北 遺構No.１	Ⅰ	銅・銅合金製品	釘	(1.2)	0.3	0.25	1.2	頭巻釘、先端欠損	201901-M41

第５章　総括

第１節　各調査区の成果

第１章第１節で記述した通り、切石積石垣確認調査は、城郭庭園等の総合研究事業の一環として、金沢城庭園の構成要素である切石積石垣を取り上げ、その構築当初の状況を探ることを目的に着手したものである。一方で石垣の調査研究は、金沢城調査研究事業の根幹であり、切石積石垣の初期の様相を明確にすることは、累年の課題でもあった。以上からそれぞれに特徴のある数寄屋屋敷北・玉泉院丸南東・玉泉院丸北の３地点において、上記の課題にかかる知見を得るべく確認調査を実施した。

各調査区の成果については、第３章各節の結びでとりまとめたが、ここで改めて略述しておく。

①数寄屋屋敷北調査区については、雛土蔵下石垣下部において、正面正方形を基調とする切石材の布積が確認できる箇所であり、当初は、切石積石垣出現期である寛永年間（1624 ～ 44）頃（石垣編年４期）の状況が遺存している可能性も念頭においていた。調査の成果、４期粗加工石の転用材を主体とする数寄屋屋敷北石垣と一体的に構築されていることが判明し、石材の加工状況や根固めの造成土から出土した瓦の年代等からみても、石垣の構築は 17 世紀後半に下ると結論した。また雛土蔵下石垣を構成する石材は、極めて厳密な規格を保持しており、調整加工は最高水準の精緻さであった。さらに戸室石の材のほかに、部分的に坪野石材を組み込んでおり、意匠の異なる数寄屋屋敷北石垣との一体性も含め、見せる石垣として意図的に整備されていることが窺えた。

②玉泉院丸南東調査区については、寛永 11 年（1634）の庭園作庭当初は、調査区を含む南東一帯まで堀の形状を継承した池が広がっており、その東岸には石垣が築かれていたこと、しかし当初の石垣は粗加工石積であり、17 世紀後半に乱積の切石積石垣に改修されたことが判明した。なお池岸の石垣については、出島・紅葉橋の北側においても、同様の過程を経ていることが確認されている［石川県金沢城調査研究所 2015d］。

③玉泉院丸北調査区については、意匠的な切石積石垣が連なる庭園東側の中央部に位置し、庭園の要とも言える色紙短冊積石垣の基礎部を検出し、構築年代を確認した。埋没していた基礎部も地上部と同様の特徴であり、17 世紀後半に新設されたと結論した。また隣接する納戸土蔵下石垣も色紙短冊積石垣と一体的に構築されたことが明らかとなった。

第２節　金沢城の切石積石垣

１．初期の切石積石垣

初期の切石積石垣の事例

上記の通り、今回の調査で基礎部を確認した切石積石垣は、17 世紀後半に構築・改修されたものであった。寛永期に遡る切石積石垣の資料は得られなかったこととなるが、ここで現在判明している初期・寛永年間頃（石垣編年４期）の切石積石垣の事例を確認しておきたい。

４期の切石積石垣として確実な事例は、二ノ丸の東辺、五十間長屋下南半･西から橋爪門続櫓下南･東へと続く櫓台石垣と、櫓台南部に取り付く階段（雁木坂）を挟んで対面する西側石垣台のそれぞれ下部である。菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台石垣は、寛永８年（1631）の大火後の二ノ丸造成と一体的に構築された。内堀に面した部分は粗加工石積、橋爪門枡形・二ノ丸に面した部分は切石積となっている。その後の複数の改修により、菱櫓や五十間長屋北部は根石まで取り替えられ、五十間長屋南部から南側の基礎数段が、構築当初の様相を保っている。階段西側の石垣台は大部分が近代以後撤去されているが、東辺の基礎の一部が確認されている［石川県金沢城調査研究所 2011d・2015c］。

これらは控えが短く、正面正方形を基調とする切石専用材を整然と積んだ布積（四方積）であるが、地点によって多少の違いがある。①五十間長屋下南半・西（2120W）中央付近は、最下段（根石）が粗加工石で、その上面を平坦に整形し、おおよそ正面正方形の石材を布積にした典型とみなしうるもの（第138図１・２、第141図上）、②五十間長屋下南半・西（2120W）南端付近は、南側へ地盤が下り階段となっていることと対応し、一部に鉤形(角欠き)や長方形を呈する石材が混じるものとなる(第138図３、第141図上)。階段を挟んだ対面の石垣台（2330E）についても、当初材の立面はほとんど確認できないが、上面に鉤形の切り込みがやはり認められる(第138図４)。③橋爪門続櫓下南(2110S)（第138図５、第141図上）は、最下段が粗加工石で、この上１～２段までが構築当初の積みであるが、正面形は台形状を呈して左右の脇に楔形の石口が生じ、密着した切合わせにならず、半切石積ともいうべき状態である。ただしこれは石垣前面の整地層により、これらの大半が埋もれることと関連しているように思われる。

この他、本丸附段三十間長屋北側櫓台（明治以後地上部撤去）の西面（1421W）において検出した、４期構築とみられる切石積石垣がある（第138図６）［石川県金沢城調査研究所2008d］。調査地点では近代の抜き取りにより、粗加工石の根石と、正面略長方形の切石材がその上位に一石残るのみであった。切石材の加工はやや粗く、刻印が残る。上面・北側側面は平刃の工具により平坦に調整されていた。ただし石垣前面の整地層との関係からすれば、この事例も地中に埋まっていた部分とみられる。

なお、本丸鉄門付近の石垣は、文禄年間（1592～96）頃（１期）に始まり、明和３年（1766）まで複数時期の改修が窺われる。門台石垣の基礎や、門の北側、乾櫓まで延長される西側への張り出し部分の基礎に寛永期の石材が据えられている［石川県金沢城調査研究所2014d］が、上部における石積の状況は明確ではない。明和期改修範囲にも近世前期の切石材が転用されており、寛永期に切石積石垣として整備された可能性があるが、詳細は判然としない。

このように、４期の切石積石垣は、後代の改修等により、根石を含むごく基礎部分しか遺存しておらず、なかでも構築時の地表面より上位に露呈していたのは、五十間長屋下南半のみとなっている。ここからは、①正面が正方形に近い材で、布積とする意匠が主体で、②階段のような箇所では、長方形や鉤形（角欠き）も組み合わされること、③地中に埋まる部分では、根石の上に、石口が密着しない若干不整形の材を積む場合があるといった点が確認される。

主要な門の初期の状況と５期の切石積石垣

ここで、上記の状況と対比させるため、尾坂門・河北門・石川門・東ノ丸唐門といった主要な門の石垣と、４期に後続する５期の切石積石垣の構築状況について概観しておく。

大手にあたる尾坂門石垣は、巨石を用いた鏡積で、原形は慶長年間（1596～1615）頃（２期）に遡る。後代に改修を受けているが、割石積ないし粗加工石積である（第138図７、4010N）。

河北門枡形は明治初期に大部分が撤去されたが、遺存していた基礎部分の検討から、慶長年間後半頃（２期新）に成立し、17世紀後半（５期）に切石積化したと考えられる［石川県金沢城調査研究所2011c］。河北一ノ門外東側、河北坂東の粗加工石積石垣は、面が比較的平板に調整されている（第138図８、第141図中、3440W）。当初の枡形内もこのような形状だった可能性が想定される。

石川門の枡形の一部や二ノ門台は、明和２年（1765）に改修された切石積となっているが、この時に初めて切石積になったかどうかははっきりしない。ただし現況の平面プランとなったのは寛永年間頃（４期）と推定され、明和の切石積に隣接し、４期の粗加工石積［3120N等］が遺存している（第139図１）。

寛永以前、本丸の正面出入口であった東ノ丸唐門前については、文禄・慶長期の創建から元和期(1615～24)・寛永期とプランの変更を伴う改修を経て、17世紀後半にも石垣意匠の変更があったが、主たる石垣面（1300N）は、自然石積から粗加工石積への変化であった（第139図２）［石川県金沢城調

査研究所 2008d]。

石垣編年５期については、寛文～元禄年間（1661 ～ 1704）頃としているが［石川県金沢城調査研究所 2012c 他］、その主体は寛文年間（1661 ～ 1673）とする見方が強まっている。

４期の系統を引く四方積については、ア：二ノ丸菱櫓・五十間長屋北部、イ：二ノ丸北西部裏口門周辺西部・雛土蔵下・数寄屋屋敷東の大別２地点のみで認められる。

４期切石積（四方積）基礎部を検出した五十間長屋南半では、上部は宝暦 13 年（1763）に改修されており、それまでは４期四方積が上部まで遺存していた可能性が考えられる。ただしア:菱櫓(2140W・S)・五十間長屋北半（2130W・S）については、寛文８年（1668）に根石ごと改修された状況で、５期切石積石垣となっている（第 139 図３、第 141 図下)。石材の主体は控の短い切石専用材で、刻印が残るものが目立つ。正面は正方形を基調とするが、角落としとなって五～六角形を呈するものも多い。これらは４期石材を転用・再調整した材とみられる。五十間長屋北半は比較的整然とした四方積、菱櫓では正面多角形の石材が多くなるが、いずれにしろ四方積の系統を引く意匠である。

イについては、石材の加工状況等により細別されるが、基本的には上部が正面長方形材を連ねる布築積、下部は四方積となっている（第 139 図４、第 142 図中下)。下部の四方積は、今回の調査地点である雛土蔵下西（2710W）では、最下段の根石も５期に構築されたことが判明した。数寄屋屋敷東(2720W）では、雛土蔵下と同様に、間隔を空けて坪野石石材を組み込む意匠がみられる。これらのことから、この一帯の切石積石垣は下部を含め５期に下る可能性が高い。しかし石材には大型の刻印を残す４期の正面正方形の切石材が多数転用されており、本来は、４期の四方積切石積石垣が曲輪の一角に築かれていたことを想起させる。

一方、乱積（金場取残積を含む）は、数寄屋屋敷北（2800N)・玉泉院丸（第 139 図５、第 142 図上、第 143 図上）のほか、本丸附段北部の階段側壁（第 139 図６、第 141 図下、1412E・1411W）［石川県金沢城調査研究所 2019c]、三ノ丸北西部の土橋門（第 139 図７、第 141 図下、3620E)、玉泉院丸西部の鼠多門（第 139 図８、6110N・6100S)、鶴ノ丸東部の水ノ手門（第 140 図１、第 141 図下、1221N）等広がりを見せる。発掘調査や文献史料から、石垣自体は４期かそれ以前に創建されていることが窺える。玉泉院丸庭園が粗加工石積であったこと以外、先行する石垣の状況は明確ではないが、玉泉院丸や石川門等の事例からすると、粗加工石積であった可能性を考える必要がある。

初期の切石積石垣の構築箇所

以上から、初期の切石積石垣は、主として二ノ丸御殿とその周辺で採用され、これらの区域では５期に改修されることがあっても、四方積の系統を引く意匠が受け継がれたとみられる。「見せる石垣」として、第一に御殿の荘厳の演出［石川県金沢城調査研究所 2020f］を意図して構築されたと理解される。他方、自然石積・割石積・粗加工石積であった箇所が５期に切石積に改修される場合、乱積が採用されたと考えておきたい。

なお、公儀普請であった元和６年（1620)・寛永元年（1624)・寛永５年（1628）の大坂城石垣普請では、金沢城に先行して、前田家により門の枡形や曲輪の仕切りに大型の正面長方形・正方形石材等を用いた切石積石垣が構築された（第 140 図２)。元和６年（1620）時の石垣は石材寸法が比較的不均等で、鉤形の切り欠きを多用し段差の解消を図っている部分が多くみられる。時期が降るにつれ石材の規格化が進み、鉤形の調整は少なくなるが、石材の方形化が不徹底で、その結果生じた石材間の隙間に楔形の小型石材を充てることが多くなる［石川県金沢城調査研究所 2012c　P299 ～ P310]。全国的にも城郭の切石積石垣としては最古の部類に入るとみられ、金沢城での構築はこの経験を踏まえていると考えられるが、四方積とは異なる意匠であり、この差異をどう考えるかが課題となっている。

加工技術

今回の事業で体系的に追求するには至らなかったが、切石積石垣や、粗加工石積石垣の隅角部にみ

られる特徴として、平刃工具を用いた隅角部稜線脇の平坦化による稜線の強調、石材上下面・側面（合端）の平坦化による隣接石材間の密着状況が注目される（第 140 図３・４）。これらは、伝統技術の事例から、平刃の頭部に直交する柄を取り付けた工具である「タタキ」（第 141 図５）を用い、石面に対して刃を垂直気味に当て、凹凸を均して平坦にする「小叩き」と称される加工によると考えられる。金沢城では、５期以降の切石積石垣や、粗加工石積石垣の隅角部で普遍的に観察される。一方、４期・寛永年間頃においては、事例の少ない切石積石垣では十分に観察できていないが、粗加工石積石垣の隅角部を対象とすると、稜線・側面加工ともに、確実な平刃工具痕が認められない。４期においては、丁寧なノミ加工を重ねて、稜線や合端を整えていると看取される。なお城内出土の石造物では、４期ないしそれ以前から同様の加工技術が認められる個体があるので、石造物製作等からの技術の導入があったと推定されるが、詳細は今後の課題としたい。

なお、先に挙げた本丸附段三十間長屋北側櫓台石垣の調査では、切石材の側面・上面に平刃工具痕を確認しているが、近代に上部が撤去されている箇所で、櫓台の北側では寛文期以後の改修も想定されるので、寛永期の加工の事例とするには慎重を期す必要がある。

２．庭園と切石積石垣

庭園の構成要素としての石垣

石垣は、城郭の重要な構成要素であるが、金沢城の玉泉院丸庭園においては借景等ではなく、庭園の構成要素そのものである点が大きな特徴である。色紙短冊積石垣周辺のように、直接曲輪の斜面を保護するものではなく、建物の土台でもなく、通常の庭園であれば自然石を主体に山水のさまを象徴する石組等に代わって、石垣がこれを表現する構成となっている。

今回の調査では、作庭当初の玉泉院丸庭園には、切石積石垣が備わっていなかったことが明らかになったが、作庭以前に二ノ丸下の崖際に配されていた堀を前身として、寛永 11 年（1634）に池泉が整備されるにあたり、池泉の岸に精巧な粗加工石積石垣が構築されたことも明確になった。作庭段階から、庭園の構成要素として石垣が扱われていたのであり、全体的な構成は不明であるものの、その発想は、前田利常の代に淵源を求める必要がある。

玉泉院丸の切石積石垣については、金沢城調査研究事業に着手した当初から、いわゆる寛永文化と関連付ける見方があり、今もなお検討すべき課題になっている。茶道を始め、建築や庭園等の分野で大きな足跡を残した小堀政一（遠州）と前田利常の親密な関係や、遠州が作庭した、あるいはその影響が認められる庭園で、切石材が効果的に用いられていること等はよく知られている。

今回の調査では、石垣を庭園に積極的に取り入れた作庭時の寛永期と並び、切石積の導入に示される、意匠としての石垣を究極にまで推し進めた寛文期の画期性を改めて認識することになった。

前田利常が小松城に隠退した 17 世紀中葉においては、４代光高の早世もあり、金沢城の整備は停滞していたと推定されている。江戸に生まれ育ち、寛文元年（1661）に初めて国元入りした５代綱紀は、以降金沢城の再整備に取り組むこととなる。この間の石垣普請の特徴について、江戸初期までの城郭構造の展開が一段落し、政庁としての機能や威儀の整備に重点が置かれるようになったことを背景に、戸室石切丁場の第２次稼働期を万治３年（1660）～寛文末年に比定し、これと連動して形成された新たな造営体制に支えられたものであったこと等が考察されている［木越 2013b・2015］。

乱積について

寛文期に改修・構築された石垣の大きな特徴はその多様性にあり［北野 2004・石川県金沢城調査研究所 2020f］、玉泉院丸庭園に凝縮されている。ここではそのうち、切石積の主体を為し、色紙短冊積や金場取残積の基調とも言える乱積について取り上げる。ただし、割石材・粗加工石材による乱積と比較すると、切石積の場合は横目地が通る部分も多く、正面正方形材を整然と積み並べる四方積との差異がむしろ特徴になっている。その成立にはさまざまな背景が想定される。意匠としては、氷

の罅割れ・裂け目になぞらえた氷裂文を想起させる。また規格的な四方積に対し崩した形とみなすことができれば、芸道の分野で説かれる真行草の格と対応するようにも思われる。素材の効率的な利用という観点からは、形状にばらつきのある粗加工石材を転用し、普請の現場で適宜組み合わせて築くことに適した積み方と考えられる。このことは、とくに金場取残積に窺えるところであるが、乱積の切石積石垣の素材の主体を、前代４期の粗加工石の古材に求める想定に基づいている。さらにこの頃導入された、平刃工具の利用など細工石工の系統を汲む加工技術も、乱積切石積石垣の盛行に寄与したと考えられる。

ところで加賀前田家では、切石積石垣の成立以前、慶長後期から元和期にかけては、先進的とも言える布積を積極的に採用せず、乱積傾向の石垣を構築することが主流であった。寛永期に至り布積が主体となるが、乱積傾向を残す石垣も構築されていた。

寛文４年(1664)に改修された、いもり堀南東の鯉喉櫓台石垣(1930S)は、布積の粗加工石積であるが、ほぼ同時期改修の二ノ丸菱櫓下に比べると、乱積に近い箇所が目立つ（第 140 図６）［ 石川県金沢城調査研究所 2020c］。鯉喉櫓台では旧材の転用度合いが比較的高いためかと考えられるが、これらの箇所は、寛文５年（1665）改修の切石積石垣である土橋門西側（第 139 図７）とよく似た面構成となっている［ 石川県金沢城調査研究所 2012c］。このように乱積は、前田家においては長く継承されてきた積み方と言え、切石積石垣の意匠としても受け入れやすい状況だったのかも知れない。

玉泉院丸石垣の改修が、利常隠居後の整備停滞を受けたものであったとしても、乱積を基調とする切石積とした点に大きな意義を認めたいが、二ノ丸以外の一部の門等にも採用されていることを考慮すると、城郭全体を対象とした再整備構想において、「見せる」石垣にも格式あるいは真行草のような区別の意識が生じた可能性を考えておきたい。

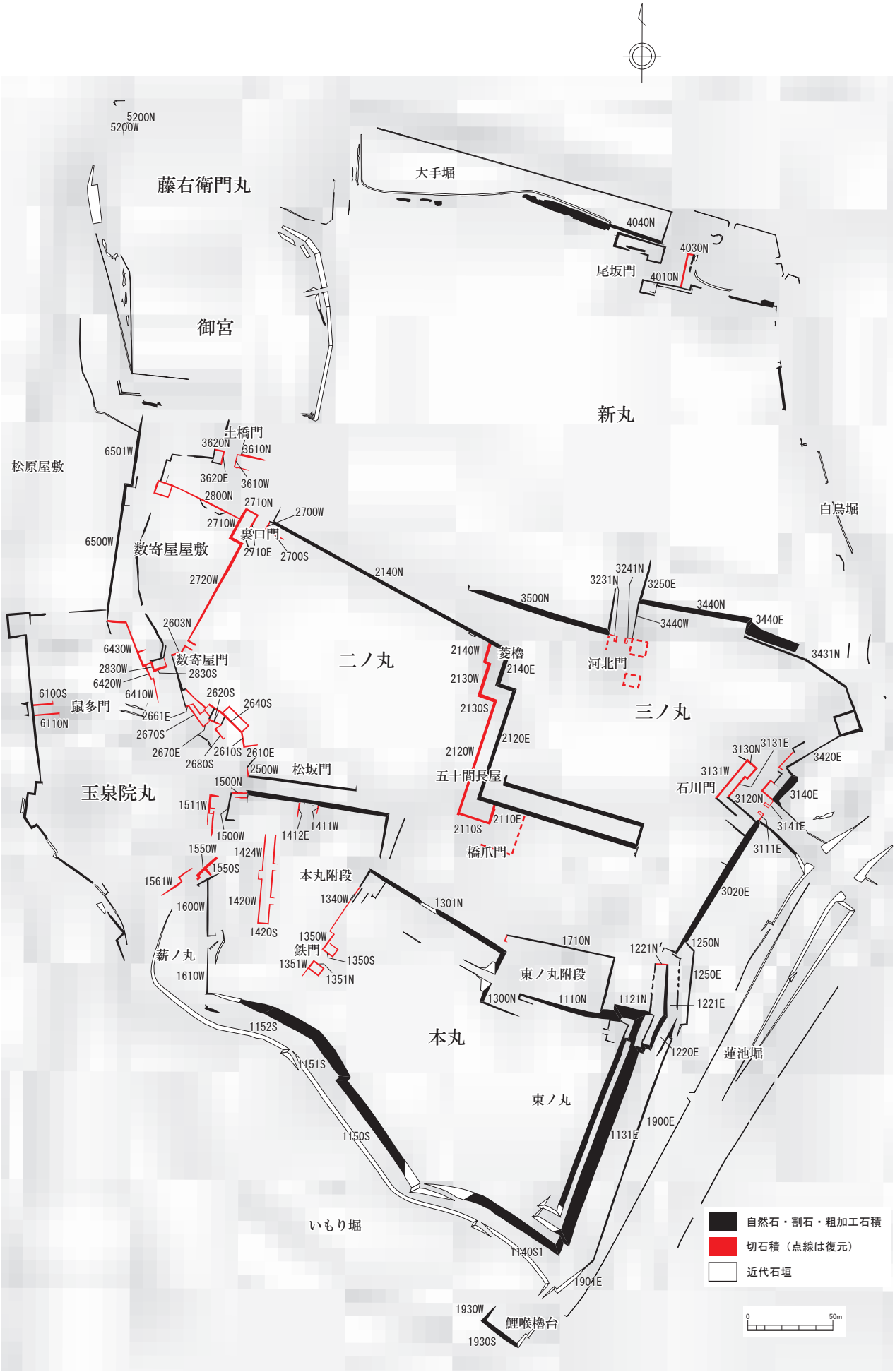
ただし玉泉院丸石垣には、変化に富み工夫を凝らした豊かな意匠性が示すように、庭園向きの石垣として独創性があることは論を待たない。また色紙短冊積とその周辺は、城郭の構造物として発達してきた石垣により、滝石組や滝壺などを表現した、あるいは石垣がそれらの機能や景観を備えているのであって、単に切石材によって滝石組を構築する営為とは区別される。北野博司氏が指摘した通り［ 北野 2004］、このような発想は、石垣構築技術の成熟による支持があってこそ実現されるが、造園に造詣の深い文化的素養のある人物・集団等の影響・関与が想定される。

庭園における切石積石垣のその後

17 世紀後半では、城の縁辺部である金谷出丸・蓮池の地において、庭園や馬場、文庫等で構成される屋敷空間が形成された。蓮池に隣接する南東の高台（のちの竹沢）も含め、後には庭園自体の充実とあわせて、二ノ丸に匹敵する御殿が構えられるようになる。この傾向の端緒としても、17 世紀後半は重要であるが、一方で庭園の見所としての石垣は、玉泉院丸庭園にのみ認められる。

金谷・蓮池庭では、築山の土留等に石垣がみられるが、庭園の構成要素であるとしても見せる石垣とは言い難い。蓮池庭に隣接し、19 世紀前半に整備が進んだ竹沢庭では、神社社殿や長屋（櫓・蔵）、水道施設の基壇、池・水路の護岸（第 140 図７）、出入り口等の他、天然の湧水である金城霊沢周辺において、人工の崖（第 140 図８）や岩窟に切石材が用いられている［ 石川県金沢城調査研究所 2018c］。しかし基壇・護岸・出入り口等は、庭園特有の見所ではない。金城霊沢周辺については、玉泉院丸庭園の石垣と一脈通じたところがあるが、規模が小さく、何より切石を用いた構造物といった方がふさわしい点、やはり区別されるものである。

以上の通り、庭園の見所としての石垣構築は、寛永期・寛文期における玉泉院丸周辺に特徴的な事象であり、そのまま後代に受け継がれることはなかった。この点もまた、寛永期・寛文期特有の問題の所在を示唆するものと言える。



第 137 図　金沢城切石積石垣現位置図

1．五十間長屋下南半西下部１（2120W）

2．五十間長屋下南半西下部２（2120W）

3．五十間長屋下南半西階段下部（2120W）

4．二ノ丸階段西（2330E）

5．橋爪門続櫓下南下部（2110S）

6．三十間長屋北側下西（1421W）
（2003-6 地点）

7．尾坂門（4010N）

8．河北坂東（3440W）

第 138 図　金沢城跡の切石積石垣等1

1．石川門桝形（3120N）

2．東ノ丸唐門前（1300N）

3．五十間長屋下北半西（2120W）

4．数寄屋屋敷東（2720W）

5．玉泉院丸東泉水縁（1511W）

6．本丸附段階段西（1412E）

7．土橋門西（3620E）

8．鼠多門側壁南（6100S）

第 139 図　金沢城跡の切石積石垣等2

1．水ノ手門（1221N）

2．大坂城山里丸

3．寛永石垣隅角部稜線（本丸北東 1301N）　寛文石垣隅角部稜線（二ノ丸菱櫓下北東 2140E）

4．五十間長屋下西 北半　切石材合端加工

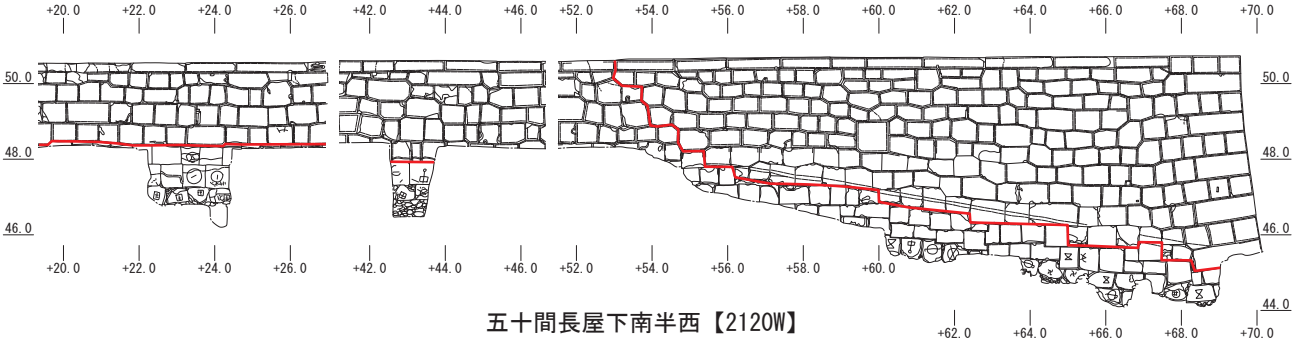
5．タタキ（近代）［小阪央氏蔵］

6．鯉喉櫓台南（1930S）

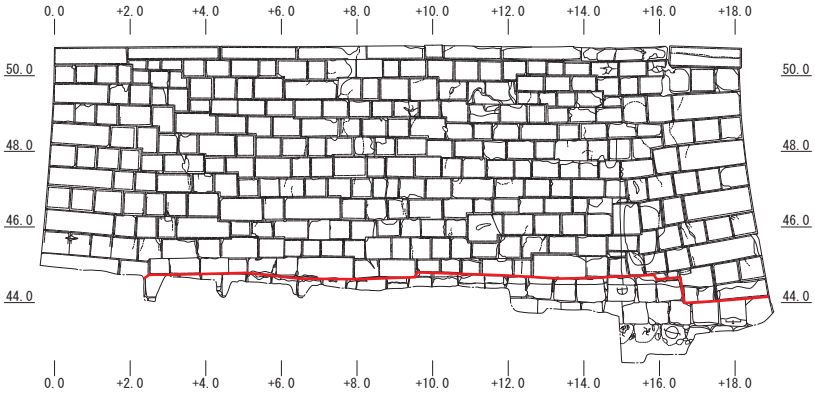
7．兼六園（竹沢庭）霞ヶ池

8．兼六園（竹沢庭）金城霊沢南東

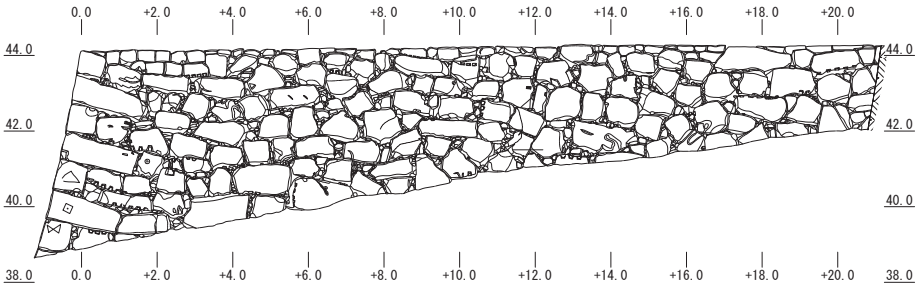
第 140 図　金沢城跡の切石積石垣等3



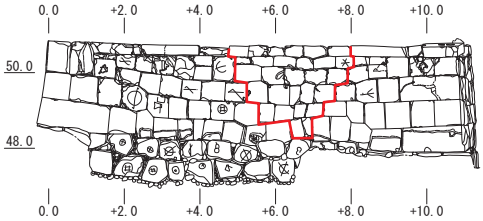
五十間長屋下南半西【2120W】



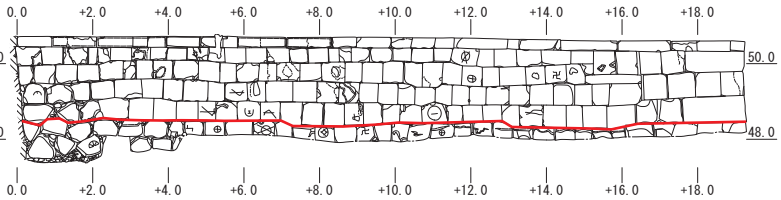
橋爪門続櫓下南【2110S】



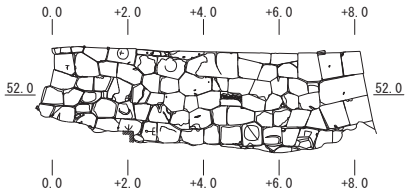
河北坂東【3440W】



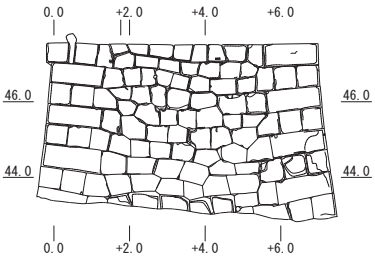
菱櫓下西【2140W】



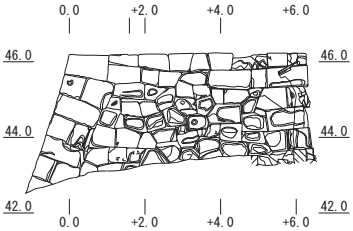
五十間長屋下北半西【2130W】



本丸附段階段西【1412E】



土橋門西【3620E】

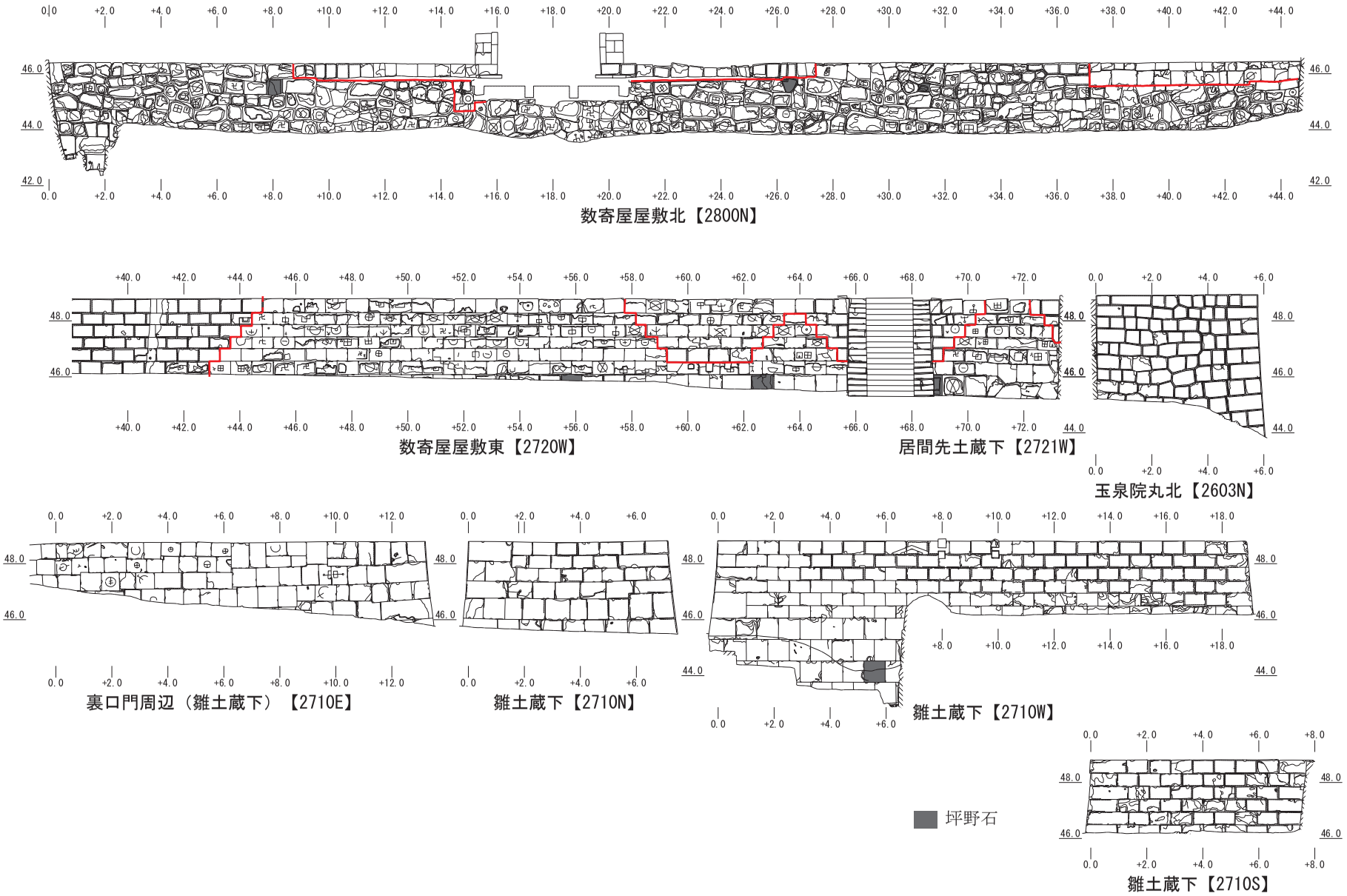


水ノ手門続【1221N】

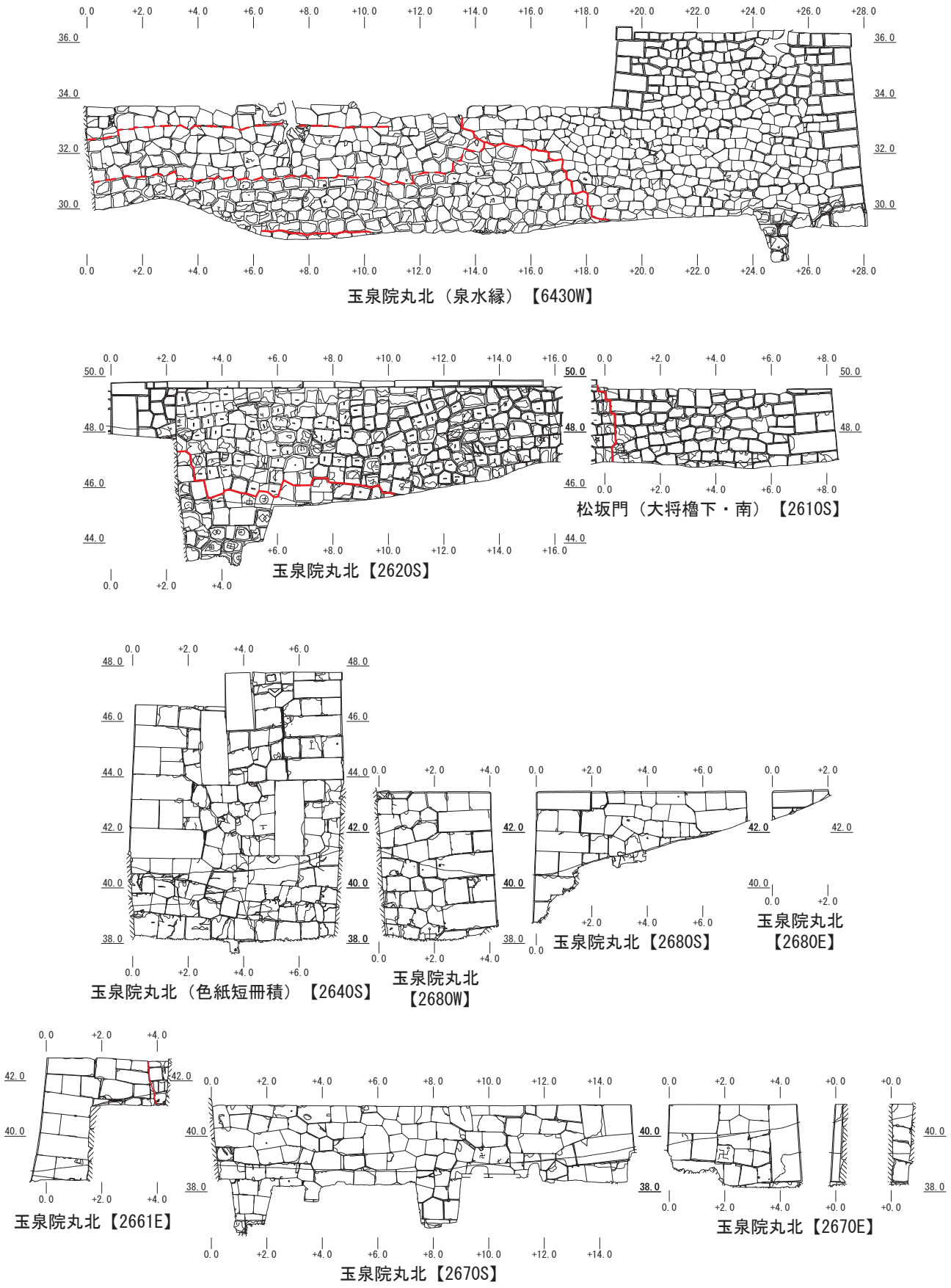
S=1/200

0　5m

第 141 図　金沢城跡の切石積石垣等4



第 142 図　金沢城跡の切石積石垣等5



第 143 図　金沢城跡の切石積石垣等6

引用・参考文献

石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所 2012『特別名勝兼六園　栄螺山石垣等修理工事報告書』
石川県金沢城調査研究所 2008a『金沢城調査研究所年報１』
石川県金沢城調査研究所 2008b『絵図でみる金沢城』
石川県金沢城調査研究所 2008c『金沢城石垣構築技術史料Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所 2008d『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所 2008e『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所 2009a『金沢城調査研究所年報２』
石川県金沢城調査研究所 2009b『よみがえる金沢城２』
石川県金沢城調査研究所 2010a『金沢城調査研究所年報３』
石川県金沢城調査研究所 2010b『金沢城の三御門－河北門・橋爪門・石川門－』
石川県金沢城調査研究所 2011a『金沢城調査研究所年報４』
石川県金沢城調査研究所 2011b『金沢城石垣構築技術史料Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所 2011c『金沢城跡－河北門－』
石川県金沢城調査研究所 2011d『金沢城跡－二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅰ－』
石川県金沢城調査研究所 2012a『金沢城調査研究所年報５』
石川県金沢城調査研究所 2012b『金沢城跡－二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅱ－』
石川県金沢城調査研究所 2012c『城郭石垣の技術と組織』
石川県金沢城調査研究所 2013a『金沢城調査研究所年報６』
石川県金沢城調査研究所 2013b『金沢城普請作事史料１』
石川県金沢城調査研究所 2013c『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所 2014a『金沢城調査研究年報７』
石川県金沢城調査研究所 2014b『金沢城普請作事史料２』
石川県金沢城調査研究所 2014c『金沢城跡－石川門付属太鼓塀－』
石川県金沢城調査研究所 2014d『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所 2015a『金沢城調査研究所年報８』
石川県金沢城調査研究所 2015b『金沢城普請作事史料３　奥村栄実御用番幷御城方日記』
石川県金沢城調査研究所 2015c『金沢城跡－橋爪門－』
石川県金沢城調査研究所 2015d『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅰ－』
石川県金沢城調査研究所 2016a『金沢城調査研究所年報９』
石川県金沢城調査研究所 2016b『金沢城普請作事史料４』
石川県金沢城調査研究所 2016c『金沢城跡石垣保存実態調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所 2016d『金沢城跡－鶴ノ丸第１次・新丸第１次・尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋屋敷－』
石川県金沢城調査研究所 2017a『金沢城調査研究所年報 10』
石川県金沢城調査研究所 2017b『金沢城普請作事史料５　三壺聞書』
石川県金沢城調査研究所 2017c『絵図にみる金沢城二ノ丸御殿』
石川県金沢城調査研究所 2018a『金沢城調査研究所年報 11』
石川県金沢城調査研究所 2018b『金沢城総合年表　前編』
石川県金沢城調査研究所 2018c『金沢城庭園調査報告書』
石川県金沢城調査研究所 2018d『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅱ－』
石川県金沢城調査研究所 2018e『平成 30 年度 切石積石垣確認調査の概要』（現地説明会資料）
石川県金沢城調査研究所 2019a『金沢城調査研究所年報 12』
石川県金沢城調査研究所 2019b『金沢城編年史料　近世一』
石川県金沢城調査研究所 2019c『金沢城跡－本丸附段・北ノ丸－』
石川県金沢城調査研究所 2019d『令和元年度 切石積石垣確認調査の概要』（現地説明会資料）
石川県金沢城調査研究所 2020a『金沢城調査研究所年報 13』
石川県金沢城調査研究所 2020b『金沢城編年史料　近世二』
石川県金沢城調査研究所 2020c『金沢城跡－いもり堀－』

石川県金沢城調査研究所 2020d『金沢城跡－鼠多門・鼠多門橋Ⅰ－』
石川県金沢城調査研究所 2020e『令和２年度 二ノ丸御殿確認調査の概要』（現地説明会資料）
石川県金沢城調査研究所 2020f『金沢城シンポジウム　近世前期の金沢城－利常・綱紀の城づくり－』
石川県金沢城調査研究所 2021a『金沢城調査研究所年報 14』
石川県金沢城調査研究所 2021b『文化五年　御造営方一件留帳』
石川県金沢城調査研究所 2021c『金沢城跡－鼠多門・鼠多門橋Ⅱ－』
石川県金沢城調査研究所 2021d『令和３年度 二ノ丸御殿確認調査の概要』（現地説明会資料）
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2003a『年報１』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2003b『研究紀要 金沢城研究 創刊号』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004a『年報２』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004b『御造営方日並記』上巻
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005a『年報３』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005b『御造営方日並記』下巻
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005c『金沢城フォーラム　記録集　石垣の匠と技』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006a『年報４』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006b『金沢城跡Ⅱ』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006c『よみがえる金沢城１』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006d『金沢東照宮（尾崎神社）の研究』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2007a『年報５』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2007b『金沢城代と横山家文書の研究』
石川県教育委員会 1970『金沢城二ノ丸跡発掘調査概報』
石川県教育委員会 1979『石川県の古庭園』
石川県教育委員会 2001『金沢城フォーラム　いま甦る金沢城』
石川県教育委員会事務局文化財課「いしかわ文化財ナビ」[http://wwww.bunkazainavi.pref.ishikawa.lg.jp/]
石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会 1991a『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』金沢城史料編
石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会 1991b『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』金沢御堂史料編
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2001a『年報２（平成 11 年度）』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2001b『金沢市 三社町遺跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002a『金沢市 金沢城跡Ⅰ』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002b『金沢市 木ノ新保遺跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002c『金沢市 経王寺遺跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002d『金沢市 高岡町一ツ水溜跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002e『金沢市 前田氏（長種系）屋敷跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2007『金沢市 三社町遺跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2010『金沢市 金沢城跡１』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2012『金沢市 金沢城跡２－堂形（第３・４次調査）－』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2013『小松市 八幡遺跡Ⅱ』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014a『石川県金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014b『金沢市 小立野ユミノマチ遺跡』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014c『金沢市 金沢城跡３－堂形（第５次調査）－』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014d『金沢市 元菊町遺跡』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2015a『金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）Ⅱ』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2015b『金沢市 小立野ユミノマチ遺跡Ⅱ』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2016『金沢市 金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2017『金沢市　金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区）』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2020『金沢市　金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）』
石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所 2010『金沢城跡石垣修理工事報告書－玉泉院丸南西石垣－』
石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所 2017『金沢城跡　玉泉院丸南石垣等』

石川県立埋蔵文化財センター 1990『元菊町遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1992『特別名勝 兼六園（江戸町跡推定地）発掘調査報告　－附　本多家上屋敷跡試掘調査報告－』
石川県立埋蔵文化財センター 1996『金沢城跡車橋門発掘調査報告書』
石川県立埋蔵文化財センター 1997『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター 1998『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅱ』
石川県立歴史博物館 1995『加賀藩主 前田斉泰』
石野友康 2005「『寛文元年二年　日帳』」『研究紀要 金沢城研究』第３号　金沢城研究調査室
井上鋭夫 1969『金沢城跡の発掘』金沢大学金沢城学術調査委員会
上野佳也 1976「金沢城四十間長屋跡発掘調査概報」『日本海文化』No. ３　金沢大学法文学部日本海文化研究室
江戸遺跡研究会 2001『図説　江戸考古学研究事典』 柏書房
小野正敏 1982「15、16 世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』№.２　日本貿易陶磁研究会
垣内光次郎 2001「第三章　近世・近代の瓦」『新修　小松市史　資料編３』 小松市
金沢市・金沢市教育委員会 1991『瓢箪町遺跡』
金沢市教育委員会 1995『金沢市本町一丁目遺跡』
金沢市教育委員会 1997a『安江町遺跡』
金沢市教育委員会 1997b『金沢市本町一丁目遺跡Ⅱ　鍛冶片原地点』
金沢市埋蔵文化財センター 1998『長田町遺跡　長町遺跡　穴水町遺跡』
金沢市埋蔵文化財センター 1999『下本多町遺跡』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a『金沢市高岡町遺跡Ⅰ』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001b『金沢市昭和町遺跡Ⅰ』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001c『金沢市醒ヶ井遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2002『石川県金沢市 彦三町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003a『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003b『石川県金沢市 高岡町遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003d『野田山墓地』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004a『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004b『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅰ（測量図編）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004c『石川県金沢市 久昌寺遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005a『石川県金沢市 片町二丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005b『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅱ（古代・中世編、測量図編２）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005c『石川県金沢市 木ノ新保遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006a『石川県金沢市 市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006b『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅲ（近世編１）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅳ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007a『石川県金沢市 兼六元町遺跡　彦三一丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007b『石川県金沢市 下堤・青草町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007c『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅳ（近世編２）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008a『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅰ～西外惣構跡・東内惣構跡発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b『野田山・加賀藩主前田家墓所調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009a『辰巳用水調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009b『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅴ（金沢能楽美術館地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2010a『平成 21 年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2010b『石川県金沢市 東山一丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011a『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅱ～西内惣構跡（主計町地点）発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011b『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅲ～西外惣構跡（武蔵町地点）発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012a『平成 23 年度　金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012b『本多家上屋敷関連遺構調査報告書』

金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012c『石川県金沢市 金沢城下町遺跡（本多町三丁目地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012d『野田山・加賀八家墓所調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012e『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅳ 金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書 遺構編』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013a『平成 24 年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013b『石川県金沢市 小立野四丁目遺跡―天徳院前田家墓所―』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013c『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅴ 金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書 遺物編』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014b『石川県金沢市 片町二丁目遺跡（５番地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014c『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅵ 東内惣構跡（枯木橋南地点）発掘調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2016b『石川県金沢市 玉川町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2017『平成 28 年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2018a『平成 29 年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2018b『金沢城下町遺跡（兼六元町７番地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2018c『金沢城下町遺跡（大手町３番地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2018d『金沢市指定史跡 本多家上屋敷西門跡及び堀跡附道跡 調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2019a『平成 30 年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2019b『金沢城下町遺跡（飛梅町３番地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2019c『金沢城下町遺跡（前田氏（長種系）屋敷跡地区）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2020a『令和元年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2020b『金沢城下町遺跡（飛梅町３番地点）Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2020c『金沢城下町遺跡（兼六元町 15 番地点）発掘調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2021『金沢城下町遺跡（袋町２番地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2021『長町三丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2021『金沢城下町遺跡（飛梅町３番地点）Ⅲ』
金沢市史編さん委員会 1999『金沢市史 資料編３ 近世一』 金沢市
金沢市史編さん室 1965『金沢の百年 明治編』 金沢市
金沢市史編さん室 1967『金沢の百年 大正・昭和編』 金沢市
金沢市役所 1973『稿本 金澤市史』市街編第四 名著出版
金沢市立玉川図書館 2003『金沢市図書館叢書（四）温故集録 一』
金沢大学創立 50 周年記念事業後援会 2001『金沢大学 50 年史』通史編
金沢大学埋蔵文化財調査センター 2000『金沢大学文化財学研究』２
金沢大学埋蔵文化財調査センター 2002『金沢大学文化財学研究』３・４
金沢大学埋蔵文化財調査センター 2003『金沢大学文化財学研究』５
金沢大学埋蔵文化財調査センター 2017『金沢大学構内遺跡―角間遺跡、宝町・鶴間遺跡』
金沢御堂・金沢城調査委員会 1993『金沢城跡 金沢城跡遺構実態調査概要報告書』 石川県教育委員会
紺野義夫 1993『新版・石川県地質図（10 万分の１）および石川県地質誌』 石川県
紺野義夫 2001「石川県の地質に関連する調査研究の百年史年表」『石川県地質誌・補遺』 北陸地質研究所
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』
木越隆三 2003「元和～寛文期の金沢城修築について」『研究紀要 金沢城研究』創刊号 金沢城研究調査室
木越隆三 2004「金沢城全域絵図の分類と編年－金沢城絵図調査報告Ⅰ－」『研究紀要 金沢城研究』第２号 金沢城研究調査室
木越隆三 2006「金沢城作事所に関する断簡資料（１）－名倉氏採取襖下張文書（金沢大学文学部日本史研究室蔵）－」『研究紀要 金沢城研究』第４号 金沢城研究調査室
木越隆三 2007「近世後期、石垣構築技術「秘伝」の形成過程」『研究紀要 金沢城研究』第５号 金沢城研究調査室
木越隆三 2009「金沢城と辰巳用水」『辰巳用水調査報告書』 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
木越隆三 2013a「金沢の惣構創建年次を再検証する」『日本歴史』第 780 号 日本歴史学会
木越隆三 2013b「金沢城「寛文」石垣造営の背景を探る」『研究紀要 金沢城研究』第 11 号 金沢城研究調査所
木越隆三 2015「金沢城の石垣技術と造営体制」『城下町金沢論集 城下町金沢の文化遺産群と文化的景観』石川県・金沢市

北垣聰一郎 1987『石垣普請』 法政大学出版局
北島俊朗 1987『金沢の石切り　石切り緊急調査報告書』金沢市教育委員会
北島俊朗 1995『戸室石引き道　調査報告書』金沢市
北野博司 2001「加州金沢城の石垣修築について」『東北芸術工科大学紀要』№８　東北芸術工科大学
北野博司 2003「金沢城石垣の変遷１」『研究紀要 金沢城研究』創刊号　金沢城研究調査室
北野博司 2004「金沢城石垣の変遷２－切石積石垣－」『研究紀要 金沢城研究』第２号　金沢城研究調査室
久保智康 1992「近世後期南加賀における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』10
久保智康 2001『北陸の瓦の歩み』 日本セラミックス協会北陸支部
久保智康 2005「日本海域をめぐる赤瓦」『日本海歴史体系』第四巻　近世篇Ⅰ　清文堂
兼六園全史編纂委員会・石川県公園事務所 1976『兼六園全史』 兼六園観光協会
佐々木達夫 1980「金沢城跡の発掘－一九七九年－」『日本海文化』№７　金沢大学文学部日本海文化研究室
佐々木達夫 1981「金沢城跡の発掘－ 1977 年－」『金沢大学日本海域研究所報告』第 13 号
貞末堯司・石崎俊哉・前田清彦 1986「金沢城の発掘－ 1981 －藤右エ門丸北側法面裾部発掘報告」『金沢大学日本海域研究所報告』第 18 号
貞末堯司・前田清彦・児玉剛 1989「金沢城の発掘－ 1986 年－黒門横北側県外部発掘調査報告」『日本海文化』№５　金沢大学文学部日本海文化研究室
瀬戸市史編纂委員会編 1993a『瀬戸市史』陶磁史篇四　愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会編 1993b『瀬戸市史』陶磁史篇五　愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会編 1998『瀬戸市史』陶磁史篇六　愛知県瀬戸市
千田嘉博 2000『織豊系城郭の形成』 東京大学出版会
辰巳ダム関係文化財等調査団 1983『加賀 辰巳用水－辰巳ダム関係文化財等調査報告書－』
田端寶作 1979『金沢城石垣刻印調査報告書』 城郭石垣刻印研究所
坪井利弘 1993『建築家のための瓦の知識』 鹿島出版会
坪井利弘 1999『図鑑　瓦屋根』 理工学社
東京大学理学部遺跡調査室 1989『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書１　東京大学本郷構内の遺跡 理学部７号館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書５　東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』
東京大学埋蔵文化財調査室 2006『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書７　東京大学本郷構内の遺跡 工学部 14 号館地点』
長山直治 2006b『兼六園を読み解く―その歴史と利用―』 桂書房
日本海文化研究室 1976『金沢城郭史料』日本海文化叢書第三巻　金沢大学法文学部日本海文化研究室
布尾幸恵 2008「第５章　石工道具調査報告」『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅰ』石川県金沢城調査研究所
布尾幸恵 2009「金沢市内の凝灰岩石工道具調査報告－戸室石石工道具の比較－」『研究紀要 金沢城研究』第７号　石川県金沢城調査研究所
橋本確文堂企画出版室 1997『特別名勝兼六園－その歴史と文化－』
藤　則雄 1999「金沢城「百間堀」の断層とその周辺の地形」『北陸の考古学Ⅲ』 石川考古学研究会々誌第 42 号　石川考古学研究会
（公財）文化財建造物保存技術協会 2014『重要文化財金沢城石川門修理工事報告書』 石川県
文化庁 1969『重要文化財金沢城　石川門・三十間長屋保存修理工事報告書』
文化庁 2005『史跡等整備のてびき』 同成社
文化庁 2013『発掘調査のてびき－各種遺跡調査編－』 同成社
文化庁文化財部記念物課 2015『石垣整備のてびき』 同成社
日置　謙 1956『改訂増補　加能郷土辞彙』 北國新聞社
日置　謙 1930 ～ 1948『加賀藩史料』
増山　1997「金沢城下における近世墓―久昌寺墓地を中心として―」『第９回関西近世考古学研究大会　西日本近世墓の諸様相』
増山　仁 1999「金沢城跡」『金沢市史』資料編 19 考古　金沢市史編さん委員会
牟礼町石の民俗資料館 1998『重要有形民俗文化財　牟礼・庵治の石工道具』牟礼町教育委員会
森島康雄 1993「聚楽第跡出土の軒平瓦」『京都府埋蔵文化財情報』49 （財）京都府埋蔵文化財センター
谷口明伸・増山　仁 2004「前田土佐守家の下屋敷と醒ヶ井遺跡」『研究紀要』第１号（財）金沢文化振興財団
吉岡康暢 1985「金沢城の発掘」『金沢城と前田氏領内の諸城』日本城郭史研究叢書　第五巻　名著出版

報告書抄録

ふりがな	かなざわじょうあときりいしづみいしがきかくにんちょうさほうこくしょ
書名	金沢城跡切石積石垣確認調査報告書
副書名	金沢城史料叢書 42
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西田郁乃、滝川重徳
編集機関	石川県金沢城調査研究所
所在地	〒920-0918　石川県金沢市尾山町 10-5　TEL076-223-9696
発行年月日	2022 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かなざわじょうあと 金沢城跡	いしかわけん 石川県 かなざわしまるのうち 金沢市丸の内	17201	130200	36° 33′ 58″	136° 39′ 35″	20170619 ～ 20170831	20	保存目的調査
						20180521 ～ 20180831	38	
						20190507 ～ 20190903	15	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢城跡	城館	近世	石垣、堀、池等	陶磁器、瓦、石製品、金属製品	

要約

切石積石垣確認調査は、埋没している初期の切石積石垣を発掘して、出現期の実態（場所･意匠･技術等）を明らかとすることで､外観や意匠を重視した「見せる石垣」が生み出された技術的・社会的背景を探ることを目的として行われた。

数寄屋屋敷北調査区では、対象とした雛土蔵下石垣と数寄屋屋敷北石垣はともに 17 世紀後半、寛文期に構築されたことを確認した。雛土蔵下石垣は最下部の根石から天端に至るまで厳密な規格性を有するが、数寄屋屋敷北石垣は寛永期の古材を転用するなどし、正面を多角形に成形し、面加工も荒々しさを残す。対照的な二つの石垣を配することで、それぞれの意匠を際立たせることを意図した石垣と考えられる。

玉泉院丸南東調査区周辺は、当初玉泉院丸庭園が作庭された頃は池がこのあたりまで迫っていた。寛文期の庭園の再整備に際して、粗加工石積を切石積石垣に改築したことを確認した。石垣は現地表下約 3.8 ｍまで続いており、地上部と埋没部の大部分は切石積（５期）で積まれているが、基部の３段分は粗加工石積（４期）であった。

玉泉院丸北調査区では、色紙短冊積石垣が平面的なプランも含め 17 世紀後半に新設されたことを確認した。色紙短冊積石垣の東面石垣は、粗加工石積で築かれているが、その基部に至るまで５期の様相であった。また、隣接する納戸土蔵下石垣の基部についても同時期に構築されたことを確認した。

これらの調査から、切石積石垣が玉泉院丸庭園において出現したのは、17 世紀後半とみられ、それは、前田家五代綱紀によって行われた庭園の再整備と一体的に進められたと考えられる。

金沢城史料叢書 42

金沢城跡切石積石垣確認調査報告書

令和４年（2022）３月 31 日発行

編集・発行　石川県金沢城調査研究所

〒 920-0918　石川県金沢市尾山町 10-5
TEL　076（223）9696　　FAX　076（223）9697
https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html
メールアドレス　kncastle@pref.ishikawa.lg.jp

印刷　株式会社ハクイ印刷